

「アダム・スミスの価値尺度論」に関する
海外における諸研究

— 19世紀末から1970年代末 —

(上)

中 川 栄 治 著

広島経済大学

地域経済研究所

1 9 9 5

— 広島経済大学研究双書 第14冊 —

「アダム・スミスの価値尺度論」に関する
海外における諸研究

— 19世紀末から1970年代末 —

(上)

中 川 栄 治 著

広 島 経 済 大 学
地 域 経 済 研 究 所

1 9 9 5

「アダム・スミスの価値尺度論」に関する

海外における諸研究

—— 19世紀末から1970年代末 ——

上 巻

目 次

序. 本書の成立経緯ならびに方法	1
1. J. K. イングラム (1888年)	7
2. F. von ヴィーザー (1889年)	12
3. J. ボナー (1893年)	15
4. W. リーブクネヒト (1902年)	19
5. C. M. ウォルシュ (1903年)	26
6. A. C. ウィッテカー (1904年)	42
7. R. カウラ (1906年)	62
8. H. J. ダウンポート (1908年)	70
9. C. リスト (1909年)	78
10. L. H. ヘイニー (1911年)	83
11. R. A. マクドナルド (1912年)	88
12. C. M. ウォルシュ (1926年)	94
13. И. И. ルービン (1926年)	100
14. P. H. ダグラス (1927年)	110
15. E. キャンン (1929年)	114
16. A. グレイ (1931年)	118
17. Д. И. ローゼンベルク (1934年)	122
18. M. ボウリー (1937年)	134
19. E. ロール (1938年)	137
20. V. W. ブレイドウン (1938年)	144
21. A. H. ジェンキンズ (1948年)	157
22. H. ミント (1948年)	165

目 次

23. J. F. ベル (1953年)	183
24. J. A. シュムペーター (1954年)	187
25. J. P. ヘンダースン (1954年)	194
26. É. ジャム (1956年)	199
27. R. L. ミーク (1956年)	202
28. H. M. ロバートスンと W. L. テイラー (1957年)	229
29. L. ロビンズ (1958年)	235
30. S. アムビラジャン (1959年)	237
31. R. ルカッチマン (1959年)	240
32. D. F. ゴードウン (1959年)	243
33. M. ブラウグ (1959年)	249
34. E. ウィッテカー (1960年)	276
35. W. フェルナー (1960年)	281
36. O. H. テイラー (1960年)	284
37. A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年)	289
38. M. ブラウグ (1962年)	310

〈下巻内容〉

- 39. F. ベーレンス (1962年)
- 40. J. オーザー (1963年)
- 41. P. L. ダナー (1964年)
- 42. W. J. バーバー (1967年)
- 43. I. H. ライマ (1967年)
- 44. E. G. ウェスト (1969年)
- 45. G. ローゼンブルース (1969年)
- 46. C. ナポレオーニ (1970年)
- 47. A. S. スキナー (1970年)
- 48. H. W. スピーゲル (1971年)
- 49. M. ドップ (1973年)

目 次

50. M. ボウリー (1973年)
51. S. ホランダー (1973年)
52. S. カウシル (1973年)
53. T. サウエル (1974年)
54. V. W. ブレイドウン (1974年)
55. D. P. オブライエン (1975年)
56. R. B. エーケルンド Jr. と R. F. エベール (1975年)
57. G. ラウス (1975年)
58. V. W. ブレイドウン (1975年)
59. D. A. リースマン (1976年)
60. R. H. キャンベルと A. S. スキナー (1976年)
61. P. シロス-ラビーニ (1976年)
62. B. ショシュキチュ (1976年)
63. M. オラルドと R. トルタジャーダ (1976年)
64. H. D. クルツ (1976年)
65. P. L. ダナー (1976年)
66. L. デュモン (1977年)
67. W. ジャッフエ (1977年)
68. J. T. ヤング (1978年)
69. P. ディーン (1978年)
70. H. アルント (1979年)

おわりに

あとがき

序．本書の成立経緯ならびに方法

古典派経済学においてはいわゆる「価値論」は一つの重要な領域を構成していたのであったのであり、それゆえまたそれは、その点からだけでも、経済学の歴史とりわけ古典派経済学を取り扱う研究者にとっても、たとえどんな形においてにせよとにかくそれに触れずにすませることの困難な論題でありつづけてきた。そして、古典派経済学者の一人としてのアダム・スミス (Adam Smith) の経済学を取り扱うにさいしても多くの研究者は、彼の「価値論」ということに論及してきたのであって、日本でも、しかもきわめてさかんに、「スミスの価値論」に関する研究が行われ、豊かな内容をもった多数の労作が産み出されてきたのであった。

そしてそのさい、たとえば、スミスは「投下労働価値説」と「支配労働価値説」とを併置もしくは混同した、あるいは、スミスは「投下労働価値説」を主張したのであるがそれが資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態にも妥当しうるということを示す論理を持たなかったのであって、そのような不備を克服して「投下労働価値説」のより一般的な妥当性を論証しうる論理を見つけ出そうという試みをなそうとしたのが D. リカードウ (D. Ricardo) であり、さらにそれを発展させて「投下労働価値説」を完成もしくはほとんど完成させたのが古典派経済学の研究をなしつつみずからの経済学を構築した K. マルクス (K. Marx) であった、といった認識と結びつきつつ「スミスの価値論」にアプローチする、あるいは、少なくともマルクスの（もしくは、リカードウ経由のマルクスの）視点、枠組みから「スミスの価値論」を捉えようとするのが、日本での「スミス価値論」研究における一つの有力な流れであった、ということもできるであろう。

もちろん、経済学の歴史の研究において扱われる個々の経済学者の経済学、またそれを構成する個々の学説そのものは、それら個々の経済学者の思考に基づいて構想されたものであるゆえ、それら個々の経済学、そこに組み込まれたものとしての個々の学説を理解するためには、できるだけそれら個々の経済学者自身に即してその経済学、個々の学説を捉えようとする努力は払われなければならないであろう。しかしまた同時に、たとえそのような努力が

私われたとしても一人の経済学者の経済学、またそこにおける一つの学説に関して論者によって異なった解釈が生じうるであろうし、そしてその際に影響力を発揮しているもののうちの一つの有力な要因は、各論者自身が自覚的もしくは無自覚的に抱えている経済学、ということも考えるのであり、そしてまた、もしある研究者が経済学の歴史についての一貫した叙述をなしたとすれば、そこではその研究者自身が抱く経済学というものも一つの重要な役割を演じていた、と考えることができるのであって、このような意味で、先で触れたような方向で「スミスの価値論」を捉えることそれ自体は、それはそれで、一つの有効な方法であったろうし、事実、日本ではそのような方向からきわめて精緻で水準の高い研究が残されてきた、と言うこともできるであろう。

だが他方で、たとえば経済学の歴史の研究そのものは逆にその研究者の抱く経済学というものに影響を及ぼすということもあろうし、また、うえでも触れられたように各研究者が抱く社会科学としての経済学そのものは相互に異なったものでありうるのであり、さらに、相対的に似た経済学を抱く研究者のあいだにあって問題関心等々の点での相違といったものはありうるのである。したがってその意味では、「スミスの価値論」ということに関して、諸研究者のあいだでそれについて多様な解釈が示され、また各研究者の解釈そのものが変化を遂げる、といったことがあっても不思議はないのである。

ところで、なんらかの経済学者のなんらかの学説についての研究をなすさい、そこで第一義的に取り組まなければならないものは、もちろん、その経済学者による一次文献そのものである。だが同時に、うえのような事情からして、各研究者が自分の解釈の占める位置を他の解釈との関係で確認しておくことも意味のあることであろうし、さらに、一次文献と取り組むその作業そのものは、その一次文献がどのような視点から取り扱われまたどのような解釈を受けてきたかということを意識することによって、より自覚的な形ですすめられうることになるであろう。二次文献は、もちろんその二次文献が書かれた時代や場所における経済学またそれをとりまく環境、その研究者の抱く経済学や問題関心等々を反映するといった面もありうるのであって、それはそれで経済学史研究におけるきわめて興味深い諸論点を提供しうることになるのであるが、二次文献そのものはうえのような意味においても、重

要な役割を演じうるものであり、そしてそのような点からしても、二次文献そのものについての研究それ自体も、それはそれで意義を持ちうるものと言うことができるのである。そしてまたその二次文献の内容の多様性さらにその豊かさの程度が大きければ大きいほど、それを研究することの意義、さらにその必要性の程度も大きい、という側面を持つことになるのである。

もちろん、本書の筆者には日本における「スミス価値論」研究を集中的に考察した経験はなく、それゆえまた先でなした日本での「スミス価値論」研究に関連する言及そのものは筆者の単なる印象を述べたものでもしておくのが妥当なところであるが、同時にまた、筆者の見ることでできた限りでの、主に今世紀に入ってから海外において公表されてきた「スミスの価値論」に関連する研究について筆者は、日本でのそれに比べて相対的に、先で触れたような視点からの研究をその一部として含みつつもより多様な視点からの研究が見いだされる、といった印象をもっている、ということも事実である。そして、それがより多様であるだけに、少なくとも幾つかの重要な論点に関してなんらかの形で整理を与えておくことが必要でありまたそれは間接的な形においてではあるが、日本での研究の意味を理解するうえでの一つの助けともなるであろうという判断から書かれたのが、拙稿『『国富論』における価値論の位置に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——』（『広島経済大学経済研究論集』第1巻第3号、1978年12月）、「アダム・スミスの価値論における諸価値および現実価格：語法に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——」（同上第1巻第4号、1979年3月）、『『国富論』における価値・価格分析の構造に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——』（同上第2巻第3号、1979年12月）である。

そして、うへの作業の延長線上で考察されることとなったのが、「アダム・スミスの価値尺度論」に関連する外国二次文献ということなのである。すなわち、うへの作業をすすめる過程で筆者は、「スミスの価値尺度」に関連してなされた諸論者の論及内容の多様性、さまざまな視点といったことを感得させられるとともに、たとえば、「スミスの価値尺度」といわれるものにたいする諸論者の姿勢と、スミスの議論における「投下労働」と「支配労働」といったことを含めて価値に関するスミスの議論一般にたいする諸論者の姿勢ということとの、さらにまたスミスの経済学一般についての諸論者の把握

といったこととの、結びつき、といった感触を得ることとなった。そしてそのような事情をうけて、これまでのところそれ自体としてはまとまった形でとりあげられることの比較的少なかったテーマの一つ「スミスの価値尺度論」を研究することの意義ということに思い至るとともに、「スミスの価値尺度論」という観点から主に今世紀に入って以来の海外の諸文献の内容を考察してそのような点から、我々の「スミス価値尺度論研究」のさらなる展開またそれをつうじての我々の「スミス経済学研究」のいっそうの進展のための、たとえささやかなものであれ一つの動力源を提供することができれば、と考えるに至ったわけである。

さて、そのような考察をなそうとするにあたって見ることできた諸文献について言えば、もちろん、「スミスの価値尺度論」に関連するそれぞれ独自の研究内容を提示するものが多数あったのであり、またそれにくわえて、把握の容易でない議論の展開されているものも多々あるのであった。このような事情から筆者は、何よりもまず、それらの文献に見いだすことのできる「スミス価値尺度論」に関連する研究の各々を個々に取り扱うことによって、各々の研究の内容そのものを把握してそれを明らかにする試みをなしておくことが必要である、と判断することとなった。そして、まずそのような試みをなし、ついでそれを踏まえつつ、それらの研究において直接・間接に取り扱われている諸問題およびその取り扱われ方という角度からそれらの研究のなかにみられる個々の見解を相互比較することをつうじて、それら個々の見解のもつ意味さらにそれらの見解をその内容として含む諸研究のもつ意味をより明らかにするとともに、それらの研究がそのような諸問題に関連して我々に提起していることになる諸論点およびその含意、すなわちそれらの研究によって提起されそして我々が「スミスの価値尺度論」に関連してさらなる研究の展開をなそうとするにさいして意識しておくべきことが示唆されているところの諸論点およびその含意を、さらにまた、それらの研究をしてそれらの論点を論点として提起させているその背景となっている諸認識、諸事情を、できるだけ明らかにするという試みをなす、といった形での、「スミス価値尺度論」二次文献についての研究を構想することとなったわけである。

しかしながらまた、そのような構想のもとにすすめられることとなった研究そのものは、うえの前者の試みをなすだけで非常に多くの紙面が必要となるといった問題に出合うこととなった。一つにはこのような事情から、本書

では、うえの前者の試みをなすにとどめ、後者の試みは次の機会になす、ということとなったのである。

したがって本書の以下で示される研究結果は、当初の研究計画から言えばその前半部分に当たり、後半部分の研究の基礎を提供するものということになる。しかしまた同時に、もし海外における諸研究一つひとつの内容そのものを把握してそれを明らかにするという主要目的の達成に成功しているならばその研究結果はまたそれ自体でも、「スミスの価値尺度論」を我々が考えるにさいしてさまざまな脈絡でその有用性を発揮しうるはずである。うえのような事情にくわえてさらに積極的なこのような考慮から、うえの主要目的達成の成功の程度に不安を抱きつつも、本書を公にすることとなったわけである。

なお、本書では主に今世紀に入ってからの研究を取り扱うのであるが、今世紀に入る直前の状況もみておきたいという意図から、19世紀末のいくつかのものもとりあげておくこととし、さらに、それぞれの地で学生に教えられているようなある意味で一般的な見方といったものをみておくことも意味があるであろうという判断から、どちらかと言うと「教科書」に分類されるようなもののなかに見いだされる議論のいくつかもとりあげておくこととした。

また、本書での諸研究についての叙述そのものは、もちろん、それらの研究についての筆者の理解、解釈に基づきつつなされたわけであるが、そこで取り扱われた文献のなかには、「スミスの価値尺度論」そのものあるいはそれに関連する事柄を直接の考察対象とすることを意図したものというよりもむしろ他の問題を取り扱う過程でそれに論及しているといったものも含まれており、また、うえでも触れられたように理解の容易でない議論の展開されているものも多々あったわけであって、そのような文献を取り扱うさいには、それらの文献からもできるだけ多くのことを学び取りたいという意図もあって、「スミスの価値尺度論」という観点からそれらの文献のなかにみられる議論を捉えるよう努めるとともに、その議論自体が一つの論理整合的な議論として捉えることもできそうな議論については、必要に応じて可能なかぎりでの補足、推測等々を加えつつ、できるだけ論理の一貫した議論として捉える方向で取り扱うこととした。

さらに、本書で使用された文献そのものは、必ずしも、原版、初版のもの

あるいは最初に掲載、公表された書物、雑誌等からのもの、ではないのであるが、本書では、原則として、著書中に示された研究についてはその著書の原版もしくは初版が刊行された年あるいはその著書の最初の著作権が成立した年、また、論文等のなかに示された研究についてはその論文等が最初に書物、雑誌等に掲載されて公表された年、にしたがってそれぞれの研究の発表年の区分をなし、その発表年の順に、また同一年内での著書中に示されたものと論文等のなかに示されたものについては前者を先に、個々の研究をみることにした。本書で取り扱うことのできた諸研究は、「スミスの価値尺度論」に関連する諸研究のすべてをおおいつくしているわけではなく、また、本書で使用した文献そのものが公にされた年は必ずしもうえの年区分と一致するわけではないのではあるが、本書のなかで論じられる諸研究を順次迎へれば少なくともおおよそのところでは、19世紀末以降1970年代末までの海外における「スミス価値尺度論」研究の展開の跡の一端を追体験することになるはずである。⁽¹⁾

以下、個々の研究を順次見ていくこととしよう。⁽²⁾

(注)

- (1) 本書で取り扱う諸研究は、本文で示された発表年区分の方法にしたがえば、1970年代末までのものである。それ以後にも、たとえば Rory O'Donnell, *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke & London: Macmillan, 1990 のなかにみられるような重要と思える研究も現れている。1980年代以降の諸研究、少なくとも上掲書中にみられる R. オドーネル (R. O'Donnell) の研究については、別の機会になんらかの形で取り扱いたい、と考えている。
- (2) なお、本書の「1」から「15」、「17」から「55」、および、「58」、の内容は、1981年4月から1988年6月にかけておよび1993年6月に筆者が『広島経済大学経済研究論集』で発表したものに多くの加筆修正を施したうえで改めて発表されるものである。

1. J. K. イングラム (1888年⁽¹⁾)

その初版が1888年に刊行された J. K. イングラム (J. K. Ingram) の一著書 (John Kells Ingram, *A History of Political Economy*, new and enlarged edition, with a Supplementary Chapter by William A. Scott and an Introduction by Richard T. Ely, [London: Black], 1915 [1st edition Edinburgh: Black, 1888]; reprint edition, New York: Augustus M. Kelley, 1967. なお、ここでは、増補を加えられて1915年に出された新版の、1967年に刊行された上掲のリプリント版を使用するのであるが、ここで取り扱うイングラムの研究の発表年の区分については、上掲書の初版が刊行された年、1888年をとり、そして、以下では、上掲のリプリント版を Ingram [1888] と略記することとする。米山勝美訳『経済学史』[1915年新版の邦訳]、早稲田大学出版部、1925年) のなかでイングラムは、「アダム・スミスの価値尺度論」に関連するつぎのような概要をもった所説を示している、といえよう。

① スミスは『国富論』での議論の展開の過程で、「効用 (utility)」という意味での価値としての「使用価値 (value in use)」にはわずかに触れるだけで「購買力 (purchasing power)」という意味での価値としての「交換価値 (value in exchange)」についての研究へとすすもうとするのであるが、そのさいスミスは、「価値の尺度 (measure) は何であるか」、さらに、「他物と交換されるであろう一物の量を規制 (regulate) するものは何であるか」ということを問題にしようとした。⁽²⁾

② そして、スミスによる交換価値についてのその研究のうち前者の問題については、スミスは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつ」のであって「それゆえそれ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準 (standard) である。労働はすべての商品の真実価格 (real price) であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない」のであり、「労働がすべての商品の交換価値 (exchangeable value) の真の尺度である」とした (WN, pp. 30, 33. 大河内訳

〈I〉, 52ページ, 57ページ, 58ページ)。だが、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつ」といったものにみられるようなスミスの文言は不明確なものである。そもそも労働の種類が確定されてもいないのに「労働の量」とは何なのか、また、「等しい価値をもつ」という語句によって何が意味されているのか。⁽³⁾

③ なお、このようにスミスは労働を真の価値尺度とするのであるが他方でまたスミスは、人々の実際の取引においては、貨幣は交換の媒介物であることはもちろん価値の尺度でもあるのであり、貴金属はほどほどの長さの諸期間 (periods of moderate length) ではそれら自体の価値においてほとんど変動しないために価値尺度としての機能に最も適しているが、遠くへ離れた時点 (distant times) については、穀物が比較のより良い標準であるとして⁽⁴⁾いる。

(注)

(1) 本書で取り扱う諸研究の発表年の区分は、原則として、著書中に示されたものについては、その著書の原版もしくは初版が刊行された年あるいはその著書の最初の著作権が成立した年に、そして論文等のなかに示されたものについては、その論文等が最初に書物、雑誌等に掲載されて公表された年に、したがうということ、しかしまた、本書で使用した文献そのものは、必ずしも原版、初版のものあるいは最初に掲載、公表された書物、雑誌等からのもの、ではないということは、本書の「序」で触れられたとおりである。

なお、本書においてそれら諸研究を取り扱うさい、原語での文献とともに、それを翻訳したものを参考その他のために利用した場合には、ページ等を示すさいそれら両方のものにおける各々のページ等を示すことにしたのであるが、その翻訳されたものが、本書で使用した原著の版とは異なる版のものからの翻訳書、あるいは、本書で使用したものと異なる書物、雑誌等に掲載されたものから翻訳されたものである場合にも、その事情を断ったうえで、原語でのものにおけるページ等と翻訳されたものにおけるそれに対応しているページ等を、示しておくこととした。

また、本書では、『国富論』の原典としては、Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited, with an Introduction, Notes, Marginal Summary and an Enlarged Index by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, New York: Random House, 1937 を使用し、そしてそれを WN と略記することとした。なお、言うまでもなく、本書で取り扱われる諸研究の各々において必ずしもこのモダン・ライブラリー版が使用されてい

1. J. K. イングラム (1888年)

るというわけではないのであるが、本書では、モダン・ライブラリー版以外の版を使用している諸研究において示されている『国富論』中の箇所は、モダン・ライブラリー版中のそれに対応する箇所を示しておくこととした。

さらに、本書では、『国富論』の邦訳として、大河内一男監訳『国富論』(全3巻)、中央公論社、1976年)を使用し、そしてそれを大河内訳と略記するとともに巻数を〈I〉、〈II〉、〈III〉と略記し、たとえばその第1巻は大河内訳〈I〉、といったように略記することとした。ただし、この邦訳は、1789年の『国富論』原著第5版(3巻本)を底本としたものである。なお、『国富論』からの引用文の本書における訳は、必ずしもこの大河内訳におけるものと一致しない。また、本書においては、同一の引用文についても、議論の脈絡からそれに相異なった訳を与えている場合もある。また、1950年のキャンナン版第6版(2巻本)の邦訳である大内兵衛、松川七郎訳『諸国民の富』(全2巻、岩波書店、1969年)、1920年のキャンナン版第2版(2巻本)の邦訳である竹内謙二訳『国富論』(上、中、下巻、東京大学出版会、1969年)、1776年の『国富論』原著第1版の邦訳である水田 洋訳『国富論』(上、下、『新装版・世界の大思想』7-8、河出書房新社、1974年)も参考にした。

また、本書において、原語でのものとその邦訳とを使用した他の諸文献についても、うへの『国富論』からの引用文の訳と同様、その原語での文献からの引用文の本書における訳は、必ずしもその邦訳におけるものと一致せず、また、同一の引用文について、議論の脈絡からそれに相異なった訳を与えている場合もある。

なお、本書ではまた、Smith, *Lectures* [ed. Cannan] によって E. キャンナン編『グラスゴウ大学講義』の原典を指し(ただし、本書ではリプリント版を使用した。その完全表記に関しては、本書後出「27」の注1を見よ)、Scott, *Adam Smith* によって W. R. スコットの *Adam Smith as Student and Professor*, そして ED によってそこに収録されている「国富論草稿」の原典、を指すこととした(これについても、リプリント版を使用した。その完全表記に関しては、本書後出「20」の注4を見よ)。また、たとえば、Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa] によって D. リカードウの P. スラッフ編『経済学および課税の原理』の原典を指し(完全表記については本書後出「6」の注17を見よ)、Bailey, *Dissertation* によって S. ベイリーの *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; Chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and His Followers* の原典を指し(これについても、リプリント版を使用した。その完全表記に関しては、本書後出「20」の注2を見よ)、Marx-Engels Werke, Bd. 13 によってドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編集の『カール・マルクス＝フリードリヒ・エンゲルス全集』第13巻の原典を指し(完全表記については本書後出「27」の注6を見よ)、Marx, *Mehrwert* によって K. マルクスの『剰余価値学説史』の原典を指すこととした(その原典として本書で使用した文献の完全表記に関しては、本書後出「17」の

注7を見よ)。

(2) Ingram [1888], p. 92. 邦訳, 131ページ。

(3) Ingram [1888], pp. 92-93, pp. 92-93n. 2. 邦訳, 131ページ, 135ページ注2。

(4) Ingram [1888], p. 93. 邦訳, 131-132ページ。なお、すでにみたように、イングラムによれば、スミスは「交換価値」についての研究にさいして「価値の尺度は何であるか」ということ、さらに、「他物と交換されるであろう一物の量を規制するものは何であるか」ということを問題にしようとした、とみられるのであるが、イングラムは、以上でみられてきたような彼の所説につづけて、うえの二つの問題のうちの後者の問題についてのスミスの議論を取り上げている。それについては、Ingram [1888], pp. 93-95, 邦訳, 132-135ページを見よ。なお、そこでは、スミスの議論においては、最初期の社会段階に関しては、ある品物の交換価値を決定(determine) するものとしてはその品物を生産するのに費やされた労働の量 (the amount of labour employed) 以外に何も考慮する必要はない、ということとなっている、とみられている。

J. K. イングラム (1888年) についての覚書

イングラムによれば、スミスは『国富論』での議論の展開の過程で、「効用」という意味での価値としての「使用価値」にはわずかに触れるだけで「購買力」、「他物と交換されるであろう一物の量」という意味での価値としての「交換価値」についての研究へとすすもうとしたのであるが、その「交換価値」についての研究においてスミスは、交換価値の「尺度」の問題と交換価値の「決定・決定因」の問題を論じた、とみられるのであった。イングラムは、スミスが価値尺度の問題について論じるさいその尺度によって測定されるべき「価値」とは、効用という意味での価値としての「使用価値」とは区別されるものとしての、「購買力」、「他物と交換されるであろう一物の量」という意味での価値としての「交換価値」であったのであり、そしてスミスの議論では「そのようなものとしての価値の大きさを測定するものとしての尺度の問題」と「そのようなものとしての価値の大きさを規制する要因といった問題」とは別個な問題であった、と捉えるわけである。

そしてイングラムによれば、スミスはうえのようなものとしての「交換価値」の真の尺度を労働に求めた、とみられるのであった。しかしまた同時にイングラムは事実上、測定のために労働の量を用いるためにはその前に労働の種類・質の相違といった問題を処理しておかなければならないはずである

1. J. K. イングラム (1888年)

にもかかわらずスミスの議論には、そのようなことをなさないままで尺度を労働に求めているという難点がある、ということ、さらに、真の尺度を労働とするさいスミスはその根拠を時間および空間をつうじての労働の価値の不変性ということに求めているのであるがそこでの時空をつうじての労働の「等しい価値」ということによって意味されていることは不明確である、ということを指摘するのであった。

また、イングラムによれば、スミスはうえのように真の価値尺度を労働に求めるのであるが他方でまたスミスは、人々の実際の取引においては貨幣は価値尺度であるのであってほどほどの長さの諸期間では貴金属の価値は安定的であるため——なお、イングラムはここでは、そのような貴金属の安定的な価値ということに関してはことさら問題にしようとはしなかったのであるが、おそらくそこでの「価値」は貴金属の、うえのようなものとしての「交換価値」として捉えていたのであろう——そのような期間については貨幣・貴金属が最適の価値尺度でありそれに対し遠くへだたった時点については穀物がより良好な価値尺度であるとしている、とみられるのであった。イングラムは、スミスは労働を真の価値尺度としてはいるがスミスの議論では貨幣・貴金属、穀物もそれぞれ労働とならぶ別個な一尺度として考えられているのであって、そしてそのうえでそのような尺度としての貨幣・貴金属および穀物の適格性が問題にされている、とみている、と言うこともできるのであろう。

2. F. von ヴィーザー (1889年)

1889年に刊行された F. von ヴィーザー (F. von Wieser) の一著書 (Friedrich von Wieser, *Der natürliche Werth*, Wien: Alfred Hölder, 1889. 以下, Wieser [1889] と略記する。邦訳: 大山千代雄訳『自然価値論』, 有斐閣 (売捌所), 1937年。英訳: *Natural Value*, edited with a Preface and Analysis by William Smart, translated by Christian A. Malloch, New York: Kelley & Millman, 1956. 以下, この英訳を English ed. と略記する) のなかには, つぎのようなものとして捉えることもできるであろうようなヴィーザーの見方を見いだすことができる, ともいえよう。

① スミスは「価値」についての説明において事実上, 「哲学的」理論と「経験的」理論ともいえる二つの互いに矛盾する理論を提示したのであり, またスミスの議論のなかにはスミス自身がそれらの理論の間になんらかの矛盾が存在するということを感じていたということを示す徴候を見いだすこともできるのではあるが,¹⁾ その「哲学的」理論においてスミスは事物の「有用性」その他の諸属性から区別されるべきところの「価値」の固有の属性を明らかにしようとしていたのであり, そしてスミスはまず, 最も単純で, 最も初期の, 自然的な状態での事物の「価値」というものを考察することによってそのようなものとしての「価値」の固有の属性, 「価値」の本質についての考えを獲得しようとするとともにスミスはさらに, そのようにして得られた価値についての考えを価値現象の経験的諸事情にも適用しようとしたのであった。そしてまた, そのようなものとしてのスミスの「哲学的」理論において示されている「価値」についての考えというものは, 「価値」を生じさせるものは労働であり, 財貨は我々にとって, それが労働という形で費やさせる (kosten) ものしたがってまたその所有が労働という形で免れさせる (ersparen) ものという値打ちがある, というものであったのであって, そしてそこではさらに, 価値がその内容をそれから受け取るころの労働というものとの関連をつうじて, 価値を測定することさえできる, ということになっているのであった。²⁾

2. F. von ヴィーザー (1889年)

② さらにまたスミスは、うえのような「哲学的」理論とは独立的に「経験的」理論ともいえるもののなかで、価値の存在 (Vorkommen) および価値の大きさ (Grösse) の、現実の生活において作用している原因 (Ursachen) について論じたのであり、そしてそこではスミスは生産物の交換価値 (Tauschwerth) は一般に、生産の労働にくわえて生産に要する資本にたいする利子 (Zins) と生産に要する土地にたいする地代といった三つの要素によって構成されるのであって労働が唯一の原因 (Ursache) というわけではないとするのであったのではあるが、同時にまたそこでのスミスの議論では、経験的に観察される「価値」も哲学的に説明される「価値」と別の本質をもつものではなく、土地および資本によって創造される価値部分は労働によって創造される価値部分と同一の本質をもつのであり、また、その価値部分の内容を把握そして測定するために引き合いに出されなければならないのは、やはり労働なのである、ということになっているのであった。⁽³⁾

(注)

(1) 本章後出の注を見よ。

(2), (3) Wieser [1889], Vortwort, S. III-IV. 邦訳, 「原著者序」, 12-13ページ。
English ed., Author's Preface, pp. xxvii-xxviii.

なお、ヴィーザーによれば、スミスが「価値」についての哲学的説明と経験的説明との間になんらかの矛盾が存在するということを感じていたということを示す唯一の徴候は、経済の最初期の自然的状態の叙述から資本および土地の私的所有を伴う経済の実際の現存の状態の叙述へと移行するところで見いだされるのであり、スミスはひとたび現実の領域に到達するや資本利子および地代を自明の事実として彼の体系のなかに受け入れるのではあるがここではスミスは、「自分たちが種子をまきもしなかった場所で収穫したが」人々に対する非難を申し立てずにはいられないのである、とされる。Wieser [1889], Vortwort, S. IV. 邦訳, 「原著者序」, 13ページ。English ed., Author's Preface, p. xxviii.

F. von ヴィーザー (1889年) についての覚書

ヴィーザーによれば、「価値」についての説明においてスミスは事実上、「哲学的理論」と「経験的理論」ともいえる二つの互いに矛盾する理論、スミス自身がそれらの間になんらかの矛盾が存在するということを感じていたという徴候を示しもししているところの二つの理論を、提示した、とみられるのであ

た。

そしてヴィーザーによれば、スミスはその「哲学的理論」において事物の「有用性」その他の諸属性から区別されるべき「価値」の固有の属性を明らかにしようとしていたのであるが、また、そのさいスミスはまず、最も単純で、最初期の自然的な状態での事物の「価値」ということを考察することによってそのようなものとしての「価値」の固有の属性、「価値」の本質についての考えを獲得しようとし、そしてその考えを価値現象の経験的諸事情にも適用しようとしたのであるが、うえのようにして得られた「価値」についての考えそのものは、「価値」とは労働によって生じさせられるものであり、事物は労働という形でその事物が費やさせるものしたがってまた労働という形でその事物が免れさせるものという値打ちのあるもの、といったものであったのであり、そしてまたそこでは、価値にその内容を与える労働というもののとの関連をつうじて価値を測定することさえできるということとなっている、とみられるのであった。

そしてまたヴィーザーによれば、スミスはうえのような「哲学的理論」とは独立的に「経験的理論」ともいえるものを提示したのであるが、スミスはそこでは価値の存在および価値の大きさの、現実の生活において作用している原因について論じようとしていたのであり、そしてそこではスミスは生産物の交換価値は一般に、生産の労働にくわえて生産に要する資本にたいする報酬と土地にたいする報酬といった三つの要素によって構成されるのであって労働が価値の唯一の原因というわけではないとした、とみられるのであった。だがまた同時にヴィーザーによれば、そこでのスミスの議論では、経験的に観察される「価値」も、哲学的に説明される「価値」と別の本質をもつというわけではなく、土地および資本によって創造される価値部分も労働によって創造される価値部分と同一の本質をもつのであり、また、その価値部分の内容を把握そして測定するために引き合いに出されなければならないのはやはり労働である、ということにもなっている、とみられるのであった。

3. J. ボナー (1893年)

その初版が1893年に刊行された J. ボナー (J. Bonar) の一著書 (James Bonar, *Philosophy and Political Economy: In Some of Their Historical Relations*, [new impression], London: Frank Cass, 1966 [1st edition London: Swan Sonnenschein; New York: Macmillan, 1893; 2nd edition London: George Allen & Unwin, 1909; 3rd edition 1922]). なお、ここでは、上記の出版社から1966年に新刷として出された上掲書を使用するのであるが、ここで取り扱うボナーの研究の発表年の区分については、上掲書の初版が刊行された年、1893年をとり、そして、以下では、上掲の新刷を、Bonar [1893] と略記することとする。なお、1992年には初版のリプリント版が、Warren J. Samuels による序文が付されて Transaction Publishers (New Brunswick, N. J.) から Transaction Edition として出されている。東 晋太郎訳『経済哲学史』[1909年の第2版の邦訳]、大鑑閣、1921年)のなかでボナーは、つぎのような概要をもった所説を示している、ということもできよう。

① スミスは、事物の他事物にたいする購買力としての「交換価値 (value in exchange)」と事物の効用としての「使用価値 (value in use)」とを区別し、しかもそれら両価値の間には確固たる依存関係はないことを示したうえで注意を「交換価値」に向け、そして、交換価値の通常の共通の尺度は貨幣であるということを認めつつもまた常にそれほど一貫していたわけでもないけれども、あらゆる事物の交換価値の真の尺度はその当該事物の貨幣での価格ではなく、その当該事物が購買者をして支配することを可能にさせるであろうところの労働の量であるとしたのであり、そこでは、売り手の観点からすれば売られる品物は、売り手がその品物と交換に獲得する対応物のもつ労働購買力に応じて、また買い手の観点からすれば買われる品物は、その品物が買い手から彼自身の労働を省くあるいは他人の労働を購買するのに応じて、大なるあるいは小なる価値をもっているのであるといったことが考えられている。⁽¹⁾

② また、スミスはそのようなものとしての「支配しうる労働」を価値尺度としたのであるが彼は事実上、生物学的に同一の人類としての人間は時間的にも空間的にも相互に類同性を具えておりまたそれゆえ労働に伴う生理学上の費用もすべての人間にとって時間的にも空間的にも等しいのであるといった考えをもっていたのであって、そのような考えに基づきつつ、「労働」という時空をつうじて安定的なものにたいする支配力こそが真の価値尺度を提供すると考えたのである。⁽²⁾

③ なお、「労働」というものについてのうえのようなスミスの考えに対しては、たとえば、熟練労働と不熟練労働との間の賃金格差の存在といった異論、また、スミスは肉体労働しか考えていないといった異論、が存在するが、熟練労働者が行う現在の労働だけでなくその熟練を獲得するのに費やした労働といったもの、また雇用の不安定性さらに職業が直面しなければならない危険等々といったものを考慮に入れば結局のところ全体としての労働生活ということにとってはすべての労働の間で賃金は平準化しているのであって、異なった種類、質の労働の間に存在する賃金格差ということによって労働についてのそのようなスミスの考えの妥当性が損なわれるわけではなく、また、頭脳労働の緊張は今も昔も同じであり、人間の心身の変化は、少なくとも勤労するさいの材料や方法の変化といったことと比べれば、取るに足りないものであったのであって、労働についてのそのようなスミスの考えは、肉体労働と同じように頭脳労働にも当てはまりうるのであり、うえのような異論はスミスの議論にとっては致命的なものではない。⁽³⁾

④ ただし、スミスは全体としてみて人類は変化してきたわけではなくまた快楽という点におけるのと同じように労苦という点においても人々は通常思われている以上に等しいものであるとみていたのであるけれども、スミスはみづからの議論において「価値」という用語を同一の意味で一貫して使用してはいないという異論は彼の議論にとってより深刻なものである。すなわち、たとえばスミスが「等量の労働は、時と場所のいかにを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない」と言うとき(WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 57ページ)、そこで意味されている「価値」とは「交換価値」ではなくて「使用価値」なのであり、そして「価値の

3. J. ボナー (1893年)

パラドックス」についてのスミス自身が示している説明にしたがえば交換価値と使用価値とは互いになんかの確固たる関係も持たないのであって、一方は他方の尺度ではありえないはずなのであり、スミスが、現実にはほとんどの人は価値尺度として労働よりも「手でさわれる物体」である貨幣、穀物のようななんらかの「他の商品」を用い、労働は実際には「抽象的な観念であって、十分にわかりやすいものにされることができるとしてもそれほどごく自然かつ自明なものではない」ということを認める(WN, pp. 31-32. 大河内訳< I >, 55-56ページ) 必要に迫られた原因は、こういったところにあったのである。⁽⁴⁾

(注)

- (1) Bonar [1893], pp. 156-157. 邦訳, 260-262ページ。
- (2) Bonar [1893], p. 157. 邦訳, 262ページ。
- (3) Bonar [1893], pp. 157-158. 邦訳, 262-263ページ。
- (4) Bonar [1893], p. 158. 邦訳, 264-265ページ。

J. ボナー (1893年) についての覚書

ボナーによれば、スミスは事物の他事物にたいする購買力としての「交換価値」と事物の効用としての「使用価値」とを区別し、しかもそれら両価値の間には確固たる依存関係はないことを示したうえで注意を「交換価値」に向け、そして、事物の交換価値の真の尺度を、(ただし、常にそれほど一貫してというわけではないけれども、) 当該事物が購買者をして支配することを可能にさせるであろうところの労働の量に求めたのであり、そこでは、売り手の観点からすれば売られる品物は、売り手とその品物と交換に獲得する対応物のもつ労働購買力に応じて、また買い手の観点からすれば買われる品物は、その品物が買い手から彼自身の労働を省くあるいは他人の労働を購買するのに応じて、大なるあるいは小なる価値をもっているのである、ということとなっている、とみられるのであった。

またそのさいボナーによれば、スミスは事実上、生物学的に同一の人類としての人間は時空をつうじて相互に類同性を具えておりまたそれゆえ労働に伴う生理学上の費用もすべての人間にとって時空をつうじて等しいといった考えに基づきつつ、そのような意味で「時空をつうじて安定的なものである

労働」，というものにたいする支配力こそが，真の価値尺度を提供すると考えたのである，とみられるのであった。

なお，ボナーによれば，時空をつうじての人間の類同性，人間にとっての労働に伴う生理学的費用の時空をつうじての等しさといった「労働」というものに関するうえのようなスミスの考え自体の妥当性は，異なった種類・質の労働の存在またそれらの労働にたいする賃金の格差の存在といったようなことによってそれほど損なわれるわけではない，とみられるのであるが，同時にまたボナーによれば，スミスの議論には「価値」という言葉が同一の意味で一貫して使用されていないという難点があるのであり，たとえば「等量の労働は，時と場所のいかんを問わず，労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。……彼はつねに，自分の安楽，自由，幸福の同一部分を犠牲にしなければならない」とスミスが言うとき，そこで意味されている「価値」とは「交換価値」ではなくて「使用価値」なのであり，そして「価値のパラドックス」についてのスミス自身が示している説明にしたがえば交換価値と使用価値との間には確固たる関係はないのであって，一方は他方の尺度ではありえないはずなのであり，スミスが，現実には価値尺度として労働よりも貨幣や穀物のようなものが用いられ労働はそれほど自然かつ自明な価値尺度ではないということを認めざるをえなかった原因は，こういったところにあったのである，とみられるのであった。

4. W. リープクネヒト (1902年)

1902年に刊行された W. リープクネヒト (W. Liebknecht) の一著書 (W[ilhelm] Liebknecht, *Zur Geschichte der Werttheorie in England*, Jena: Gustav Fischer, 1902. 以下, Liebknecht [1902] と略記する。八木澤善次訳『英国価値学説史』, 弘文堂書房, 1926年) のなかには, つぎのようなものとして捉えることもできるであろうようなリープクネヒトの見方を見いだすことができる, とはいえよう。

① スミスは「使用価値 (value in use)」と「交換価値 (value in exchange, exchangeable value)」とを区別するのであるが, そこで言われている「使用価値」とは「効用 (utility)」と同一物であり, そして「交換価値」とは事物の他財貨にたいする購買力であり, しかもスミスの場合その交換価値という言葉は「真実価格 (real price)」という言葉と同一の意味をもたされている⁽¹⁾。

② そして, スミスは, そのように「使用価値」から区別された「交換価値」についての研究をなそうとしたのであるが, では, 交換価値の本質とは何であったのか, 交換価値は何によって決定 (bestimmen, 規定) されるのであったのか。スミスは, 「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち, あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは, それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が, それを獲得してしまった人にとって, またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって, 真にどれほどの値打ちがあるかといえ, それによって彼自身がはぶくことができ, またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」と述べる (WN, p. 30. 大河内訳 I, 52-53ページ) のであった。しかしながらまたスミスによれば, 交換価値の研究にさいしては, 土地の占有と資本の蓄積に先立つ事物の「原始的状態」とそれらが行われる「現代の状態」という二つの歴史期が厳格に区別されなければならないのであった⁽²⁾。

③ そしてスミスは, 労働の生産物すべてが労働者に属することとなる社

会のうえの原始的状態では、財貨はそれらの財貨の生産に使用された相対的な労働量にしたがって交換されるのであって、そこでは労働が交換価値の源泉（Quelle）であり、そして労働時間（Arbeitszeit）が交換価値の尺度（Massstab）であるとし、さらに、労働の質、種類の差異といったことが考慮に入れられるべきであってより大きな努力、熟練、巧妙さ等を必要とする労働は普通の労働の何倍かのものにあたるものとして計算されるべきであり、そのような労働によって生み出される生産物にはその生産に向けられた時間を単に算定することによって帰されることになる価値よりもより高い価値が与えられるべきであるとしつつも、高度な才能、熟練等によって生産される生産物の高価値はその才能、熟練等の習得に要する時間および労苦に対して支払われる妥当な報償にほかならないと述べることによって、ここで生じうる困難を片付けてしまおうとしたのであった。⁽³⁾

④ 他方、スミスはまた、土地の占有と資本の蓄積が行われ労働者がもはや彼の労働の全生産物を受け取ることのない社会の現代の状態では、商品の獲得、生産に費やされる労働量はもはや、商品の交換価値決定の唯一の要素ではあらず、賃金、利潤、地代が、たいていの商品の価格の三つの構成部分をなす、とするのであるが、しかしまた同時に、依然として労働がそれら三つの構成部分の真実価値（real value）の尺度なのであるすなわちそれらの各々が購買または支配しうる労働がそれらの構成部分の真実価値の尺度なのである、ともするのであった。⁽⁴⁾

⑤ ところで、以上のようなものとしてのスミスの議論そのものは混乱したものでありそしてスミスはブルジョア社会一般について価値の、一つの最終的な決定因を見つけ出すことを放棄してしまっているのである。というのは、彼が一商品の購買しうる労働の量をその商品の交換価値の唯一の尺度と主張したとしても、それによつては、任意の一商品の交換価値の事実についての説明もその任意の商品の交換価値の特定の高さについての説明も、与えられているわけではないはずであるからである。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

⑥ また、商品としての労働は他の諸商品となんらかわることなくその価値において他の諸商品とまさに同じように変化するものであるはずのものであるのであるが⁽⁷⁾、スミスは、たとえ雇い主の観点からすれば労働の価格は他のすべての商品の価格と同様上下に変動するとしても等しい労働量は労働者にとってはつねに等しい価値をもつものであると主張することによって、

4. W. リープクネヒト (1902年)

そのことを否定する。その価格において変化するの実は、労働者が賃金として受け取る財貨のほうなのであり、「それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ)とするのである。だが、こういった全立論にたいしては、つぎのただ一つの反論で十分である、すなわち、ここで問題となるのは、労働者にとっての労働の価値すなわちこの意味での労働の使用価値ではなくて、労働の社会的価値、労働の交換価値なのである、ということである。⁽⁸⁾

(注)

- (1) Liebknecht [1902], S. 20, S. 20 Anm. 2. 邦訳, 45ページ, 46ページ注1。なお、リープクネヒトによれば、スミスは「使用価値」と「交換価値」との区別の例証として水とダイヤモンドの例を挙げるのであるが、そこにおいてスミスは「合理的 (vernünftig)」使用価値と「非合理的」使用価値とを区別するという誤りを犯している、とされる。(Liebknecht [1902], S. 20. 邦訳, 46ページ。)
- (2) Liebknecht [1902], S. 20-21. 邦訳, 46-47ページ。
- (3) Liebknecht [1902], S. 21, 24. 邦訳, 46-48ページ, 55ページ。
- (4) Liebknecht [1902], S. 21-22. 邦訳, 48-49ページ。
- (5) リープクネヒトは、スミスは一商品の価格の構成部分各々の真実価値 (real value) はその各々が購買しうる労働の量によって測定されとすることによって一商品の交換価値の尺度を、その商品が購買しうる労働の量としようとしていた、とみているのであろう。また、リープクネヒトは、スミスの議論においては「真実価値 (real value)」という用語は交換価値と同義のものとして使用されていた、と捉えている、とみても差し支えないであろう。
- (6) Liebknecht [1902], S. 22. 邦訳, 49ページ。リープクネヒトは、一商品の購買しうる労働の量をその商品の交換価値の尺度とすることそれ自体は、任意の一商品の交換価値の事実についての説明さらにその任意の商品の交換価値の特定の高さについての説明といったこととは別のこととみているわけであり、その意味で、リープクネヒトは事実上、交換価値の尺度の問題は、交換価値の事実についての説明、交換価値の源泉についての説明の問題さらに交換価値の特定の高さについての説明、交換価値の高さを決定する事情についての説明の問題とは別の問題であるはずである、とみているのである (なお、リープクネヒトは、たとえば、「バイリー (S.

Bailey) は彼の論文〔本書前出「1」〕の注1中で言及された Bailey, *Dissertation*〕の第二の部分(第10および第11章)において、なかんずく、従来経済学者たちによって全く許容できない形でごちゃまぜにされて同義のものとして取り扱われていた『価値の尺度 „Wertmass“ (measure of value)』と『価値の原因 „Wertursache“ (cause of value)』という概念の厳格な区分をなす、といった言及をなしている。Liebknecht [1902], S. 58. 邦訳, 127ページ。〔 〕内は中川)。また、このような視点から言えば、リープクネヒトは、スミスの議論では「社会の原始的状態」において財貨の交換価値の事実についての説明、また財貨の交換価値の特定の高さについての説明、さらに財貨の交換価値の尺度を提供するものとともに、財貨の生産に投入される労働ということになっていた、とみていた、とすることができるかもしれないであろう。

- (7) リープクネヒトは、スミスが社会の現代の状態における交換価値の尺度とする「購買しうる労働」とは「商品としての労働」である、と捉えているのである。
- (8) Liebknecht [1902], S. 22. 邦訳, 49-50ページ。なお、リープクネヒトによればまた、スミスは、うえのように土地の占有と資本の蓄積が行われる社会の現代の状態では商品の獲得、生産に費やされる労働量はもはや、商品の交換価値決定の唯一の要素ではありえず、賃金、利潤、地代がたいていの商品の価格の三つの構成部分をなすとしつつも、他方でまた、そこで退けられていることになる労働価値説 (Arbeitswerttheorie) を社会の現代の状態にも妥当するものとみなすとともに萌芽的な形態においてではあるがマルクスの剰余価値学説といったものを意味することになるような文言を示しもしているのではあるが、賃金、利潤および地代を、たいていの商品の交換価値の不可欠の構成要素さらにすべての交換価値の本源的源泉ともしそしてその各々の自然率で賃金、利潤および地代を支払うのに十分な商品価格を商品の自然価格 (natural price) と呼びつつ展開されるそのスミスの議論ではまた、結局のところ、社会の原始的状態のもとにおいては諸財貨は、労働の質、種類の差異を考慮に入れつつ、それらの財貨の生産に使用された相対的な諸労働量にしたがって交換され、それに対して現代のブルジョア社会については、大多数の商品の、交換価値、あるいは、自然的もしくは平均的価格 (der natürliche oder durchschnittliche Preis) は、使用された労働プラス地代の、費用、プラス平均利潤率、ということによって、規制 (regulieren) され、諸商品のその時々々の市場価格は、有効需要にたいする供給の割合をつうじて規制される、ということになっている、とみられるのであるが、それについては、Liebknecht [1902], S. 22-25, 邦訳, 50-55ページを見よ。

また、うえでみられたことからわかるように、リープクネヒトは、スミスの議論における「自然価格」を平均的価格と同様なものとして捉えるとともに、スミスの議論においてはその「自然価格」は現代のブルジョア社会における「交換価値」

4. W. リープクネヒト (1902年)

に対応するものであったと捉えていた、ということもできるのである。

W. リープクネヒト (1902年) についての覚書

リープクネヒトは、スミスの議論では「真実価格 (real price)」という言葉は「交換価値」という言葉と同一の意味をもたされている〔さらにまた事実上、「真実価値 (real value)」という言葉も「交換価値」という意味合いをもたされており、他方「自然価格」とは平均的価格と同様なものであるがその「自然価格」という言葉は現代のブルジョア社会における「交換価値」に対応するものとして使用されている〕とみるのであるが、そのリープクネヒトによれば、スミスは、彼の場合「効用」と同一物であるところの「使用価値」と、事物の他財貨にたいする購買力としての「交換価値」とを、区別したうで「交換価値」についての研究をなそうとした、とみられるとともに、事実上交換価値に関してスミスは、「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえ、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」と述べている、とみられていたのであった。

しかしまたリープクネヒトによれば、スミスは、交換価値に関してうえのような文言を示しているのではあるが、交換価値の研究にさいしてはまた、土地の占有と資本の蓄積に先立つ事物の「原始的状态」とそれらが行われる「現代の状態」という二つの歴史期の厳格な区別がなされなければならない、と考えていた、とみられるのであった。

そして、リープクネヒトによれば事実上、スミスは、社会のうえの「原始的状态」のもとでは財貨の交換価値の源泉、また、財貨の交換価値の大きさの決定因、さらに、財貨の交換価値の尺度となるものはともに、財貨の生産に投入される労働、財貨の生産に要する労働量、生産に費やされた労働時間であるとし、さらに、労働の質、種類の差異といったことが考慮に入れられるべきであってより大きな努力、熟練、巧妙さ等を必要とする労働は普通の労働の何倍かのものにあたるものとして計算されるべきでありまたそのような労働によって生み出される生産物にはその生産に向けられた時間を単に

算定することによって帰されることになる価値よりもより大きい価値が与えられるべきであるとしつつも、高度な才能、熟練等によって生産される生産物の高価値はその才能、熟練等の習得に要する時間および労苦に対する妥当な報償にほかならないと述べることによって、そこで生じうる困難を片付けてしまおうとした、とみられるのであった。

また、リープクネヒトによれば事実上、土地の占有と資本の蓄積が行われる社会の「現代の状態」についてはスミスは、そこでは商品の獲得、生産に費やされる労働量はもはや、商品の交換価値決定の唯一の要素ではありえず、賃金、利潤、地代がたいていの商品の価格の三つの構成部分をなすとするいっぽうで、そこで退けられているはずの交換価値の源泉さらに交換価値の大きさの決定因を生産に費やされる労働に求めるという考えを社会の現代の状態にも妥当するものとするとともに萌芽的な形態においてはあるがマルクスの剰余価値学説といったものを意味することになるような文言を、示しもするといった議論を展開するのではあるが、賃金、利潤および地代をたいていの商品の交換価値の不可欠の構成要素さらにすべての交換価値の本源的源泉ともしそしてその各々の自然率で賃金、利潤および地代を支払うのに十分な商品価格を商品の自然価格と呼びつつ展開されるそのスミスの議論ではまた、結局のところ、社会の現代の状態、現代のブルジョア社会のもとでは大多数の商品の交換価値の源泉は賃金、利潤および地代でありそしてその交換価値あるいは自然価格の高さの決定因は賃金と地代との費用プラス平均利潤率ということになっている、とみられるのであった。

そしてまたリープクネヒトによれば（すなわち、スミスはブルジョア社会一般について価値の、一つの最終的な決定因を見つけ出すことを放棄してしまっている、とみるとともに、事実上、「価値の源泉についての説明および価値の大きさの決定因についての説明の問題」と「価値の尺度の問題」とは本来別個な問題であるとみるリープクネヒトによれば）事実上、社会の現代の状態、現代のブルジョア社会での商品の交換価値の事実についての説明（交換価値の源泉についての説明）および商品の交換価値の特定の高さについての説明（交換価値の大きさの決定因についての説明）としてスミスは事実上うえのような議論を示していたのであるが、スミスはまた商品の価格の構成部分の各々の真実価値はその各々が購買しうる労働の量によって測定されることもすることによって事実上、社会の現代の状態における商品の交換価値の

4. W. リープクネヒト (1902年)

唯一の尺度を、その商品が購買しうる労働の量という「労働」としようともしていた、ともみられていたのであった。そして、事実上「購買しうる労働」とは「商品としての労働」であると捉えるリープクネヒトによればまた事実上、商品としての労働はその価値において他の諸商品と同じように変化するはずのものであるのであるが、スミスは、たとえ雇い主の観点からすれば労働の価格は他のすべての商品の価格と同様変動するとしても等しい労働量は労働者にとってはつねに等しい価値をもつものであると主張することによって、そのことを否定して、その価格において変動するのは労働者が賃金として受け取る財貨のほうなのであって「それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない」とするのはあるけれども、スミスがそのようにして、それ自身の価値のけっして変動することのない労働だけが究極で真の価値尺度を提供すると言おうとするとき、そこでの労働の価値とは事実上、労働者にとっての労働の価値、その意味での労働の「使用価値」なのであって、それは交換価値についての議論において問題となるべき労働の社会的価値、労働の交換価値ではないのである、とみられるのであった。

5. C. M. ウォルシュ (1903年)

1903年に刊行された C. M. ウォルシュ (C. M. Walsh) の一著書 (Correa Moylan Walsh, *The Fundamental Problem in Monetary Science*, New York: Macmillan; London: Macmillan, 1903. 以下, Walsh [1903] と略記する) のなかには, 以下のような形で整理できるであろうようなウォルシュの所説を見いだすことができる。

① スミスは, 「使用価値 (value in use)」と「交換価値 (exchangeable value)」とを区別し, さらに「交換価値」を, 貨幣での交換価値としての「名目交換価値 (nominal exchangeable value)」——ウォルシュによれば, スミスはこれを簡略化して「名目価値 (nominal value)」と呼んだとされる——と, 「真実交換価値 (real exchangeable value)」——ウォルシュによれば, スミスはこれを簡略化して「真実価値 (real value)」あるいはさらに簡略化してたんに「価値 (value)」と呼んだとされる——とに区別し, そしてスミスは彼の関心をもつば, この後者の意味での「交換価値」, すなわち彼が簡略化して「真実価値」あるいはたんに「価値」と呼んだものに限定したのであった。¹¹⁾

② そしてスミスは, そのような意味での価値を測定するものを労働に求めたのであるがそのさい彼は, 労働を, ある所与の時と場所における価値の尺度 (measure) としてだけでなく, あらゆる時と場所における価値の標準 (standard) としても考えていたのであった。¹²⁾

③ また, スミスは, 二つの別個な理由からそのように考えさせられることとなったのであった。¹³⁾

③-a. その一つはつぎのようなものであったといえるであろう。すなわち, 人の貧富は「人間生活の必需品, 便益品および娯楽品」にたいするその人の支配力に依存する, ところがいかなる人もこれらの事物を自分自身の労働だけによって手に入れるわけではなく, その多くの部分を, 他の人々の労働に依存するのであるから, 彼は, 他の人々の労働にたいする彼がもつ支配力 (そしてこの支配力は, 彼自身の労働を別とすれば, 彼が土地や商品の形

ですでに蓄積している所有物によってのみ、彼に与えられうるものである)に比例して、これらの事物にたいする支配力をもちうる、それゆえ、彼が所有する事物の彼にとっての価値は、その事物が彼をして支配することを可能にするところの労働によって表現される、といったものである。⁴⁾

しかしながら、このような議論は十分に説得的なものとはいえないであろう。というのは、そこでは、労働はたんに、ある人間が所有する富(wealth)とその人間が消費する富とのあいだの一媒介物として使用されているにすぎないのであって、したがってまた同様な推論によって、貨幣あるいはその他のある物が価値の尺度、標準であるということを示すことも可能であるはずであるからである。⁵⁾

③-b. もう一つの理由は、「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値 (value) をもつものと言うことができよう」(WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 57ページ) というものである。⁶⁾

しかしながらスミスのこの文言にも問題があるのである。というのは、ここで使用されている「価値 (value)」という言葉によって意味されているものは不明であり、それは、いかなる経済的な意味も、とくに「交換価値 (exchangeable value)」にかかわるいかなる意味合いをも持ちえないものであるからである。⁷⁾ なお、スミスはまた、「あらゆる物の真実価格 (real price)、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52ページ) といったことを、また、人類一般にとって労働こそが、我々がすべての物にたいして支払う「最初の価格 (first price)」あるいは「究極の価格 (ultimate price)」であるといったことを、述べてもいる。たしかにそこでは「価格 (price)」という用語よりも「コスト (cost, 費用)」という用語のほうがふさわしいであろうけれども、先の「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」と述べるのに比べれば、むしろそこでのほうがスミスはより良好な一つの立場を示している、といえるであろう。⁸⁾

④ なお、スミスはいまみたような脈絡においても「価格 (price)」という用語を用いているのであり、また、スミスの議論にはそのようなものとしての「価格」という用語と、「価値」という用語との区別が見いだされるのであるが、スミスの議論におけるそれらのものの区別および使用法といった

ことについて見てみるとすれば、つぎのようなことが言える。すなわち、そこでのスミスの語法では、一方で、ある品物の「価格 (price)」とは、その品物を獲得するために我々が手放すものあるいはその品物が我々をして費やさせるもの、他方で、その品物の「価値 (value)」とは、その品物を手放すことによってあるいはその品物を交換に与えることによって我々が獲得することのできるもの、ということになっている。ところで、スミスは、未開社会では諸財貨はそれらの財貨を生産するのに要した労働量に比例して交換されたことであろうと考えた。したがってそのような社会では、それらの財貨の「価格」と「価値」とは一致することになる〔すなわち、それらの財貨を獲得するために手放されるあるいは費やされる労働量、それらの財貨の生産に要する労働量で示されたものとしての、それらの財貨の「価格」と、それらの財貨を手放すことによってあるいは交換に与えることによって獲得される労働量、それらの財貨の支配しうる労働量で示されたものとしての、それらの財貨の「価値」とは、一致することとなる〕であろう。しかしながらまたスミスは、我々の住む文明化の進んだ段階では諸財貨はそれらの財貨の生産に要する労働量に比例して交換されはしないということを、認識していた。したがって我々の世界では、諸財貨の労働での「価格」〔すなわち、それらの財貨の生産に要する労働量での、それらの財貨の「価格」、それらの財貨の労働コスト (労働費用)〕と諸財貨の労働での「価値」〔すなわち、それらの財貨の支配しうる労働量での、それらの財貨の「価値」〕とはもはや一致せず、「生産に要する労働量」を「価格」の尺度とするばあいの〕価格の尺度と「支配しうる労働量」を「価値」の尺度とするばあいの〕価値の尺度とは、同一の諸財貨について異なった大きさを提示することとなり、一方は他方の大きさを提示することはできない、ということとなる。かくして、「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にとって真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」、また、人類一般にとって労働こそが、我々がすべての物にたいして支払う「最初の価格」あるいは「究極の価格」である、と考えるとともに、「支配しうる労働量」がある所与の時と場所における価値の尺度だけでなくあらゆる時と場所における価値の標準を提供する、と考える〕スミスは、財貨の「真実価格」とは、その財貨を生産するのに要する労働の量〔での「価格」〕であるが、財貨の「真実価値」また貨幣の「真実価値」とは、それらが購買

5. C. M. ウォルシュ (1903年)

するであろう労働の量〔での「価値」〕である、としたのであった。ただし、労働の「価格」に関してスミスは、すでに触れたように労働の「真実価値」は労働自体であってそれはつねに同一であるとする一方で、労働の「真実価格」は「労働と交換に与えられる生活の必需品と便益品の量」(WN, p. 33. 大河内訳くI), 58ページ)である、としている。だが、いずれにせよ、スミスがもっぱら関心を向けていたのは、真実価格の尺度ではなくて、真実価値の尺度あるいは価値の真の尺度であったのである。⁽¹⁰⁾

〈補記〉

なお、ウォルシュは、概ね以上のような内容をもつ所説を示したうえで、さらに、スミスの議論における貨幣の価値およびその測定ということを取り上げようとする。そこでのウォルシュの所説の内容は、概ね以下のようなものである。

① スミスがもっぱら関心を向けていたのは、真実価格の尺度ではなくて、真実価値の尺度あるいは価値の真の尺度であったのであるが、貨幣の場合には、スミスの議論では、その「真実価値」は、それが支配あるいは購買するであろう労働量に呼応する、したがって、その労働購買力に呼応する、すなわち、その労働での交換価値に呼応する、ということになるのである。⁽¹¹⁾

② したがって、貨幣の真実価値とは、労働の名目価格あるいは労働の貨幣価格すなわち賃金〔貨幣賃金〕と逆の関係にあるもの、ということになる。⁽¹²⁾

③ そして、たとえスミスが貨幣価値の変動を測定する試みにおいて賃金〔貨幣賃金〕をそのように使用せずにそれに代えて穀物価格〔穀物の貨幣価格〕で代替したとしても、それはただ、彼が穀物価格〔穀物の貨幣価格〕に関する資料を入手できたのに賃金〔貨幣賃金〕に関する資料を入手することができなかったという実的な困難性ということによるだけのことであったのであり、また、彼は、穀物価格〔穀物の貨幣価格〕の変動は労働の価格〔労働の貨幣価格、貨幣賃金〕の変動に最も近似的でありそうだと考えていたのであった。⁽¹³⁾ スミスの議論では、本来、貨幣の、価値すなわち「交換価値(exchangeable value)」は、穀物価格〔穀物の貨幣価格〕をつうじてでなく

賃金〔貨幣賃金〕をつうじて真に測定されるべきであったのである。¹⁴⁾

④ しかしながら、そこでは「賃金 (wages)」〔「貨幣賃金」〕という言葉ではなく「労働による収入 (earnings)」(もちろん、「労働による貨幣収入 (money-earnings)」) という言葉が使用されるべきであろう。¹⁵⁾ そしてもしスミスが、「賃金」という言葉に代えて「労働による収入」という言葉を使用し、さらに、貨幣の「尊重価値 (esteem-value)」はそのような「労働による収入」をつうじて測定されるのであり、また、貨幣のその「尊重価値」が一定に留まるためには「労働による収入」率が一定に留まらなければならない、と言っていたならば、スミスは一つの正確な言説をなしていた、ということになるであろう。そのような形で測定される「価値」とは、事実上、「尊重価値」なのである。¹⁶⁾ だがスミスは、「賃金」——正確には、「労働による収入」——をつうじての貨幣価値の測定という考えを、貨幣の「交換価値 (exchangeable value)」の測定ということに適用しようとしたのである。¹⁷⁾

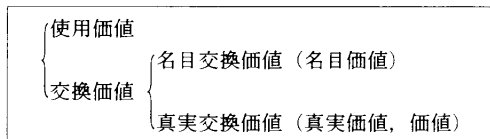
⑤ なお、貨幣の「交換価値 (exchangeable value)」を貨幣の「購買力」とするスミスは、このように、貨幣の「交換価値」の尺度として、〔「賃金」率——正確には、「労働による収入」率とされるべき——をつうじて確定されるところの〕貨幣で購買しうる「労働量」というものをを用いようとするのであるが、スミスはまた他方で、貨幣で購買しうる「労働 (labor) と商品 (commodities) の量」、さらに、貨幣で購買しうる「労働の量あるいは商品の量」といったものをも尺度として使用しようとしたのであった。したがって、スミスの議論には事実上、貨幣の交換価値は①その貨幣が購買しうる労働によってのみ測定される、②その貨幣が購買しうる労働と商品とによって——両者を組み合わせたものによって——測定される、¹⁸⁾ ③その貨幣が購買しうる労働によってでもあるいは商品によってでも測定される、という三つの考えが示されているということになるのであるが、このような混乱は、貨幣の「尊重価値」の測定には適するが貨幣の「交換価値 (exchange-value)」の測定には適さない〔「賃金」率——正確には、「労働による収入」率とされるべき——をつうじて確定されるところの〕貨幣で購買しうる「労働量」というものを標準として用いようとしたということに起因しているのである。¹⁹⁾

⑥ それゆえスミスの見解は矯正される必要がある。すなわち、スミスが「交換価値 (exchangeable value)」のために提出した標準は、実際には、「尊重価値 (esteem-value)」の標準なのである。そして、スミスはまさしく「交

交換価値 (exchange-value)」そのもののための標準が、「尊重価値」の標準との論理に合わない提携に入ることを許しもしてはいるが、彼は、まさしく「交換価値 (exchange-value)」そのもののためのその標準を、退けたのである。もしスミスが、彼が選んだ標準に照らして貨幣の「価値」が一定に留まることを望んだとするならば、彼は実際には、貨幣の「尊重価値」の一定性を望んだということになるのである。だが、スミスの議論は、スミスは貨幣の「交換価値 (exchange-value)」の一定性を望んでいたということを暗に示しているのである。なお、もしスミスがこれら両方のことを同時に望んでいたとすれば、彼は、不可能なことを望んでいたことになる。また、もしスミスがこれら二つのことの両立し難いことを認識していたならばはたして彼はこれら二つのことのうちのいずれのものを選んでいたのであろうかということは、我々には知ることはできない。とはいえ我々は、スミスはどちらかといえば、賃金標準 (wages standard) に「したがって、購買または支配しうる労働量という標準に」、また、貨幣において一定であるべきものは貨幣の尊重価値であるという見解に、傾いていた、と考えなければならない。⁽²⁰⁾

(注)

- (1) ウォルシュは、スミスは事実上、図—1に示すことができるような価値概念の区別をなしている、とみる。ウォルシュによれば、スミスは、「交換価値」を「使用価値」から区別し、さらに、「交換価値」を「名目交換価値」と「真実交換価値」とに、あるいは、簡略化して「名目価値」と「真実価値」(さらに簡略化して「価値」)とに区別した、とされるのである。そしてまたこれに関連してウォルシュは、スミスは「名目価値」によってたんに貨幣での交換価値 (exchange-value in money) を意味したのであるが、スミスはそのような一つの特殊交換価値とは区別された意味での一般的な交換価値 (general exchange-value) のための用語を持っていなかったのであり、また、そのためにこの種の価値はスミスの念頭から消え去ってしまい、そしてそれによって全体としての交換価値そのものといったことはわきへやられることとなり、スミスの関心はもっぱら、彼が簡略化して「真実価値」あるいはさらに簡略化してたんに「価値」と呼んだものに限定されることとなってしまった、といった内容の指摘をなしている。ただし、またウォルシュによれば、



図—1

スミスによる議論が展開される過程で、スミスのいうその「真実価値」,「価値」は一面では混乱を含みつつも交換価値 (exchange-value) の諸要素を保持していたのではあるが他面でそれらはまた事実上、交換価値以外の何物かにもなってしまっている、とされる。Walsh [1903], pp. 46-47.

なお、Walsh [1903] のタイトル・ページの著者名の箇所には、Author of *The Measurement of General Exchange-Value* という説明が付されているが、そこに示されている文献は、中川にとって未見のものである。

(2) Walsh [1903], p. 47.

(3) Walsh [1903], p. 47.

(4) Walsh [1903], p. 47.

(5) Walsh [1903], p. 47.

(6) Walsh [1903], p. 47.

(7) なお、ウォルシュによれば、もしもスミスが、ある所与の量の労働で購買しうる財貨の全体としての量は労働者にとってつねに等しい「価値」をもつと言っていたならば、そのときには、そこで言われている「価値」という言葉を「尊重価値 (esteem-value)」を意味するものとして解すれば、その主張はそれなりの意味を持ちうるのであり、また「価値」という言葉もそれなりの意味合いを伴いながら使用されていることになる、とみられる。しかしまた同時にウォルシュによれば、本文でみたスミスの文言のすぐ後でスミスが同一の労働は「より大きな分量の」財貨「を購買することもあれば、より小さい分量の」財貨「を購買することもある」けれども「変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらの財貨を購買する労働の価値ではない」と述べていることからわかるように、スミスは個々の財貨の価値のことを言おうとしていたのであって、財貨の全体としての量の価値といったことを言おうとしていたわけではないのである、とみられる。Walsh [1903], pp. 47-48n.

なお、ウォルシュはここでの議論に先立って、経済価値 (economic value) には「使用価値 (use-value)」,「尊重価値 (esteem-value)」,「コスト価値 (cost-value)」,「交換価値 (exchange-value)」, という四つの種類があるとみ、その各々についての定義を示すとともに同一の事物にそなわるそれら四つの種類の価値といったことについての議論を展開しているのであるが (Walsh [1903], pp. 6-8), そこでは、諸事物の「尊重価値」とは、「諸事物にそなわるところの、我々が諸事物を保持するさい尊重の心をもって保持するといったそのような尊重 (esteem) ということと相関するもの——我々が諸事物にたいしていただく愛着 (affection) や傾倒 (attachment), また、我々が所有するものを確実に自らのものにしておこうとするさいの精力 (energy), さらに、諸事物を手に入れるために我々がすすんで行使しようとする努力 (effort), といったものと相関するもの——」, とされ、それにたいし、一事物の「交換価値」

5. C. M. ウォルシュ (1903年)

とは、「一事物の、別の一事物にたいするあるいは諸事物一般にたいする購買力」とされる。なお、「使用価値」は、効用 (utility) という言葉によって意味されるものをほとんどこえるものではなく、「コスト価値」は、諸事物がその生産者たちに費やさせる努力 (effort) もしくは労働と相関するもの、とされる。Walsh [1903], p. 6.

- (8) Walsh [1903], pp. 47-48. なお、ウォルシュは、スミスの言う当該事物を獲得するための「労苦と骨折り」というものを当該事物を獲得するための「労働」と同義のものとして捉えている、といえよう。
- (9) ウォルシュによれば、この議論は欠陥をもつものである、とみられる。すなわち、労働者の労働にたいしてその労働者に与えられる必需品等の量〔つまり、ここで言われる労働の「真実価格」を示すもの〕というものは、その労働者の労働が購買する必需品等の量〔その労働者が彼の労働を交換に与えることによって獲得できる必需品等の量〕と同一のものであり、またそれゆえ、〔スミス自身の議論における、それを手放すことによってあるいはそれを交換に与えることによって我々が獲得することのできるものとしてのその「価値」ということからして〕その量は、同じように、彼の労働の「価値」〔を示すもの〕ともみなされうるのであり、そしてそのようなものとしての労働の「価値」というものは、〔必ずしも不変なものではなく、〕その量とともに変動してしまうものということになる、とされるのである。

Walsh [1903], p. 49n.

- (10) Walsh [1903], pp. 48-49.
- (11) Walsh [1903], p. 49.
- (12) Walsh [1903], p. 49. たとえばいま1単位の労働にたいする貨幣賃金が15円であるとすれば、貨幣1円の労働支配力は $1/15$ となり、貨幣1円の真実価値は $1/15$ 単位の労働として示されることとなる。
- (13) なお、ウォルシュは、このような事情からスミスは価値測定の問題という脈絡のなかで穀物 (corn) を取り上げることとなったとみるとともに、さらに、スミスの議論には穀物を価値の標準と考えることに対するそれとは全く別の、二つの異なった理由も示されているとみ、それについての言及をなすのであるが (Walsh [1903], pp. 49-50n.), そこでのウォルシュの所説の内容は概ね以下のようなものである。

まず、スミスの示しているそのような理由の一つは、同一量の穀物はつねに同一量の労働を扶養するというに関係するものである。つまり、穀物は労働を扶養するのであるから、また、一事物が購買するであろう労働量がその事物の真実価値の尺度であるのだから、究極的には、一事物が購買するであろう穀物の量が、その事物の真実価値の尺度となる、というものであったように思える。ところで、こういった穀物標準と労働標準とのそのような符合は、労働者たちがある固定的な量の (ある最低限の) 食べ物で維持されるかぎりにおいてのみ持続するであろうけれど

も、スミス自身も、そのような状況は永続的なものとは信じてはいなかったのであり、またうえのようなものは、たぶん、穀物の価格〔穀物の貨幣価格〕は長期の諸期間 (long periods) にわたってのその諸変動という点で労働の価格〔労働の貨幣価格〕すなわち賃金〔貨幣賃金〕と符合するのだというスミスの見解のための一つの基礎的理由づけにすぎないのである。〔なお、タイクグレバー (R. F. Teichgraeber III) によれば、スミスの生きていた時期の間にあっては、「穀物 (corn)」という用語は、パンを生産するために使用されるすべての穀類 (cereals)——小麦、ライ麦、大麦、等々——を言い表すために用いられていたのであり、また、ほとんどの普通の人々はほとんど全くパンだけを食べて生きていたと考えられていたのであり、したがってまた、「穀物の価格 (price of corn)」はおおよそのところ、「生計費 (cost of living)」あるいは「食糧価格 (price of food)」と同義であった、とされる。Richard F. Teichgraeber III, *'Free Trade' and Moral Philosophy: Rethinking the Sources of Adam Smith's Wealth of Nations* (Durham: Duke University Press, 1986), p. 203n. 82 を見よ。〕さらにまたスミスは、もう一つの理由、すなわち、穀物生産費の経時的同一性ということからも、穀物標準を推薦している。だがそういったものは、相対価値 (relative values) を説明 (explain) するために生産費説 (cost-of-production theory) を使用したさいにおけるスミスの逸脱と同じように、スミスの真の立場からの偶発的な逸脱といえるものにすぎないのである。

なお、前出本文④のなかでみたように、ウォルシュは、スミスの議論では、未開社会においては諸財貨はそれらの財貨の生産に要した労働量に比例して交換され、それらの財貨の生産に要する労働量がそれらの財貨の支配しうる労働量（それらの財貨の「真実交換価値」〈「真実価値」, 「価値」〉の大きさ）に等しくなったのに対し文明化の進んだ段階での社会においては諸財貨はそれらの財貨の生産に要する労働量に比例しては交換されはせず、それらの財貨の生産に要する労働量は、それらの財貨の支配しうる労働量と一致しはしない、ということとなっている、とみるのであった。そしてここではウォルシュは、相対価値を説明するために生産費説を使用したさいにおけるスミスの逸脱といったことに言及するのであった。このような事情からして我々は、ウォルシュはスミスの議論には、「交換価値」（「相対価値」）の因果的説明の問題と「交換価値」（「相対価値」）の真の尺度という問題とを別個の問題として論じるという側面があった、と捉えていた、とみることも可能であるかもしれないであろう。

(14) Walsh [1903], pp. 49-50.

(15) ウォルシュによれば、「賃金 (wages)」とは、人々が自らの労働によってあげる唯一の収入ではない、とされる。(Walsh [1903], p. 50.) ここでは、ウォルシュはおそらく、「賃金 (wages)」という概念には教育訓練等の結果として生じる機能への報

5. C. M. ウォルシュ (1903年)

酬といったものは含まれないと考え、「労働による収入 (earnings)」によって、教育や熟練などの人的資本に対する分配分といったものを含めて機能的分配の見地からみて労働に帰属するいさいの所得としての「労働所得 (labor income)」といったようなものを意味しようとしているのであろう。

- (16) ウォルシュによれば、一般の人々はより多くの貨幣を、働いた報酬として受け取れば受け取るほど〔「労働による貨幣収入」率が高ければ高いほど〕、彼らは貨幣をそれだけより少なく尊重 (esteem) し、またより少なく受け取れば受け取るほどそれだけより多く尊重するのであり、そして、「労働による収入」率〔「労働による貨幣収入」率〕が一定に留まるならば貨幣の「尊重価値」は一定に留まることとなる、とされる。ウォルシュは事実上、「労働による収入」率〔「労働による貨幣収入」率〕の逆数は貨幣1単位の労働購買力を示すことになるのであるが、その逆数、その労働購買力は実は貨幣1単位の「尊重価値」の大きさを示すことになるのである、とみるのである。Walsh [1903], pp. 50-51.

- (17) Walsh [1903], pp. 50-51.

- (18) ウォルシュは、この場合には、貨幣がより多くの労働を、そしてより少ない商品を購入しうようになるとときには、あるいはまたその逆になるときにも、貨幣の交換価値は一定ということもありうる、とする。Walsh [1903], p. 51.

- (19) Walsh [1903], pp. 51-52. なお、ウォルシュの著書の左記の箇所には、概ね以下のような内容をもったウォルシュの議論が含まれている。すなわち、もしも貨幣価値を労働によって測定しようと商品によって測定しようとそこにはなんの差異も生じないならば、すなわち、貨幣価値を測定するそれら二つの方法がつねに同一の結果をもたらすならば——ウォルシュによれば、このようなことは、おこりえないことである、とされる——、本文でみた②の立場は、前の二つの立場を調和させることになるであろう。また事実、ある人の財産は「その財産で彼が購買または支配しうところの、他の人々の労働の量または同じことであるが他の人々の労働の生産物の量」に正確に比例する、とスミスが言う時 (WN, p. 31. 大河内訳 I), 54ページ) に彼が考えていたのは、この立場なのである。だが、こういったものは事実と合致するものではない。そればかりか、それは、スミス自身の学説でさえもないのである。というのは、スミス自身の学説というものは、こういったものは未開社会においてのみ事実と合致し、我々の時代では事実と合致しない、というものであったからである。〔ここではウォルシュはおそらくつぎのようなことを考えているのであろう。すなわち、いま、ある人の「財産額」を F 、労働1単位当たりの「労働による収入」を e 、ある一生産物の1単位当たりの価格を p 、その生産物1単位を生産するのに要する労働の単位数を n 、で示すとすれば、「その財産で彼が購買または支配しうところの、他の人々の労働の量」は F/e 、「その財産で彼が購買または支配しうところの、他の人々の労働の (一) 生産物の量」は F/p 、ということにな

るのであるが、スミスの議論からすれば、未開社会においてのみ、労働の生産物はすべてその労働を行った労働者に帰属することとなり、さらにまたそこでは、生産物1単位当たりの価格(p)は、生産物1単位当たりの「労働による収入」費用総額($e \cdot n$)に等しい、ということとなる。したがって、ここでは、 $F/p = F/(e \cdot n) = (1/n)(F/e)$ という関係が成立しうることとなる。そして、もし、その生産物1単位の生産に要する労働の単位数が1単位($n=1$)で一定であるならば、「その財産で彼が購買または支配しうるところの、他の人々の労働の量」(F/e)と「その財産で彼が購買または支配しうるところの、他の人々の労働の(一)生産物の量」(F/p)とは常に等しい、ということとなる。また、 $n \neq 1$ の場合でも、その生産物を生産するのに労働が必要で、しかもその生産物1単位の生産に必要な労働の単位数が一定であるかぎりにおいては、それら二つの量は、 $(1/n)$ という比例定数を伴いつつ正比例する、ということになる。】さらに、スミス自身、異なる期では労働生産性が異なり、それゆえ異なる期においては、同一量の労働を支配するであろう貨幣は同一量の労働生産物を支配しはしないであろう、また、同一量の労働生産物を支配するであろう貨幣は同一量の労働を支配しはしないであろうということを認識していたのであったのであり、そしてスミスが標準として「購買しうる商品量」ではなくて「購買しうる労働量」を選んだのは、まさしく、その「購買または支配しうる労働生産物量」と「購買または支配しうる労働量」との間での選択であったのである。スミスは、能率(*efficiency*)によって測定されることになる生産力という標準〔(購買または支配しうる)労働生産物量という標準〕でなく時間(*time*)によって測定されることになる生産力という標準〔(購買または支配しうる)労働量という標準〕を選んだことになるわけである。なお、スミスはこのような選択をなしたのであるが、彼は、これらの標準のうちの方〔購買または支配しうる「労働」量という標準〕を固守し他方のもの〔購買または支配しうる「労働生産物」量、「商品」量という標準〕を全く退けておくということはできなかった。その原因は、彼が「交換価値(*exchangeable value*)」の標準として、交換価値(*exchange-value*)に適さない標準〔購買または支配しうる「労働」量という標準〕を選んだことにあったのであり、そのような選択の結果、スミスは、そのように退けられはしたが実は交換価値(*exchange-value*)に適している標準〔購買または支配しうる「労働生産物」量、「商品」量という標準〕の存在に抗しきれず、その標準ともう一方の標準とをごっちゃにすることとなったのである。

(20) Walsh [1903], pp. 52-53.

C. M. ウォルシュ (1903年) についての覚書

1903年の一著書におけるウォルシュの見解によれば、スミスは、「使用価

5. C. M. ウォルシュ (1903年)

値」と「交換価値」とを区別し、さらに事実上、「交換価値」を、「名目交換価値」——ウォルシュによれば、スミスはこれによって貨幣での交換価値を意味しようとし、そしてそれを簡略化して「名目価値」と呼んだ、とされる——と「真実交換価値」——ウォルシュによれば、スミスはこれを簡略化して「真実価値 (real value)」あるいは、さらに簡略化して「価値」と呼んだ、とされる——とに区別し、そしてスミスは事実上、その関心を、それらの価値概念のうちもっぱら「真実交換価値」に、スミスが簡略化して「真実価値」、さらに簡略化して「価値」と呼んだものに、限定した、ということになるのであった。(ただし、またウォルシュによれば、スミスによる議論が展開される過程で、スミスの言うその「真実価値」、「価値」は一面では混乱を含みつつも交換価値の諸要素を保持していたのではあるが他面でそれらはまた事実上、交換価値以外の何物かに「事実上、「尊重価値」に」もなってしまうている、とみられるのであった。)

そして、ウォルシュによれば、スミスがそのような意味での「価値」——「真実交換価値」、「真実価値」、「価値」——の尺度を問題にするさい、スミスは一つには、人の貧富は「人間生活の必需品、便益品および娯楽品」にたいするその人の支配力に依存するのであるがいかなる人もそれらの事物を自分自身の労働だけによって手に入れるわけではなくて、その多くの部分を他の人々の労働に依存するのであるから、人は、他の人々の労働にたいしてその人がもつ支配力——なお、ウォルシュによれば、この支配力は、その人自身の労働を別とすれば、その人が土地や商品の形ですでに蓄積している所有物によってのみ、その人に与えられうるものである、とされる——に比例して、それらの事物にたいする支配力をもちうるものであり、それゆえその人が所有する事物のその人にとっての価値とは、その事物が彼をして支配することを可能にさせる労働によって表現される、という理由から、また一つには、「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」、という理由から、「労働」が、ある所与の時と場所における価値の尺度だけでなくあらゆる時と場所における価値の標準を提供する、と考えた、とされるのであった。

しかしながら同時にまたウォルシュによれば、うえの二つの理由のうち前者の理由においては「労働」はたんに、ある人が所有する富とその人が消費する富とのあいだの一媒介物として捉えられているにすぎないのであるから

同様な推論によって貨幣あるいはその他の物が価値の尺度であるということを示すことも可能であるはずであって、それだけでは労働を価値尺度とすることにたいする十分な根拠たりえない、とみられるとともに、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言いうことができよう」という理由についても、もしスミスがある所与の量の労働で購買しうるだけの量の財貨は労働者にとってつねに等しい価値をもつと言っていたならば、そこで言われる「価値」を「尊重価値」——なお、ウォルシュによれば、事物の「尊重価値」とは、諸事物にそなわるところの、我々が諸事物を保持するさい尊重の心をもって保持するといったそのような尊重ということと相関するもの(我々が諸事物にたいしていただく愛着や傾倒、また、我々が所有するものを確実に自らのものにしておこうとするさいの精力、さらに、諸事物を手に入れるために我々がすすんで行使しようとする努力、といったものと相関するもの)、とされる——と解すればそこでの主張はそれなりの意味を持ちうるものになりうるのであるが、うえのスミス自身の文言のなかで使用されている「価値」という言葉そのものの意味は不明であり、それはいかなる経済的な意味も、とくに、「交換価値」——なお、ウォルシュによれば、一事物の「交換価値」とは、一事物の、別の一事物にたいするあるいは諸事物一般にたいする購買力、とされる——にかかわるいかなる意味合いも持ちえないものであって、うえのようなスミスの文言は、「労働」をある所与の時と場所における価値〔「真実交換価値」,「真実価値」,「価値」〕の尺度としてでだけでなくあらゆる時と場所における価値の標準と考えるための根拠を提示しうるものではない、とみられるのであった。

さらにまたウォルシュは、スミスの議論にはまた「価値」と「価格」との区別も見いだされるとし、そのことに関して概ねつぎのような内容の所説を展開するのであった。すなわち、スミスの議論では、事物の「価値」はその事物を手放すことによってあるいはその事物を交換に与えることによって我々が獲得できるものであるのにたいし、事物の「価格」とはその事物を獲得するために我々が手放すものあるいはその事物が我々をして費やさせるものということになっているのであるが、未開社会では諸事物はそれらの事物の生産に要する労働量に比例して交換されるけれども我々の住む文明化の進んだ段階の社会では諸事物はそれらの事物の生産に要する労働量に比例して交換されはしないと考えるスミスの議論においては、未開社会では諸事物の生

産に要する労働量で示された諸事物の労働での「価格」と諸事物の購買または支配しうる労働量で示された諸事物の労働での「価値」とは一致するが、我々の住む文明化の進んだ段階の社会では、それらは一致せず、「生産に要する労働量」という「価格」の尺度と「購買または支配しうる労働量」という「価値」の尺度とは同一の諸事物について異なった大きさを提示することとなり、一方は他方の大きさを提示することはできない、ということになる。かくして、「購買または支配しうる労働量」がある所与の時と場所における価値の尺度だけでなくあらゆる時と場所における価値の標準を提供すると考えるスミスは、諸事物の「真実価値」をそれらの事物が「購買または支配しうる労働の量」での「価値」とするとともに、「あらゆる物の真実価格 (real price)、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」また人類一般にとって労働こそが我々がすべての物にたいして支払う「最初の価格 (first price)」あるいは「究極の価格 (ultimate price)」であるとするスミスはまた——なお、ウォルシュによれば、そこでは「価格」という用語よりも「コスト (cost, 費用)」という用語のほうがふさわしい、とされ、また、ウォルシュは事実上、「それを獲得するための労苦と骨折り」をそれを獲得するための「労働」と同義のものとして捉えるのであった——、諸事物の「真実価格」をそれらの事物の「生産に要する労働の量」での「価格」とするのであった。なお、スミスの議論では、労働の「真実価値」は労働自体であってそれはつねに同一であるとされるのであるが、他方でスミスは、労働の「真実価格」については、それを、「労働と交換に与えられる生活の必需品と便益品の量」としている。だがそのような議論にはつぎのような欠陥が存在することになる。すなわち、労働者の労働にたいしてその労働者に与えられる必需品等の量——つまり、ここで言われる労働の「真実価格」を示すもの——というものは、その労働者の労働が購買しうる必需品等の量——つまり、その労働者が彼の労働を交換に与えることによって獲得できる必需品等の量——と同一のものであり、またそれゆえ、スミス自身の議論における、それを手放すことによってあるいはそれを交換に与えることによって我々が獲得することのできるものとしてのその「価値」ということからして、その量は、同じように、その労働者の労働の「価値」を示すものともみなされうるのであり、そしてそのようなものとしての労働の「価値」というものは、必

ずしも不変なものではなく、その量とともに変動しうるもの、ということになってしまうのである。

なお、ウォルシュは、スミスの議論における「価値」と「価格」ということに関して概ね以上のような内容をもった所説を示すのではあるが、ウォルシュによれば、スミスのもっぱらの関心事は、あくまでも、真実価格の尺度ではなくて真実価値の尺度あるいは価値の真の尺度ということであったのであり、そしてスミスの議論ではその尺度は「購買または支配しうる労働量」であったのである、とされるのであった。

そしてウォルシュは、以下、もっぱらスミスの議論における貨幣の価値およびその測定ということを取り上げようとするのであるが、そこではまず、ウォルシュは、スミスの議論では貨幣の「真実価値」は、「購買または支配しうる労働量」での貨幣の「価値」であったのであるが、その「購買または支配しうる労働量」そのものは〔貨幣〕賃金——ウォルシュによれば、「労働による（貨幣）収入」という言葉のほうがふさわしいとされるのであった——をつうじて確定されることになる、とみるのであった。

そして、ウォルシュによれば、たとえスミスが貨幣価値の変動を測定する試みにおいて〔貨幣〕賃金をそのように使用せずに穀物の〔貨幣〕価格で代替したとしても〔したがって、「購買または支配しうる労働量」に代えて「購買または支配しうる穀物量」で貨幣の価値、またその変動を示したとしても〕、そこではスミスは、前者に関する資料の入手困難性および後者に関する資料の入手可能性、しかも後者の変動は前者の変動に最も近似的でありそうだという彼の判断から、そうしたにすぎないのであり——なお、ウォルシュによれば、スミスは穀物を価値の標準と考えることにたいする理由として、穀物の労働扶養力の安定性という点からの穀物の労働支配力の安定性による「購買または支配しうる穀物量」標準と「購買または支配しうる労働量」標準との符合、さらに、穀物生産費の経時的安定性、といったこともあげているが、前者の穀物の労働支配力の安定性についてのその考えは、労働者の生活資料に関するスミス自身の議論と相容れないものであるとともにそれはたぶん、長期の諸期間にわたっての変動という点での穀物の〔貨幣〕価格と〔貨幣〕賃金との符合というスミスの見解のための一つの基礎的理由づけにすぎず、また、穀物生産費の経時的安定性ということについても、それは、相対価値の説明のために生産費説を使用したさいにおけるスミスの逸脱と同じよ

5. C. M. ウォルシュ (1903年)

うに、スミスの真の立場からの偶発的な逸脱といえるものにすぎない、とみられるのであった——、スミスの議論では、本来、貨幣の真実価値は、〔貨幣〕賃金——正確には、「労働による（貨幣）収入」——をつうじて確定される「購買または支配しうる労働量」によって測定されるべきものであったのである、とみられるのであった。

しかしまた同時にウォルシュは、そのような形で測定される貨幣の「価値」そのものは、事実上、貨幣の「尊重価値」であるはずである、とするのであった。そしてウォルシュによれば、「真実交換価値」を簡略化して「真実価値」さらに簡略化して「価値」と呼んだスミスは、まさに貨幣の「尊重価値」を測定するためのこの方法を、貨幣の「交換価値」の測定に用いようとしたのであり、そしてこのような事情からスミスは事実上、貨幣価値の尺度として「購買または支配しうる労働量」という尺度にくわえて、「購買または支配しうる労働と商品の量」、さらに、「購買または支配しうる労働量か、あるいはまた同様に、購買または支配しうる商品量」——なお、ウォルシュによれば、「購買または支配しうる商品量」こそが、貨幣の「交換価値」の測定に適したものである、とされるのであった——という尺度をあげるといった混乱した議論を示すこととなった、とみられるのであった。

なお、たしかに以上の点は、「スミスの議論における貨幣の価値およびその測定」ということに関するウォルシュの所説のなかにみられるものではある。だがまた同時に、我々は、それらの点から、スミスの議論における貨幣以外の事物の価値およびその測定といったことに関するウォルシュの見方を推測することも可能であろう。

6. A. C. ウィットカー (1904年)

1904年にその元の版が刊行された A. C. ウィットカー (A. C. Whitaker) の一著書 (Albert C. Whitaker, *History and Criticism of the Labor Theory of Value in English Political Economy*, New York: Columbia University Press, 1904; reprint edition, New York: Augustus M. Kelley, 1968. なお, ここでは上掲のリプリント版を使用するのであるが, ここで取り扱うウィットカーの研究の発表年の区分については上掲書の元の版が刊行された年, 1904年をとり, そして, 以下では, 上掲リプリント版を Whitaker [1904] と略記することとする) のなかでウィットカーは, スミスはもともと現代の経済理論が到達することを望むような正確さをもって価値の法則を記述することを実際に計画していたようには思えない, つまり, 価値についてのスミスの議論といったものは, 価値という事象についての骨の折れる分析の試みというよりも, むしろ, 富についての重商主義的見解に対する抗議の言葉のなかでたまたま展開されたものである, とみるのであるが,¹⁾ ウィットカーによれば, 『国富論』における価値についてのスミスの説明は第1篇の, 第5章に含まれる部分と第6章および第7章に含まれる部分という二つの主要な部分に分けることができ, 第5章では数量的に価値を決定する価値の規制者 (*regulator*) としての労働標準, 商品の価値はその商品の生産に要する労働での費用によって決定されるという「労働費用標準 (labor-cost standard)」と, 単なる価値尺度 (*measure*) としての労働標準, 商品の価値はその商品が購買または支配することのできる労働量によって測定されるという「労働支配力標準 (labor-command standard)」という二つの別個の労働標準が, それらの二つの標準の相互関係についてはなにも述べられることなしに, 示唆され, 他方, 第6, 第7章での議論では「労働費用標準」が放棄され, (競争的な市場においては) 商品価値はその商品の生産のために支払われなければならない労働の賃金, 資本の利潤, 土地の地代の合計に等しくなるとされ, 事実上, 「企業者費用の法則」と呼ばれるものに相当するもの, 商品価値はその商品の生産のために支払われなければならない労働の賃金を含めた企業者費用によって決定されるという考えが示されるのであるが, それでもなお, 商品の, ま

た、所得分配における分け前としての具体的な所得の、「真実価値 (real value)」は、その商品あるいは所得が支配しうる労働量によって測定されるとされている、とみられるのであるが⁽³⁾、そのような価値尺度としての「労働支配力標準」についてのスミスの議論に関連して、ウィットカーは、以下のように整理することもできるであろう諸指摘をなしている、といえよう。

① スミスの議論においては「労働」という言葉は、人間の生産力 (productive power) としての労働と、生産の過程において人々が耐え忍ぶ不効用 (disutility) もしくは不快 (discomfort) としての労働という、関連はあるけれども別個な二つの事柄を意味しており、スミスは、「労働」という言葉をこれら両方の意味で使用しているのであるが、彼が労働を価値の尺度とするにさいしても、一方で、労働を生産力として捉えているつまりスミスは労働支配力標準のための最初の一般的な議論では労働を生産力の側面において考えているように思えるのにな⁽⁵⁾、他方で彼は、労働は不変の大きさの「辛苦 (hardship)」を表すために労働が「不変の尺度」であるとしているように、労働を不効用の側面において考えている。⁽⁶⁾

② ところで、そのような「辛苦」等によって表されるような不効用というものは、「交換価値 (exchangeable value)」というよりもむしろ「意義としての価値 (value as "Bedeutung")」と、結びつけられるものである。⁽⁷⁾

③ ところが、スミスの示しているさまざまな文言は、彼の学説は、各人の労働の不効用はその人自身の労働と引き換えにその人が獲得する諸商品のその人にとっての「主観的な」価値を測定するかもしれないといった考え以上のことを意味している、ということを示唆している。すなわち、スミスは、「交換価値の真の尺度」としての労働について語っているのであり、したがってまた、「意義としての価値」、「尊重価値 (esteem value)」に似たものとして考えられるべきものであるところの彼のいう財貨の「真の値打ち (real worth)」とそれらの財貨の「交換価値 (exchangeable value)」とを区別できずにいるのである。⁽⁸⁾

④ つまり、スミスは、労働によって測定されるものとしての財貨の「真実交換価値 (real exchangeable value)」について語ろうとしていたのであって、なんらかの特定の人物にとっての「値打ち (worth)」といったものとは別個なある「真の値打ち (real worth)」といったものを心に描いていたので

ある。そしてスミスは、財貨のこの「真の値打ち」とは、その財貨と交換に支配される労働によって測定されるものである、としたのであり、またスミスがそうしたことの理由は、彼が最初に示唆したところによれば、労働は、生産力として、諸商品の等質的な源泉の要素であるからだ、ということであった、しかしまた第二に、1単位の労働はまた、ある独立的でかつ不変の意義をもつと想定される一つの単位としての、1単位の不効用である、という示唆が、その理由として入り込んでくるのであった。だが、この種の「真の値打ち」やそのような不効用という単位は、混ぜ合わされて作られた抽象的概念であり、それらはあまり意味のあるものではないのである。⁽⁹⁾

⑤ また、たとえ、「真実交換価値」としての「真の値打ち」というこの混乱した考えや、様々な人物の様々な労働のなかに識別することのできる不効用一般という一つの単位といった考えを、一応容認するとしても、我々はまだ、いっそうの諸困難に出合う。すなわち、同一の商品が、普通労働2日と交換されるかもしれないしあるいは熟練労働1日と交換されるかもしれない。これらのいずれも、引き換えに支配される労働量なのであり、スミスの考えにしたがえばこれらのいずれも、その商品の「真実価値 (real value)」を測定しなければならないのである。また実際には、1日の熟練労働は、通常、普通労働2日よりも⁽¹⁰⁾少ない不効用を伴うものである。さらに、競争的賃金は、⁽¹¹⁾能率 (efficiency) に比例して支払われるのであって、不効用に比例して支払われるのではないのであり、したがってまた、所与のある一定量の労働は、引き換えに支配されるさいには、その労働にたいして支払われる賃金に比例して、大きな量とみなされたり小さな量とみなされたりすることになってしまうであろう。⁽¹¹⁾したがって、スミスの「労働支配力標準」にまつわる一つの難点はつぎのようなことである。すなわち、スミスは、労働は真実価値 (real value) の尺度として役に立つことができるというその能力を労働の不効用ということから得ているということを暗に示しているのであるが、同一の商品は、異なる諸交換において⁽¹²⁾異なった諸不効用を支配するであろう、ということである。なお、熟練労働の高賃金はその熟練を習得するための不効用に比例すると主張することによって、熟練を不効用に帰せしめようとする試みは、無駄なものである。⁽¹²⁾

⑥ したがって、以上の問題を結論づけるとすればつぎのようなこととなる。すなわち、スミスが、ある所与の人物にとってのある財貨の経済的な値

打ち (economic worth) は、その人物にとつてのその財貨の不効用費用 (disutility cost) というタームで、その人物によつて測定されることができ、ということを示唆しようとしているかぎりでは、その立場もまたその諸帰結のいくつかのものも、受け容れることはできる⁽¹³⁾、だが、これを越えての彼の議論の諸含意は、弁護のできないものであるように思える。⁽¹⁴⁾

⑦ さらに、スミスは、「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」については、「労働費用標準」〔投下労働量標準〕と「労働支配力標準」〔支配労働量標準〕とを提示し、それにたいし、利潤および地代の存在する資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態については、そこでは商品の生産に要する「労働費用」〔投下労働量〕は商品の生産に要する賃金費用の大きさを決定するだけで商品の交換価値そのものを決定するわけではないということから価値の規制者、決定者としての「労働費用標準」を放棄する一方で、そのような状況においても商品の、また、所得分配における分け前としての具体的な所得の、「真実価値」は、その商品あるいはその所得が支配しうる労働量によつて測定されるとして、価値尺度としての「労働支配力標準」の適用可能性を主張しようとするのではあるが、スミス自身の示している論理からしても、この「労働支配力標準」は、このような社会の状態には適用できないはずのものであったのである。⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

⑧ なお、スミスのいわゆる価値の穀物尺度については、つぎのようなことが言える。すなわち、リカードウはスミスが「標準尺度 (standard measure) として、あるときには穀物 (corn) を、他のときには労働を」あげていると述べているが、⁽¹⁷⁾このようにして与えられる印象は誤ったものである。すなわち、穀物は労働と同格の標準として選ばれたのではなく、真の標準すなわち労働標準の便利な実用的指標 (index) であるという理由から、諸商品のなかから選択されたにすぎないのである。スミスは、ある所与の量の穀物 (grain) は異なる時点においてほとんどの他の諸商品よりもヨリいっそう不変に近い価値をもつと信じていたのであり、そしてその理由は、たんに、穀物 (corn) は、世々にわたっては (from age to age)、労働との安定的な交換比率 (exchange ratio) を保持しうるのであるから、ということであるのであつた。⁽¹⁸⁾

(注)

- (1) ウィットカーによれば、たとえば『国富論』第1篇第5章の第3パラグラフの「ホップズ氏が言っているように……」という言葉ではじまる章句は、貨幣を富(wealth)の唯一の尺度(measure)、富の真の源泉(source)とみなさないようにという呼びかけである、とされる。Whitaker [1904], pp. 16-17.
- (2) Whitaker [1904], p. 18. なお、ウィットカーは、価値測定(value measurement)と価値規制(value regulation)とは、マルサス(T. R. Malthus)や他の人々が指摘したように、別個のものである、とするのであるが、そのウィットカーによれば、価値についての古典派の諸議論——なお、ウィットカーが但し書きを示しながらWhitaker [1904]において古典派の学者としてその議論を取り扱おうとする人物は、スミス、リカードウ(D. Ricardo)、マルサス、マカロック(J. R. McCulloch)、J. ミル(J. Mill)、トレنز(R. Torrens)、シーニョア(N. W. Senior)、J. S. ミル(J. S. Mill)、ケアンズ(J. E. Cairnes)である——は互いに異なり錯綜してはいたけれどもそこには「価値規制の理論」と「価値測定の理論」という別個の主要な、思考活動所産の系列を識別することができるのであり、そして前者はさらに、ヴィーザー(F. von Wieser)の用語にしたがえば、価値についての、「哲学的(philosophical)」説明と「経験的(empirical)」説明からなっている、とされる。そしてまた、ウィットカーによれば、その「哲学的」説明とは、価値の一般的な謎、価値の究極的な性質、本質に対する古典派の人々の解答であり、この説明における中心的な考え方は労働費用(labor-cost)が〔交換〕価値の本質であるというものであり、それに対し、その「経験的」説明とは、現実の世界においては商品の交換価値はその商品の生産のために支払われなければならない労働の賃金、資本の利潤、土地の地代等々といったものの合計に等しくなる傾向があるというものであり、これは「企業者費用の法則(law of entrepreneur's cost)」と呼ばれる原理に相当するものである、とされる。(ウィットカーによる、「哲学的説明」および「経験的説明」についてのより詳細な一般的説明については、Whitaker [1904], pp. 12-15を見よ。)そしてさらにウィットカーによれば、『国富論』では、その「哲学的」説明は第1篇第5章に、「経験的」説明は第1篇第6、第7章に含まれているのであるが、『国富論』では「哲学的」説明は第1篇第5章において無条件的に真実であるかのように一般的なタームで述べられているけれども「経験的」説明がなされるにいたるとそれまでに述べられてきたことのかかなりの部分はいわゆる「資本(stock)の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」に限定されるゆえ、この哲学的説明は、スミスにおいては、価値についての「原始的(primitive)」説明と呼んでもよい、とされる。Whitaker [1904], pp. 9-15, 18-19.
- (3) 詳しくは、Whitaker [1904], pp. 16-31, 129-130を見よ。なお、ウィットカーによれば、本文でみたように、『国富論』第1篇第5章における、事実上「初期未開

6. A. C. ウィットカー (1904年)

の社会状態」での価値についての考察において、スミスは価値規制、価値決定を説明するものとしての「労働費用標準」と価値尺度としての「労働支配力標準」という二つの別個の労働標準を、それら二つの標準の相互関係についてなにも述べることなしに、示唆した、とされるのであるが、同時にまたウィットカーによれば、スミスが、そのような第5章での、うえのような社会状態のもとでの価値についての考察から、価値の哲学的本質といった思弁的な問題を捨てて近代的市場における交換価値の問題へと向かうとき、すなわち、第6、第7章での「資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態」のもとでの価値の問題へとアプローチするさい、スミスはそれら二つの標準の関係についての彼の見解を説明している、とされる。そしてそれによれば、価値の本質が生のまま現れると想定されているところの「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」という仮設的な条件のもとでは、商品の労働費用つまり商品の生産に要する労働量が、その商品が引き換えに支配しうる労働量を決定 (*determine*) するのであって、それら二つの労働量は「おのずと」同一の量となり、労働の全生産物は労働者に属し、「労働費用」と「労働支配力」との間の一致を崩す利潤も地代も存在しないのに対し、利潤や地代の存在する「資本の蓄積と土地の占有の行われる」社会においては、支配される労働量と生産に要する労働量とは一致せず、商品の交換価値はもはや労働費用、労働での費用すなわちその商品の生産に要する労働量によって決定されるのではなくて、その生産に要する労働、資本、土地に対する賃金、利潤、地代といった報酬の合計に等しくなるとともに、それでもなお、それらの報酬の各々の「真実価値」、したがってその合計としての当該商品の「真実価値」は、また、所得分配における分け前としての具体的な所得の「真実価値」は、それらが支配しうる労働量によって測定 (*measure*) される、ということになっている、とされる。そしてまたウィットカーによれば、結局のところ、現実の生活に適用されるべきものとしての価値学説としては、スミスは我々に、「企業者費用の法則」の初期的形態と「価値の労働支配力尺度」とを残したのであり、労働費用が市場価値を規制するという純粹の古典派的価値学説と考えられるものとの関係を絶っている、とされる。Whitaker [1904], pp. 29-31.

なお、ウィットカーが、価値についてのスミスの「哲学的説明」では財貨の価値あるいは「真の値打ち (*real worth*)」は、その財貨の生産に要する労働量によっても、あるいは、その財貨が交換において支配できる労働量によっても、同じように測定されるということになっていると言うときには (たとえば、Whitaker [1904], p. 129), それは、うえの「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」という脈絡でみられたような意味での投下労働量と支配労働量との一致ということにもとづいている、といえる。

- (4) Whitaker [1904], p. 19. なお、ウィットカーによれば、この意味での生産力は、状況しだい、なんの不効用も伴わないこともあれば、多くの不効用を伴うことも

ありうるものであり、この意味で、ここでの生産力の大きさと不効用の大きさとの間には比例関係はなく、それらは別個のものである、とされる。Whitaker [1904], p. 19.

- (5) Whitaker [1904], p. 36. このことを、ウィットカーは他のところで、概ねつぎのように説明している。すなわち、スミスは、「哲学的説明」の行われている『国富論』第1篇第5章のなかで、「労働支配力標準」の一般原理について、それを論証するための議論をなしており、その議論は、第5章の冒頭のパラグラフ、すなわち、「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行きわたるようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない。彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない。したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」という章句(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。傍点の付されている箇所はウィットカーがイタリック体にしてある箇所)のなかに、含まれている。この章句については一つの解釈のみが可能である。すなわち、もしも私が、貨幣価格もしくは交換価値をもつ諸事物を所有しているという意味で、それらの諸事物でもって私が購買もしくは支配しうる労働量に比例して、富んでいるのなら、ここでは労働量は、一つの事だけを意味しうる。すなわち、労苦(toil), 苦痛(pain), 主観的犠牲あるいは不効用といったものの量に対するものとしての、生産力の量だけを、意味しうるのである。社会において、私は、実質的には、私が自由にできる労働の生産力の総計に比例して、財貨を供給されるのであり、そして、この総計が価値の真の尺度であると主張されているのである。我々はこれを、「潜在的な商品としての労働(labor as potential commodity)」という見解と言いつづけることができるかもしれない。これから遂行されるべき労働とは、商品の卵なのである。そして、特定の場合においてそれがどんな種類の商品となるかということは、その労働にたいする支配力をもつ人の意志に依存するのである。つぎのスミスの文章はこの説明を確認する。「[ある人の] 財産の大小は、[労働にたいする] この力の大きさに正確に比例する。すなわちその財産で彼が購買または支配しうるものの、他の人々の労働の量または同じことであるが他の人々の労働の生産物の量、に正確に比例する。あらゆる物の交換価値はその所有者にもたらされるこうした力の大きさにつねに正確に等しいにちがいない。」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 54ページ。〔 〕内はウィットカー)。以上のことはつぎのことを意味する。すなわち、ある品物の

所有者にとってのその品物の価値は、その品物が引き換えに支配することのできる労働量によって測定されなければならない、なぜなら、この労働が、価値を有する諸品物一般を獲得するための手段であるからである、ということである。スミスにとっては、労働は、労働から産み出される多様な多くの財貨にとっての、おおいに均一的・等質的な公分母なのである。Whitaker [1904], pp.32-34.

- (6) Whitaker [1904], p. 36. この間の事情に関連してウィットカーは他のところで、概ねつぎのような説明を示しているといえる。すなわち、スミスは、労働の量そのものの測定に関して、労働の量を測定することの困難さを指摘するのであるが、この問題について、スミスはまず、様々な具体的な種類の労働が交換される比率（あるいは労働一般すなわち抽象的な意味での労働の、量の計算）は、「ある正確な尺度によってではなく、正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって調整されるのである」（WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ）ということを示唆している。しかしスミスは他方で事実上、異質労働の問題を考慮に入れて、労働の量を不効用および熟練の程度と合成された労働時間に依存させる、すなわち、不効用および熟練によってウェイトづけられた労働時間によって労働量が測定されるとみる。しかしスミスはさらに、人間は生得の諸能力においてははもともと等しいと想定し、また、諸職業間における賃金格差の問題を取り扱う『国富論』第1篇第10章でも示されているように、熟練という要素は実際には過去の不効用を表すと考えるのであった。したがってスミスの議論が一貫しているものとみれば、スミスはここでは労働の量によって不効用の量を意味していた、と結論することができる。スミスの言う財貨の「真の値打ち (real worth)」とはこのような意味での労働によって測定されるのである。ところで、労働が諸財貨の「真の値打ち」を測定する手段であるというこのような意見は、この尺度が異時点間および異場所間の一財貨の価値を比較するために使用されうろという考えを必ずしも含んでいるわけではない。しかしながら、『国富論』第1篇第5章の一つの重要な部分では、労働は、不変の大きさの不効用を表し、その意味でそれ自身の価値の変動するものでないため、労働はあらゆる時と場所における価値の「不変の尺度」を提供する、という主張にあてられているのである。Whitaker [1904], pp. 22-25.

なお、以上のような内容の説明につづけてウィットカーはまた、スミスはさらに、うえで見たような議論の脈絡で、労働を購入する人はあるときにはより多量の財貨でもってまたあるときにはより少量の財貨でもって労働を支配するゆえ「それ〔労働〕は、一方の場合には彼にとって高価にみえ、他方の場合には安価にみえる。けれども実は、財貨が、前者の場合に安価であり、後者の場合に高価であるのである」（WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。〔 〕内は中川）として労働の価値の不変性を主張している、とみるとともに、同時にまたウィットカーは、うえのスミスの

文言のすぐあとの、「〔それ〈労働〉の真実価格 (real price) は、それ〈労働〉と交換に与えられる生活の必需品と便益品の量にあると言われてもよい。……〕労働者が富んでいる (rich) か貧しいか、その報酬がよいかわるいかは、彼の労働の真実価格に比例している」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。〔 〕内の文言は中川が引用したもの。またそのなかの〈 〉内は中川) というスミスの文言はスミスの議論に矛盾をもたらすものであるとみてつぎのような内容の議論を示している。すなわち、一方ではスミスによれば、人は、その人の諸財貨がその人をして支配することを可能にさせるところの労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするものであったのであり、事物の「真実価値 (real value)」は、その事物と交換されるであろう労働の量によって測定されるのであった。したがって、人は、その人の所有物の「真実価値」に応じて、富んでいたり、貧しかったりすることとなり、また同時に、たとえ財貨の物理的な量が変化したとしても、もし変化後の量の財貨が変化前の量の財貨と同じだけの量の労働を支配するならば、そのときには、変化後の量の財貨は変化前の量の財貨と同一の「真実価値」をもつということになるであろう。そしてまた、ある所与の量の労働はつねに、ここで言われている意味での「富裕 (riches)」の、同一の大きさと、交換されなければならないのである。だが、もしこのように1日の労働〔というある所与の量の労働〕の実質賃金 (real wages) がつねに、同一の大きさの「富裕」というものであるにちがいないのであるならば、どのようにして、労働者は、彼の実質賃金である財貨の物理的量——ウィッターカーはここでは、うえのスミスの文言における「労働の真実価格」を、この意味での実質賃金として捉えているのである——が増加あるいは減少するのに応じて、ヨリ富んでいたりヨリ貧しかったりしうのか。〔すなわち、ある一定量の支配しうる労働はある一定不変な大きさの「富裕」を表し、一定量のその労働を支配される労働者はその一定量の労働と引き換えにそのある一定不変な大きさの「富裕」を受け取るのであって、そこでの労働者の「富裕」の程度は、彼がその労働にたいして受け取る財貨の物理的な量そのものとは直接的に結びついているわけではないのである。〕たしかに、もし労働者が賃金としてヨリ大きな物理的量の財貨を受け取るならばその労働者は生活の享受という点でヨリ富んでいることになるであろうということをスミスは言おうとしていたのだ、と言われるかもしれない。だが、スミスの議論では、「富裕」の尺度は労働支配力であったのであり、「富裕」の大小は、その「富裕」を構成する財貨によって支配される労働の多少によってのみ、知られることができるのであったのである。Whitaker [1904], pp. 25-27.

- (7) Whitaker [1904], p. 36. ウィッターカーは、このことに関連してつぎのような内容の指摘を加えている。すなわち、もしもある所与の商品と引き換えにその商品によって支配されるのが私自身の労働であったならば、私がそれと引き換えに自分の労働を与えたところのこの商品の、私にとっての個人的な価値は、私の心の中では、

6. A. C. ウィットカー (1904年)

その商品が私に費やさせた不効用のタームで、十分に考えられるかもしれない。それゆえ、一般的には、もしも1日の賃金によって買われうるところの(換言すれば、1日の労働を「支配する」ところの)ある種の商品の量が変化するならば、賃金稼得者たち一般にとつてのこの商品の意義 (significance) は、変化するのであろう。ある人々は、意義におけるその変化を、主に、変化した不効用費用 (disutility cost) のタームで考えるかもしれない。こういった事実は、恐らく、統計学者たちが実質賃金とか、家計における変化とかいった問題を研究するときに彼らによって考慮されることであらう。しかしながら、引き換えに支配される労働が「交換価値 (exchangeable value)」の正確で不変な尺度であるのだというスミスの主張は、そのようにゆるい原理を述べるには良い形態のものではないのである。Whitaker [1904], pp. 36-37.

- (8) Whitaker [1904], p. 37. ウィットカーによれば、ある所与の市場におけるある商品の交換価値 (exchange-value) とは、その商品の所有者がだれであろうと、またその人の必要 (needs) がどのようなものであろうと、あるいはその人の特定の必要 (needs) にたいするこの商品の関係がどのようなものであろうと、そのようなことによって変わるものではないのであり、また、たしかにうえの関係は、その商品に、その人にとつての価値を与えるかもしれない、だがそれは市場におけるその商品の交換価値といったものではないのである、とされる。Whitaker [1904], p. 37. (なお、ウィットカーによれば、特定の所有者の特定の必要 (needs) といったものからの市場価値 (market-value) のこういった独立ということは、オーストリア学派の経済学者たちが「客観的交換価値 (objective exchange-value)」という用語で伝えようとしたことのうちの一つである、とされる。Whitaker [1904], p.37.)

なお、ウィットカーは他のところで、スミスの議論に時折みられるルーズな語法が価値についてのスミスの議論を研究することを困難なものにしているとし、その一例として「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。」というスミスの文章 (WN, p. 33. 大河内訳 I), 57ページ) をあげ、そして、本書前出「1」の②でみたようにそこ言われている「等しい価値をもつ」という語句によって何が意味されているか等々といった指摘をなしている J. K. イングラム (J. K. Ingram) の、「この文章は詳しく検討してみればいかなる明確な理解することのできる意味も持つものではないということがわかるであろうが、この文章は、形而上学的な思考が経済学的思惟を不明確にする道すじについての一つのよい例を、提供している」という文言 (Ingram [1888], p. 92n. 2. 邦訳, 135ページ注2) を引用し、また、そのスミスの文章では、「価値 (value)」は、文脈からいって、おそらく、不効用 (disutility) を意味している、とするのであるが (Whitaker [1904], pp. 17-18, p. 18n. 1), さらにまたウィットカーは、スミスによる「価値」という言葉の使用法に関連してつぎのような指摘を

なしている。それによれば、スミスは「価値 (value)」が「使用価値 (value in use)」と「交換価値 (value in exchange)」という二つの意味をもつことを説明し、考察を「交換価値 (exchangeable value)」についての諸原理だけに限定し、そしてこの「交換価値」を、ある対象物がその所有者にもたらす他の財貨にたいする購買力 (power of purchasing) として定義している (WN, p. 28. 大河内訳〈I〉, 49-50ページ) のであるが、スミスは、彼が「交換価値 (exchangeable value)」というその言葉を二つの意味で使用しているということを説明していないし、またそのことを認識してもいないように思える。すなわちスミスは他方で、ある人にとってのあらゆるものの「真の値打ち (real worth)」とは「それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」ということ (WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ)、したがってまた、労働は「すべての商品の交換価値 (exchangeable value)」の真の尺度であるということ (WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ) を、主張するのであって、ここでの「交換価値 (exchangeable value)」とは、単なる購買力 (purchasing power) 以外の何物かを意味することになるのである。すなわち、ほぼ1世紀のちにメンガー (C. Menger) は、価値とは、我々がある財貨に条件づけられるなんらかの欲求の充足を感じるときにその財貨が我々の評価において獲得するところのあの意義 (significance, *Bedeutung*) である、と述べたのであるが、これは、「尊重価値 (esteem value)」あるいは「意義としての価値 (value as *Bedeutung*)」であるのであり、スミスはこの意味での意義を満足にではなく労働に見だしているのではあるけれども、スミスがここで言っている「真の値打ち」としての価値という概念は、「交換価値 (exchangeable value)」というよりもこのような価値に似たものであって、スミスは、これを、誤って、「交換」価値という名で呼んだのである。スミスはこのように、「他の財貨にたいする購買力」としての価値と、「尊重価値」、「意義としての価値」に似たものとしての「真の値打ち」としての価値とを区別することなく、これら二つのものをともに、「交換価値」の名で一括しているのである。Whitaker [1904], pp. 19-20, 37-38.

また、ウィットカーによれば、もしもスミスのいう「交換価値 (exchangeable value)」が現代的な意味での単なる「交換価値 (exchange value)」——重さ、容積あるいは長さ等で客観的に測定される他の一財貨のなんらかの数量にたいする、ある財貨の交換力 (power to exchange) ——を意味していたのであるならば、そのときには、貨幣は、労働と全く同程度に確かなまた労働よりもはるかに便利な、この価値についての尺度を、提供していたことであろう、とされる。Whitaker [1904], p. 17.

(9) Whitaker [1904], pp. 37-38.

(10) これにたいしてウィットカーはつぎのような内容の但し書きを付している。すな

6. A. C. ウィットカー (1904年)

わち、ここでは、我々は、異なる諸個人がこうむる不効用の通約可能性を想定しているわけではなく、異なる諸職業に付随する不効用の通約可能性を、想定しているのである。したがって、たとえば、我々は、ただ、汽船の火夫の職は食堂の給仕長の仕事よりも骨の折れる労働を意味するといったことを、言おうとしているのである。だが、火夫としての我々自身の(想像上の)労働と給仕長としての我々自身の[想像上の]労働とを比較することによってこのことを判断しているのだ、と考えられてもよい。Whitaker [1904], p. 38n. 1.

- (11) ここではウィットカーはつぎのようなことを言おうとしているのであろう。すなわち、もし競争的賃金の格差が労働不効用の格差に対応するのであればそのような賃金格差に照らして、異なる等級の不効用を伴う労働の量の間の換算さらにある等級の不効用を伴う労働の量といったものの確定といったことも可能となる。しかし、競争的賃金とは、能率に比例して支払われるのであって不効用に比例して支払われるのではない。したがって、いまもし、不効用という点では同一であるが能率という点では異なる二つの種類の労働が存在し、しかも競争的賃金の格差を労働不効用の格差の指標として用いるならば、それらの労働1日分は不効用という点で同一の労働量であるにもかかわらず、能率がより高くしたがって賃金がより高い労働1日は能率がより低くしたがって賃金がより低い労働1日よりより多くの不効用を、その意味でより多くの労働量を意味することとなってしまふ。

- (12) Whitaker [1904], pp. 38-39. ウィットカーはさらにつづけて、概ね以下のような内容をもつ指摘をなしている。すなわち、熟練労働の賃金はその労働の相対的な不効用に——すなわち、日々感じられる不効用とその熟練を習得するのに要した過去の不効用費用 (disutility cost) のある部分あるいは他の部分との合計に——比例するという傾向は、他の諸力に比べてきわめて弱いものであるため、そのような傾向は無視してもよいものであり、さらにこのことにくわえて、多くの熟練は、習得されたものではなくて、その熟練を有する人に習得のためのなんの不効用費用をもかけさせることのなかった生まれつきのものなのである。Whitaker [1904], p. 39.

なお、うえの議論に少し先立つ他の箇所では示されているウィットカーの議論によれば、財貨の「真の値打ち」、「真実価値」といったものがその財貨と引き換えに支配することのできる労働の量によって測定されるとするならば、その労働の量そのものを測定するための手段、労働の量そのものを明らかにするための手段が必要になるのであるが、このことに関連してスミスは、[本章の注6でも触れたように、]「一財貨が交換されうる貨幣の量は、はっきりと知覚することのできるものであるのにたいし、貨幣の使用ということをつうじて間接的に一財貨が支配する労働の量とは、「抽象的な観念であって、十分にわかりやすいものにされることができるとしてもそれほどごく自然かつ明白なものではない」としつつも (WN, p. 32. 大河内訳<I>, 56ページ)、様々な具体的な種類の労働が交換される比率 (あるいは労働一

般すなわち抽象的な意味での労働の、量の計算）は「市場のかけひきや交渉」によって調整されるということを示唆するのであるが、スミスの議論のなかにはさらに、一般的な形で労働の量を明らかにすることを可能にさせるような原理といった考えの存在を見いだすことができる、とみられるのであった。そして、そこでは、そのようなスミスの考えの内容を、ウィットカーは、概ねつぎのようなものとして把握していた、といえる。すなわち、異質労働といった問題の存在のゆえに、たんなる労働時間数だけでもって労働の量を示すものと考えのでは不十分である。そこでまず、労働の量を、当該労働に伴う不効用および熟練の程度でもってウエイトづけられた労働の時間数、不効用の大きさおよび熟練の程度と合成された時間、といったものが考えられることとなった。ところで、ある商品がそれと引き換えに支配しうる労働の量そのものは、直接的には、支配されるその労働にたいする賃金の大きさに依存するものである。したがって、いまでもし、ある貨幣額に値する一商品が、それと引き換えに、職業Aにおける1日の労働を支配し、職業Bにおける2日の労働を支配するならば、職業Aの1日は職業Bの2日と同一の労働量であるということになる。職業Aにおける1日の労働と職業Bにおける2日の労働は同額の賃金を得るゆえ、職業Aの1日は職業Bの2日と同一の労働量、ということになるのであり、（競争的な状況のもとで）支払われる賃金の大きさが、あらゆる所与の具体的仕事における労働量の真の検査手段を提供するということになるのである〔すなわち、それぞれの種類の労働1日にたいする（競争的な状況のもとでの）賃金の大きさは、それぞれの種類の1日の労働というものに伴う不効用および熟練の程度を反映し、それらの賃金の間の格差は、不効用および熟練の程度の相違を反映するのであり、このような意味での賃金によって、不効用および熟練の程度でもってウエイトづけられた時間数としての労働の量を確定することが可能となるのである〕。だがこのようなことにくわえてさらにまた、諸職業間における賃金格差の問題を取り扱う『国富論』第1篇第10章のなかで示唆されているように、熟練労働にたいする特別増しの報酬とは、ヨリ多くの不効用にたいする一つの、姿を変えた支払いなのである。熟練とは、その熟練を習得するのにこむる不効用を表現するもの、過去の不効用を表現するものであって、熟練にたいする余剰の報酬は事実上、利子に類似した形態での、不効用にたいする報酬なのであり、その報酬は獲得された熟練にたいするものなのである——なお、人間の諸能力の生まれつきの均等性の想定というスミスの思想を基礎づけている暗黙裡の想定、すべての職業は、能率という点では生まれつき等しい人々によって競争される、という想定のもと、スミスは、生まれつきの熟練、生得のすぐれた才能といったことは問題にしない——。したがって、すべての職業は、すべてのことを考慮に入れば〔ここでは、それらの職業に付随する現在および過去の不効用というものを考慮に入れば〕、ほぼ同程度に報酬を与えられているということとなり、〔競争的な状況のもとでの〕ヨリ高い賃金は、

6. A. C. ウィットカー (1904年)

ヨリ多くの労働が、究極的には[・]不[・]効[・]用[・]という意味でヨリ多くの労働が存在するところのみ〔ヨリ多くの現在および過去の不効用が付随するところのみ〕、支払われるのであり、〔競争的な状況のもとでの〕賃金の[・]不[・]均[・]等[・]とは、労働の[・]時[・]間[・]〔究極的には（現在および過去の）[・]不[・]効[・]用[・]の大きさ、またその大きさに対応する労働の時間という意味での労働の時間〕に比例してでのみの不均等ということになるのである。そしてまた、労働の量とは、[・]不[・]効[・]用[・]の[・]量[・]を意味することとなるのである。〔熟練とは、その熟練を習得するためにこうむった過去の不効用を表現するのであり、それぞれの種類の労働1日にたいする（競争的な状況のもとでの）賃金の大きさは、それぞれの種類の労働に伴う現在の不効用の量および——もしその労働が熟練労働であるならばその熟練を習得するのにこうむったところの——過去の不効用の量という意味での、不効用の量を反映し、賃金の格差は、そのような意味での不効用の量の相違を反映するのであり、したがってまた、（ある所与の時点における、）様々な種類の労働にたいする様々な大きさの（競争的な状況のもとでの）賃金に照らすことによって各労働に対応する不効用の等級を確定することができ、さらに、（その時点において）ある大きさの賃金をどれだけ支配できるかを確定することによってその大きさの賃金に対応する労働をどれだけ[・]の[・]量[・]だけ支配できるかを確定することができるのである。そしてその場合、ある等級の不効用を伴う労働をどれだけ[・]の[・]量[・]だけ支配できるかということが確定されるのであって、そこでは、労働の量とは、事実上、[・]不[・]効[・]用[・]の[・]量[・]を意味することとなっているのである。〕 Whitaker [1904], pp. 22-24. 本章の注6もみよ。

- (13) ただし、ウィットカーによれば、スミスの理論は、効用と不効用との限界の均等（final equivalence）といったことについての後代の諸理論のなしているようには、その問題に深く入り込むことはできなかった、とされる。Whitaker [1904], p. 39.
- (14) Whitaker [1904], p. 39.
- (15) Whitaker [1904], pp. 29-31, 129-130. 本章の冒頭パラグラフおよび注3も見よ。
- (16) このことをウィットカーはつぎのように説明している。すなわち、スミスは、分業のもとにおいてはいかなる人もほとんどすべての必需品、便益品および贅沢品を他の人々の労働から得なければならないのであるから、その人が支配しうるこの労働の量に比例して、その人は、価値を有する諸事物を所有するという意味で富んでいるにちがいない、としている。ここでの[・]暗[・]黙[・]裡[・]の[・]想[・]定[・]は、この人のための諸事物を生産するのに費やされる労働の量が、[・]勞[・]働[・]費[・]用[・]として（as labor-cost）、それらの諸事物の価値を決定する、ということである。というのは、もしも、彼が支配することを可能にさせられている他人の労働から彼が獲得する経済財が、そのように支配される労働の量すなわちそれらの経済財の労働費用に比例しないような価値をもっていたとするならば、そのときには、この人は、たんに彼が支配する労働〔の量〕に比例して富んでいたり貧しかったりするといったことはないであろうからであ

る。したがって、スミスによって提出されている主要な議論に従えば、価値の労働支配力標準は価値の労働費用規制というものに依存させられていることになるのであるから、スミスは実際には、彼が資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態のもとにおいてそうしているようには労働支配力標準を適用することはできない、ということとなる。なぜなら、彼自身が、そのような状況のもとでは価値の労働費用規制はあてはまらない、としているからである。Whitaker [1904], pp. 39-40.

- (17) David Ricardo, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. Piero Sraffa, with the collaboration of M. H. Dobb, vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation* (Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1951)——本書で Ricardo, *Principles* [ed. Sraffa] と略記されるもの——, p. 14, P. スラフファ編『デイヴィッド・リカード全集』第1巻：堀 経夫訳『経済学および課税の原理』（雄松堂書店、1972年）——以下これを、堀訳『原理』と略記する——, 16ページを見よ。
- (18) Whitaker [1904], p. 27. なお、ウィットカーは、一つの動学的問題としての、価値にたいする労働、貴金属および穀物 (grain) の関係についてのスミスの一般的な理論を示すものとして、スミスのつぎのような章句を引用している。「それゆえ、労働が唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度でもあること、言い換えると労働が、いついかなるところでも、様々な商品の価値を比較することのできる唯一の標準であることは明白であると思える。我々が、世紀から世紀にかけて様々な商品の真実価値 (real value) を、それらと引き換えに与えられる銀の量で評価しえないことは、広く認められている。我々は、この真実価値を、年々について穀物 (corn) の量で評価することはできない。労働の量をもってすれば、世紀から世紀にわたる場合も、年々の場合も、真実価値を最も正確に評価することができるのである。世紀から世紀にわたる場合は、銀よりも穀物 (corn) のほうがすぐれた尺度である。というのは、世紀から世紀にかけては、等量の穀物 (corn) のほうが等量の銀よりも同一量に近い労働を支配するであろうからである。これに反して、年々の場合であれば、穀物 (corn) よりも銀のほうがすぐれた尺度である。というのは、等量の銀のほうが同一量に近い労働を支配するであろうからである。」(WN, pp. 36-37. 大河内訳〈I〉, 63ページ。傍点の付されている箇所はウィットカーがイタリック体にしてある箇所。) Whitaker [1904], pp. 27-28n. 3.

A. C. ウィットカー (1904年) についての覚書

「価値規制の問題」と「価値測定の問題」とは本来別個な問題であるとみるウィットカーによれば、スミスを含む古典派の人々の、価値についての諸議論は互いに異なり錯綜してはいたけれどもそこには「価値規制の理論」と「価値測定の理論」という別個の主要な、思考活動所産の系列を識別するこ

とはできるのであり、そして、『国富論』第1篇の、第5章に含まれる部分と第6章および第7章に含まれる部分という二つの主要な部分に分けることのできる『国富論』でのスミスによる価値についての説明においては、まず第5章では、「価値規制の問題」に関する投下労働量による価値の規制という考え（ウィットカーの用語では、「労働費用標準」という考え）と「価値測定の問題」に関する支配労働量による価値の測定という考え（ウィットカーの用語では、「労働支配力標準」という考え）といった二つのものが、それらの相互関係についてはなにも述べられることなしに、示唆され、ついで第6、第7章では、うえの二つの考えの関係についてのスミスの見解が見いだされうるとともに、そこでは、「価値規制の理論」としての「労働費用標準」といった考えの妥当性は「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」に限定され、資本の蓄積と土地の占有の行われる現実の生活に適用されるべき「価値規制の理論」としては、競争的な市場においては商品価値はその商品の生産のために支払われなければならない賃金、利潤および地代の合計によって決定されるといった事実上、「企業者費用の法則」の初期的な形態をもったものともいえる考えが示されるとともに、そのような状況においてもなお、商品の、また、所得分配における分け前としての具体的な所得の、「真実価値 (real value)」はその商品あるいは所得が支配しうる労働量によって測定されるところによって、「価値測定の問題」に関するものとしての「労働支配力標準」、「価値の労働支配力尺度」は妥当するものとされている、とみられるのであった。

そして、スミスの議論では「労働」という言葉によって一方で人間の〔財貨・商品を生産する力という意味での〕「生産力」、他方で〔財貨・商品の〕生産の過程において人々がこらむる「不効用」、といった関連はあるけれども別個な二つの事柄が意味されているのであってスミスは「労働」という言葉をこれら両方の意味で使用しているとみるウィットカーによれば、スミスが労働を価値の尺度とするにさいしても、一方で、労働を「生産力」の側面において考えるとともにまた他方で、労働を「不効用」の側面において考えていた、とみられるのであった。

すなわち、ウィットカーによれば、スミスはまず、分業の行きわたっている社会においては、人の貧富の程度すなわちその人が享受することのできる生活の必需品、便益品および娯楽品の程度は、結局のところ、そのような品

物を産み出す労働にたいする支配力に比例するのであって、人の「富裕」の程度は、その人の「富裕」を構成している諸財貨が支配しうる労働量によって知ることができるのであり、諸財貨を産み出すことになる労働こそが諸財貨にとっての均一的・等質的な公分母なのであって、このようなものとしての労働にたいする支配力こそが人の「富裕」の程度の、またその「富裕」を構成することになる個々の財貨の価値の、尺度を提供するのである、とするのであり、そこでは事実上、「労働」は「生産力」として捉えられているのであり、またそこには事実上、「潜在的商品としての労働」といった考えを見いだすことができる、とされるのであった。そしてまた同時にウィットカーによれば、スミスは他方で、「労働」は不変の大きさの「不効用」を表し、その意味で「労働」はそれ自身の価値の変動するものでないため、そのようなものとしての労働にたいする支配力が、あらゆる時と場所における価値の「不変の尺度」を提供する、とするのであり、そこでは事実上、「労働」は「不効用」として捉えられているのである、とみられるのであった。（なお、ウィットカーによれば、うえのような意味での生産力は、状況しだいで、なんの不効用も伴わないこともあれば、多くの不効用を伴うこともありうるのであり、この意味で、そこでの生産力の大きさと不効用の大きさとの間には比例関係はなく、それらは別個のものである、とされるとともに、労働者の貧富は、その人の労働と交換に与えられる生活の必需品と便益品の量としてのその人の労働の「真実価格 (real price)」に比例するといった内容のスミスの文言はうえのようなものとしてのスミスの議論に矛盾をもたらすものである、とされるのであった。）

また、ウィットカーによれば、スミスは「価値」とは「使用価値」と「交換価値」という二つの意味をもつことを説明し、考察を「交換価値」に限定し、この「交換価値」を、ある対象物がその所有者にもたらす他の財貨にたいする購買力として定義し、そしてそのようなものとしての「交換価値」の尺度を、一方で労働の「生産力」ということから労働に求めるとともにさらに他方で労働の「不効用」ということから労働に求めるのであるが、後者のそのような労働の不効用といったものは、本来、そのようなものとして定義されるものとしての「交換価値」という客観的な市場価値と結びつくはずのものではない、とされるのであった。すなわち、たとえばスミスはある人にとってのあらゆるものの「真の値打ち (real worth)」はそれによって彼自身

6. A. C. ウィットカー (1904年)

がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りであって、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である、として「真の値打ち」と「交換価値」とを同義のものとして取り扱うのであるが、そのようなものとしての「真の値打ち」というもののものは、「尊重価値 (esteem value)」あるいは「意義としての価値 (value as Bedeutung)」といったものに似たものであるのであって、それは単なる「他財貨にたいする購買力」以外のものを意味しているのである、とされるのであった。

かくしてウィットカーによれば、スミスは、このように、「他の財貨にたいする購買力」としての価値と、「尊重価値」、「意義としての価値」に似たものとしての「真の値打ち」としての価値とを区別することなしにそれら二つのものをともに「交換価値」の名で一括しつつ、なんらかの特定の人物にとっての主観的な「値打ち」、「価値」といったものとは別個な「真実交換価値」としての「真の値打ち」と言えるようなものを問題にしようとしていたのであり、そしてスミスは、財貨のこの「真の値打ち」は、その財貨と交換に支配される労働によって測定されうる、としたのであり、またスミスがそうしたことの理由は、第一に、労働は、生産力として、諸商品の等質的な源泉的要素であるから、しかし第二に、1単位の労働はまた、ある独立的でかつ不変の意義をもつ一つの単位としての1単位の不効用である、ということであったのであるが、この種の「真の値打ち」やそのような不効用という単位は、混ぜ合わされて作られた抽象的な概念であって、それらはあまり意味のあるものではない、とみられることとなるのであった。(なお、ウィットカーによれば、もしもスミスのいう「交換価値」が現代的な意味での単なる「交換価値」——重さ、容積あるいは長さ等で客観的に測定される他の一財貨のなんらかの数量にたいする、ある財貨の交換力——を意味していたのであるならば、そのときには、貨幣は、労働と全く同程度に確かなまた労働よりもはるかに便利な、この価値についての尺度を、提供していたことであろう、とされるのであった。)

さらにまたウィットカーによれば、たとえ「真実交換価値」としての「真の値打ち」、「真実価値」といった混乱した考えや、様々な人物の様々な労働のなかに識別することのできる不効用一般という一つの単位といった考えを、一応容認するとしても、それでもなおスミスの「労働支配力標準」にはつぎのような難点、すなわち、スミスは、労働は「真実価値」の尺度として

役に立つことができるというその能力を労働の不効用ということから得ているということを暗に示しているのであるが、同一の商品は、異なる諸交換において異なった不効用を支配するであろう、といった難点がある、とされるのであった。ウィットカーによれば、同一商品が、たとえば、普通労働2日分、熟練労働1日分を支配するかもしれず、しかも実際には、1日分の熟練労働は、通常、2日分の普通労働よりも少ない不効用を伴うものなのである、とされるのであった。そしてまたウィットカーによれば、競争的賃金とは能率に比例して支払われるのであって不効用に比例して支払われるわけではなく、熟練労働の賃金はその労働に伴う現在の不効用とその熟練を習得するのに要した過去の不効用のある部分あるいは他の部分との合計といった内容をもつ相対的不効用に比例するという傾向は、無視しうるほどにきわめて弱いものであり、さらに、熟練とは多くの場合、習得されたものではなくて、その熟練を有する人に習得のためのなんの不効用をもかけさせることのなかった生まれつきのものなのであって、熟練労働の高賃金はその熟練を習得するための不効用に比例すると主張することによって熟練を不効用に帰せしめようとするスミスの試みは無駄なものである、とされ、事実上、競争的賃金の格差をもって労働不効用の格差の指標とすることの不可能性が指摘されるのであった。(なお、ウィットカーによれば、熟練を過去の不効用を表すものと考えようとするそのスミスの議論の脈絡では、事実上、労働の量によって不効用の量が意味されているのであり、財貨の「真の値打ち」とはこのような意味での労働によって測定される、ということになっているのであるが、労働が財貨の「真の値打ち」を測定する手段であるというこのような意見は、この尺度が異時点間および異場所間の財貨の価値を比較するために使用されうるという考えを必ずしも含んでいるわけではない、だが、『国富論』第1篇第5章の一つの重要な部分は、労働は、不変の大きさの不効用を表し、その意味でそれ自身の価値の変動するものでないため、労働はあらゆる時と場所における価値の「不変の尺度」を提供する、という主張にあてられている、とみられるのであった。)

そして以上のようなことからウィットカーは、スミスがある所与の人物にとってのある財貨の経済的な値打ちはその人物にとってのその財貨の不効用費用というタームで、その人物によって測定されうるということを示唆しようとしているかぎりでは、その立場もまたその諸帰結のいくつかのものも

6. A. C. ウィットカー (1904年)

受け容れることはできるが、これを越えての彼の議論の諸含意は弁護できないものであるように思える、とするのであった。

なお、ウィットカーによれば、スミスは価値尺度としての「労働支配力標準」が資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態におけるのと同様それらが行われる社会状態においても適用可能であることを主張しようとするのではあるが、スミスが提出している主要な議論に従えばそのような「労働支配力標準」というものはもともと価値の規制者としての「労働費用標準」〔価値の規制者としての投下労働量〕というものに依存させられていることになるのであるから、スミス自身の示している論理からしても、その「労働支配力標準」は、「労働費用標準」の妥当性が否定される資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態には適用できないはずのものであったのである、とされるのであった。

さらにまたウィットカーによれば、スミスが「価値測定の問題」との関連で穀物に言及するさいには、そこでは穀物は労働と同格の尺度として考えられているのではなくて、真の尺度である労働〔支配力〕標準の便利な実用的指標として考えられているのであり、そしてスミスは、そのような指標としては、長期においては他の諸商品よりも穀物が労働とより安定的な交換比率を保持しそうであるという意味でより不変に近い価値をもつゆえ、長期では、穀物が適しているとするとともに、短期では、おなじく労働との交換比率の安定性ということから穀物よりも銀（貴金属）のほうが適しているとした、とみられるのであった。

7. R. カウラ (1906年)

1906年に刊行された R. カウラ (R. Kaulla) の一著書 (Rudolf Kaulla, *Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien*, Tübingen: H. Laupp, 1906. 以下, Kaulla [1906] と略記する) のなかには, 以下のように整理することもできるであろうようなカウラの所説を見いだすことができる。

① スミスは, 自然法の立場から事態を考察しようとし, そして, 人間は他の人間と交換しようという性向を持ちまたその性向から分業が生じたという想定のもと, 人類の自然的な状態においてもすでに交換がなされていたとみるのであるが, そのスミスが自然的な交換比率 (Austauschverhältnis) を決定 (bestimmen, 規制, 規定) する原則を問題にするさい, 使用価値 (Gebrauchswert, value in use) と交換価値 (Tauschwert, value in exchange) との間にはなんの因果関係もなく, 前者は後者の決定因ではないとしたうえで, 後者すなわち交換価値は何に依存するのかということを論じるのであった。⁽¹⁾

② そしてスミスは一方で, すべての人間には自己の生活状態を改善しようという天賦の欲求がそなわっているのであり, すべての人間はできるだけ安楽に暮らしたいという自然的な性向をもっている, したがってまた, 自由に放任すれば, 人は, 財貨を交換するさい, それを生産するのにどれほどの労苦が費やされたかという観点から, 財貨を評価するであろう, と考えるのであった。スミスは, 「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期末開の社会状態のもとにおいては, 種々の物の獲得に必要な労働量のあいだの比率が, これらの物を相互に交換するにあたっての原則 (rule) を提供しうる唯一の事情であったと思われる。……ふつう 2 日分または 2 時間分の労働の生産物であるものが, ふつう 1 日分または 1 時間分の労働の生産物であるものの 2 倍の値打ちがあるというのは, 当然である」と述べる (WN, p. 47. 大河内訳 < I >, 80 ページ。傍点の付されている箇所は, カウラが強調している箇所)。したがって, このような立場によれば, 財貨の生産に必要な平均的必要労働支出 (der durchschnittlich notwendige Arbeitsaufwand) が, 人間の根源的なレベルにおいて, 様々な財貨の価値を比較するための自然的な

尺度 (Massstab) ということになるのであった。⁽²⁾

③ だがまたスミスは他方で、つぎのような議論を示すのであった。すなわち、分業が徹底的に行きわたるようになると、人間が自分で調達することのできる自分の生活必需品はほんのわずかな部分にしかすぎなくなり、その圧倒的な部分は、他人の労働によって生産されそして交換という方法によって入手される財貨に依存することになる。したがって、財産を所有することの意義は、人が交換という方法によって他人の労働生産物を、またそれによって他人の労働を、意のままにする能力を与えられるということにあるのである。それゆえ財貨の交換価値は、その財貨がその所有者をして交換することを可能にするところの労働量に相応することとなるのである。スミスは、「……彼は、自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に依りて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない。したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」と述べる (WN, p. 30. 大河内訳 <I>, 52ページ)。自然的な状態の支配下にある人間は、こんにち人が諸貨幣額を交換するのと同じように、諸労働量を交換するのである。「世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってであった」 (WN, p. 30. 大河内訳 <I>, 53ページ) のである。⁽³⁾

④ このようにスミスは、うえのような脈絡で、真の価値尺度を、二つの形で、また別の根拠から、労働に求めたのであり、したがってスミスは、あるときには財貨の生産に必要な労働量を、他のときにはその財貨と交換されうる労働量を、真の価値尺度 (Wertmass) と呼び、またある箇所では、両方の価値尺度が相並んで提出されたのであった。⁽⁴⁾そしてそのことはリカード (D. Ricardo) やその他の多くの後代の人々によって矛盾のあるものと主張されてきた。しかしながら実際には、それら二つの労働量の大きさは等しいのである。というのは、たしかにスミスは他のところで使用価値と交換価値との因果関係を否定してはいるのであるが、スミスが交換の主体として提出する通常の人々にとっては、交換される財貨の使用価値は必然的に等しい、つまり、通常の場合、交換を行う人々の各々にとって同じだけの使用価値をもつ諸財貨のみが交換されうるはずであり、そして、スミスの主張する自然

法の考え方によれば、すべての通常の人間をして、彼の利己心が、同じように、彼の物質的な生活状態の向上や安楽を追求させるのであるから、通常の場合、彼が受け取る以上のいかなる労働も与えてはいないということしたが、ってただ同一量の労働が互いに交換されるということが考えうるような様式においてのみ、交換が存在するからである。⁽⁵⁾

⑤ また、スミスの議論では、このような意味での労働量の比較においては、労働の困難さ、労働の辛さや熟練の相違等々といったことが斟酌されなければならないとされているのであるが、スミスの考えでは、人間の生来の天分というものはすべての人間にとってほぼ等しく、才能の相違は分業による職業の相違の結果であるとされ、高度の熟練はその熟練の獲得に費やされた労働の産物であり、ヨリ困難な労働、ヨリ辛い労働、ヨリ高度な熟練を伴う労働による生産物は、そうでない労働による生産物よりも、ヨリ多くの普通の労働に分解されうるのであり、それゆえまた、ヨリ高い交換価値をもつのであり、このようにして、平均的労働（Durchschnittsarbeit）の量に従って交換価値が測定（bemessen）される、ということになるのであった。そしてスミスは言う。「こうした事態にあっては（すなわち、ごく初期未開の時代にあっては）、……ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量〔平均的に必要とされる、平均的労働の量〕が、その商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量〔平均的に支配される、平均的労働の量〕を規制できる唯一の事情である」（WN, pp. 47-48. 大河内訳くⅠ）、82ページ。引用文中の、（ ）内はカウラ、傍点の付されている箇所はカウラが強調している箇所、〔 〕内は中川。⁽⁶⁾

⑥ しかしながらまた、現実には労働の困難さや労働の熟練度等々ということについてのこういった必要な斟酌を実行することは非常に困難であるということからスミスは、商品の交換価値の真の尺度は労働であるけれども、この労働の代用物（Surrogat, Ersatz）として、金属貨幣、穀物をもちだし、遠くへだたった時点間の尺度としては価値の安定性という点で後者がすぐれているとするのであるが、それらの価値の安定性の基準は、それらのものの労働購買力の安定性ということであった。⁽⁸⁾

⑦ 他方スミスは、現代の事態における価値形成については、うえのような経済生活の本源的状態におけるのとは同じでない見地から、考察したのであり、そして、資本の蓄積と土地の占有が行われまたその資本と土地の助け

をかりて財貨の生産が行われる現代の社会状態においては、財貨は、その生産に使用された労働にたいする賃金にくわえて使用された資本および土地にたいする利潤および地代に相応する価格 (Preis) を獲得しなければならず、「あらゆる進歩した社会では、この三つのすべてが、大多数の商品の価格のなかに、多かれ少なかれその構成部分としてはいりこんでいるのである」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ)、とするのであるが、このような社会状態についてもスミスは交換価値を労働にのみ還元しようとしていた面がないわけではない、すなわち、彼はここでも、交換可能な労働を依然として唯一の真の価値尺度と考えようとしていたのであり、「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値 (real value) は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである。労働は、価格のなかの労働に分かれる部分の価値だけでなく、地代に分かれる部分の価値、および利潤に分かれる部分の価値をも測るのである」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ)と述べるのである。ところで、労働が、利潤や地代を測定する尺度であるとするならば、このことは、利潤および地代もそれら自体が労働に分解させられうるという仮定のもとにおいて理解されうるだけである。というのは、ある大きさは、ある同種類の大きさでもってのみ、測定されうるからである。そして事実スミス自身の議論のなかにも、たとえば、資本所有者の利潤となるところのその価値構成要素も全く労働に負っているのだといった考えを見いだすことはできる。⁽⁹¹⁾しかしながらスミスは他方で、「賃金と利潤と地代は、すべての交換価値の三つの本源的な源泉であり、同時にすべての収入の三つの本源的な源泉でもある」(WN, p. 52. 大河内訳〈I〉, 88-89ページ。傍点の付されている箇所はカウラが強調している箇所)、「どんな商品の価格も、やはり究極的には、これら三つの部分のうちのどれか一つ、またはすべてに分かれるにちがいない」(WN, p. 52. 大河内訳〈I〉, 88ページ。傍点の付されている箇所はカウラが強調している箇所)、と述べているように、三つの構成部分を完全に切り離して論じ、さらに、交換価値をある唯一の究極的な要因に分解するといったことをまさしく禁じている。このようにスミスは、一方ですべての価値を労働に分解し、他方では賃金、利潤、地代といった価値の究極的源泉としての三個一組のものを示すという矛盾をおかしているものであり、またそのうえ、うえの表現にみられるように、労働量と価値の要素としての賃金とが、ごっ

ちやにされているのである。¹⁰⁾

(注)

(1) Kaulla [1906], S. 133-134.

(2) Kaulla [1906], S. 135.

(3) Kaulla [1906], S. 135-136.

(4) このことを示すものとしてカウラはつぎのようなスミスの文言を引用している。

「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち, あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは, それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が, それを獲得した人にとって, またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって, 真にどれほどの値打ちがあるかといえ, それによって彼自身がはぶくことができ, またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52-53ページ。)

Kaulla [1906], S. 136 Anm. 3.

なお, このような脈絡のなかでうえのようなスミスの文言を引用していることからみて, カウラは, スミスの議論における「労苦」「骨折り」とは「労働」のことであり, 「真実価格 (real price)」と「真の値打ち (real worth)」とは同義のものであってそれらはともに「交換価値」を指し示すものである, とみているといえよう。

(5) Kaulla [1906], S. 136.

(6) Kaulla [1906], S. 136-137.

(7) カウラはつぎのようなスミスの文言を引用している。「辛さにせよ, 巧妙さにせよ, その正確な尺度を見つけ出すのは容易なことではない。」(WN, p. 31. 大河内訳 < I >, 55ページ。) Kaulla [1906], S. 137.

(8) Kaulla [1906], S. 137-138. なお, カウラはつぎのようなスミスの文言を引用している。「遠くへだたった時点では, 等量の, 金銀またはたぶん他のどのような商品をもってするよりも, 労働者の生活資料である穀物の等量をもってするほうが, よりいっそう等量に近い労働が購買されるであろう。」(WN, p. 35. 大河内訳 < I >, 61ページ。) Kaulla [1906], S. 138 Anm. 2.

(9) このことを示す例としてカウラはつぎのようなスミスの文言を引用している。「職人たちが原料に付加する価値は, ……二つの部分に分かれるのであって, その一つは, 彼らの賃金を支払い, 他の一つは, 彼らの雇い主が前払いした原料と賃金との全資本 (stock) にたいする雇い主の利潤を支払う」(WN, p. 48. 大河内訳 < I >, 82ページ。傍点の付されている箇所はカウラが強調している箇所), そして, 「こうした事態のもとでは, ……ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量は, その商品がふつう購買し, 支配し, またはこれと交換されるはずの労働の量を規制できる唯一の事情ではなくなる。その労働の, 賃金を前払いし原料を提供した資本

7. R. カウラ (1906年)

- (stock) の利潤のために、ある追加量がとうぜんに与えられなければならないことは明白である」(WN, p. 49. 大河内訳 < I >, 84ページ)。Kaulla [1906], S. 139.
- (10) Kaulla [1906], S. 138-140. なお、カウラは、概ね以上のような内容の所説につけてさらに、ヴィーザー (F. von Wieser) がスミスにおける「哲学的」価値理論と「経験的」価値理論とを区別しているようにスミスは以上のような内容の議論にくわえて、国民経済の想像上の原始状態の価値問題とは違った現代の価値問題そのものを取り扱っているということは可能である、とみつつ、その現代の価値問題についてのスミスの議論を検討しようとし、そしてそこではカウラは、スミスの議論における、「有効」需要と供給による財貨の市場価格の決定、財貨の全価値を意味するところのその財貨の生産にあずかる労働、資本、土地にたいする穏当な収入率を約束する財貨の自然価格に向けての市場価格の収斂傾向、その自然価格の含意等々といったことを論じるのであるが (Kaulla [1906], S. 140-142 を見よ)、そこでのカウラの所説を含めて、カウラの議論では、たとえば前で扱われたウィッテカーの所説にみられるような「価値規制の問題と価値測定の問題」といったようなことはことさら問題にされてはいない、といえよう。

R. カウラ (1906年) についての覚書

カウラによれば、スミスは、人間は交換性向を持ち、そしてその性向から分業が発生したのであり、人類の自然的な状態においてもすでに交換がなされていたと考えるのであるが、そのスミスが交換価値の問題を扱うとき、「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」という想像上の原始状態での交換価値とそれらが行われる社会状態という現代の社会状態での交換価値とを論じた、とみられるのであった。

そしてカウラによれば、スミスは、前者の社会状態では「種々の物の獲得に必要な労働量のあいだの比率が、これらの物を相互に交換するにあたっての原則を提供しうる唯一の事情であったと思われる」とするとともに、後者の社会状態では、その大きさに逆比例する比率で種々の財貨が相互に交換されることになるところの各々の財貨の現実の市場価格は、「有効」需要と供給との関係によって決定され、そしてその各々の財貨の市場価格は、その各々の財貨の生産にあずかる労働、資本、土地にたいする穏当な収入率を約束するその各々の財貨の自然価格に収斂する傾向を持つ、とした、とみられるのであった。

そしてまたカウラによれば、スミスは一方で、そのような「初期未開の社会状態」では生産にふつう必要とされる労働量に応じて諸財貨相互の交換比

率、諸財貨相互の相対的な価値が決まるということから、生産に平均的に必要とされる労働量が諸財貨の価値を比較するための尺度となるとするとともに、そのような社会状態においてもすでに交換、分業がなされていたと考えるスミスは他方で、人は自分に必要な財貨の多くを、まず自分の労働生産物を交換に供することによって他人の労働生産物を得るという形で、調達するといった状況のもとでは諸財貨の価値はそれらの財貨と交換されうる労働量に相応することになるということから、交換されうる〔支配しうる〕労働量が価値の尺度となつた、とみられるのであった。そしてさらにカウラによれば、スミスはこのように真の価値尺度を「生産に必要な労働量〔投下労働量〕」および「交換されうる労働量〔支配労働量〕」という二つの形で、また別の根拠から、労働に求めたのであるが、スミスの想定している人間という点からして通常のばあい人は自分が受け取る以上のいかなる労働も与えていないしたがって同一量の労働が互いに交換されるということが考えうるような様式においてのみ交換が存在することになるゆえ、それら二つの労働量は等しく、それら二つの価値尺度は互いに矛盾しはしないことになる、とみられるのであった。またカウラによれば、スミスの議論では、うえのような意味での労働量の比較においては、労働の困難さ、労働の辛さや熟練の相違等々といった労働の種類、質の相違が斟酌されなければならないとされているのであるが、すべての人間の生得の能力は等しく高度の熟練はその熟練の獲得に費やされた労働の産物であると考ええるスミスによる議論では、ヨリ困難な労働、ヨリ辛い労働、ヨリ高度な熟練を伴う労働による生産物は、そうでない労働による生産物よりも、ヨリ多くの普通の労働に分解されうるものであり、それゆえまたヨリ高い交換価値をもつのであって、原理的には、交換価値は平均的労働の量に従って測定される、ということになっているのであり、かくしてスミスは、ごく初期未開の時代にあつては「ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量〔平均的に必要とされる、平均的労働の量〕が、その商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量〔平均的に支配される、平均的労働の量〕を規制できる唯一の事情である」と述べるのである、とみられるのであった。〔ただし、カウラによればまた、スミスは、現実にはうえのような労働の種類、質の相違といったことについての斟酌を実際になすことは非常に困難であるということから、真の価値尺度は労働であるけれどもこの労働の代用物として、金属貨幣、穀

7. R. カウラ (1906年)

物をもちだし、そして遠くへだたった時点間の尺度としては価値の安定性という点で後者がすぐれているとしたのであり、そしてそのさいの価値の安定性ということの基準は、それらのものの労働購買力の安定性ということであるのであった、とみられるのであった。]

さらにカウラによれば、スミスは、うえてみられたような初期未開の社会状態とはちがって資本の蓄積と土地の占有が行われまたその資本と土地の助けをかりて財貨の生産が行われる現代の社会状態では、財貨は、その生産に使用された労働にたいする賃金にくわえて使用された資本および土地にたいする利潤および地代に相応する価格を獲得しなければならないとしつつも、そのようなものとしての要素収入の価値はその各々が支配しうる労働量によって測定されるところによって「なお、カウラによれば、スミスはこのことをなすさい、労働量と価値の要素としての賃金とをごっちゃにしていた、とされるのであった」、このような社会状態についても「交換されうる労働量〔支配労働量〕」を唯一の真の価値尺度と考えようとしていたのであり、またこの意味で、スミスはこのような社会状態についても交換価値を労働にのみ還元しようとしていた面はないわけではない、とされるのであった。しかしながらまたカウラによれば、そのように労働が利潤や地代を測定する尺度であるならば利潤および地代もそれら自体が労働に分解させられうるものでなければならないのであり、また事実スミス自身の議論のなかにもそのような把握を示す面も存在するのではあるが、同時にまたスミスの議論のなかには、スミスは価値の要素としての賃金、利潤、地代という三つの要素を完全に別個のものとして捉え、交換価値はある唯一の究極的要因といったものに分解されることはできないと考えていた、ということを示す面もあるのであって、スミスの議論には、一方ですべての価値を労働に分解し、他方で賃金、利潤、地代という価値の究極的源泉としての三個一組のものを示すといった矛盾が存在するのである、とみられるのであった。

なお、このようにカウラは、スミスの議論では資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態については投下労働量および支配労働量が、それらが行われる現代の社会状態については支配労働量が、真の価値尺度を提供するものと考えられている、とみるのであるが、そのさいカウラは事実上、「価値尺度の問題と価値の因果的説明の問題」といったようなことそのものはことさら問題にすることなしに、みずからの議論を展開していたのであった。

8. H. J. ダヴンポート (1908年)

1908年にその元の版が刊行された H. J. ダヴンポート (H. J. Davenport) の一著書 (Herbert Joseph Davenport, *Value and Distribution: A Critical and Constructive Study*, [Chicago: University of Chicago Press, 1908]; reprint edition, New York: Augustus M. Kelley, 1964. なお、ここでは上掲のリプリント版を使用するのであるが、ここで取り扱うダヴンポートの研究の発表年の区分については上掲書の元の版が刊行された年、1908年をとり、そして、以下では、上掲リプリント版を Davenport [1908] と略記することとする) のなかには、以下のように整理することもできるであろうようなダヴンポートの所説を見いだすことができる。

① スミスの議論では、労働は、あるときには、価値の決定因 (determinant of value), さらに、価値の、決定力をもつ源泉 (determinant source of value), 商品生産物の創造的源泉 (creative source of commodity products) であるかのように取り扱われており、他のときには、測定の一手段 (a medium of measure), 表現の様式 (a mode of expression), 価値がそれに還元されることができたそれによって価値が〔相互に〕等質的で比較可能なものにされうるところの一つの公分母 (a common denominator), 価値表現の一つの標準 (a standard of value expression) として、取り扱われており、さらにまた他のときには、延べ払いの一標準 (a standard of deferred payments), 広範な時間的間隔にわたっての比較の一手段 (a medium of comparison over wide intervals of time) として、取り扱われており、かつ、それら三つの場合において取り扱われている問題そのものは互いにその性質において本来別個なものであるにもかかわらず、スミスの議論では、それらの問題はほとんど絶望的に混乱させられている。¹¹⁾

② なお、スミスにとっては、延べ払いの問題も一つの価値問題として現れたのであり、そしてスミスは、うえてみたように「労働」を延べ払いの一標準、広範な時間的間隔にわたっての比較の一手段としても取り扱い、延べ払いの理想的な標準として「労働」を主張するのであった。しかしまた、支

8. H. J. ダウンポート (1908年)

払いの容易さという点でなんらかの具体的で触知できる実在物が望ましいと考えられることからスミスは、長期 (long-time) については「穀物」を、短期 (short-time) については「銀」を、標準商品として提案しようとしたのであり、そしてそこでの提案の基準は、延べ払いの理想的標準を提供するものとしての「労働」、その「労働」にたいしてそれらのものがもつ支配力の相対的安定性ということであった。⁽²⁾

③ また、スミスは、事実上価値尺度あるいは価値標準の問題に関しても、「労働」を、価値の最良のしかもことによると唯一の表現手段および公分母として、主張するのであるが、事実上そこで主張されるその価値尺度あるいは価値標準としての労働は、これまた事実上価値の原因 (cause)、価値の決定といった問題に関するものとしてのスミスの議論のうちにみうけられるような労働苦痛投入といったことにもとづく価値の基礎としての労働ではなく、苦痛購買力あるいは苦痛回避力——したがって究極的にはサービスをさせる力——という観点からみての基礎としての労働、といったものとして考えられているのである。⁽³⁾

(注)

(1) Davenport [1908], pp. 14-15, 20, 25. 以上のことからわかるように、このダavenportの見方に特徴的なことの一つは、多くの場合「価値尺度あるいは価値測定の問題」として一括して捉えられている問題を、同時に存在する〔諸事物の〕価値の、尺度 (measure) あるいは公分母の問題 (Davenport [1908], pp. 20, 25) と、延べ払いの問題あるいは広範な時間的間隔にわたっての比較の問題とに、区別している、ということである。

(2) Davenport [1908], pp. 15-17, p. 17n. なお、ダavenportは、スミスが長期については「穀物 (corn)」を標準商品としようとしたさいのスミスの論理を、概ね以下のようなものとして捉えている、といえる。すなわち、「遠くへだたった時点では、等量の、金銀またはたぶん他のどのような商品をもってするよりも、労働者の生活資料 (subsistence) である穀物の等量をもってするほうが、よりいっそう等量に近い労働が購買されるであろう。それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値 (real value) により近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるであろう」(WN, p. 35. 大河内訳〈I〉, 61ページ)。もちろん、消費水準の変動のゆえに等量の穀物は正確に同一量の労働を購買または支配するわけではない。だが、他の諸商品は、それらの商品が労働者の生活資料にた

いして支配力をもちうることによってのみ、また、その支配力に比例して、労働にたいする支配力をもちうるものであり、それゆえ、たとえば、「穀物で納めることになっている地代は、一定量の穀物が購買しうる労働の量の変動から影響をこうむるだけである。ところが、他のなんらかの商品で納めることになっている地代は、ある特定量の穀物が購買しうる労働の量の変動からだけでなく、ある特定量のその商品で購買しうる穀物の量の変動からも、影響をこうむる」(WN, pp. 35-36. 大河内訳〈I〉, 61-62ページ), ということになる、というわけである。Davenport [1908], pp. 15-16.

長期については「穀物」を標準商品としようとするスミスの論理を概ね以上のようなものとして捉えたうえでダヴンポートはさらに、そのようなものとしてのスミスの議論に関してつぎのような内容の指摘をなす。すなわち、うえのようなことが言えるためには、労働者たちが稼いだものすべてを生活資料に支出するということだけでなく、「穀物」が生活資料としての唯一の商品であるということも、言えなくてはならない。それが言えるときには、たしかに、他の諸商品は、それらの商品の穀物支配力の程度におうじてのみ労働支配力をもちうることとなり、また、穀物標準が理想的な標準としての労働標準に及びえない程度は、労働に対して給付される穀物量の変動の程度においてのみ、ということになるであろう。いずれにせよ、スミスの議論では、穀物は生活資料を意味するゆえ、穀物は他のいかなる商品よりも、労働標準にヨリ近く接近することとなる、と考えられているのである。また、そのようなスミスの議論は、賃金は長期的には最低限の暮らしのために必要なものあるいは生存水準で必要とされるものへと接近する傾向があるということを想定している、ということは明らかである。スミスの議論は、長期の諸期間にわたっては穀物はその労働支配力という点ではほとんど変化しないという想定に基づいているのである。そしておそらく、それらのものの関係のこの安定性というものは、人口増加と、生計のために必要なものあるいは生存のために確定的に必要とされるものとの間の、想定上の結びつき、というものによっている。かくして、技術改良あるいは環境的諸条件の改善によって労働はかなりの期間にわたって生産物の形でヨリ豊富に報酬を受けるかもしれないけれども、そのような状況は結局のところ一時的なものである、というのは、緩み——その緩みが、生存のために絶対的に必要なものというものを超える差額とみなされるものであろうと、あるいは、それ以下では労働者たちが自らを再生産することを拒否するであろうようななんらかの消費水準といったものを超える差額とみなされるものであろうと——は、人口の趨勢というものによって吸収されることになるからである、と考えられるのである。Davenport [1908], p. 16, p. 17n. [なお、本書前出「5」の注13のなかで見られた「穀物 (corn)」に関するタイクグレバー (R. F. Teichgraeber III) の指摘も見よ。]

他方、ダヴンポートは、短期については「穀物」ではなく「銀」を標準商品とし

8. H. J. ダヴンポート (1908年)

よとするスミスの論理を、概ねつぎのようなものとして捉える。すなわち、スミスはここでは、貨幣タームでの賃金は穀物価格の騰落の各々とともに騰落しその結果労働者の穀物賃金は一つの実際的に変動することのない額に留まることになるという後にある程度の一般的受容を受けることとなる一学説を展開することなく、短期では生存必需品に対する支配力タームでの実質賃金は大きく変動する、「労働者の生活資料、すなわち労働の実質価格 (real price) は、あとで明らかにしようと思うが、場合によって非常に異なることがある」(WN, p. 35. 大河内訳<I>, 61ページ)、とし、したがってまた、たとえば「穀物地代の真実価値 (real value) は」——労働支配力タームでみた穀物地代の価値は——「世紀から世紀にかけての変動では貨幣地代のそれにくらべてはるかに少ない」けれども「年々の変動となると」貨幣地代のそれにくらべて「ずっと大きい」、「ところが銀の価値は、世紀から世紀にかけては大きく変動することはあるが年々大きく変動することは減多になく、半世紀またはまる1世紀のあいだ、ずっと同一、または同一に近いことが多い。……その期間中に、穀物の一時的で偶然的な価格は、ある年には前年の2倍であることも、しばしばありうる」のである(WN, p. 36. 大河内訳<I>, 62ページ)、とする。かくしてスミスは、理想的標準である労働標準からみての一般的購買力という点で「世紀から世紀にわたる場合は、銀よりも穀物のほうがすぐれた尺度である」が「年々の場合であれば、……穀物よりも銀のほうがすぐれた尺度である」(WN, p. 37. 大河内訳<I>, 63ページ)、とするのである。Davenport [1908], pp. 16-17.

なお、スミスの議論では事実上、延べ払いの問題は一つの価値問題として現れておりそして延べ払いの標準は価値の標準に同化させられているとみるダヴンポートによれば、もし一価値標準を延べ払いの基準 (basis) として採用しようとするならば、価値の、実体 (essence) あるいは意味 (significance) あるいは決定因 (determinant) としてなんらかの基本的な原理が発見されるときにのみ、それは可能になるのであって、たんに一つの交換比率として捉えられたものとしての「価値」というもののそれ自体は、延べ払いの標準ということにたいしては、なんの手掛かりをも与えることはできず、それぞれの価値諸比率というものの諸数量のあいだに等質性 (homogeneity) についてのなんらかの基礎が確立されていなければまた確立されるまでは、たんなる交換比率として捉えられた価値をもって二つの価値の間の均等あるいは不均等といったことについて語ることは、延べ払いの問題にとってはなんの意味をも持ちえないのであり、延べ払いにおける均等といった目標は、諸数量間のたんなる諸比率というものよりもむしろ数量というものに訴えることによって達成されなければならないのである、とされるのであるが (Davenport [1908], pp. 17-18n., pp. 18-19), 価値の原因、決定因に関するものとしてのスミスの議論についてのダヴンポートの否定的な所説については Davenport [1908], pp. 20ff. を、さらに、延べ払いの標準という問題に関するものとしてのスミスの議論についての

ダヴンポートの否定的な所説については Davenport [1908], pp. 17-19n.3 を、見よ。

また、ダヴンポートは他の箇所において、スミスは強度、熟練、方向等における諸労働間の相違およびそれに対するものとしての市場のかけひきや交渉をつうじてもたらされるおおよその同等性等々といったことに関する言及をなしているのであるがそこでのスミスの議論ではもし正しく理解されさえすれば労働をある等質的なファン্ডに還元することは可能であるということが意味されているように思える、とみて、つぎのように述べている。「時間〔というファン্ড〕かといえば、明らかに否である。苦痛 (pain) 〔というファン্ড〕かといえば、これ〔苦痛というファン্ড〕もまた、価値に関しては役立たないのではなからうか。だが、もしこれ〔このファン্ড〕が、生産物に依存しかつ生産物から引き出される一つの価値であるならば、等質性ということは達成できるものであるしまた実際に達成されてもいるということは十分に明らかなことである。だがそこでの等質性とは、究極的には労働を、価値を決定するものというよりもむしろ価値を受け取るものと考えることになる、そういった一見解を説明するために持ち出されるところの価値という、まさにそのような価値の観点からみでのみの、等質性なのである。また、労働とはその価値を生産物の価値から引き出すのだという根本原理のもとでは、たぶんなんらかの機会費用分析をつうじて以外には、労働は、価値を与えることのできるものではないのである、……。Davenport [1908], p. 14. (引用文中の、傍点の付されている箇所はダヴンポートがイタリック体を用いている箇所、〔 〕内は中川。)

ダヴンポートによれば、スミスの議論では労働はその強度、熟練、方向等といった点で非常に異なるものでありうるけれども労働はなんらかの共通の要因に還元されることができる〔したがってまたそういった質、種類の異なった労働はそのような共通の要因の観点から互いに換算されることができる〕と考えられていたのであるが、そこでの共通の要因とは事実上、生産物の価値から労働が引き出し受け取る価値というものであったのであり〔したがって、その意味での各労働の受け取る価値（その意味での各労働の賃金率）に照らして、質、種類の異なった労働を互いに換算し合うことができる、ということになる〕、またそこでは、労働は事実上、価値を決定するものというよりもむしろ価値を受け取るものということになる、とみられるのである。

- (3) Davenport [1908], p. 25. なお、ダヴンポートによれば、スミスは「使用価値 (use value)」に言及したのち、「交換価値 (value in exchange, exchange value)」と「真実価値 (real value)」とを区別するとともに、さらにまたときとして、〔うへの注 2 で触れられた労働の受け取る価値にみられるような〕「交換価値からの一時的な逸脱や変異といったことをそのなかに含んでいるところの、一価値 (a value which covers the temporary disturbances and variations from exchange value)」について語っているようにも思える、とされるのであるが、そのダヴンポートは、スミスの

8. H. J. ダウンポート (1908年)

議論における「真実価値」と「交換価値」とに関してつぎのような見方を示している。それによれば、スミスの議論における「真実価値」とは、価値の規準 (norm) としての「労働苦勞価値 (labor-burden value)」といえるもの、究極的な費用というものに由来するところの価値、を意味するものであったのであり、それは、当該事物の生産量といったこととは関係なく、また、ありうる代替的な生産物といったものには影響されることのないものであって、それは、「あらゆる物の真実価格 (real price)、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」(WN, p. 30. 大河内訳<I>, 52ページ)と言われる「真実価格」に対応するとともにさらにまたそれは、事物を産出し調整し市場に運ぶのに用いられる労働、資本、土地にたいする自然率での報酬を組み入れたものとしての「自然価格 (natural price)」といったものに対応関係をもつことになるものであったのであり、それにたいしスミスの議論における事物の「交換価値」とは、事実上、事物の現実の「市場価値」と同義のものであり、そしてその「交換価値」の真の大きさ、「真の値打ち (real worth)」とは、当該事物を手放すことによって免れることのできる労働、その事物で購買または支配しうる労働というものであったのであり、そしてまたこの「交換価値」の真の、そして究極の、基礎は、「労働苦勞価値」としての、究極的な費用というものに由来する価値としての、「真実価値」のなかにあったように思えるのである、とみられ、さらにまた、「真実価格」とともに究極的な費用ということに関係すると同時に「すべての商品の価格がたえずそれに向けて引きつけられているところの中心価格」(WN, p. 58. 大河内訳<I>, 99ページ)ともされるスミスの議論における「自然価格」というものは、事実上「ノーマルな交換価値」に相当するものであった、と捉えられるのであった。そしてダウンポートは事実上、スミスの議論においては商品の「交換価値」の真の大きさとしての「真の値打ち」も商品の生産に要する究極的な費用の真の大きさも、ともに、購買あるいは支配しうる(苦痛——「労苦」、「骨折り」——としての)労働の量によって測定されることとなっている、とみるのである。Davenport [1908], pp. 11-15, 23, 25, 26, 27.

したがって、うえのような議論に従えば、一商品の究極的な費用がその生産に要した労働であってしかもその費用が当該商品の支配しうる労働量と一致しているときには、その商品の生産に要する究極的な費用というものに由来する価値に対応するものとしてのその商品の「真実価格」と、その商品の「交換価値」とは、一致している、ということとなり、また、一商品の究極的な費用がその商品の生産に要した労働、資本、土地にたいする報酬である場合には、それらの報酬の各々が支配しうる労働量の合計とその商品が支配しうる労働量とが一致するときには、その商品の支配労働量タームでの生産費というその商品の究極的な費用といったものに由来する価値と、その商品の「交換価値」とは一致することとなり、そしてさらにもし

そのときにそれらの報酬の各々が自然率での報酬であったならば、その商品の「自然価格」と「交換価値」とは一致し、その商品のその「交換価値」はその商品の「ノーマルな交換価値」である、ということになる、といえるであろう。

ただし、すでに先の注2のなかでみたように、ダヴンポートによれば、スミスの議論ではもし正しく理解されさえすれば質、種類の異なった労働をある等質的な要因に還元することは可能であるということも意味されているように思えるのではあるがその等質的な要因そのものは事実上、時間という要因でも苦痛という要因でもないということになる、とみられるのであった。

H. J. ダヴンポート (1908年) についての覚書

ダヴンポートによれば、スミスの議論では事実上、「価値の原因、決定因の問題」、「同時に存在する〔諸事物の〕価値の、尺度あるいは公分母の問題」、「延べ払いの標準、あるいは広範な時間的間隔にわたっての比較の手段、の問題」というその性質において本来別個なものであるはずの三つの問題が、ほとんど絶望的に混乱させられた形で論じられている、とみられるのであった。

そしてダヴンポートの議論の示すところによれば、スミスの議論では商品の「交換価値」とは事実上、商品の現実の「市場価値」と同義のものであり、そしてそこでは、同時に存在する諸商品の「交換価値」の真の大きさとしてのそれらの商品の「真の値打ち」も、それらの商品の生産に要する究極的な費用の真の大きさも、ともに、当該商品、当該費用が購買あるいは支配しうる「苦痛としての労働」の量によって測定されるということになっており、また、一商品の究極的な費用がその生産に要した労働（苦痛としての労働）のみであってしかもその費用が当該商品の支配しうる労働量（苦痛としての労働の量）と一致しているときには、その商品の生産に要する究極的な費用というものに由来する価値——スミスのいう「真実価値」——と、その商品の「交換価値」（つまり、その商品の現実の「市場価値」）とは、一致していることとなるのであって、ここでのその「真実価値」に対応関係をもつものとしてのその商品の「真実価格」は、その商品の「交換価値」と等しいということとなり、他方、一商品の究極的な費用がその商品の生産に要した労働、資本、土地にたいする報酬であってしかもそれらの報酬の各々が支配しうる労働量の合計がその商品が支配しうる労働量と一致しているときには、その商品の生産に要する究極的な費用というものに由来する価値——「真実価値」

——と、その商品の「交換価値」とは一致することとなり、そしてさらにもしそのときにそれらの報酬の各々が自然率での報酬であったならば、ここの「真実価値」に対応するものとしてのその商品の「自然価格」と、その商品の「交換価値」とは一致し、その商品のその「交換価値」はその商品の「ノーマルな交換価値」である、ということになるのであった。

ただし、またダウンポートの議論の示すところによれば、スミスの議論ではもし正しく理解されさえすれば質、種類の異なった労働をある等質的な要因に還元することは可能であるということも意味されているように思える、しかしその等質的な要因そのものは事実上、時間という要因でも苦痛という要因でもなく、生産物の〔交換〕価値から労働が引き出し受け取るものというものであった、ということになるのであった。〔したがってまたそこでは、質、種類の異なった労働を互いに換算し合うことが可能になるのは、うへの意味での各労働の受け取るもの——その意味での各労働の賃金率——に照らすことによって、ということになるであろう。〕

さらにまた、「同時に存在する〔諸事物の〕価値の、尺度あるいは公分母の問題」と「延べ払いの標準、あるいは広範な時間的間隔にわたっての比較の手段、の問題」とは本来別個の問題であるはずであるにもかかわらずスミスの議論ではそれらは混乱させられた形で論じられているとみるダウンポートは、スミスにとっては「延べ払いの問題」は一つの価値問題として現れたとしつつ、スミスの議論では延べ払いの理想的な標準として〔支配しうる〕労働が、また、支払いの容易さという点でなんらかの具体的で触知できる実在物が望ましいということから長期については「穀物」、短期については「銀」・貨幣が、標準として提案されたのでありまた「穀物」、「銀」・貨幣についてのその提案の基準は理想的標準としての「労働」にたいする支配力の相対的安定性ということであった、とみ、そして、そのようなものとしてのスミスの議論に検討をくわえるのであった。ダウンポートの議論によれば、スミスが標準として「労働」とともに「穀物」、「銀」・貨幣を論じたのは事実上、「同時に存在する〔諸事物の〕価値の、尺度あるいは公分母の問題」についての議論の脈絡においてではなくて、「延べ払いの問題」についての議論の脈絡においてであった、ということになるのである。

9. C. リスト (1909年)

C. リスト (C. Rist) は、1909年にそのフランス語版初版が刊行された C. ジイド (C. Gide) との共著 (Charles Gide and Charles Rist, *A History of Economic Doctrines: From the Time of the Physiocrats to the Present Day*, translated by R. Richards, 2nd English edition, with additional matter from the latest French editions translated by Ernest F. Row, Boston, etc.: D. C. Heath, [1948]). なお、ここでは上掲の英語訳版第2版——フランス語版第2版 (1913年) の最初の英語訳 (1915年) に基づきつつフランス語版第6版 (1944年) および第7版 (1947年) でなされた修正および追加を組み入れたもの——を使用するのであるが、ここで取り扱うリストの研究の発表年の区分については、ジイドとリストとによるうえの著書のフランス語版初版が刊行された年、1909年をとり、そして、以下では、上掲英語訳版第2版を Gide & Rist [1909] と略記することとする。宮川貞一郎訳『経済学説史』(上, 下) [1925年フランス語版第5版の邦訳], 東京堂, 上巻第20版 1943年, 下巻第17版 1943年 [初版, 上巻1936年, 下巻1938年]) において「アダム・スミス」をも扱うのであるが、そこには、以下のように整理することもできるであろうようなリストの所説を見いだすこともできる。

① スミスは彼の価値理論を、「使用価値」と「交換価値」との間に存在する基本的な相違を強調することから開始するのであるが、スミスは「使用価値」という言葉によって、我々が「効用」という言葉によって理解するもの、あるいは、他の著作家たちが「主観価値」、「望ましさ」あるいは「オフエリミテ (経済的な満足)」と呼ぶものとはほとんど同じことを意味していた⁽¹⁾。そして、こんにちの経済学者たちは、価格——諸事物の交換価値——を取り扱うさいには、主としてこの「使用価値」の概念に頼るのであり、諸商品の「交換比率」の説明は、それに先立つ、それらの商品を交換する人々にとってのそれらの商品の効用についての分析というものに、その基礎を置くのであるが、これにたいしスミスは、「使用価値」を「交換価値」と対照するためにのみ「使用価値」に言及し、そしてその「使用価値」を、それ以上

9. C. リスト (1909年)

の考察をくわえることなしに片付けてしまうのである。スミスによれば「使用価値」と「交換価値」とはなんの接点をも持たないように思えるのであり、そして「交換価値」のみがスミスにとって興味のあるものであったのである。⁽²⁾

② そして、商品の真実価値というものはある瞬間から次の瞬間にかけてあるいはある場所から他の場所にかけて変動するものではないのであって、たえず変動する現実の価格、市場価格の下にいま一つの価格——スミスはそれを真実価格、あるいはまた時として自然価格と呼ぶ——が認められうる、と考えるスミスは、価格の動きのたえざる変動の下にヨリ安定的な要因またヨリ不変的な要因を発見しようとするのであるが、こういった問題にたいするスミスの最初の理論は、あらゆる商品の真の価値を、その商品を生産するのに要した労働もしくは努力⁽³⁾の量に依存させる、というものであった。スミスは、「それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度 (measure) である」、「あらゆる物の真実価格 (real price)、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ)、と述べる。労働——すなわち、一商品の生産に費やされる努力——が、その商品の交換価値の、原因であり、尺度でもあるのである。⁽⁴⁾このようにスミスはまず、労働もしくは努力を価値の原因とすることによって、交換価値のための、需要と供給という変わりやすい不安定な基礎によって与えられるものよりもヨリ堅固なよりどころを、見つけ出そうと試みたのであった。⁽⁵⁾

③ だがそのような試みをなすのとほとんど同時に、スミスはまた、うえのような進路におけるいくつかの諸困難に気付いていたのであった。たとえば、そういった労働は、また、その労働に依存する価値は、どのように測定されるべきであったのか。スミスは、「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働けばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。だが、辛さにせよ、巧妙さにせよ、その正確な尺度を見つけ出すのは容易なことではない」、と述べるのである (WN, p. 31. 大河内訳〈上〉, 55ページ)。また、第二の困難は、文明社会における商品の価値を考えるさいには、労働だけでなく、使用する人々になんらかの経

費を費やさせるところの商品の生産に使用される土地と資本をも、考慮に入れなければならない、ということである。そして、これをうけてスミスの議論では、「ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量」がその商品の価値を決定する唯一の事情であるのは「原始社会」においてのみであって、こんにちにおいては、土地と資本をも考慮に入れなければならない、したがってそこでは、労働は、価値の唯一の原因でもなければ価値の唯一の尺度でもない、ということになるのであった。⁽⁶⁾

(注)

- (1) ただしリストによれば事実上、スミスは、「使用価値」と「交換価値」との間の相違を強調する「水とダイヤモンドの価値のパラドックス」についての説明において、「使用価値」としての「効用」を、経済学上における「効用」というよりもむしろ日常語でいう「効用」、「有用性」といったことを示すものとして考えている、ともみられる。それについては、Gide & Rist [1909], p. 92, incl. footnotes, 邦訳(上), 107ページ, 108ページ注14, 注15を参照せよ。
- (2) Gide & Rist [1909], pp. 92-93. 邦訳(上), 107-108ページ。
- (3) 我々がここで使用しているテキストでは‘effort’という用語が用いられている。Gide & Rist [1909], p. 93.
- (4) なお、リストによれば、スミスの議論にはある対象物の価値はそれを生産するのに要する労働の量によってではなく、その対象物と引き換えに購買されうる労働の量によって決定されるということを暗に言っているように思えるところもあるのではあるが、根本的には、それら二つの考えは一つのものである、なぜなら、等しい価値をもつ諸対象物のみが交換されうるのであり、したがって、なんらかの対象物でもってある人が購買しうる労働の量は、その対象物を生産するのに要する労働の量に等しい、からである、とされ、さらに、「諸財貨は、ある一定量の労働の、価値を含んでおり、その一定量の労働の、価値を我々は、そのときそれと等しい量の労働の、価値を含んでいとみなされるものと、交換するのである」とスミスは言っている(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 53ページ), とされる。Gide & Rist [1909], p. 94n. 1. 邦訳(上), 110ページ注21。
- (5) Gide & Rist [1909], pp. 93-94. 邦訳(上), 109-110ページ。
- (6) Gide & Rist [1909], p. 94. 邦訳(上), 110-111ページ。なお、スミスは価格の動きのたえずなる変動の下にヨリ安定的、ヨリ不変的な要因を発見しようとしたのであり、たえず変動する市場価格の下にいま一つの価値が認められうると考え、市場価格の変動の背後につねに隠れている真の価値を追求しようとしていたのだ、とみるリストは、そのような問題にたいするスミスの最初の理論を概ね以上のようなもの

9. C. リスト (1909年)

として捉えるのであるが、リストはさらに、スミスはまた文明社会に適用しえないそのような最初の理論に代わる別の理論を展開しようとした、とみて、そのスミスの理論を検討しようとする（それについては、Gide & Rist [1909], pp. 94ff., 邦訳(上), 111ページ以下を見よ)。なお、市場価格の変動の背後につねに隠れている真の価値の追求の一つとして把握されるものとしてのそのスミスの議論についてのそこでのリストの検討においては、少なくとも我々がここで使用しているテキストでは、価値の「決定因 (determinant)」, 「規制者 (regulator)」といった言葉が現れるのにたいし価値の「尺度 [我々がここで使用しているテキストでは *measure*]」といったような言葉そのものは見いだされはしない。ただし、以上でみてきたリストの議論からして、リストのばあい、価値の「原因 [我々がここで使用しているテキストでは *cause, origin, source*]」となるものが価値の「尺度」となるべきものと考えられており、また、「価値の決定因」, 「価値の規制者」ということのないなかには「価値の原因」と「価値の尺度」という両方の意味が込められている、といえるかもしれない。

C. リスト (1909年) についての覚書

価格すなわち諸事物の交換価値とするリストによれば、スミスは価値に関する彼の議論を「使用価値」と「交換価値」との相違を強調することから始めてそれらは互いになんの接点も持たないとし、そしてスミスはそうのように区別される「交換価値」を議論の対象としようとしたのであるが、そこではスミスは、需要と供給という変わりやすい不安定な基礎のうえで異時点間、異場所間においてたえず変動する現実の価格、市場価格の下に、そのようには変動することのないもう一つの価格——リストによれば、スミスはこれを真実価格、あるいは時として自然価格、と呼んだ、とされるのであった——が存在すると考え、そのようなものとしての、市場価格の変動の背後につねに隠れている真の価値を、追求しようとしたのであり、市場価格のたえざる変動の背後に存在するより安定的でより不変的な要因を発見しようとしていたのであった、とみられるのであった。

そして、価値に関するスミスの議論をもっぱらそのようなことをなす試みと捉えるリストによれば、スミスはまず、「労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」, 「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折り」であると述べ、商品の生産に要する労働（すなわち努力）

が真にその商品に交換価値を与え、たえず変動する商品の市場価格の背後に存在するその商品の真の価値はその商品の生産に要する労働の量に依存するのであり、商品の生産に費やされる労働がその商品の交換価値の、原因であり、尺度でもあるのだ、とした、とみられるのであった。なおそのさいリストによれば、商品価値の大きさをその商品の生産に要する労働量に依存させる考えとその商品と引き換えに購買しうる労働量に依存させる考えという二つの考えは、根本的には一つのものである、とされるのであった。

しかしまたリストによれば、スミスの議論では他方で、商品の生産に費やされる労働がその商品の交換価値の、原因であり、尺度でもあるとするうえのような考えには、克服することの困難な労働そのものの質、種類の相違といった問題があるとともに、うえのような考えは土地や資本を考慮に入れる必要のない「原始社会」には適用しうるとしても、それらを考慮に入れなければならないこんにちの社会の状態では、労働は価値の唯一の原因でもなければ価値の唯一の尺度でもない、ということになっている、とみられるのであった。

10. L. H. ヘイニー (1911年)

1911年にその初版が刊行された L. H. ヘイニー (L. H. Haney) の一著書 (Lewis H. Haney, *History of Economic Thought: A Critical Account of the Origin and Development of the Economic Theories of the Leading Thinkers in the Leading Nations*, 4th and enlarged edition, New York: Macmillan, 1949 [1st edition 1911; 2nd edition (revised) 1920; 3rd edition 1936]). なお、ここでは上掲の増補第4版を使用するのであるが、ここで取り扱うヘイニーの研究の発表年の区分については、同じ出版社から上掲書の初版が刊行された年、1911年をとり、そして、以下では、上掲書を Haney [1911] と略記することとする。なおまた、邦訳としては、大野信三訳『経済思想史』(上、下) [1920年改訂版の邦訳]、而立社、1923年、がある) のなかで、ヘイニーは、スミスは価値についての彼の議論を「使用価値」と「交換価値」とを区別することからはじめ、そしてそれらのうち、「交換価値 (value in exchange, exchangeable value, exchange value)」だけに関心をいただき、その「交換価値」を、財貨が有する「他財貨にたいする購買力」と定義したのであり、その意味でスミスの価値概念はまったく客観的なものである、とするのであるが⁽¹⁾、そのようなものとしての価値の、尺度についてのスミスの議論に関連して、ヘイニーは、以下のように整理することもできるであろうような見方を示している、といえる。

① 「交換価値」についてのスミスの研究においては「労働」という言葉が「価値の原因 (cause) および決定因 (determinant)」と「価値の尺度 (measure)」という二つの脈絡のなかで使用されているのであるが、スミスの価値理論を理解するためには一方での価値の原因および決定因と、他方での価値の尺度とのあいだの区別に留意しておくことが必要であり、また、どの程度までスミスが意識的にこの区別をなしていたかということについてははっきりとしたことは言えないとしてもスミスの語法がかなり一貫しているのは単なる偶然以上のものであるように思える。だが、スミスがそれらのものの間の区別をもっと明確に意識してはいなかったということが惜しまれ

る。もしもスミスが、価値があるといった性質の原因をつきとめること自体は必ずしも価値の大きさを測定するための手段を提供するわけではないということを理解していたならば、彼は、我々に、何故に異なる事物が異なった大きさの価値をもつのかということ——これは価値の決定の問題である——についてのより満足のいく説明を、提供していたかもしれない。⁽²⁾

② ところで、スミスの議論では、事物の他財貨にたいする購買力を表示し、測定するものが、「交換価値」の尺度であるわけであるが、スミスは、このような意味での「真の尺度」を、その事物と交換される労働の量、その事物が支配しうる労働の量としており、しかもこのことは、「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」にもそれらが行われる社会状態にもあてはまると考えている。⁽³⁾

③ スミスが労働を真の価値尺度とした理由は、貨幣や穀物は他の諸商品にたいする支配力において変動するところが大きいゆえにほとんど適切な尺度たりえないのにたいし、通常の状態のもとにおいては労働者は「つねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ)のであり、労働者はより多くのあるいはより少ない財貨を受け取るかもしれないが、その労働者がそれらの財貨に支払う労働価格は同一のままにとどまる、それらの財貨の価値は変化するがそれらを購買する労働の価値は変化するのではない、ということであった。⁽⁴⁾

④ 他方、スミスは価値尺度として穀物、貨幣および労働を使用しているとしてもその点で彼が矛盾しているというわけではない。というのは、彼は、穀物および貨幣の妥当性を労働にたいするそれらのものの支配能力に基づかせて、穀物、貨幣を、たんにより便利なものとしてとりあげているにすぎないからである。⁽⁵⁾

⑤ しかしながら、スミスは、一つの客観的な交換関係としての価値というものを考えていたのであるから、長期(long-time)のあるいは絶対的な標準の彼の探求は、矛盾したものである。⁽⁶⁾

(注)

(1) Haney [1911], pp. 217-218.

(2) Haney [1911], pp. 219-221.

(3) Haney [1911], pp. 219-220. なお、ヘイニーは他方、スミスの議論では事実上、

10. L. H. ヘイニー (1911年)

事物の生産、獲得のために用いられる「労苦」、「骨折り」としての「労働」が唯一の費用である「初期未開の社会状態」においては、そのようなものとしての労働が当該事物の価値の唯一の「原因」であり、また、その労働の量が、当該事物の価値の大きさの唯一の「決定因」であるのであって、その労働の量が、当該事物の支配しうる労働の量を規制 (regulate) するということとなっている、とみている、ということもできるであろう。Haney [1911], pp. 218-220 を見よ。

- (4) Haney [1911], p. 220. なお、ヘイニーはまた、スミスは事実上、客観的交換価値の決定についての費用説 (cost theory, 生産費説) を提示しようとしたのであるがスミス自身はまた、価値はなんらかの正確な尺度によって調整されるわけではなくて、同等性へのおおよその接近ということに従って、市場のかけひきをつうじて、調整されると述べている、とみ、そしてそのスミスの述べていることに關して、つぎのような内容をもった指摘をなしている。すなわち、[そこでの] 彼の考えは、平均的な労働費用が使用されてもよいというものであった。すなわち、通常のあるいは平均的な熟練、体力および健康をそなえた労働者をとれば、一日の仕事はつねに同一量の不効用——等しい、安楽、自由および幸福の犠牲——を伴うであろう、というものである。『国富論』第1篇第6章のなかで彼は、辛さ、熟練等々における相違、異なる職業の性質について考慮をなしている。そして、[彼の議論にとつて] 調和的でない効用という要素を導入することへとあやうく近づきつつ、彼は、熟練にたいする報酬は、しばしば、熟練を獲得するために費やされる時間と労働とにたいする報酬に等しい、ということを結論している。スミスは、頼るべきものとしての限界費用という考え方をもっていなかったのであるが、その代わりに、彼は、平均的な状況のもとにある平均的な人間という装置を使用するのである。もしもこの、平均的人間の使用ということが考えられるならば、またさらに、もしも、スミスはたんに間接的に、そして費用をつうじて、価値を決定することを、追求しているのだということが想起されるならば、ある所与の職業に関する限りでは、彼の推論は、環境的諸条件におけるあるいは労働の質における均一性の欠如という理由からの批判には、さらされないように思える。ある所与の等級のある平均的な労働者にとっての平均的な諸条件のもとでのある平均的な労働費用という考え方は、非実際的、非現実的でさえあるようにみえるかもしれない、しかしそれは、非論理的であるように思えないのである。Haney [1911], p. 221.

(5) Haney [1911], p. 221.

(6) Haney [1911], p. 222.

L. H. ヘイニー (1911年) についての覚書

ヘイニーによれば、スミスは、「使用価値」と「交換価値」とを区別し、

そして、「他財貨にたいする購買力」とスミス自身によって定義される一つの客観的交換関係としての価値というものとしての、「交換価値」を、研究対象とした、とみられるのであった。

ただし、ヘイニーは、そのような意味での「価値」についてのスミスの議論を理解するためには「価値の原因および決定因」と「価値の尺度」とのあいだの区別に留意しておくことが必要であるとしたうえで、どの程度までスミスが意識的にこの区別をなしていたかということについてははっきりとしたことは言えないがスミスの語法がかなり一貫しているのは単なる偶然以上のものであるように思えるとしつつも、スミスがそれらのものの間の区別をもっと明確に意識していなかったということが惜しまれる、とするのであった。

そして、ヘイニーによれば、スミスは事実上、「価値の原因および決定因」という脈絡のなかでも「価値の尺度」という脈絡のなかでも「労働」という言葉を使用するのであるが、事実上「価値の尺度」の脈絡のなかでは、他財貨にたいする購買力としての一事物の「交換価値」の大きさを表示、測定する「真の尺度」を、その事物が「支配しうる労働」の量に求めており、しかもその尺度は「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」でもそれらが行われる社会状態でも適用されうるものであると考えている、とみられるのであった。

そしてまたヘイニーによれば事実上、スミスがそのような意味での「労働」を「真の尺度」とするさいにその根拠として、通常の状態のもとにおいては労働者は〔財貨を手に入れるためにある一定量の労働を提供するとき〕「つねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない」という意味で、〔その一定量の労働と交換に〕労働者が受け取る財貨の量の多少にかかわらず、そのより多量の財貨にあるいはより少量の財貨にたいして労働者が支払っている労働価格の大きさそのものは変化していない、またその意味で、財貨の価値は変化してもそれらの財貨を購買する労働の価値そのものは変化しない、といったことを考えている、とみられるのであった。なお、スミスは客観的交換価値の決定についての費用説（cost theory、生産費説）を提示しようとしつつも価値はなんらかの正確な尺度によって調整されるわけではなくて、同等性へのおおよその接近ということに従って、市場のかけひきをつうじて、調整されるとしているとみるヘイニーによればまた、

10. L. H. ヘイニー (1911年)

そこでの、同等性へのおおよその接近ということに従っての市場のかけひきをつうじての価値の調整ということは事実上、平均的な状況のもとにある平均的な人間にとっての平均的な労働不効用——犠牲にされる安楽、自由、幸福——というものを、またその意味での平均的な労働費用というものを、使用しての調整ということであった、とみられるとともに、また事実、ある所与の等級のある平均的な労働者にとっての平均的な諸条件のもとでのある平均的な労働費用という考え方自体は、たとえ非实际的、非現実的でさえあるようにみえるかもしれないとしても非論理的であるように思えない、とされるのであった。

さらに、ヘイニーによれば、スミスは価値尺度として、「労働」にくわえて「穀物」、「貨幣」も使用するのであるがそのこと自体は矛盾を含むものではなく、スミスの議論では「穀物」、「貨幣」の価値尺度としての妥当性はそれらのものの労働支配力ということに基づかせられつつたんにヨリ便利なものとして「穀物」、「貨幣」がとりあげられているにすぎないのである、とみられるいっぽうで、スミスは一つの客観的な交換関係としての価値というものを考えていたのであるから長期のあるいは絶対的な標準をスミスが探求しようとしたこと自体は矛盾を含むものであった、とされるのであった。

11. R. A. マクドナルド (1912年)

1912年に公表された R. A. マクドナルド (R. A. Macdonald) の一論文 (Robert A. Macdonald, "Ricardo's Criticisms of Adam Smith," *Quarterly Journal of Economics*, vol. 26 (no. 4, August 1912), pp. 549-592. 以下, Macdonald [1912] と略記する) のなかで, マクドナルドは, 以下のように整理できるような「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつ彼の所論を示している, といえる。

① スミスは一方で, つぎのことを指摘している。すなわち, 商品の価値はその商品が購買しうる労働の量 (マクドナルドによれば, ここで言われている「労働の量」は, 「労苦」, 「骨折り」——要するに「労働の不効用」——と同義である, とされる) に等しいが, 労働は価値を表示するのには適さない手段である, それにたいし, 貨幣 (金, 銀) は, その価値において変動するために正確な価値尺度, 不変の尺度たりえないけれども, 価値を表示するという目的のために他のいかなる商品よりもヨリしばしば使用される, ということである。⁽¹⁾

② 他方, スミスの議論には, 「労働」についての「労働者の見方」——マクドナルドはこれを「主観的な見方」と名付けてもよいとしている——と「雇い主の見方」——マクドナルドはこれを「客観的な見方」と名付けてもよいとしている——という二つの見方が存在するのであり, そして, 「雇い主の見方」からすれば必ずしもそうとはいえないのであるが「労働者の見方」からすれば, (ある所与の等級での) 労働の不効用は時間的にも空間的にも不変であり, その意味で労働の価値は不変であるとされ, そしてスミスはこの想定にもとづいて, 労働が価値の不変の標準であるということ, を主張している。⁽²⁾⁽³⁾

③ このように, スミスが労働を価値の真の標準とみなすときには, 彼は労働者の観点からそうした, つまり, スミスは労働を主観的にながめていたのであり, そしてスミスのこの労働標準は, 労働者の観点からみた場合の財貨の価値を測定するのである。そして, そのような観点からみた場合の財貨

11. R. A. マクドナルド (1912年)

の価値とは、その財貨が「包含 (embody) する」労働量に等しいのであり、⁽⁴⁾ スミスが労働を価値の真の標準、尺度であるとするとき、そこでの尺度とはこのような意味での尺度なのであり、そしてその尺度の内容は、まさしく、⁽⁵⁾ 財貨の生産に投下された (bestowed) 労働の量のことなのである。

④ また、スミスは一方で、長期 (long period) での、穀物の労働購買力あるいは労働支配力の相対的安定性ということから穀物の真実価値は長期間にわたっては貴金属や貨幣を含めた他の諸商品よりもより不変的なものであるとしつつも穀物を完全な標準とはしていないのであるが、他方で彼はしばしば、穀物を価値の、一つの完全な標準であると想定する傾向があり、穀物がその価値において変動して不変の価値尺度の要件を満たしえないといった問題を過小評価している。⁽⁶⁾

(注)

(1) Macdonald [1912], pp. 550-551.

(2) このことを示すものとして、マクドナルドは、つぎのようなスミスの文言を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。……彼〔労働者〕が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。」 (WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 57 ページ。〔 〕 内はマクドナルド。) Macdonald [1912], p. 551.

(3) Macdonald [1912], pp. 551-552. なお、言うまでもなく、また、たとえば Macdonald [1912], pp. 555-557 から明らかなように、Macdonald [1912] でマクドナルドが「価値の標準 (standard of value)」というときそれは「価値の尺度 (measure of value)」と同義である。

(4) なお、マクドナルドは、スミスの議論からすれば価値は、異なる見地から考察されるのに応じて、次ページの図-2 で示されるような四つの異なる含意をもつことになる、としている。しかしまたマクドナルドによれば、価値のそのような諸含意といった把握そのものはスミスの議論において首尾一貫した形で実際に運用されていたというわけではなく、スミスはたとえば、「価値」によってときとして「真実価値 (real value)」(I, A) を意味し、またときとして「名目価値」(II, C) を意味し、そしてしばしば、ある商品に「具現された (realized)」労働量 (I, A) を、その商品が市場において「購買する」であろう労働量 (II, A) と混同している、とされる。 Macdonald [1912], p. 553.

なお、マクドナルドは、価値尺度としての労働ということに関しては、スミスは

ある商品に具現された労働量はその商品が市場で購買するであろう労働量と等しいということを、どこにも明確には述べてはいないということが注意されるべきである、としている。 Macdonald [1912], p. 555.

I. 労働者の観点からすれば：

A. 商品の価値は、その商品が「包含する」労働の量に等しい。(マクドナルドによれば、これは、スミスのいうその商品の「真実価値」にあたる、とされる。)

II. 雇い主の（あるいは所有者の）観点からすれば：

商品の価値はつぎのものに等しい。

A. その商品がそれと交換されるであろう労働の量。

B. その商品がそれと交換されるであろう生活の必需品および便益品。

C. その商品がそれと交換されるであろう貨幣の額。（「名目価値」）

図—2

（出典：Macdonald [1912], p. 553.）

(5) Macdonald [1912], pp.552-553, 555. マクドナルドはさらにつぎのような説明を付している。それによれば、たとえばいま、ある平均的なパン屋について一般的に言って、一かたまりのパンがどのような価格で売られようとそのことにはかわりなく、その一かたまりのパンを生産するのにある所与の労働量が、たとえば x だけが必要であるとすれば、その一かたまりのパンはつねに同じだけの「真実」価値をもつ。たとえもしそのパンが一週間もそのままにされてまったく役に立たないほどに新鮮さが失われてしまい、その名目価格が需要の欠如のゆえにゼロへと低下したとしても、そのパンは、それでもなおある量の労働を包含し、同じだけの「真実」価値をもつであろう。言い換えれば、「真実」価値（I, A）は不変に留まったであろう、しかし、他の諸価値（II, A, B, C）は存在しなくなったであろう。これが、スミスが労働が価値の尺度であると語ったときに、彼が実際に意味したことのできである。 Macdonald [1912], p. 555.

なお、マクドナルドは、以上のようなものとしての価値尺度としての労働についてのスミスの議論に関連して、つぎのような指摘をなしている。

① スミスが労働を価値の真の尺度とするさいその基礎となっているのは、（なんらかの所与の等級での）労働の不効用は時間的にも空間的にも不変であるというスミスの考えであるのであるが、労働の不効用を規定（determine）する諸条件は非常に多種多様であるため、科学的精確さをもってそれを取り扱うことはほとんど不可能である。 Macdonald [1912], p. 552.

② スミスは労働についての労働者の見方、主観的な見方から労働を真の価値尺度としているのであるが、スミスは、価値とは本質的に社会的な概念であって個人

11. R. A. マクドナルド (1912年)

的な概念ではないということを、また、価値の理論にとつては労働についての主観的な見方は、相対的に、あまり重要性をもたないということを、認識することができなかった。 Macdonald [1912], p. 555.

③ スミスがとりわけ、「労働」を価値の不変の尺度と考えていたとしても、彼はその用語に、リカードウ (D. Ricardo) によって暗に示されているような意味合いを付してはいなかった。 Macdonald [1912], p. 556. (なお、マクドナルドによれば、労働を価値の「源泉 (source)」とみなすという点ではスミスとリカードウとは一致している、ともされる。Macdonald [1912], p. 554.)

④ また、スミスは価値という用語を使用するさいに非常に一貫性を欠いており、『国富論』には、商品に具現された労働量とその商品が市場において購買するであろう労働量との混同が、存在する。 Macdonald [1912], p. 556.

- (6) Macdonald [1912], pp. 556-557, 589-590. こういった事情についてのマクドナルドの説明およびそのなかに見受けられる彼の考えは概ね以下のようなものとして把握することもできよう。スミスは労働を労働者の観点から、つまり労働を主観的にながめつつ労働を価値〔「真実価値」〕の真の標準とし、そしてそこでの真の標準としての労働の量とは「具現された」「包含された」「投下された」労働の量であったのであり、またしかしスミスの議論では価値尺度としての労働ということに関しては商品に具現された労働量はその商品が市場で購買するであろう労働量と等しいといったようなことはどこにも明確には述べられてはいず、さらに、そのスミスの議論には「具現された」労働量と「購買する」であろう労働量との混同が存在するのであるが、スミスは価値尺度としての「穀物」に関しては、「遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値により近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるであろう」しかし「穀物の等量ですらも、そのことを正確にはなしはしないであろう」として (WN, p. 35. 大河内訳 < I >, 61ページ), スミス自身の見解においてさえ穀物は完全な標準ではなかったということを示している。しかしながらまた、穀物は非常に近くにまでそのようなものへと接近するということから『国富論』では穀物は非常にしばしば、完全な一価値標準であると想定されており、スミスは、ある所与の量の穀物はつねに同数の人々を養うといった理由から、穀物が標準であることから逸脱してしまうことを明らかに過小評価していたのであった。なお、スミスによれば、穀物が標準であることから逸脱してしまう唯一の原因は、社会が富裕あるいは衰退へと進んでいくさいに社会が通過するさまざまな諸条件のなかに見いだされるべきものであったのであるが、そのときにおいてさえ、そのような逸脱は、ある所与の量の穀物を生産するのに必要な労働量の多少という理由からではなく、労働に割り当てられる穀物量の多少という理由から生じる、とされるのであった。穀物価値についてのこの特殊な見解は、

スミスにおいてはつねにもっとも支配的な見解であったのであり、またしばしば彼の推論を傷つけるものであった。穀物の価値〔「真実価値」〕も他の諸商品の価値〔「真実価値」〕と同じようにそれを生産するのに要する労働量によって左右されるのであって、穀物も他の諸商品と同様その価値において変動しうるのであり、また、ある量の穀物は、必ずしも、それが包含するのと等しい量の労働を購買しないであろう。穀物は、労働と同じようには、不変の価値標準ではありえないのである。なお、たしかにスミスは、穀物価値は長期の諸期間にわたってはほとんど不変であると考えていた。スミスは、穀物需要が穀物供給を規制 (regulate) するのではあるけれどもある所与の人口のみがある所与の量の穀物によって維持されうるという意味で穀物供給は穀物需要を規制する、と考えたのであった。もちろんこの側面ではスミスは確かに正しいのであり、またそのような意味では、穀物価値は、長期間にわたっては、貴金属や貨幣を含めた他の諸商品の価値よりもより不変的なものということになりうるであろう。だが、スミスが顧みることのなかった農業における収穫逓減の法則等々を考慮に入れれば、穀物価値も変動しうるものであるものであり、穀物も価値の不変の標準ではありえないのである。 Macdonald [1912], pp. 555-557, 589-590 を参照せよ。

R. A. マクドナルド (1912年) についての覚書

マクドナルドは、スミスは一方で、商品の価値はその商品が購買しうる労働の量に等しいのであるが労働は価値を表示するのには適さない手段であるのにたいし、貨幣（金、銀）はその価値において変動するために正確な価値尺度、不変の尺度たりえないけれども価値を表示するという目的のために他のいかなる商品よりもよりしばしば使用されるところとしている、としつつも、スミスの議論には事実上、「労働者の観点からの議論」と「雇い主の観点からの議論」が存在する、とみ、そしてそのような「二つの観点」という視点からあらためてスミスの議論を捉えつつ、そのスミスの議論にみられる諸「価値」概念、スミスのいう価値尺度の内容等々に関してその所説を展開するのであった。

そしてそのマクドナルドの議論によれば、スミスは事実上、「労働についての労働者の観点からの見方」、「労働についての主観的な見方」からみて（ある所与の等級での）労働の不効用は時空をつうじて不変であってその意味で労働の価値は不変であるとし、そしてそのような想定に基づきつつ労働が不変の価値尺度、価値標準であるとした、ということになるのであった。

11. R. A. マクドナルド (1912年)

また、マクドナルドによれば、スミスは「価値」という用語の使用において一貫性を欠いていたのではあるが、うえのような価値尺度によってその大きさが測定されるものとしての商品「価値」とは、事実上、「雇い主（あるいは商品所有者）の観点」からみた場合の諸「価値」概念から区別されるべきものとしての、「労働者の観点」からみた場合の商品「価値」としての、スミスのいう「真実価値 (real value)」であったのであり、そしてそこでの価値尺度としての「労働」とはその商品に「具現された」（「包含された」、「投下された」）労働であるのであった、とみられるのであった。

そしてまたマクドナルドは、うえのようなものとしてのスミスの議論に関連してそれのもつ問題点等々を論じるのであるが、さらにまたマクドナルドによれば、スミスは一方で、穀物の労働購買力の長期における相対的安定性ということから穀物の真実価値は長期においては貴金属や貨幣を含めた他の諸商品のそれよりもより不変的なものであるとしつつも穀物を完全な標準とはしていないのではあるけれども他方でスミスはしばしば、穀物を一つの完全な価値標準として想定する傾向があった、とされるのであった。しかしまた、マクドナルドの議論の示すところによれば、スミスの議論には商品に「具現された」労働量とその商品が市場で「購買する」であろう労働量との混同が存在するのではあるが、価値尺度としての労働ということに関してはスミスは商品に「具現された」労働量はその商品が市場で「購買する」であろう労働量と等しいといったようなことはどこにも明確には述べてはいないのであり、また事実、ある量の穀物は必ずしもそれが「包含する」のと等しい量の労働を購買しはしないのであり、さらに、穀物の生産に要する労働量、穀物に「具現された」労働量そのものは変化しうるものであり、またそれゆえ、スミスの議論においては本来「具現された」労働の量によってその大きさが示されるものであったはずの穀物の「真実価値」そのものは、変化しうるものであるのであって、穀物は、「真実価値」の大きさを測定するための不変の標準としての要件を満たしえないということになるのであるが、穀物を非常にしばしば完全な一価値標準と想定する傾向のあったスミスの議論においては、このような点で、穀物の、標準からの逸脱、穀物は不変の標準たりえないといったこと自体は、過小評価されていた、ということになるのであった。

12. C. M. ウォルシュ (1926年)

1926年に刊行された C. M. ウォルシュ (C. M. Walsh) の一著書 (Correa Moylan Walsh, *The Four Kinds of Economic Value*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1926. 以下, Walsh [1926] と略記する) のなかで, ウォルシュは, さまざまな価値のうちの一つである経済価値 (economic value) は「使用価値 (use-value)」、「尊重価値 (esteem-value)」、「コスト価値 (cost-value)」、「交換価値 (exchange-value)」という四つの種類に分類できるといった本書の「5」で扱われた Walsh [1903] におけるのと同様な見方を示すとともに, スミスの議論においてそれらの「価値」が事実上どのような形であらわれているのかということに言及するのであるが⁽¹⁾, その脈絡のなかでウォルシュは, スミスの議論における価値尺度ということに関連をもつ以下のように整理できるような自らの見方を示している。

① スミスは, 「等量の労働は, 時と場所のいかんを問わず, 労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」と述べているが (WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 57ページ), そこではいかなる交換にも言及されていないのであって, そこで言われている価値は「交換価値」ではない。しかしまた, 労働者はつねに彼の労働にたいして同一の尊重 (estimation) を付すと言うことはできるかもしれない。だがこれは, たんなる「尊重価値」でありうるだけである。⁽²⁾

② なお, スミスは, 交換は財貨と財貨とのあいだにだけでなく財貨と労働とのあいだにも生じると考えていた。そして, 財貨と財貨とのあいだの交換の場合, たとえば財貨Aの所有者がその財貨Aを財貨Bと交換するときには, スミスの語法によれば, 財貨Aの所有者にとっての財貨Aの「交換価値」あるいはたんに「価値」は財貨B, そして彼にとっての財貨Bの「価格 (price)」は財貨A, ということとなり, 他方, 財貨Bの所有者にとっての, 財貨Bの「交換価値」あるいはたんに「価値」は財貨A, 財貨Aの「価格」は財貨B, ということとなるはずである。したがってここでは, 交換において相対する一方の側にとっての「交換価値」あるいはたんに「価値」は他方

の側にとつての「価格」と、一方の側にとつての「価格」は他方の側にとつての「交換価値」あるいはたんに「価値」と、事実上、同一物ということとなるはずである。⁽³⁾

③ また、財貨と労働とのあいだの交換の場合についても、スミスの論理、語法からすればつぎのようになるはずである。すなわち、たとえば財貨Aが1日の労働にたいして与えられ、そして1日の労働が財貨Aにたいして与えられるときには、財貨Aの所有者にとって、財貨Aの、スミスの議論における「真実交換価値」あるいはたんに「真実価値 (real value)」は、その財貨Aと引き換えに彼が獲得するその1日の労働であり、その1日の労働の、スミスの議論における「真実価格 (real price)」は財貨A、ということとなり、他方またその労働者にとっては、財貨Aの「真実価格」は、その財貨Aを獲得するために彼が与えたその1日の労働であり、彼のその1日の労働の「真実交換価値」あるいはたんに「真実価値」は——これは論理上の帰結であるが、しかしまたスミスの議論ではなおざりにされている点でもあるが——、財貨Aとなろう、ということになるはずである。なお、この場合、労働者が(彼自身によって)等しいものとして評価される彼の労働を交換に供するとき彼は、ある時と場所においては他の時と場所におけるよりも、その労働と交換にヨリ多くの財貨たとえばヨリ多くの財貨Aを得るといったことがあるかもしれないであろう。このときには、もとの量の財貨Aをヨリ少ない労働で獲得できるのであるから、スミスの語法からの論理的な演繹によれば、その労働者にとっては、財貨Aの「真実価格」は低下したこととなり、また彼の労働の「真実交換価値」は上昇したこととなるはずであり、他方、いまや雇い主はもとの量の財貨Aと交換に労働者のヨリ少ない労働しか獲得しないのであるから、雇い主にとっては、財貨Aは「交換価値」において低下した、⁽⁴⁾ということになるはずである。⁽⁵⁾

④ ところで、スミスは彼の議論においては事実上、うえの労働者の観点と雇い主の観点のうち雇い主の観点を取り、そして、労働を「真実価値」の尺度として使用したのであった。このスミスの取り扱いには矛盾を含んだものである。というのは、労働はその労働者にとってのみ不変なもの〔ただし事実上、「交換価値」という意味において不変なものというわけではなくて、その労働者にとっての労働の「尊重価値」という意味において不変なもの〕でありうるかもしれないだけのことであるからである。たしかにスミスは、

労働はすべての物にたいして支払われる「最初の価格 (first price)」——また、「究極の価格 (ultimate price)」——である、といったようなことを言っている。だがたとえそうであるとしても、そこで言われている「価格」とは、労働者たちによってのみ支払われるものなのであり、そして、雇い主たちが彼らの所有する財貨でもって「労働を購買する」とときには、雇い主たち自身にとってつねに同一の価値をもつものを購買しているわけではなく、労働者たちにとって同一の価値（ただし尊重価値）をもつものを購買しているだけなのである。労働者たちの標準は、不都合なしに雇い主たちの標準とはされえないのである。⁽⁷⁾

(注)

- (1) それについては、Walsh [1926], pp. 3, 4ff., 15-19（また、本書の「序」で触れられた拙稿の一つ、中川栄治「アダム・スミスの価値論における諸価値および真実価格：語法に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——」〈『広島経済大学経済研究論集』第1巻第4号、1979年3月〉の、219-225ページ）を見よ。なお、この Walsh [1926] でのウォルシュによれば、「価値」一般は、日常の会話においては非常に広範な意味を持っているのであり、またそれは、道徳、音楽、絵画さらに数学等々におけるように種々の芸術部門や科学部門においてさえ使用されるのであるが、そのうちで「経済価値」とは、その一般的な意味においては、「諸事物を占有する人々あるいはできれば占有するであろう人々の福利 (well-being) および活動 (activity) ということとの関連での、その占有可能な諸事物にそなわるあるいはその占有可能な諸事物とともかくも結びつけられるある性質もしくは力 (power)」である、とされる。そして、ここではウォルシュは、「経済価値」についての定義をこのように示したうえで、うへの性質もしくは力を分類することをつうじて、経済価値を、「使用価値」、「尊重価値」、「コスト価値」、「交換価値」という四つの種類に分類するのであるが、そこではまず、「使用価値」は、我々の諸目的にかなう一事物の力、とされる。他方、「尊重価値」は、我々をしてその事物を所有することを欲せさせるその事物の力、我々をして、第三の種類価値すなわちコスト価値の創造に向かう労働という手段によって、その欲せられる事物の獲得を追求させ、また、その事物を我々が持っている場合には、その事物を補充することの骨折りもしくは犠牲を回避せんがために、我々をしてその事物を保持させる力、とされる。また、「コスト価値」は、我々にたいしてその事物を獲得するための努力 (effort) を課するといったその事物の力、とされる。さらに、「交換価値」は、その事物を交換に供することによって他の諸事物を獲得できるといったその事物の力、我々がその所有を放棄することによって、その時に我々がより大

12. C. M. ウォルシュ (1926年)

きな欲望を抱くところの換言すればより高い尊重価値を付するところの他の一事物もしくは他の諸事物を、我々が手に入れることを可能にするその事物の力、とされる。Walsh [1926], pp. 15-16. (なお、ここでいま触れられたようなことに関連するウォルシュの Walsh [1903] での見方については、Walsh [1903], pp. 6-8 を、また本書前出「5」の注7も、見よ。)

なお、その初版が1961年に刊行された L. D. マイルズ (L. D. Miles) の一著書中の「価値とは何か (What Is Value?)」という題の付された箇所のなかでマイルズも、「価値」とは幅のある言葉であるがそれはしばしば、「使用価値 (use value)」、「尊重価値 (esteem value)」、「コスト価値 (cost value)」、「交換価値 (exchange value)」という四つの種類に分けられる、としており、そしてそこでは、「使用価値」は、「ある用向きとかある働きとかある用役とかを果たすところの特性および性質」、「尊重価値」は、「我々にそれを所有したいと思わせるところの特性とか特徴とか魅力」、「コスト価値」は、「それを生産するのに必要とされる労働、材料その他さまざまな費用の合計」、「交換価値」は、「我々がそれを我々の欲するなにか他のものと交換することを可能にするところの、そのもつ特性とか性質」、とされている。Lawrence D. Miles, *Techniques of Value Analysis and Engineering* (New York, etc.: McGraw-Hill, 1961), p. 3. (産業能率短期大学価値分析研究会訳『価値分析の進め方——生産コスト引下げのために——』(日刊工業新聞社, 1962年), 3-4 ページ。なお、この邦訳では 'esteem value' には「貴重価値」という訳語が当てられている。また、本書で使用している 'cost value' の訳語としての「コスト価値」というもののものは、この邦訳から借用したものである。)(なお、1972年に同じ出版社から刊行された原著第2版にも「価値とは何か (What Is Value?)」という題の付された箇所があるのではあるが、うえのようなことに関する言及はみられない。)

(2) Walsh [1926], p. 5.

(3) Walsh [1926], pp. 4-5. なお、この事情を図の形で示すとすれば図-3のように示すことができよう。

財貨Aと財貨Bとの交換の場合

・財貨Aの所有者にとって:

財貨Aの「交換価値」あるいはたんに「価値」……………財貨B

財貨Bの「価格」……………財貨A

・財貨Bの所有者にとって:

財貨Bの「交換価値」あるいはたんに「価値」……………財貨A

財貨Aの「価格」……………財貨B

図-3

- (4) なお、この事情を図の形で示すとすれば図—4のように示すことができよう。

財貨Aが1日の労働と交換される場合

・財貨Aの所有者にとって：

財貨Aの「真実交換価値」あるいはたんに「真実価値」……1日の労働
1日の労働の「真実価格」……………財貨A

・1日の労働を交換に供する労働者にとって：

1日の労働の「真実交換価値」あるいはたんに「真実価値」……財貨A
財貨Aの「真実価格」……………1日の労働

図—4

- (5) Walsh [1926], pp. 5-6.
(6) ウォルシュによれば、スミスはこのような考えをホブズ (T. Hobbes) からあるいはテュルゴー (A. R. J. Turgot) から得たのかもしれない、とされる。Walsh [1926], p. 6, p. 6n. 2 を参照せよ。

なお、またウォルシュによれば、「価格 (price)」とは、その異常に広い意味においては、交換において一方が与えそして他方が受け取る場所のものであり、それにたいし、「コスト (cost, 費用)」は、人がある事物のために手放し、しかも他のいかなる人も〔それ自体としては〕受け取ることのないものである、とされる。Walsh [1926], p. 7n. 3.

- (7) Walsh [1926], p. 6. なお、ウォルシュは、スミスは「使用価値」と「交換価値」とを区別したとして、スミスの議論においては、こういったことのなかで本来「経済価値」の一種としては「使用価値」、「交換価値」と同格の地位にあるはずの「尊重価値」が「交換価値」のもとに包摂させられてしまっている、あるいはそれらのものが混同されてしまっている、とみるのであった。また、ウォルシュによれば、以上でみてきたことは「あらゆる時と場所における」価値に関連するものであるが、「同一の時と場所における」様々な商品の比較価値 (comparative values, 相対的な価値) については、スミスはそれらの価値を、それらの商品を生産するための、地代および利潤と混ぜ合わされた諸労働費用 (labor-costs) によって説明した、換言すれば、それらの商品の交換価値 (exchange-values) は、自然 (Nature) がそれらの商品を売るさいの、労働で支払われる「諸価格 (prices)」に、従うとした、とされる。そしてまたウォルシュは、そこで言われているような「価格」とは実際には「コスト (cost, 費用)」と呼ばれるほうが適切なものであるものであり、そこではスミスは事実上「価格」という誤用された呼称のもとに、「経済価値」の一種としては「使用価値」、「交換価値」、「尊重価値」と同格の地位にあるはずの「コスト価値」を、隠してしまうという誤りをおかしている、事実上「コスト価値」のことをいうために「価格」という誤用された呼称を用いることによって「価値」という概念から逸脱してしまっている、とみるのであった。Walsh [1926], pp. 4-8 を参照せよ。

C. M. ウォルシュ (1926年) についての覚書

ウォルシュの1926年の一著書のなかにみられるウォルシュの所説は、本書の「5」でみられた1903年の彼の一著書での彼の所説と共通する点を多く含むのであるが、ウォルシュは、この1926年の研究において、経済価値を「使用価値」、「尊重価値」、「コスト価値」および「交換価値」とに分類するとともにスミスの議論における「〔交換〕価値」という言葉と「価格」という言葉との関係といったことに言及しつつ、その議論を展開するのであった。

そして、本書の「11」でみられた R. A. マクドナルドと同じように、スミスの議論における「雇い主の観点」と「労働者の観点」といったことを問題にするウォルシュによれば、スミスが財貨の「真実交換価値」あるいはたんに「真実価値」と呼ばれるものを考えるさい、スミスはその「価値」を事実上、「雇い主の観点」からみ、そしてその「尺度」を労働とした、とみられるのであった。しかしまた同時にウォルシュによれば、スミスがそのように労働を尺度とするさいに「労働の価値」の不変性ということを主張するのであるがその労働の価値の不変性ということとは、ただその労働を行うその労働者にとってのみ、すなわち労働を「労働者の観点」からみたときにのみ、妥当することもありうるだけであり、雇い主にとっては、すなわち「雇い主の観点」から労働をみた場合には当てはまるわけではなく、またそこで不変なものと言われている労働の「価値」とは事実上、「交換価値」ではなくて労働者にとっての労働の「尊重価値」といったものでありうるだけである、とみられるのであった。そしてまたウォルシュは、こういったことのなかに、スミスの議論における、「経済価値」の一種としては「交換価値」と同格の地位にあるはずの「尊重価値」の「交換価値」への包摂、「交換価値」と「尊重価値」との混同といった誤り、をみるのであった。

なお、ウォルシュによれば、うえのようなことをその一部として含むスミスの議論そのものは事実上、「あらゆる時と場所における」価値に関連するものであったのであり、それにたいし「同一の時と場所における」価値についてはスミスは、事実上「価格」という誤用された呼称のもとに「コスト価値」を隠してしまうといった誤りをおかしつつ別の取り扱いをしている、とみられるのであった。

13. И. И. ルービン (1926年)

1926年にそのロシア語版初版が刊行された И. И. ルービン (И. И. Рубин) の一著書 (Isaac Ilych Rubin, *A History of Economic Thought*, translated and edited by Donald Filtzer, Afterword by Catherine Colliot-Thélène, London: Ink Links, 1979. なお、ここでは、ロシア語版改訂第2版第2刷1929年からの翻訳であるこの英語訳版を使用するのであるが、ここで取り扱うルービンの研究の発表年の区分については、彼のうえの著書のロシア語版初版が刊行された年、1926年⁽¹⁾をとり、そして、以下では、上掲の英語訳版を Rubin [1926] と略記することとする) のなかで、ルービンは、スミスは価値という概念の分析に着手するにさいしてまず、「使用価値」と「交換価値」を区別し、前者を彼の研究の範囲外におき、彼の全注意を「交換価値」に向け、このようにしてスミスはみずからを、各々の生産物がその生産者の必要の直接的な充足よりもむしろ交換に向けられるところの商品経済についての研究に、堅固に据える、とするのであるが⁽²⁾、ルービンは、そのようなものとしてのスミスの議論を論じる過程で、つぎのような見方を示している、といえる。

① スミスは非常に明確にまた絶対的に正しく彼の研究の対象——交換価値——を定めるのであるが、彼がこの対象を研究する視点という点では、彼が問題を提出する道すじには方法論上の二元性 (methodological duality) が見いだされる。すなわち、スミスは、一方で、まず商品がどれほど多くの価値をもつかということを決定し第二にその価値の大きさの変化を決定するところの諸原因を明らかにすることを欲し、他方で、彼は、商品の価値を測定するために使用されうる正確で不変な標準を見つけ出すことを欲する。彼は、一方で、価値の諸変化の源泉を暴露することを熱望し、他方で、不変の価値尺度を発見することを熱望するのである。ところで、問題提出のこれら二つの道すじの間にはある根本的な方法論上の相違が存在するということが、および、この相違がスミスの理論の核心のなかへある二元性を導入するにちがいないということは、明らかである。かくして、価値の実質的諸変化についての理論的研究が、価値の最良の尺度に到達しようという実地的な課題と混同

されるようになるのである。⁽³⁾

② この混同の一つの結果として、交換価値についてのスミスの分析は、二股に分かれたものとなり、そして二つの方法論的に異なる経路に沿って進んでいくこととなる。すなわち、一方は、価値の諸変化をひきおこすものの発見であり、他方は、不変の価値尺度の探求である。⁽⁴⁾

③ 研究の最初にスミスは、何の中に「交換価値の真の尺度」が存するかということ問うのであり、また、そのような不変の尺度の探求ということが彼の注意の大部分を占めている(『国富論』第1篇第5章)のであるが、なぜスミスが彼の分析をそのような方法論的に正しくない方向に向けたのかということを理解するためには、スミスは価値の尺度を発見しようという問題を彼の重商主義者の先行者たちから受け継いだということ、思い起こすべきである。⁽⁵⁾そしてまた、スミスがまず交換価値の尺度を問題にしたことには、スミスの一般的な個人主義的および合理主義的アプローチが彼の、価値尺度の探求のなかにも入り込んでいるといった事情もあったのであった。⁽⁶⁾⁽⁷⁾

④ それでは、生産物の価値の尺度あるいは指標とは何か。この問題にたいする解答としては、スミスは、当該生産物との交換において獲得される他の諸商品や貨幣をしりぞけるのであって、⁽⁸⁾彼は、[社会的]分業についての彼の理論に訴えることによって、商品の価値の尺度を、その商品と交換に獲得もしくは購買されうる労働の量に求めるのである。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

⑤ 価値尺度についてのスミスの理論は、労働者たちの社会としての交換社会という彼の考えから発しているように思えるのであるが、その理論はつぎのような欠陥をもっている。すなわち、我々が、単純商品生産者の社会ではその社会の構成員のすべては、彼らの労働の生産物を、したがってまた彼らの労働自体を、交換する、と言うときには、我々は、「交換」という言葉を、二つの異なる道すじで用いている。つまり、一方では、労働の生産物は、実際に交換され、そして市場においてお互いにある同等な関係に置かれるというものであり、ここでは、我々は、言葉の文字どおりの意味での交換をもつ。これにたいし、現実の労働の「交換」に関しては、我々は、本質的には、諸個人の労働活動が互いに結びつけられまた配分されるプロセス——労働生産物の市場交換と密接に結びつけられるプロセス——を、意味しているのである。ところが、そのような単純商品生産者の社会では、字義どおりに言えば、労働のいかなる交換も存在しはしない。というのは、市場において売買

されるのは現実の労働ではなくて、労働の生産物にすぎないからである。つまり、人々の労働活動は、ある一定の社会的機能を遂行する、しかし、それは、売買の対象ではないのである。我々がそこで労働の「交換」が存在すると言うときには、我々は、諸労働が社会的に同等にされるということを意味しているのであって、諸労働が市場において等置されるということを意味しているのではないのである。したがって、我々が、人々が単純商品生産者として互いに関係する一つの交換社会において私が私の服地をだれか他の人の労働に対する支配を獲得するためあるいはだれか他の人の労働を購入するために使用する、と言うときには、これはただつぎのことを言っているだけである。つまり、私は、他の商品生産者が作ったものを獲得することによって、その人の労働にたいしてある間接的な影響力を及ぼしている、ということである。私は、私の生産物を、直接的には、労働の生産物と交換するのであって、だれか他の人の労働と交換するのではないのである。私の服地と交換に私が砂糖を受け取り、そしてそれによって、間接的に、その砂糖生産者の労働を受け取るのである。換言すれば、私は、他の人物の労働を、その人物が生産した生産物としてすでに具体化された (*materialised, materialized*) 形態で、獲得するのである。このことは、私の服地の、だれか他の人の労働とのすなわちある雇われる労働者の労働力との、直接的な交換とは、著しく異なる。すなわち、これら二つのケースは、たんに購買される労働の具体的形態（具体化された労働にたいする生きた労働）という点だけでなく、交換にあずかる人々を結びつける社会的な関係という点でも、はげしく異なるのである。最初のケースでは、彼らは、単純商品生産者として、お互いにある関係に入るのにたいし、第二のケースでは、彼らは、資本家と労働者として、お互いにある関係に入るものであり、最初のケース（すなわち、一生産物と、それとは別の生産物とのあるいは具体化された労働との、交換）は、すべての商品経済の一つの基本的な特徴を構成するのにたいし、第二のケース（すなわち、ある生産物の、生きた労働との交換、あるいは、資本の、労働力との交換）は、資本主義経済においてのみ発生するのである。そして、労働が直接的に、売買の対象としてあるいは商品（すなわち労働力）として機能するのは、第二のケースにおいてのみなのである。ところがスミスは、すべての商品経済に起こる労働の社会的「交換」（あるいはより適切には、同等化）を、資本主義経済に生じるところの、売買の対象としての労働の市場「交換」

と混同するという失敗を、おかししたのであった。スミスは、私は、私の服地でもって、他の人々の労働を獲得もしくは購買する、といったことを言う。だが、私は私の服地を、具体化された労働と（すなわち、だれか他の人の労働の生産物と）交換しているのか、それとも、ある雇われた労働者の生きた労働と交換しているのか、と尋ねられるときには、スミスはいかなる明確な答えをも与えはしないのである。スミスは、「それで（所与の商品で）彼〔所与の商品の所有者〕が購買または支配しようとするところの、他の人々の労働の量または同じことであるが他の人々の労働の生産物の量」（WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 54ページ。（ ）内は中川。〔 〕内はルービン。傍点の付されている箇所は、ルービンがイタリック体にしてある箇所）について語るのであり、そしてスミスは、彼の分析をつうじて一貫して、労働の生産物と労働とのこの混同を、なしているのである。諸商品の価値についての、あるいは、単純商品経済についての、分析のなかに、資本主義経済に固有な諸特徴を持ち込むことは、この分析のなかに、ある非常な混乱をもたらすことを意味する。そして、ある所与の商品と交換に購買されるところの、またその商品の価値の尺度として役立つところの、労働というスミスの概念は、実際には、二つの概念となり、あるときにはそれは「購買される具体化された労働」として現れ、またあるときには、「購買される生きた労働」として、現れる。このようなスミスの概念上の混乱は、商品経済において労働を「交換する」というプロセスの社会的な性質を把握することに初めから失敗していたという事実に起因するのであり、彼は、それを、労働の市場「交換」あるいは労働の売買と間違えたのであった。彼は、一つの社会的機能としての労働を、一つの商品として機能する労働と同じものであると考えたのであった。⁽¹²⁾

⑥ しかしそれでも、もし労働が売買の品目としてはたらくならば、それは実際に、一つの価値尺度として役立つのか。ある所与の労働量は（「労働」に対して支払われる賃金の変動に依存しつつ）より多量のあるいはより少量の商品を購買しうるであろうという事実のゆえに、労働自体の価値が変化しはしないのか。この困難性を免れんがために、スミスは、「等量の労働は、時と場所のいかなを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」（WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ）という命題を提出する。労働者が1日の労働をどれほど多くの諸商品と交換できようと、この1日の労働は、つねに、彼が「自分の安楽、自由、幸福」の同一量を犠

性にしなければならないということを、意味するであろう。彼が今日、1日の労働を、彼が昨年交換できたよりも2倍もの多くの服地と交換できたとしても、このことはたんに、服地の価値が低下したということを、示しているだけである。労働自体の価値は変化したのではない、また、変化しえないのである。というのは、労働することの労苦についての主観的な評価は、不変に留まるからである。だがその場合に、ある所与の商品と交換に購買される労働の客観的な量が、その商品の価値の正確な尺度と考えることができるのである。ある所与の商品の価値が2倍になったということが納得されるためには、我々はただ、1日の労働で以前には購買することのできたその商品は今や2日の労働でもって買われうるだけであるということを確認することだけが、必要なのである。たとえその2日の労働が、今や、1日の労働が以前に与えていたよりも多くの商品（あるいは賃金）を与えることがないにしても、2日の労働は、あらゆるときに、1日の労働とくらべて2倍の主観的労苦および骨折りを、表しているのである。購買される労働の客観的な量が不変の価値尺度としてのその役割を保持することができるよう、スミスは、労働することの労苦についての主観的な評価もまた不変であるということ、を、主張しなければならなかったのであり、ここに、客観的な諸要因と主観的な諸要因とのあいだのスミスの理論上の混乱（客観的な諸要因が支配する傾向をもつところの混乱）が、顕著にあらわれるのである。前で、スミスは誤って、一つの社会的機能としての労働を一つの商品としての労働の意味に転じてしまい、そして、「購買される労働」を不変の価値尺度と考えたのであった。そしていまや、それ自体が一つの商品である労働に固有な価値における絶えざる変動ということを免れんがために、彼は、購買される労働の客観的な量を、この労働が引き起こすところの総主観的骨折りおよび労苦に取り替えるのである。一つの社会的機能としての労働するという活動と、一つの商品としての労働との（すなわち、「購買される労働」との）混同、「購買される具体化された労働」と「購買される生きた労働」との混同、そして最後に、労働の客観的な量と、総主観的労苦および尽力との混同、これらの概念上の混同は、スミスが彼の研究を、価値尺度の探求という方法論的に誤った方向に沿って向けてしまったことに対して彼が支払わなければならなかった代価、なのである。¹³⁾

13. И. И. ルービン (1926年)

(注)

(1) ロシア語版 (Исаак Ильич Рубин, История экономической мысли) 初版の刊行年についての情報は、イサーク・イリイチ・ルービン著、竹永 進訳『マルクス価値論概説』(経済学古典選書 3, 法政大学出版局, 1993年), 「訳者解説」, 471-472ページから得られたものである。なお, その「訳者解説」のその箇所ではまた, 本文前掲の英語訳版はロシア語版第3版1929年からの翻訳として示されているのであるが, その英語訳版の, 著作権欄に付された説明および Editor's Preface, p. 7 にみられる叙述内容から, 本書では, その英語訳版の底本は本文で示したものとしておいた。

(2) Rubin [1926], p. 186. なお, ルービンによれば, 問題のこのような提出様式は節操のある, また明快なものであるが, スミスがそのような問題の提出様式をとりえたのは, 分業に基礎を置く社会では各生産者は, 社会の他の諸構成員によって必要とされている諸生産物を作っているであろうという分業についての彼の学説に, おっているものであり, そしてそれによって, スミスは非常に明確にまた絶対的に正しく彼の研究の対象——交換価値——を定める, とされる。Rubin [1926], p. 186.

なお, Д. И. ローゼンベルク (Д. И. Розенберг) は, スミスが使用価値を研究の範囲外におき交換価値のみを研究していることをルービンはスミスの成功とみなしている, とし, それに関してつぎのような批判をなしている。「マルクス主義的経済学を歪曲したルービンは, 古典学派に対するマルクス主義的批判をも歪曲しているのである (彼はその『著書』をマルクス主義的なもののごとく見せ掛けている)。何となれば, スミスが交換価値を使用価値から切り離しているのは, 彼が両者の区別のみを見てその統一に気付かないこと, すなわちまさに『商品経済の研究の土台の上に』立っていないことを示すからである。」ローゼンベルグ著, 直井武夫訳『経済学史』(第1巻), ナウカ社, 1935年 (ロシア語原著の刊行は1934年), 313ページ。

(3) Rubin [1926], p. 186. なお, ローゼンベルクによれば, ルービンは, スミスが一方では価値の変化の原因を発見しようとし, 他方では価値の不変の尺度を見つけ出そうと努めていること, 価値の実質的変化の理論的研究と最良の価値尺度を見つけ出そうとする実際の課題とが混同されているということに, スミス価値論の批判の基礎を置いており, スミスの不幸は彼が実際の動機と理論的動機との双方によって導かれている点にある, としているが, これは全く形式的な批判であるにとどまらず, 問題を逆に解釈しているのであり, 「理論的研究」と「実際の課題」との混同は, スミスの全概念および方法論から生ずる結果であって, 彼の方法論における二元的性質を説明すべきある独立の原因ではなく, スミスの方法論上の二元的性質は彼の階級的立場に根差しているのである, とされる。直井武夫訳, 前掲書, 319-320ページ。

(4) Rubin [1926], p. 186. そしてルービンによれば, これらの方向の各々は, スミス

をして、労働〔タムでの〕価値についての、あるいは、価値の基礎としての労働についての、ある特殊な考え方へと導く、すなわち、第一のものは、彼をして、ある所与の生産物の生産に費やされた労働の量という概念へ、第二のものは、ある所与の商品が交換をつうじて獲得もしくは購買しうる労働の量という概念へと、導く、とされる。Rubin [1926], pp.186-187.

- (5) すなわち、ルービンによれば、実際の諸問題に熱心に取り組む傾向をもっていた重商主義者たちにとっては、価値の理論は、その実際の課題として、価値の尺度を見つけ出すということをもっていたのであり、経済学 (political economy) が一かたまりの実践的諸規準から理論的諸命題の一つの体系へと転じられたのは、また、諸現象の背後には理論的な諸法則が存在するという考えが、(重商主義者たちがなしたような) 実際の諸処方とあるいは(重農主義者たちがもっていたような)「自然法」と混ぜ合わされることが止んだのは、18世紀の道程をつうじてゆっくりとまた徐々にのみであった——また、多くは、スミス自身の努力によるものであった——のであり、スミスの価値論においては、真の経済諸現象の諸原因を理論的に研究するというこの課題は、まだ、実際の性質をもつ異質な諸要素からは脱してはいなかったのである、とされる。Rubin [1926], p. 187.
- (6) この間の事情をルービンは概ねつぎのように示している。それによれば、スミスの一般的な個人主義的および合理主義的アプローチが、彼の、価値尺度の探求のなかにも入り込んでいたのであり、スミスは社会・経済的諸現象の起源を、個々の存在としての経済的個人の観点から、それらの諸現象がもつ効用によって説明する側面をもつのであるが、彼は、分業と交換を取り扱うときにも、同じアプローチを採択しており、交換に基づく分業は、各個人をして、彼自身の生産物を交換することによって彼が必要とする諸品物を獲得することを可能にするのであり、そしてまたそのために彼自身の生産物は、それを他の諸品物と交換できるという彼の力のおかげでその個人にとって特別の意義を獲得する、とみられている。したがって、そのような個人の観点からすれば、提出されるべき最初の実際的な問題は、この品物が彼にとってどれほど大きな意義を有するか、すなわち、交換価値の正確な尺度は何かであるか、ということになる。Rubin [1926], p. 187.
- (7) Rubin [1926], p. 187.
- (8) その間の事情をルービンはつぎのように示している。それによれば、一見したところ我々は、我々が交換において獲得する他の諸商品の量を我々の尺度として用いることができる、と思えるであろう。すなわち、それらの商品の個数が大きければ大きいほど、当該商品の価値はそれだけより高いというのである。だがスミスは、私自身の生産物と交換に私が受け取る商品の価値は、それ自体、絶えざる変動をこうむるという理由から、まったく正当にも、この解答を否定する。また、それと交換されるであろう貨幣(金)の量によって商品の価値を測定することも、同様に、

13. И. И. Рубин (1926年)

不可能であるとする、そしてその理由は、金もまた価値において変動するからである、ということであった。Rubin [1926], pp. 187-188.

- (9) その間の事情をルービンは概ねつぎのように示している。それによれば、何によって生産物の価値を測定しうるのかという問題に答えるためにスミスは、分業についての彼の理論に訴える。スミスは分業についての理論において、分業に基礎を置く社会とは、労働した自分たちの労働の生産物の相互交換をつうじて間接的に自分たちの労働を交換する人々の社会である、ということを示したのであるが、彼は、交換価値についてのあるきわめて重要な客観的・社会学的構想（マルクス〈K. Marx〉が、彼自身の価値論の基礎として使用することとなったもの）を用い、そしてそれに、ある主観的・個人主義的解釈を与えている。すなわち、スミスによれば、交換社会は、その社会の構成員たちの労働の相互交換に基づくものとされるのであるが、スミスは、個々の存在としての個人の立場からすればこの交換は何に帰することになるかということを探ねるのであり、そしてそれに対するスミスの解答は、その個人自身の生産物と交換に他の人々の労働を獲得することに帰する、ということであった。私が作った服地を砂糖あるいは貨幣と交換するさい、私は、本質的には、他の人々の労働のある一定の量を、獲得しているのであり、私の服地と交換に私が処分しうるあるいはスミスの表現では「支配」しうる他の人々の労働の量が多ければ多いほど、それだけ私の服地はより大きな価値をもつのである。社会的分業のゆえに、私は、私が必要とする生産物を、私が私自身の労働でもってそれらを生産するというよりもむしろ、私が私自身の労働でもって生産した生産物を交換することによって、獲得することができるのである。したがって、私は、私が生産したものの価値を、それを交換するときに私が受け取る他の人々の労働の量によって、測定することができるのである。ある所与の商品と交換に獲得もしくは購買されうる労働の量が、その商品の価値の尺度なのである。Rubin [1926], p. 188.

なお、ルービンによれば、商品の価値の第二次的な尺度として、スミスは、その商品が交換をつうじて購買するであろうところの穀物の量を取り上げるのであり、そしてその理由は、ある所与の量の穀物は、つねに、ほぼ同一量の労働を購買できるであろうからである、ということであるとされる。Rubin [1926], p. 188 n.

- (10) Rubin [1926], pp. 187-188.

- (11) ルービンによれば、スミスは『国富論』第1篇第5章の初めでは、一般に、他の独立の商品生産者たちの労働の生産物を獲得することによって彼らの労働を間接的に自由に使用するのだという考えをもっていたのであるが、その章が終わるまでに、すでに、商品の、生きた労働あるいは労働力との、交換に、より大きな強調を付しつつあるのであり、そこでは、商品所有者は、「雇い主」として、現れ、そして、労働と交換に引き渡される商品は、「労働の価格」あるいは労働者の賃金として、現れる、とされる。Rubin [1926], p. 190. (なお、英訳者は、このことを示すもの

としてスミスのつぎのような文章を引用している。「しかしながら、等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値をもつものではあるが、労働者を雇用する者にとっては、比較的大きい価値をもつようにみえることもあれば、比較的小さい価値をもつようにみえることもある。雇い主は等量の労働を、あるときには比較的多量の、あるときには比較的小量の財貨で買うのであって、雇い主にとっては、労働の価格は、他のすべての物の価格と同じように変動するように思われる。それは、前者の場合には彼にとって高価にみえ、後者の場合には安価にみえる。けれども実は、財貨が、前者の場合に安価であり、後者の場合に高価であるのである。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ。) Rubin [1926], pp. 196-197 n. 4.)

(12) Rubin [1926], pp. 188-190.

(13) Rubin [1926], pp. 190-191. ルービンは、価値尺度についてのスミスの学説に關連して以上のような議論を展開するのであるが、彼はさらに、この混乱した誤りの支配する一群の思维と平行して、諸商品の価値における量的諸変化の諸原因の分析に向けられているところのもう一つの、より重要で有望な理論的脈絡が存在するのであり、それら二つの理論的方向は、絶えず互いに交差している、として、そのことに関するスミスの議論を検討している。それについては、Rubin [1926], pp. 191-194 を見よ。なお、すでにみたように、ルービンは、スミスの議論では価値の実質的諸変化についての理論的研究は価値の最良の尺度に到達しようという実際的な課題と混同されている、とするのであるが、ここでは、ルービンは、「資本(stock)の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」——ルービンによれば、それは、本質的には単純商品経済を意味する、とされる——についても資本主義経済についてもスミスは商品の価値はその商品が交換をつうじて購買しうる労働——ルービンによれば、単純商品経済では購買しうる具体化された労働、資本主義経済では購買しうる生きた労働という違いがある、とされるのであるが——の量によって測定されるとしている、とみ、そして、価値の実質的諸変化についての理論的研究においてはスミスは単純商品経済については、「費やされた労働 (labour expended)」の量が価値の大きさを規制しまたその労働量の変化が価値の変化の原因であるとする労働価値説を、資本主義経済については生産費説を提示する、とみるのであるが、同時にまた、前者の単純商品経済での商品価値に関してスミスは商品の価値を、1) その商品の生産に費やされた労働の量によって、2) その商品が交換をつうじて購買しうる労働の量によって、という二つの道すじで決定しつつもある、とみている。また、スミスの議論における交換価値をルービンが、諸商品が交換される比率として捉えている、ということの意味する叙述 (Rubin [1926], p.193) も存在する。

なお、全体としてのスミスの価値論についてのルービンの検討のルービン自身による要約、および、スミスの理論と後代の諸理論との継承関係についてのルービン

13. И. И. ルービン (1926年)

の指摘については、Rubin [1926], pp. 195-196 を見よ。また、Rubin [1926], pp. 373-377 も見よ。

И. И. ルービン (1926年) についての覚書

ルービンによれば、スミスは「使用価値」と「交換価値」とを区別し、そして使用価値を研究の範囲外におき、明確にまた正しく彼の考察対象を交換価値に定めるのであるが、その「交換価値」についての研究にさいして、スミスは一方で価値の大きさおよびその変化を決定するものを考察しようとするとともに他方で不変の価値尺度を探求しようとし、その結果、スミスの価値論は、交換価値についての理論的研究だけでなく、経済理論としての価値の理論に固有なものでない実際的な問題である価値尺度の探求といったことを含むという方法論上の二元的性質をもち、それら二つの異質な研究を混同することとなった、とみられるのであった。

そしてまたルービンによれば、後者の最良の価値尺度の探求においてスミスは商品価値の最良の尺度を、その商品と交換に「購買されうる労働の量」に求めたのであるが、そのさいスミスは商品経済において労働を「交換する」というプロセスの社会的な性質を把握することができず、すべての商品経済に起こる労働の社会的「交換」を資本主義経済に生じる売買の対象としての労働の市場「交換」、労働の売買と、混同することによって、一つの社会的機能としての労働するという活動と一つの商品としての労働との混同、「購買される具体化された労働」と「購買される生きた労働」との混同（「労働の生産物と労働の生産物との交換」と「資本としての商品の、商品としての・労働力としての労働との、交換、資本家と労働者とのあいだの交換」との混同に対応）をなすとともに、さらに、売買の対象としての・それ自体が一つの商品としての（購買される）労働を不変の価値尺度とせんがために、労働の客観的な量と労働が引き起こす総主観的労苦および骨折りとを混同した、とみられるのであった。

なお、またルービンによれば、スミスは、商品価値の第二次的な尺度として、その商品が交換をつうじて購買するであろうところの「穀物」の量を取り上げたのであり、そしてその理由は、ある所与の量の穀物はつねにほぼ同一量の労働を購買できるであろう、ということであった、とされるのであった。

14. P. H. ダグラス (1927年)

もともとは1927年に公表された P. H. ダグラス (P. H. Douglas) の一論文 (Paul H. Douglas, "Smith's Theory of Value and Distribution," in *Adam Smith, 1776-1926: Lectures to Commemorate the Sesquicentennial of the Publication of "The Wealth of Nations,"* by John Maurice Clark and others, [Chicago: University of Chicago Press], 1928; reprint edition, New York: Augustus M. Kelley, 1966, pp. 77-115. [Originally in *University Journal of Business* (Chicago), vol. 5 (no. 1, January 1927), pp. 53-87, also in *The Development of Economic Thought: Great Economists in Perspective*, edited by Henry William Spiegel, New York: John Wiley & Sons; London: Chapman & Hall, 1952, pp. 113-143.] なお、ここでは上掲の1966年のリプリント版を使用するのであるが、ここで取り扱うダグラスの研究の発表年の区分についてはもともとダグラスの上掲論文が公表された年、1927年をとり、そして、以下では、上掲リプリント版中のダグラスの論文を Douglas [1927] と略記することとする。越村信三郎訳「スミス論」、H. W. スピーゲル編、越村信三郎その他監訳『古典学派——経済思想発展史 II——』(東洋経済新報社, 1954年) 1-55ページ) のなかで、ダグラスは、スミスは諸財貨のあいだの交換比率としての「交換価値」の、必要条件、決定因 (determinant) としての「使用価値」あるいは効用をしりぞけて、価値の尺度 (measure) ならびに源泉 (source)、決定因としての労働に注意を払う、とするのであるが¹⁾、そこで言われている労働に関して、以下のように整理することもできるような見方を示している、といえる。

① 価値の尺度ならびに源泉として労働をとらえるばあい、労働の単位という概念が必要となる。では、労働が還元されてゆく公分母とは何か。スミスは、労働の辛さや巧妙さの相違のゆえに時間だけでは不十分である、とするのであり、また、時間、辛さ、巧妙さを共通の単位に一樣化することはスミスも認めているように容易なことではないのではあるが、この問題にたいするスミスの解答は、それは「正確ではなくても日常生活の業務を処理して

14. P. H. ダグラス (1927年)

ゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」(WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ)成し遂げられる、というものであった。ここには確かに、循環論法的推論の傾向がみうけられる。すなわち、価値の尺度および源泉として役立つものが労働であるならば、価値は労働の量によって説明されなければならないにもかかわらず、スミスはここでは、その労働量を決定するのに市場価値に訴えているからである。しかし他方、『国富論』第1篇第10章の賃金格差に関する議論によって、スミスはたぶん、この論理のどうどうめぐりから免れることができるかもしれない。⁽²⁾

② なお、スミスは〔交換〕価値の尺度ならびに源泉、決定因を労働に求めて労働価値説を展開するのであるが、その労働価値説は一元的なものではなく、事実上、そのなかには、価値を決定するものは、当該事物の生産に要する労働単位の量であるといった考え方と、当該事物が支配しうる労働量であるといった考え方という二つの考え方が含まれており、⁽³⁾ 価値に関するこれら二つの説明は本質上きわめて違ったものであるが、それらはほとんど同じところでごちゃまぜに並べたてられており、実際のところスミスはこれらの両者を同じ程度に強調し、両者を区別できなかったように思える。⁽⁴⁾

(注)

(1) Douglas [1927], pp.77-81. 邦訳, 3-8 ページ。

(2) すなわち、ダグラスは、そこでは自由な競争および人々のあいだの生得の能力の等しさが暗黙裡に仮定されたうえで賃金格差に関する五つの事情が考察され、自由競争をつうじての各部門間の賃金の平準化といったことが論じられる、とするのであるが、ダグラスによれば、スミスはその議論をつうじて、等しい単位量の、不効用という意味での労働は、どの一時点においても、等しい額の貨幣賃金によって償われる、という事実を論証したと信じていたのであり、そして、スミスにしたがえば市場はこのようにして労働を構成する種々の要素を一つの共通の尺度に還元するのであり、どの一時点においても、この意味での等しい貨幣単位量は等量の労働を表すものとなる、というのである。Douglas [1927], pp. 81-88. 邦訳, 7-16 ページ。

なお、ダグラスによればまた、どの一時点においても、等しい貨幣単位量は等量の労働を表す、というその学説そのものはまた、貨幣生産費 (money cost of production, 貨幣タームでの生産費) というものに基礎をおく一価値学説への道を開くのであって、そのような価値学説は、スミスの議論のなかに潜んでいるのが見いだされることもできる、とされる。それについては、Douglas [1927], p. 88, 邦

訳、16ページを見よ。

- (3) なお、ダグラスは、前者の考え方を「労働凝固説あるいは労働費用説 (the labor-jelly or labor-cost theory)」, 後者の考え方を「労働支配力説 (the labor-command theory)」と呼んでいる。Douglas [1927], p.88. 邦訳、17ページ。
- (4) Douglas [1927], pp. 88-89. 邦訳、16-19ページ。なお、ダグラスは、「労働費用説」は原始社会における価値を説明するためのものにすぎなかったものでありそしてスミスが「労働支配力説」を考えだしたのはより進歩した社会で価値がどのようにして定められるかということの説明するためであったということが時折言われるが、これは部分的にのみ真理なのであって、「労働費用説」は、この原始的な社会段階に適用されたが、それはまた同じように、時として、さらに現代的な社会にも適用されたのである、としている。Douglas [1927], pp. 89-90. 邦訳、19ページ。

なお、ダグラスは、スミスの議論では「投下労働量」あるいは「支配労働量」による価値の決定という問題はそのまま価値の大きさを測定する問題でもあるということを示明的には述べてはいないのであるが、ダグラスは、どちらかといえば、スミスの議論における「価値の決定あるいは規制の問題と価値尺度の問題」といったようなことは問題とすることなしに、事実上、スミスの議論における価値の大きさの決定はそのまま価値の大きさを測定でもあると捉えている、ともいえる。たとえばつぎのようなダグラスの文章を見よ。「しかし、すべての商品がそれで売られるところの諸価格から、地代と利潤とが差し引かれるとすれば、二つの価値尺度〔商品の生産に要する労働量〕という価値尺度と「商品が支配しうる労働量」という価値尺度〕のあいだに不一致が生ずるであろう。」(Douglas [1927], p. 90. 邦訳、20ページ。傍点および〔 〕内は中川。) また、そのようなものとしてのスミスの「労働費用価値説」と「労働支配力価値説」についてのダグラスの検討については、Douglas [1927], pp. 88ff., 邦訳、16ページ以下を見よ。

P. H. ダグラス (1927年) についての覚書

ダグラスは、スミスの議論では、交換比率としての〔交換〕価値の尺度ならびに源泉、決定因が労働に求められて労働価値説が展開されるのであるが、その労働価値説には事実上、価値を決定するものは「投下された労働量」であるという考え方と「支配される労働量」であるという考え方という二つの考え方が含まれており、そして価値に関するこれら二つの説明は本質上きわめて違ったものであるはずのものであるのであるがスミスはこれら両者を同じ程度に強調し、両者を区別することができなかった、とする見方を示すとともに、「市場のかけひきや交渉による」「異質労働の問題」の解決というス

14. P. H. ダグラス (1927年)

ミスの議論には循環論法的な傾向が存在するとしつつも、『国富論』第1篇第10章での賃金格差に関する議論を援用することによってスミスはこの異質労働の問題に対処できたかもしれない、とするのであった。ただし、ダグラスの所論においては、スミスの議論における「価値の決定あるいは規制の問題と価値尺度、価値測定の問題」といったようなことは問題とされることなしに、事実上、スミスの議論における価値の大きさの決定はそのまま価値の大きさの測定でもあると捉えられている、ともいえるのであって、そのダグラスの所論においては事実上、スミスの議論における「投下労働量」、「支配労働量」は、ともに、価値を規制、測定するものとして問題にされるのであった。なお、ダグラスはまた他方で、スミスの議論のなかには貨幣〔タームでの〕生産費というものに基礎をおく価値学説も潜んでいるといった見方を示しているのであった。

15. E. キャンナン (1929年)

1929年にその初版が刊行された E. キャンナン (E. Cannan) の一著書 (Edwin Cannan, *A Review of Economic Theory*, 2nd edition, with a new Introduction by B. A. Corry, London: Frank Cass, 1964 [1st edition London: P. S. King & Son, 1929]). なお、ここでは上掲の第2版を使用するのであるが、ここで取り扱うキャンナンの研究の発表年の区分については上掲書の初版が刊行された年、1929年をとり、そして、以下では、上掲の第2版を Cannan [1929] と略記することとする。1929年の初版に関しては、井上巖次郎抄訳「キャンナンのスミス価値論批評」『立命館学叢』第2巻第11号、1931年9月、41-53ページ、がある) のなかで、キャンナンは、「価値」を、事実上、交換比率として捉えつつ⁽¹⁾、そのような意味での「価値」の、尺度についてのスミスの議論に関連してつぎのような内容の指摘をなしている、といえる。

① スミスは、当該事物によってその所有者がはぶくことのできるもの〔労苦と骨折り、労働〕と、その事物が他の人々に課することのできるもの〔労苦と骨折り、労働〕という、二つの尺度が、異なる帰結をもたらさうということに気付いていない。⁽²⁾

② なお、スミスは、労働というものは測定することの困難なものでありまた諸商品はヨリしばしば他の諸商品とりわけ貨幣と交換されるゆえ、価値は普通、労働では評価されない、としつつも、彼は、金や銀は価値において変動するのにたいし労働は価値において変動しないのであって、労働こそが価値を評価し比較するための究極で真の標準なのである、としている。⁽³⁾ しかしながら、これは、この世で価値の変動することのない一事物として、まったく恣意的に、労働を選び出しているにすぎないのである。⁽⁴⁾

③ また、異なった種類の労働は異なる報酬を受けるという事実についてスミスが〔『国富論』第1篇第6章の第2および第3パラグラフで〕与えている説明は、驚くほど弱いものである。⁽⁵⁾

15. E. キャンナン (1929年)

(注)

- (1) Cannan [1929], p. 170 を参照せよ。
- (2) Cannan [1929], p. 165. なお、このことを示すものとして、キャンナンは、『国富論』第1篇第5章の第1および第2パラグラフのなかに含まれるつぎのようなスミスの文言をあげている。すなわち、所有者が自分自身による消費に向けようとしていないいかなる商品の価値も「その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。／あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえば、それによって彼自身のはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。」(WN, p.30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。／は原典において行変えが行われていることを示す。) Cannan [1929], pp. 164-165.
- (3) キャンナンは、つぎのようなスミスの文言を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができる。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価 (price) は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購買することもある。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかな労働で入手できるものは、安価である。それゆえ、それ自身の価値がけって変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(WN, p.33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。) Cannan [1929], p.165.
- (4) Cannan [1929], pp. 165-166. なお、キャンナンは、概ねつぎのような内容の説明をくわえている。すなわち、[うえの注3で見られたような] スミスのその考えにしたがえば、もし労働がより多く諸商品を生産するならば「労働の生産性が上昇して、同一量の労働が費やされることによってより多くの量の諸商品が生産されるならば、また、同一量のそれら諸商品の各々がより少ない量の労働によって生産されるならば」、それらの諸商品はすべて、より安価なものに、より価値の少ないものになる、ということとなる——たとえそれらの諸商品そのもののあいだでは以前とま

まったく同一の比率での交換がなされていたとしても〔したがってまた、それらの諸商品のあいだでは、他商品にたいする交換比率という意味での各商品の価値が以前とまったく同一、であったとしても〕、そのようになる、ということとなってしまう——。しかしこのような議論はまったく恣意的なものである。というのは、逆のことが言えないという理由はないからである。すなわち、諸商品が価値において変化したのではなく〔それらの諸商品のあいだでは、他商品にたいする交換比率という意味での各商品の価値が変化したのではなく〕、〔労働の生産性の向上をうけて労働が「ヨリ良い支払いを受ける」こととなって〕いまや労働と交換にヨリ多く諸商品が与えられなければならないであろうという限りにおいて、労働がヨリ大きな価値をもつようになった〔つまり、諸商品にたいする交換比率という意味での労働の価値が大きくなった〕、と言えない理由はないからである。事実我々は、労働は、ヨリ生産的であるがゆえに、「ヨリ良い支払いを受ける」、と言う。ところが〔労働を価値の変動することのないものとすることによって〕スミスは、労働はその生産性にかかわらず同一価値を受け取っていると述べることを、求めていることになるのである。 Cannan [1929], p. 166.

- (5) もっとも、キャンナンはこの問題を、どちらかといえば、価値の尺度の問題というよりも価値の決定の問題という脈絡のなかで取り上げているのであるが（ただし、キャンナン自身がスミスの議論における「価値尺度の問題」と「価値決定の問題」とを区別しているというわけではなく、むしろそのようなことは、キャンナンの議論ではことさら問題にはされていないのであるが）、彼は概ねつぎのような内容の説明を与えている。すなわち、スミスはこの問題にたいして、労働のきびしさ等にたいする斟酌にくわえて、なみなみならぬ技能と創意を要する労働を行う才能にたいする「高い評価 (esteem, 尊重)」といったことから説明するのであるが（なお、キャンナン自身は、本文で示された『国富論』中の箇所をそのまま引用している）、もし労働が標準であるならば、なにゆえにそのような「高い評価」が事態に影響を及ぼすのか。「妥当な報償」を基礎づけるさらなる力が存在するはずである。なぜなら、スミスが後の章で説明しているようにもしそのような報償が得られないならその職業への参入者の供給が縮小させられるであろうからである。だがこのことは「高い評価」とは関係はないのである。 Cannan [1929], pp. 166-167.

E. キャンナン（1929年）についての覚書

キャンナンは「価値」を交換比率として捉えるのであるが、そのキャンナンによれば、スミスは、「労働」をそのような「価値」の尺度とするのであるがそのさい、「当該事物によってその所有者がはぶくことのできる」労働の量と「その事物が他の人々に課することのできる」労働の量、という二つの

15. E. キャンナン (1929年)

尺度が異なる帰結をもたらしうるということに気付いていなかった、とされるのであった。

また、キャンナンによれば、スミスは、価値は普通、「労働」では評価されないということを認めつつも、価値において変動する金、銀にたいして価値において変動することのない「労働」こそが価値を評価し比較するための究極で真の標準であるとするのであるが、それは、まったく恣意的に、この世で価値の変動することのないものとして「労働」を選び出しているにすぎないのである、とされるのであった。

さらにまたキャンナンによれば、労働のきびしさ等にたいする斟酌にくわえて高度の技能や創意を要する労働を行う才能にたいする「高い評価」といったようなことから、異なった種類の労働が受け取る異なる報酬ということについてのスミスの説明は、きわめて薄弱なものである、とみられるのであった。

16. A. グレイ (1931年)

1931年にその初版が刊行された A. グレイ (A. Gray) の一著書 (Alexander Gray, *The Development of Economic Doctrine: An Introductory Survey*, 2nd edition revised by Alan Thompson, London & New York: Longman Group, 1980 [1st edition 1931]). なお、ここでは上掲の改訂第2版を使用するのであるが、ここで取り扱うグレイの研究の発表年の区分については、同じ出版社から上掲書の初版が刊行された年、1931年をとり、そして、以下では、上掲の改訂第2版を Gray [1931] と略記することとする) のなかで、グレイはつぎのような見方を示している、といえる。

① 『国富論』においては、分業、さらに貨幣の起源、貨幣の必要性といったことについての議論を経て「財貨の相対価値または交換価値 (exchangeable value)」という観念が現れてくることとなっており、そしてスミスは、ある特定の対象物の効用を表すものとしての「使用価値 (value-in-use)」とその対象物がもつ他の諸商品にたいする購買力を表すものとしての「交換価値 (value-in-exchange)」に関する言及をなしたのち、後者の「交換価値」についての考察へとすすんでいる。⁽¹⁾

② この「交換価値」というものについての考察はうえのような議論の展開された『国富論』第1篇第1章から第4章につづく三つの章において行われるのであるが、スミスはまず第5章において、何がこの交換価値の「真の尺度」であるのか、⁽²⁾ ということの考察にたずさわる。

③ ところで、この『国富論』第1篇第5章は、スミスの議論におけるもっとも不明瞭な諸章のうちの一つであり、そして、スミスの頭の中ではまったく異なる二つの問題が混同されていたという印象に抗することは困難である。すなわち、ときとしてスミスは、何が価値の決定因であるかといったことを議論しているようにみえるとともに、他方でまた彼は、この不定的で可変的な世界のなかで最も安定的なものであるがゆえに最善の価値尺度となるようなものは何であるのか、といったことを考察しているようにみえるのである。しかしながら、何が価値の決定因 (determinant) であるのかというこ

とを考察することと、何が価値の理想的な尺度 (measure) であるのかということとを考察することとは、事実、二つの〔別個な〕問題であるのであり、そして、スミスがこの第5章で追求しているのは主に後者のことなのである。⁽³⁾

④ そして、何が価値の理想的な尺度であるのかという問題に対するスミスの解答を示す最も基本的な文言は、たぶん、第5章の冒頭の言説のなかにあるのであるが、⁽⁴⁾そこでは要するに、それを交換したいと思っている所有者にとってのあらゆるものの価値は、その販売価格 (selling price) が確保するであろうところの労働量によって、最も良好に測定される、ということが言われているのであり、⁽⁵⁾この意味での労働が諸商品の交換価値の真の尺度とされるのである。もちろん、諸商品の価値は一般に別な方法で評価される、すなわち、便利さまた習慣ということから諸商品の価値は実際、貨幣で評価される、しかし、金や銀は価値において変化するのであり、それにたいして「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ)、とされるのであった。⁽⁶⁾

⑤ なお、スミスはしばらくのあいだ一つの別のありうる標準をいじくっている。すなわち、労働者の生活資料を代表するところの穀物の等量は、他のどんな商品よりもおそらくより良好に、目的にかなうであろう、とするのである。また、事実、もし我々が一般的に作用する生存賃金法則 (subsistence law of wages) および生活を営むのに必要とされるものにおける均一性ということを仮定するならば、穀物というものも、かなりの程度まで、労働と同様な標準ということになるのである。⁽⁷⁾

⑥ スミスの最終的な結論は、「それゆえ、労働が唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度でもあること、言い換えると労働が、いついかなるところでも、様々な商品の価値を比較することのできる唯一の標準であることは明白であると思える」(WN, p. 36. 大河内訳〈I〉, 63ページ)といったものであり、そしてさらに、世紀から世紀にわたる場合には穀物は銀よりもすぐれた標準、年々の場合には銀は穀物よりもすぐれた尺度である、とされるのであった。⁽⁸⁾

⑦ なお、以上でみられてきたようなことを論じているスミスの全議論は、労働の価値の安定性に関する全く保証のない諸仮定だけでなく循環論法の様

相といったものをも伴う混乱したものであった⁽⁹⁾ではあるが、つぎのことに留意しておくことが重要である。すなわち、スミスの結論はもっぱら、価値の最善の尺度とみなされる労働というものに関連しているのだ、ということ、また、表現のいくつかの曖昧さということは別としてそのスミスの議論は、少なくともここでは、労働が価値の決定因であるということの証明に向けられているのではない、ということである。⁽¹⁰⁾

(注)

- (1) Gray [1931], pp. 113-115. この間の事情についてのグレイによる説明については、Gray [1931] の上掲箇所を見よ。
- (2) Gray [1931], p. 115.
- (3) Gray [1931], pp. 115-116.
- (4) グレイは、スミスのそのような文言として、『国富論』第1篇第5章の冒頭のパラグラフ中に含まれているつぎのような一節を引用している。「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。) Gray [1931], p. 116.
- (5) Gray [1931], p. 116. このようなグレイの見解にさきだってグレイ自身が示している例を用いるとすれば、もし私の万年筆が10シリングであり、一家政婦が1日5シリングで働くならば、私の万年筆は、その一家政婦2日分の仕事に値する、ということになるのであり、そしてそこでは、私の万年筆の価値は、労働を尺度として測定されているのである。Gray [1931], p. 116 を参照せよ。
- (6) Gray [1931], pp. 116-117.
- (7) Gray [1931], p. 117.
- (8) Gray [1931], p. 117.
- (9) Gray [1931], p. 117. なお、グレイは、このような内容をもった指摘をなすのではあるが、スミスの議論における労働の価値の安定性に関する全く保証のない諸仮定さらに循環論法の様相といったことそのものについてのさらなる論究をなしているわけではない。
- (10) Gray [1931], p. 117. なお、以上のような見方を示したグレイは、それにつづけて、事実上、スミスが価値の決定因、価値の決定といったことについて論じているものとして『国富論』第1篇第6、第7章でのスミスの議論を検討するのであるが、それについては Gray [1931], pp. 117-119 を見よ。なお、スミスは商品の理想的な価値尺度を「その商品で購買または支配できる労働の量」、「その商品の販売価格が

16. A. グレイ (1931年)

確保するであろうところの労働量」といった意味での「労働」に求めたとみるグレイによる上掲箇所での所論のなかには事実上、スミスの議論では資本の蓄積と土地の占有に先立つ「初期未開の社会状態」においてのみ、「当該商品の生産にふつう用いられる労働の量」という意味での「労働」が、「その商品がふつうそれと交換されるべきところの労働の量」を規制する唯一の事情、すなわち当該商品の価値を決定する唯一の事情、ということとなっている、といった見方が見いだされる。

A. グレイ (1931年) についての覚書

グレイによれば、スミスは『国富論』第1篇の第5章から第7章において、ある特定の対象物がもつ他の諸商品にたいする購買力を表すものとしての「交換価値」についての考察へとすすむのであり、そして、『国富論』第1篇第5章でのスミスの議論は、「何が〔交換〕価値の決定因であるか」という問題と「何が、交換価値の真の尺度、最善の価値尺度、理想的な価値尺度、であるか」という問題といった二つの別個な問題を混同しているかのような印象を与える非常に不明瞭なものであったのではあるが、スミスはそこではもっぱら、後者の問題にたずさわっていたのである、とされるのであった。

そして、グレイによれば、この後者の問題にたいしてスミスは、世紀から世紀にわたる場合には穀物は銀よりもすぐれた標準であるとともに年々の場合には銀は穀物よりもすぐれた尺度であるとしつつも、理想的な価値尺度は労働であるとした、すなわち、なんらかの対象物の価値は、その対象物の販売価格が確保するであろうところの労働量によって最も良好に測定されるのであり、この意味での労働が諸商品の交換価値の真の尺度であるとした、とみられるのであった。

そしてさらにグレイは、そのようなことを論じるスミスの議論は労働の価値の安定性に関する全く保証のない諸仮定だけでなく循環論法の様相といったものをも伴う混乱したものであったとしつつも、ここでのスミスの議論の結論はもっぱら、価値の最善の尺度とみなされる労働というものに関連しているのだということに、また、スミスのここでの議論は労働が価値の決定因であるということの証明に向けられているのではないのだということに留意すべきことを、強調するのであった。

17. Д. И. ローゼンベルク (1934年)

1934年にそのロシア語版原著が刊行された Д. И. ローゼンベルク (Д. И. Розенберг) の一著書 (直井武夫訳『経済学史』(第1巻), ナウカ社, 1935年 [Давид Иохелевич Розенберг, История политической экономии, часть первая, Москва, 1934の邦訳])。なお, ここでは上掲の邦訳書を使用するのであるが, ここで取り扱うローゼンベルクの研究の発表年の区分については, 上掲のローゼンベルクの原著が刊行された年, 1934年をとり, そして, 以下では, 上掲の邦訳書を, ローゼンベルク [1934] と略記することとする) のなかでのローゼンベルクの議論によれば, スミスは, 分業がいかに自然的に発生し, 交換が発達し, 貨幣が発生したかを研究したのち, 交換はいかに自然的に発達するかそれを決定する法則はいかなるものであるかということについての研究へと進み, 「人々が, 財貨を貨幣と交換するか, または財貨を相互に交換する」にあたって自然的にまもる諸法則を明らかにすることへと向かうことによって, 交換価値の研究へといたり, そして, スミスのこの交換価値論の任務は, (1)諸商品の真実価格を決定し, (2)この真実価格がいかなる部分から構成されているかを示し, (3)市場価格と真実価格との一致を妨げる原因を究明する, という三つの任務に分かれ, その各々に, それぞれ, 『国富論』第1篇の第5章, 第6章, 第7章⁽¹⁾があてられている, とされ, そして, ローゼンベルクは, その各々の任務にたいするスミスの議論を検討する (特に前の方の二つの任務について) のであるが, その脈絡のなかで, つぎのような諸点を示している, といえる。

① ペティ (W. Petty) 以来, つまりスミス以前から, 自然価格と市場価格とはすでに区別され, さらに, 自然価格は労働によって決定されると考えられていたのであり, スミスはそれに加えて, フランクリン (B. Franklin) と同様に, 諸商品の交換価値を, 諸商品の価格 (諸商品の交換価値の貨幣形態)⁽²⁾から抽象したのであった。なおその場合, 彼の一般的概念, とりわけ, 貨幣は一方では流通用具であるが他方では商品であるとする彼の貨幣論が大きな影響を与えているのであるが, この貨幣論からは, 交換価値を価格から

抽象する必要だけでなく、価格の交換価値への還元が生ずる。⁽³⁾ところで、ペティもスミスとともに、商品の交換価値または自然価格を労働によって決定しているのであるが、ペティでは、労働は商品と貨幣との量的割合を決定する尺度であったのにたいし、スミスでは、労働は商品と商品との量的割合を決定する尺度であった。⁽⁴⁾ところが、スミスはこの、商品の交換価値の労働による規定において、商品によって「購買しうる労働」と商品の生産に「費やされる労働」とを絶えず混同し、両者を同一のものと考えるといった混乱におちいつている。⁽⁵⁾この混同は、彼の全概念、とりわけ分業論から起こっているのであるが、⁽⁶⁾さらに、この「支出された労働」と「購買されうる労働」との同一視は、これによって労働を価値の内在的尺度とも外在的尺度ともみなすことができる、という事情から生じたものでもあり、スミスはここにおいて、価値の実体をなし価値を規制し価値を内在的に較量しうる価値の尺度という意味での価値の内在的尺度と、貨幣が価値の尺度であるという意味での価値の尺度つまり価値の外在的尺度とを、混同しているのである。⁽⁷⁾

② 他方スミスは、彼の第二の任務として、諸商品の価格の構成部分を問題にするのであるが、価格は労働によって決定されるというのに、この価格の構成部分とは何を指すのであろうか、また、この問題の提起そのものがすでに労働価値説の拒否を含んでいるのではないであろうか。この意味で、この問題の提起そのものが不明なもののようにみえるのである。⁽⁸⁾そしてまた事実、スミスはここでは、形式的には諸商品の交換価値の問題をつづけているのではあるが、実際上は、その問題から分配の問題に飛躍しているのであり、そしてこの飛躍のゆえにスミスは諸商品の交換価値の問題を混乱させることとなり、ついに彼は、価値法則は「原始的状態」においてのみつまり資本および土地私有がまだ存在しなかった時代にのみ支配していたのだ、という結論に達せざるをえなかったのであった。⁽⁹⁾かくしていまや、収入が「諸商品の交換価値を規制する内在的尺度」となり、労働はたんに価値の外在的尺度という役割を果たすにすぎない、ということになる。⁽¹⁰⁾このように価値の問題から分配の問題に飛躍したスミスは、労働価値説を放棄し、諸商品の交換価値は収入によって決定されるという新説をたてることを余儀なくされたのであり、そしてこの新説は、生産費説（スミスは、その生産費のなかには資本の利潤を含むあらゆる収入が含まれると説明している）なのであった。⁽¹¹⁾

(注)

- (1) ローゼンベルク [1934], 310-314ページ。なお、ローゼンベルクによれば、商品の交換価値の研究においてスミスの関心をひくものは、労働の生産物の形態としての商品、および、商品の要因としての交換価値（正確には、価値）ではなく、スミスはこれらを自然的現象とみなしていたのであり、スミスが説明することを欲したことは、たんに、一商品と他の商品との交換すなわち両者の交換価値を決定するものはどのような法則（スミスはこれを自然的なものと考えている）であるか、ということであった、とされる。ローゼンベルク [1934], 311ページ。

また、ローゼンベルクは、スミスの研究対象としての「交換価値」概念そのものについてつぎのような指摘をなしている。それによれば、スミスにしたがえば(1)商品の交換価値とは、「他の商品を購入する力」である、(2)しかしこの力は「その対象物の所有」に付随しているものであり、この力は、いわばある特権もしくは権利から生ずるのではなく、一定の対象物の所有から生ずるものである、したがってそれは、いわば対象物そのもののなかに潜みその属性をなすものであった。だがそれにもかかわらず、スミスにとっては、使用価値が商品の要因でないのと同じように、交換価値は商品の要因ではないのであった。ローゼンベルク [1934], 311-312ページ。

さらにまたローゼンベルクは、スミスが彼の研究対象としてうえにみたような意味での「交換価値」を選び、そしてそれを「使用価値」と区別したことに関連して、概ねつぎのような指摘をなしている。すなわち、商品が労働生産物の歴史上特定の形態であることを理解しないスミスは、商品が対立物の統一、相互に排除しかつ相互に前提しあう要因の統一であることを理解しなかったのであり、彼はたんに、物の直接の効用と、物の所有から他の物を購入する力が生ずることを、区別したにすぎなかった。この区別に対応するものが、スミスによる、使用価値と交換価値との区別であり、彼は、これら両者の統一を理解しなかったのである。なお、水とダイヤモンドの価値のパラドックスで示されている交換価値は使用価値に依存しないという彼の命題は、まったく正しいのであり——ただしスミスは、人間の自然的欲望を満たすものだけが有用で（すなわち使用価値をもち）、そうでないものは有用でない（すなわち使用価値をもたない）としているという意味で、効用（使用価値）を合理主義的に取り扱っているのであるが、それは誤りであり、その欲望が自然的なものから生じたもの（たとえば胃袋から生じたもの）であるかそれとも幻想から生じたものであるかという欲望の性質には関係なしに、欲望の対象となるものは使用価値をもつのではあるが——、また、スミスが関心を抱いていたのはたんに交換価値を決定する諸法則だけであるから、彼が交換価値のみを研究し、これらの諸法則に影響しない使用価値が彼の視野から脱落していたということは、すこぶる当然である。だが、スミスがこのような形で交換価値を使用価値から切り離していることは、彼が両者の区別のみを見てその統一に気付いていないこと、すなわちまさに

17. Д. И. ローゼンベルク (1934年)

彼が商品経済の研究の土台の上に立っていないことを示してもいるのである。ローゼンベルク [1934], 311-313ページ。(なお、本書前出「13」の注2でも触れたように、ローゼンベルクは、スミスが使用価値を研究の範囲外におき交換価値のみを研究していることを И. И. ルーбин (И. И. Рубин) はスミスの成功とみなしているとし、それにたいしていまみたような視点から批判をなすのであった。それについては、ローゼンベルク [1934], 313-314ページを見よ。)

- (2) ローゼンベルク [1934], 314-315ページ。なお、ローゼンベルクによれば、ペティは、その重商主義的見解に災いされて、交換価値を、価格からつまり交換価値の貨幣形態から、抽象することができなかった、とされる。ローゼンベルク [1934], 315ページ。
- (3) ローゼンベルク [1934], 315ページ。なお、その間の事情をローゼンベルクはつぎのように説明している。すなわち、もし実際に貨幣は普通の商品にすぎないとすれば、 $W-G$ および $G-W$ は、商品と商品との交換にほかならない、換言すれば、売買と直接の商品交換との区別は消滅してしまう。他方、貨幣を流通用具にのみ還元しても同じような結果に到達する。なるほどこの見地からすれば、 $W-G$ および $G-W$ は別々に見るならば商品と商品の交換行為ではない、すなわち、 $W-G$ においては、商品と引き換えにたんに流通用具つまり商品を得る用具が得られ、 $G-W$ においては、すでに得られた流通用具と引き換えに商品が得られる。しかし貨幣がたんに流通用具に還元されるとすれば、 $W-G$ および $G-W$ の行為の特殊性は消滅する。すなわち、初めの行為においては価値が商品形態から貨幣形態に転化し、あとの行為においては価値が貨幣形態から商品形態に転化するということが、消滅してしまう。注意は得られた結果にのみ注がれ、全変態は $W-W$ に還元される。このようにスミスの貨幣論は内的には矛盾していないのであり、そしてそれから、(1)すべての売買行為は、すでに、商品と商品との交換である、(2)全変態はたんに、商品と商品との交換である、という結論が生まれる。だからスミスは、あるときには交換価値を価格(自然価格)と呼び、またあるときには反対に、価格を交換価値と呼んでいるのである。したがって、重商主義に影響されたペティが交換価値を価格に還元したとすれば、反対に重商主義と戦ったスミスは価格を交換価値に還元しているのである。ペティにとっては、金銀に具体化されなければ交換価値というものには存在しないが、スミスはこの具体化にはなんらの意義をも認めない。ペティは金銀と商品との関係を決定する諸法則を求めているのにたいし、スミスは商品と商品との関係を決定する諸法則を求めている。ペティは貨幣において商品の価値が表現され実現されるにすぎないということを理解しないが、スミスは商品の価値は貨幣においてのみ表現され実現されるということを理解しない。一言でいえば、ペティが諸商品の交換価値を云々する場合、彼はこれを自然価格の意味に解し、スミスが諸商品の自然価格を云々する場合、彼はこれを交換価値の意味に解しているのである。

ローゼンベルク [1934], 315-316ページ。

- (4) ローゼンベルク [1934], 316ページ。なおローゼンベルクはまた、ここにスミスとペティとの継承関係がある、ともし、そして、ペティは労働価値説の端を開いたのであるがスミスはこれを継続し、これを彼の他の理論と結合し整然とした体系を樹立しようと試みているが他面でスミスは労働価値説を展開するにあたって新たな困難に当面し、混乱におちいりそして労働価値説を発達した資本主義経済に適用することを拒んでいる——この点ではスミスはペティ（フランクリンは言うまでもなく）よりも一歩退却している——が、それでも彼は、労働価値説を著しく前進させた、としている。したがってまたローゼンベルクによれば、俗流化に堕さないでスミスの経済学説を真実に継承する後代の理論家は、スミスにおいて切れている理論の糸を継続しなければならなかった、すなわち、まず第一に、スミスの出発点を批判的に検討し、彼の不徹底を発見し、中身を殻から分離しなければならなかった、また第二に、スミスの労働価値説は彼の一般経済理論から、なによりもまず彼の出発点である分業論から展開されているのであって、労働が交換価値の尺度であることを拒むのは彼の経済論全体の精神に矛盾していたのであるから（スミスは、一方でこの尺度を正しく理解しなかったゆえに、他方で克服しえない困難に出合ったがゆえに、このような矛盾をあえてせざるをえなかった）、スミスの労働価値説を放棄せず、反対にこの理論を救い、それによってスミスの学説を完成しなければならなかった、とされる。ローゼンベルク [1934], 316-317ページ。

- (5) この間の事情をローゼンベルクは概ねつぎのように説明している。すなわち、スミスは一方で、各人は「自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない」ということを指摘し、さらにつづけて、「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」と述べ（*WN*, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ）、商品の交換価値を決定するものはその商品によって購買しうる労働である、としている。ところが他方でスミスはそれに加えて、「あらゆる物の真実価格（real price）、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にとりて真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」と述べ（*WN*, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ）、商品の交換価値を決定するものは商品を得るために必要とされる労苦である、としている。そしてまたスミスは、商品によって購買される労働と、商品のために費やされる労働とを絶えず混同しており、彼は両者を同一のものであると考えているのであり、つぎの文言ではこのことが明瞭に現れている。「労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によって

17. Д. И. ローゼンベルク (1934年)

ではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それである新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである」(WN, pp. 30-31. 大河内訳〈I〉, 53ページ)。スミスは支出された労働——労働こそは「最初の代価」であり「本来の購買貨幣」であった——から始めているが、「それ〔商品——ローゼンベルク〕で購買または支配できる」労働をもって終わっているのである。ローゼンベルク [1934], 317-318ページ。

- (6) ローゼンベルク [1934], 318ページ。その間の事情をローゼンベルクはつぎのように説明している。すなわち、スミスは社会を分業に立脚する団体、その成員が互いに各自の労働を交換しあう団体として捉える。そして、商品は労働生産物の歴史上特定の社会的形態であることを理解しない彼は、商品と商品との交換を、労働と労働との交換に還元している。ここから彼の労働価値説が生まれる。すなわち、商品と商品との交換は労働と労働との交換にほかならないとすれば、その交換はそれに対応する労働支出にしたがって行われなければならない、というのである。そしてまたここにスミスは、「生きた労働」と、「対象化された労働」すなわち労働の生産物とを、同一視するにいたる。商品交換においては人と人との関係は対象化されて、物と物との関係として現れるのであるが、スミスはこれを看過しているのである。そしてスミスは、「生きた労働」と「対象化された労働」とを同一視した結果、さらにまた、「購買されうる労働」と「支出された労働」とを混同するにいたった。ところがこの混同は、資本主義的生産様式のもとでは労働力(スミスによれば労働)も労働生産物と同様に商品であるという事実によって、いっそう看破し難いものとなっているのであり、商品一般の本質を理解しないスミスは、特殊な・特別な商品たる労働力の本質をも理解することができなかった。かくしてスミスにおいては、商品の交換価値は、その生産に支出された労働によっても、その商品によって購買されうる労働によっても、同じように計量される、という結論が生まれたのである。ローゼンベルク [1934], 318-319ページ。

- (7) ローゼンベルク [1934], 319ページ。このことに関してローゼンベルクはつぎのような説明をしている。すなわち、スミスの議論では事実上、「支出された労働」はいっさいの商品を一定の労働量として内在的に較量できるものにし、「購買されうる労働」は諸商品の外在的尺度である(貨幣がこの尺度であるのと同様に)、ということになるのであるが、これもまた、スミスの一般的概念および一般的方法論から生じている。すなわち、スミスは古典派経済学全体と同じく、価値を、交換価値すなわちその形態から、区別しなかったがゆえに、価値の内在的尺度を、その外在的尺度から、区別しなかったのであり、したがって、価値の内在的尺度たる労働はまた、その外在的尺度たらざるをえなかったのである。そして、「支出された労働」と「購買されうる労働」との同一視は、あたかもこの必要に応ずるものであ

たのである。ローゼンベルク [1934], 319ページ。

またローゼンベルクは、「アダム・スミスについていま論じてきたばかりの諸点に、なおつけ加えておくべきことは、価値の規定 (Bestimmung, 決定, 規制) において彼が動揺しているところに、——賃金に関する明白な矛盾のほかにも——、さらに、次のような〔概念の〕混同がつけ加わっているということである。すなわち、価値の尺度のもとで、内在的尺度 (das immanente Maß)——同時に価値の実体を形成するもの——が、貨幣は価値の尺度だという意味における価値の尺度と混同されているということである。その場合、後者については、他の諸商品にたいし不変の度量者として役立つところの不変の価値をもった一商品を見いだそうとする試み——円積法〔不可能なこと〕——がなされている」というマルクスの言説 (Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Bd. 26 < I - III >, hrsg. von Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED (Berlin: Dietz Verlag, 1965-1968) [Karl Marx, Theorien über den Mehrwert (Vierter Band des „Kapitals“) < I - III >] ——本書で Marx, Mehrwert と略記されるもの—— < I >, S. 121. 大内兵衛, 細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第26巻〈全3分冊〉(大月書店, 1969-1970年) [『剰余価値学説史 (『資本論』第4巻)』〈全3分冊〉] ——以下これを、大内・細川訳『剰余価値学説史』と略記する—— < I >, 158ページ。引用文中の〔 〕内は邦訳者による補足)に関連して、つぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスは彼の階級的立場のために、商品、価値、貨幣を歴史的に制約された形態として理解することができず、これらのことは彼の研究の視野に入らず、彼の興味はただ交換価値の内容にのみ限られていた。そしてスミスはその交換価値の内容を労働に還元するのであった。そうだとすれば、労働はつねに一定量の価値を創造するわけである。ところで、労働はたんに価値の内在的尺度であるのみならず、外在的尺度でもあるというのであるから、価値尺度として労働に代わるあらゆる商品(スミスが指摘しているように実際においてはつねにこのような代位が存する)は、労働と同じくその価値において不変なものでなければならない。換言すれば、つねに同一の労働量を代表するものでなければならない。しかしながらこれは、マルクスの表現をもってすれば、不可能なこと〔円積法〕に属するのである。ローゼンベルク [1934], 319-320ページ。(なお、ローゼンベルクは以上の議論の脈絡のなかで、スミスにおける「支出された労働(費やされた労働)」と「購買されうる労働」との同一視の原因をルービンはスミスが一方では価値の変化の原因を発見しようとし他方では価値の不変の尺度を見つけ出そうと努めていること、価値の実質的変化の理論的研究と最良の価値尺度を見つけ出そうとする実際の課題とを混同しているということに求め、そしてルービンはここにスミス価値論の批判の基礎を置き、スミスの不幸は彼が実際の動機と理論的動機との双方によって導かれている点にあるとしている、と捉え、そのようなものとしてのルービンの見解にたいして批判をなしている。それ

については、ローゼンベルク [1934], 319-320ページ、また、本書前出「13」の注3も見よ。)

なお、以上①でみてきたことが、ローゼンベルクがスミスの交換価値論の三つの任務としてあげたもののうちの第一の任務についてのスミスの議論にたいするローゼンベルクの検討の要旨である。

(8) ローゼンベルク [1934], 320-321ページ。

(9) ローゼンベルク [1934], 320-323ページ。なお、左記の箇所のなかで、ローゼンベルクはこの間の事情を概ねつぎのように説明している。すなわち、スミスは、労働(生きた)は労働の生産物と同様に商品であると考えたのであるが、この特殊な商品の特殊性はスミスの視野には入っていなかった。しかしスミスは、賃労働の使用は諸商品の実現された交換価値の分配に変化をもたらすということを知っていた。すなわち、この交換価値は、もはや、商品の生産者の手元にそのまま残っているのではなく、種々の部分に分割されなければならないのである。そしてスミスによれば、これらの部分は、結局、種々の収入に還元されるのであった。そこからスミスは、諸商品の交換価値はもはやその生産のために支出された労働を表現するのではなく、それが分割される諸収入を表現するのである、と結論するのであった。このような思想行程を経て、スミスは事実上、諸商品の交換価値の問題から分配の問題に飛躍し、その飛躍のためにスミスは諸商品の交換価値の問題を混乱させるのであった。[なお、ローゼンベルクは、この脈絡において、マルクスのつぎのような文章を引用している。「他面、不思議なのは、A. スミスが、彼の疑念は商品相互の交換を規制する法則とは少しも関係がないということを、理解していないことである。商品AとBとがそれに含まれている労働時間に比例して交換されるということとは、AまたはBの生産者たちが生産物AとBとを、というよりもむしろそれらの価値を、お互いに分配しあう関係によっては、けっして妨げられない。Aの一部分が土地所有者の、他の一部分が資本家の、第三の部分が労働者のものとなる場合、その割合はどうであろうと、そのことは、AそのものがBとその価値に従って交換されることを少しも変えはしない。商品AとBとに含まれている労働時間の比率は、AとBとに含まれている労働時間がいろいろな人によってどのように取得されるかによっては、けっして影響されない。」(Marx, *Mehrwert* < I >, S. 44-45. 大内・細川訳『剰余価値学説史』< I >, 54ページ。)]「しかし、資本家と労働者とのあいだでの生産物の価値の『分配』そのものは、諸商品の——商品と労働能力との——あいだの交換を基礎としているのだから、A. スミスがびっくりして立ち止まったのは当然である。」(Marx, *Mehrwert* < I >, S. 45. 大内・細川訳『剰余価値学説史』< I >, 55ページ。)] スミスが分配の問題に飛躍したのは、結局のところ、彼が事実上、売られるものは「労働」ではなく「労働力」であるということを想起したためであるが、彼は、諸商品の交換の分析から商品(資本)と労働との交換の分析に移るや、

突如、彼の見地からは解決しがたい矛盾に直面した。すなわち、諸商品の交換価値は資本家の購買した労働によって創造されるものだとするれば、この交換価値が種々の階級間に分配されるということはどうして説明されるのか。交換価値はすべて労働者に属すべきものではないのか。そのような分配は価値法則の破壊である。かくしてスミスは、価値法則は「原始的状态」においてのみ、つまり、資本および土地私有がまだ存在しなかった時代のみ支配していたのだ、という結論に達せざるをえなかった。すなわち、スミスはその一般的概念からして労働価値説に到達した、しかし、商品一般の性質とりわけ特殊な商品たる労働の性質を理解せず、いかなる交換においても労働と労働との交換が行われると考えたスミスは、価値法則と分配法則とを衝突させた。価値法則によれば、労働者に彼の労働の全生産物（もしくは全交換価値）が帰属しなければならない。分配法則によれば、労働者にはたんに彼の労働の生産物の一部分が帰属するのみである。ところが、この分配法則は、資本と土地私有の出現をもってはじめて現れる、そしてそうであるがゆえに、この両者の出現とともに、価値法則は破られる、とスミスは結論したのである。〔ローゼンベルクは、この脈絡において、マルクスのつぎのような文章を引用している。「ところで、A. スミスは、まったく正当に商品および商品交換から出発しており、したがって生産者たちは、最初は、ただ商品所持者、商品販売者および商品購買者としてのみ相対しているから、スミスは、資本と賃労働との——対象化された労働（vergegenständlichte Arbeit）と生きた労働（lebendige Arbeit）との——交換では、一般的法則が直ちに廃棄されて、諸商品（というのは労働もそれが売買されるかぎりでは商品であるから）はそれらが表す労働量に比例して交換されない、ということを見出す（と彼には思われる）。それゆえ、彼は、労働条件が土地所有と資本との形態で賃金労働者と対立するようになれば、もはや労働時間は、諸商品の交換価値を規制する内在の尺度ではなくなる、と結論する。」（Marx, *Mehrwert* < I >, S. 43-44. 大内・細川訳『剰余価値学説史』< I >, 52-53ページ。傍点は、原文でイタリック体になっているところに邦訳者が付したもの。）〕

- (10) ローゼンベルク [1934], 323ページ。ローゼンベルクによれば、このことからスミスは救うことのできない理論的困難におちいった、とされる。ローゼンベルクは、その理論的困難としてつぎの四点をあげている。

①第一に、収入は、価値（新たに創造された価値は実際は $v + m$ に分割される）から派生した要因から、第一次的要因に、すなわち、価値を決定する要因に、転化した。

②第二に、スミスにおいては不変資本が消滅してしまった。すなわち、彼は、新たに生産された価値だけでなく労働生産物全体の価値をも $v + m$ に分割する。というのは、彼が証明に努めているように、不変資本も究極において収入に還元され、したがって彼においては、収入と資本との区別が事実上消滅するからである。

③第三に、労働は依然として価値の外在的尺度であるという筋道のたたない主張は、いやがうえにも支離滅裂となる。すなわち、以前にはスミスは価値の内在的尺度と外在的尺度とを区別しなかったのであるから(価値と価値形態とを区別しなかったように)、上の主張はなんとか筋道がとおっていた、だが、労働が価値の内在的尺度でなくなったとすれば、もはやそれが外在的尺度であることを主張する根拠はないのである。

④最後に、ある商品によって購買されうる労働の量は賃金の変動に応じて変化するのであるから、「購買されうる労働」は、もはや、価値の尺度ではありえない。なお、スミスを主として悩ましたのはこの最後の事情であった。というのは、それは事実上、労働価値説をくつがえしているからである。そこでスミスは、変化するのは「労働の価値」ではなく商品の価値であって、その結果当該商品によって購買しうる労働はある時には多くなりある時には少なくなるということを、証明しようと努める。そしてスミスは、この命題の証明において主観論におちいっており〔なお、ローゼンベルクによれば、このことが、近代の俗流経済学者がスミスを主観価値説の理論家にかぞえる理由となっている、とされる〕、つぎのように言っている。すなわち、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない」(WN, p. 33. 大河内訳 I, 57ページ)。ローゼンベルク [1934], 323-324ページ。

- (ii) ローゼンベルク [1934], 324ページ。なお、ローゼンベルクによれば、スミスは、生産費に一致する価格を自然価格と名づけ、それ以上のまたはそれ以下の価格を市場価格もしくは現実価格と呼んでおり、かくしてスミスはその価値論によって解決すべき第三の任務——諸商品の自然価格および市場価格の問題——に近づく、とされる。そしてまたローゼンベルクによれば、スミスの研究は、以上のように、労働から収入へ行き、収入から生産費に行っており、またその間に、彼の労働価値説は、労働時間による価値の決定に基づく科学的学説から生産費による価格の決定に立脚する俗流的学説に転化しているという意味で、根本的に変化しているとともに、彼の研究方法も、最初は主として内面的の方法であったが(というのはスミスはブルジョア社会の生理学に透入しようと努めたからである)、最後にはほとんど表面的方法になっていた(というのはスミスの全研究は、事物の表面において、流通において、競争においておこる事柄の観察に、止まったからである)という意味で、変化している、とされる。ローゼンベルク [1934], 324-325ページ。

なお、ローゼンベルクは、スミスの研究のこの部分(スミスの第三の任務に関する部分)で注意すべき点として、スミスは商品の需要と供給における変化、および、

市場価格をして自然価格の周囲を変動させもしくは彼のいうように市場価格を自然価格にひきつけるところの競争の機構を、かなり詳細に観察している、ということあげている。ローゼンベルク [1934], 325ページ。

Д. И. ローゼンベルク (1934年) についての覚書

ローゼンベルクは、スミスが商品の交換価値についての研究において関心を抱いていたのはたんに、スミスが自然的なものと考えていたところの一商品と他の商品との交換すなわち両商品の交換価値を決定する法則ということであったのであり、そしてスミスは商品の交換価値を「他の商品を購入する力」としつつその交換価値を、事物の直接の効用としての「使用価値」から切り離し、前者を決定する法則を説明しようとしたのであった、とみるとともに、そのようなものとしてのスミスの問題の捉え方について批判的な論評をくわえるのであった。そしてまたローゼンベルクによれば、そのような関心のもとに展開されるスミスによる交換価値についての研究の任務はさらに、(1)諸商品の真実価格を決定し、(2)この真実価格がいかなる部分から構成されているかを示し、(3)市場価格と真実価格との一致を妨げる原因を究明する、という三つの任務に分けられており、そしてその各々に、それぞれ、『国富論』第1篇の第5章、第6章、第7章があてられている、とみられるのであった。

なお、ローゼンベルクは、ペティ以来つまりスミス以前から自然価格〔真実価格〕と市場価格とはすでに区別され、さらに、自然価格〔真実価格〕は労働によって決定されると考えられていたのであるがそれに加えてスミスの議論には、諸商品の交換価値の貨幣形態としての諸商品の「価格」からの、諸商品の「交換価値」の抽象とともに「価格」の「交換価値」への還元があるのであり、スミスはあるときには交換価値を価格（自然価格〔真実価格〕）と呼びまたあるときには価格を交換価値と呼んでいるのであって、そこでは諸商品の自然価格〔真実価格〕は交換価値の意味に解されている、とみるのであった。また、ローゼンベルクは、「価値尺度」という言葉には、価値の実体をなし・価値を規制し・価値を内在的に較量しうる尺度といった意味での「価値の内在的尺度」と、たとえば貨幣が価値の尺度であるという意味での「価値の外在的尺度」という、二つの意味合いがあるという認識にたちつつその議論を展開するのであった。

そしてそのような考えをもつローゼンベルクによれば、スミスは、労働が商品と商品との量的割合を決定する尺度である〔すなわち、諸商品の交換価値、真実価格を決定するものは労働である〕とするのであるが、同時にまたスミスはこの、商品の交換価値の労働による規定において、商品によって「購買しうる労働」と商品の生産に「支出された労働」とを絶えず混同し、両者を同一のものと考えるといった混乱におちいつている、とされるのであった。そしてまたローゼンベルクによれば、この混同は、スミスの全概念とりわけ分業論から起こっているのものであって、「生きた労働」と、「対象化された労働」すなわち労働の生産物とが、同一視され、さらに、「購買しうる労働」と「支出された労働」とが混同されることとなった、とされるとともに、さらにまたローゼンベルクによれば、スミスの議論では事実上、「支出された労働」は「内在的尺度」、「購買しうる労働」は「外在的尺度」となっているのであるが、「価値」を「交換価値」すなわちその形態から区別しなかったスミスの議論では、価値の内在的尺度である労働はまたその外在的尺度たらしめるをえなかったものであり、「支出された労働」と「購買しうる労働」との同一視は、あたかもこの必要に応ずるものであって、それらのものの同一視は、それによって労働を価値の内在的尺度とも外在的尺度ともみなすことができるという事情から生じたものでもあるものであり、スミスはここにおいて「価値の内在的尺度」と「価値の外在的尺度」とを混同していることとなっている、とみられるのであった。

さらにまたローゼンベルクによれば、スミスは他方で、労働が諸商品の交換価値を規制する内在的尺度であるとともにその外在的尺度でもあるのは資本および土地私有のまだ存在しなかった「原始的状态」においてのみであると考えざるをえなかったものであり、それらが存在する社会については、内在的尺度を労働にではなく収入→生産費に求めつつも、それでもなお外在的尺度を労働に求めようとしているのであるが、労働が価値の内在的尺度でなくなったとすれば、もはやそれが外在的尺度であることを主張する根拠はないのであり、さらにまたスミスは、商品によって購買されうる労働の量は賃金の変動に応じて変化するため「購買しうる労働」はもはや価値の尺度ではありえないにもかかわらずそれを価値の尺度とせんがために、変化するのは商品の価値であって労働の価値ではないということを証明しようとし、そしてその証明において彼は主観論におちいつた、とされるのであった。

18. M. ボウリー (1937年)

1937年にその元の版が刊行された M. ボウリー (M. Bowley) の一著書 (Marian Bowley, *Nassau Senior and Classical Economics*, London: George Allen & Unwin, 1937; reprint edition, New York: Octagon Books, 1967. なお、ここでは上掲のリプリント版を使用するのであるが、ここで取り扱うボウリーの研究の発表年の区分については、上掲書の元の版が刊行された年、1937年をとり、そして、以下では、上掲リプリント版を Bowley [1937] と略記することとする) のなかで、ボウリーは以下のような見方を示している、といえる。

① スミス自身の価値および分配の理論はたんに、一つには生産を消費者需要に結びつけるメカニズムの説明といった方向へ、また一つにはなんらかの種類の指数による富 (wealth)⁽¹⁾ の進歩の測定方法の徐々なる発展といった方向へと向けられている諸示唆の合成物にすぎなかった。⁽²⁾

② 『国富論』での価値についての三つの章 (第1篇第5、第6、第7章) には、三つの論理的に別個な考えが存在しているのであるが、そのうちの一つは、不変の価値尺度を発見しようというものであった。⁽³⁾

③ スミスは、土地と資本を考慮に入れるとき、「支配される労働量」を支持しつつ「使用された (used) 労働量」を放棄したのであるが、価値の尺度として労働を使用するということは、『国富論』全体をつうじて残存した。⁽⁴⁾

④ スミスは『国富論』では、未開社会での価値の決定については労働の実際の不効用ということにもとづいて労働価値説を適用するのであるが、そのスミスの議論において土地と資本を考慮に入れなければならない社会状態について価値尺度として「支配される労働」というものが保持されているということ、それ自体は、労働することによって引きおこされる犠牲の不変性⁽⁵⁾ ということについてのスミスの主張と矛盾するものではなかった。

(注)

(1) なお、ボウリーによれば、スミスは、「生活の必需品および便益品」といった富につ

18. M. ボウリー (1937年)

いての消費者たちの立場からの考え方を採択した、とされる。Bowley [1937], p. 67.

- (2) Bowley [1937], pp. 67-68. なお、ボウリーによれば、我々が本書の「5」で取り扱った1903年のC.M. ウォルシュの所論では、総国富 (total national wealth) の変化を測定するための標準を発見しようというスミスの意図が、十分に強調されていないように思える、とされる。Bowley [1937], p. 69n. 3.
- (3) すなわち、ボウリーによれば、『国富論』第1篇の第5章「商品の真実価格と名目価格について」、第6章「商品の価格の構成部分について」、第7章「商品の自然価格と市場価格について」という『国富論』での価値についての三つの章には、三つの論理的に別個な考えが存在しているものであり、そしてそれらのうちの二つのものは、その後の価値学説の展開にとって特別な重要性をもつものであったのであって、それらは、自然価格の理論を、「グラスゴウ講義」[ここでボウリーが言っている「講義」は、E. キャンン (E. Cannan) 編『グラスゴウ大学講義』にみられるスミスの「講義」]のなかにあるその起源からすなわち半独立的な労働価値説 (the semi-independent labour theory of value) から、練り上げるというもの、および、不変の価値尺度を発見することを試みるというもの、である、とされるのである。Bowley [1937], p. 68, p. 68nn. 1, 2.
- (4) Bowley [1937], p. 70. なお、ボウリーによれば、このことは十分に論理的であった、とされる。そしてその理由は、労働価値説が適用された「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」という未開社会においては、価値の、決定因 (determinant), 尺度 (measure) および源泉 (source) はすべて一致していたのであり、そして、「ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量が、その商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量を規制できる唯一の事情である」(WN, pp. 47-48. 大河内訳〈I〉, 82ページ)と正当に言われたからである、とされる。Bowley [1937], p. 70.
- (5) Bowley [1937], pp. 69, 70. なお、ボウリーは、「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである。労働は、価格のなかの労働に分かれる部分の価値だけでなく、地代に分かれる部分の価値、および利潤に分かれる部分の価値をも測るのである。」(WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ)という文章をとりあげ、この結論は、実際には、価値理論 (theory of value) とは別個のものであり、リカードウ (D. Ricardo) がたんに混乱の結果と考えたようなものではなく、あとのほうで価値の尺度 (measure) として穀物が導入されたのと同じように、それは、不変の標準 (standard) によって富を測定しようという一つの試みにすぎない、としている。Bowley [1937], pp. 70-71.

なお、以上でみてきたボウリーの諸言説からして、ボウリーは、スミスの議論では、価値尺度となるものは一貫して「支配される労働」であったのであり、ただ未

開社会では、その「支配される労働」の量はそのような社会での価値の原因、決定因としての「使用された労働」の、量と一致したのだとされている、とみていると言うこともできよう。

また、ここではボウリーは、価値尺度に関するスミスの議論では「穀物」は、ひとつの価値尺度であるということ自体については、いわば「労働」と同格の地位を占めるものとして取り扱われている、とみていると言うこともできよう。

M. ボウリー（1937年）についての覚書

前章「17」でとりあげられたローゼンベルクは「価値の内在的尺度」と「価値の外在的尺度」といったことを問題にしたのであるが、そのような観点からすれば、ボウリーは、「価値尺度」についてのスミスの議論を、どちらかといえば「価値の内在的尺度」についての議論としてではなく「価値の外在的尺度」についての議論として捉えている、といえよう。すなわち、ボウリーは、価値尺度についてのスミスの議論を価値の原因、決定因についての議論、価値理論としてではなく、穀物が一つの価値尺度であるといった次元での議論として捉えるのであった。

そしてボウリーによれば、スミスは、価値理論としての「使用された労働」による価値の説明——労働価値説——の妥当性を「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」に限定してそれが行われる社会状態についてはそれを放棄したのではあるが、価値尺度としての「支配される労働」という考えは保持されつづけたのであったのであり、また、スミスは、労働の実際の不効用ということにもとづいて、価値理論としての「使用された労働」による価値の説明を展開したのであるが、そこに見られるような労働することによって引きおこされる犠牲の不変性といったことについてのスミスの主張ということと価値尺度としての「支配される労働」という考えのスミスによるうえのような保持ということとは矛盾するわけではなかった、とみられるのであった。

そしてまたボウリーによれば、スミスがそのような価値尺度を追求したのは、個々の財貨の価値を測定するものとしての不変の価値尺度それ自体を見いだすためであっただけでなく、さらにそれによって、「生活の必需品および便益品」としての富、総国富およびその変化を測定するための標準を見いだすためであつたのであり、そしてその標準をスミスは労働（「支配される労働」）さらに穀物に求めたのであった、とみられるのであった。

19. E. ロール (1938年)

1938年にその初版が刊行された E. ロール (E. Roll) の一著書 (Eric Roll, *A History of Economic Thought*, 4th edition revised and enlarged, London & Boston: Faber & Faber, 1973 [1st edition London: Faber & Faber, 1938; 2nd edition (revised and enlarged) New York: Prentice-Hall, 1942; 2nd edition (revised and enlarged) London: Faber & Faber, 1945; 3rd edition (revised and enlarged) London: Faber & Faber, 1954; 3rd edition Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1956; 4th edition (revised and enlarged) Homewood, Ill.: Richard D. Irwin, 1974]). なお、ここでは上掲の、1973年に Faber & Faber から出された改訂増補第 4 版を使用するのであるが、ここで取り扱うロールの研究の発表年の区分については、ロールのこの著書の初版がもともと刊行された年、1938年をとり、そして、以下では、上掲の改訂増補第 4 版を Roll [1938] と略記することとする。隅谷三喜男 (代表) 訳『経済学説史』(上, 下) [1945年に Faber & Faber から出された改訂増補第 2 版の邦訳], 有斐閣, 上巻再版 1953年 [初版 1951年], 下巻初版 1952年) のなかで、ロールは、スミスは『国富論』においてある特定の対象物の効用をあらわすものとしての「使用価値」と一対象物がもっている他の財貨を購買する力としての「交換価値」とを区別しそしてそれらのうちの「交換価値」の分析にすすむのであるが⁽¹⁾, 交換価値についてのスミスの研究自体は、(1)諸商品の交換価値の尺度は何であるか、あるいはスミスのもう一つの言い方をすれば、諸商品の真実価格 (real price) または自然価格 (natural price) とは何であるか、(2)この自然価格の構成部分は何であるか、(3)諸商品の市場価格の、その自然価格からの乖離は、どのようにして生じるのか、という三つの部分に分かれるのであり、そしてそれらの問題にたいして、それぞれ『国富論』第 1 篇の第 5 章、第 6 章、第 7 章があげられている、とし、そしてそのようなものとしての交換価値についてのスミスの議論を検討しようとするのであるが、その過程でロールはつぎのような見方を示しているといえる。

① 『国富論』第 1 篇第 5 章における交換価値の説明は、分業と私的交換

という社会的事実から生じる交換価値の質の分析から始まるのであるが、スミスはこの分析をつうじて、商品の交換価値は、その商品が支配しうる労働の量に等しくなり、この意味で労働こそが「すべての商品の交換価値の真の尺度である」と結論する³⁾。

② ところがこれにすぐつづいて、価値の源泉 (origin) および価値の尺度についてのもう一つの説明が現れ、そこでは、商品の価値は、その商品の生産に要する労働の量によっても測定される、とされている⁴⁾。

③ 「ある所与の量の商品で購買、支配しうる労働の量、あるいは、ある所与の量の労働で購買しうる商品の量」(労働の価値)と「商品の生産に要する労働の量、商品に体化された労働の量」とはまったく別のものであるにもかかわらず、スミスは後者は前者を言い換えたものにすぎないつもりでいたのであり、これら二つの交換価値の尺度は、スミスの議論において混乱した形で併行して存続していく⁵⁾。

④ なお、以上のような脈絡においてスミスが価値尺度としての労働について語る場合、そこでは事実上、労働は、交換価値の内在的尺度 (inherent measure) という意味で語られているのであるが、それにつづいてスミスは、事実上、交換価値に内在するものという意味ではなくて、それでもって諸商品の価値を比較する一つの物差しといった意味での、価値尺度としての労働について、またそれに関連しての貨幣その他のそれに付随する諸問題を論じている。そのさい、スミスは、「価値尺度」という用語の正確な意味について混乱していたため、ここにおいて、貨幣を労働と同等の地位に仕立てあげている、あるいはほとんどそうしているのである⁶⁾。

⑤ 第1篇第6章においてスミスは、うえにみられるような生産に必要な労働量による商品の交換価値の決定 (determination) は、労働者がその労働の全生産物を受け取る「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」すなわち前資本主義時代においてのみ妥当するとし ([ある所与の量の商品が購買しうる労働の量と商品に体化された労働の量という交換価値についての二つの考え方、混乱のゆえに、] 彼は、労働価値説の妥当性を、このようなものに限定せざるをえなかった)、そして、資本主義的生産という状況のもとにある社会に関しては、スミスの問題の捉え方からすれば価値の唯一の源泉 (source)、価値の内在的尺度を労働に求めることが困難となり、事実上、新たな価値理論、初期的な生産費説へと向かうのであるが、ここでも

19. E. ロール (1938年)

なおスミスは、価格の各構成部分（賃金、利潤、地代）の真実価値はそれが支配しうる労働量に等しいと主張してはいる。⁽⁷⁾

(注)

- (1) なお、ロールによれば、スミス自身は使用価値の複雑な様相の説明といったようなことには関心を抱いていたわけではなかったのであり、スミスは、真に重大な作業である交換価値の分析を始めるまえにそのようなものを邪魔にならぬよう処理しておこうということから、貨幣に関する章〔『国富論』第1篇第4章〕の末尾で「価値」という用語のその二つの意味の区別を示しているように思える、とされる。Roll [1938], p. 156. 邦訳（上）、199ページ。
- (2) Roll [1938], p. 156. 邦訳（上）、199-200ページ。なお、E. キャンン (E. Cannan) 編『グラスゴウ大学講義』での交換価値についてのスミスの議論に関するロールの言及については、Roll [1938], pp. 157-158, 邦訳（上）、201ページを見よ。
- (3) この間のスミスの推論をロールはつぎのようなものとして示している。すなわち、スミスによれば、人の貧富はその人が獲得しうる有用物の量にしたがって決まる。しかし分業が行われるようになると、彼自身の労働が彼にもたらすことのできるのはこれらの事物のごく小部分にすぎなくなり、彼の富 (wealth) は、彼が支配しうる他人の労働の量に依存することとなる。かくして、彼の所有するどんな商品もその交換価値は、その商品が支配しうる労働の量に等しくなる。スミスはここから、労働こそがすべての商品の交換価値の真の尺度であると結論した。Roll [1938], p. 158. 邦訳（上）、202ページ。
- (4) Roll [1938], p. 158. 邦訳（上）、202ページ。
- (5) Roll [1938], pp. 158-159, 161. 邦訳（上）、202-203ページ、206ページ。なお、ロールは、スミスの議論におけるそれら二つの尺度の混乱の例として、ある人の「財産 (fortune) の大小は、…その財産で彼が購買または支配しうるものの、他の人々の労働の量または同じことであるが他の人々の労働の生産物の量、に正確に比例する」というスミスの文言 (WN, p. 31. 大河内訳 I, 54ページ) をあげ、そして事実上、そこで言われている「その財産で彼が購買または支配しうる他の人々の労働の量」を「労働の交換価値」として捉え直すとともに、その財産で彼が購買または支配しうる「他の人々の労働の生産物」の量を、その財産で彼が購買または支配しうる「体化された (embodied) 労働」の量として捉え直しつつ、そのスミスの文言では、一方で「労働の交換価値」が他の諸商品の交換価値の尺度とされるときにも他方で、商品の交換価値の尺度はその商品のなかに「体化された労働の量」によって与えられるとされている、としている。Roll [1938], pp. 158-159. 邦訳（上）、202ページ。

また、ロールは、スミスのこの混乱の原因は、分業の重要性和分業の導入がもた

らず諸変化を強調したいという彼の欲求のなかに存ずるとして、つぎのような説明をくわえている。すなわち、スミスは「労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の代価……であった」（WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 53ページ）と述べる。ところが、ひとたび分業が導入されると、富を決定するのは、もはやその人自身の労働の生産物ではなくて、この生産物が支配しうる他の人々の労働の量、正確に言えば、当該人物の生産物のなかに含有されている労働量でもってその人物が購買することのできる労働一般の量、なのである。換言すれば、スミスがここでもなしつつあったことは、あらためて、しかし別の言葉で、交換価値それ自体についての考えを、労働価値説に関するかぎりでは労働がすでに一つの社会的な因子（a social factor）になっているときに発生するにすぎないところの一つの考えを、展開する、ということであったのである。何故なら、分業と交換といったことのために、異なる諸個人の労働の諸生産物が、なんらかの形で等置されなければならないのである。だがスミスは、この考えを、労働の諸生産物間でのというだけでなく労働生産物と労働自体との間でも、ある等置といったことを含蓄した形で、適用してしまったのである。（そしてまたロールによれば、スミスをしてついに異なった価値理論を展開させるにいたったのは、このことのなかに内在する困難性ということであったのである、とされる。） Roll [1938], p. 159. 邦訳（上）、203ページ。

- (6) Roll [1938], pp. 159-160, 163. 邦訳（上）、203-204ページ、208ページ。Д. И. ローゼンベルク（Д. И. Розенберг）による、スミスの議論における価値の内在的尺度と外在的尺度に関する指摘はすでに本書の「17」でみたところであるが、ロールも、いまみたように、スミスの議論には、事実上、交換価値にとって内在的な尺度といった意味での価値尺度と、それでもって諸商品の価値を比較する物差しといった意味での価値尺度という二つの考えが含まれている、とみているわけである。

なお、ロールは、うへの二つの価値尺度の意味の違いを認識していなかったという意味でスミスは「価値尺度」という用語の正確な意味について混乱していた、とみているといえるのであるが、ロールは、後者の意味での「価値尺度」という脈絡においてもスミスは真の尺度として労働に立ち帰ることとなった、とし、その間の事情をつぎのように説明しているといえる。すなわち、この後者の意味での「価値尺度」という脈絡においては労働は有効な尺度でないということをスミスは知っていた。すなわち、スミスによれば、諸商品が労働と交換されることはめったになく、他の諸商品と交換される、それゆえ、諸商品の交換価値は、「抽象的な観念」である労働のタームでよりも、「目に見え、手でさわれる」物体である他の商品の量のタームで評価されるほうがより普通である。しかしながらひとたび貨幣が使用されるようになると、すべての商品は最もしばしば貨幣と交換されるようになり、貨幣が一般に用いられる価値尺度となる、とされる。しかしまた、「価値尺度」という用語の正確な意味について混乱していたスミスは、貨幣を労働と同等の地位に仕立

19. E. ロール (1938年)

てあげつつあるいはほとんどそのようにしつつ、さらに、不変の価値をもちまたそれゆえ有効な測定物差しとして使用されうるようなものをさがそうとする。そして彼は、最も広く用いられている貨幣商品である金ならびに銀を、価値において、すなわち、それらを生産するのに必要な労働の量において、あるいは、(これまた混乱であるが) それらの一定量が支配しうる労働の量において、変動をこうむるものとして、しりぞける。こうして彼は労働に戻っていく。彼によれば、労働自体の価値はけっして変動することなく、それゆえ労働「だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ)でありつづけるのである。かくして、労働は諸商品の真実価格となり、貨幣は諸商品の名目価格 (nominal price) となる、とされるのである。Roll [1938], pp. 159-160. 邦訳 (上), 203-204ページ。

またロールは、スミスの議論では労働の量〔商品の生産に要する労働の量、商品に体化された労働の量〕と労働の価値〔ある所与の量の労働で購買しうる商品の量、あるいは、ある所与の量の商品で購買しうる労働の量〕との混同が貫かれている、とするのであるが、他方、ロールは、そこに一つの難点があるということにはスミス自身も気付いていたらしい、とし、そしてその根拠として、スミスは、労働の価値(これをスミスは不変と考えたばかりである)は、労働者にとってはつねに同一であるけれども、それを買う人にとっては、あるときにはより多量の、あるときにはより少量の財貨で、同量の労働を購買できるがゆえに、変動するかのようにみえるということを認めている、ということをあげている。ただしロールによれば、スミスは、安価であったり高価であったりするものは、労働ではなくて、労働を買う財貨のほうであると述べることによって、その問題ををはぐらかしてしまい、そして「真実」価格と「名目」価格という語に、前とは別の意味づけを与えている、すなわち、前者は労働をも含めたすべてのものと交換に与えられる生活の必需品および便益品の量、後者は労働をも含めたすべてのものと交換に与えられる貨幣の量としている、とされる。Roll [1938], p. 160. 邦訳 (上), 204-205ページ。

(7) Roll [1938], pp. 161-163. 邦訳 (上), 205-208ページ。

E. ロール (1938年) についての覚書

ロールによれば、スミスは『国富論』において、「使用価値」と「交換価値」とを区別することによって彼にとって真に重大な作業たる交換価値の分析をなすさいに邪魔となりうるものを取り除いたうえで、一対象物がもつ他の財貨にたいする購買力としての「交換価値」の分析へとすすもうとした、とみられるのであるが、そのロールによれば、本書の「17」でみたローゼン

ベルクによる理解に似て、交換価値についてのスミスの研究自体は、(1)諸商品の交換価値の尺度は何であるか、あるいはスミスのもう一つの言い方をすれば、諸商品の真実価格または自然価格とは何であるか、(2)この自然価格の構成部分は何であるか、(3)諸商品の市場価格の、その自然価格からの乖離は、どのようにして生じるのか、という三つの部分に分かれ、そしてそれらの問題にたいしてそれぞれ『国富論』第1篇の第5章、第6章、第7章があてられている、とされるのであった。

また、これもローゼンベルクによる理解と類似するのであるが、ロールによれば、スミスは、交換価値の源泉、決定を説明し交換価値にとって内在的な尺度といった意味での価値尺度と、尺度としては貨幣と同等の地位にある尺度、それでもって諸商品の価値を比較する物差しといった意味での価値尺度というこれら二つの価値尺度の意味の違いを認識せず、「価値尺度」という用語の正確な意味について混乱していた、とみられるのであった。

そして、ロールによれば、スミスは、事実上価値尺度のうえの二つの意味のうちの前者の意味での価値尺度の脈絡において真の尺度を労働に求めるのであるが、分業の重要性と分業の導入がもたらす諸変化を強調することを望みつつ展開されたそのスミスの議論では、「生産に要する労働の量」と「購買しうる労働の量」とが混同されていた、とみられるのであった。そしてまたロールによれば、そのような議論につづけてスミスはまた、事実上価値尺度の二つの意味のうちの後者の意味での価値尺度を問題にして価値尺度としての労働、貨幣等々といったものを論じるのであるが、「価値尺度」という用語の正確な意味について混乱していたスミスは、貨幣を労働と同等の地位に仕立てあげつつあるいはほとんどそうしつつ、そのような議論の脈絡のなかで、さらに、不変な価値をもちまたそれゆえ有効な測定物差しとして使用されうるようなものを追求しようとし、そして、貨幣商品である金、銀は、その価値において、すなわちそれらのものの「生産に要する労働の量」あるいはそれらのものの一定量が「購買しうる労働の量」——「生産に要する労働の量」と「購買しうる労働の量」との混乱——において、変動をこうむるものとして退け、価値において変動することのない労働のみが真の価値尺度であるとして労働に立ち帰り、商品の真実価格を労働に、名目価格を貨幣に求めている、とされるのであった。だがまたロールによれば、いまみたようにスミスは労働の価値を不変としたにもかかわらず、さらに、労働の価値は、

19. E. ロール (1938年)

労働者にとっては不変であるが、等量の労働は必ずしも等量の財貨でもって購買されうるとはかぎらないゆえ労働を購買する人にとっては労働の価値は変動するかのようにみえるということを認めるのであり、これは、スミス自身も、彼の議論における一難点——「労働の価値」〔つまり、ある所与の量の労働で購買しうる商品の量、逆に言えば、ある所与の量の商品で購買しうる労働の量〕と「労働の量」〔つまり、商品の生産に要する労働の量〕との混同ということにかかわる難点——の存在に気付いていたかもしれない、ということを示すものではあるが、スミスはその問題を正面から取り上げることなく、ここでは、安価であったり高価であったりするの労働ではなくて労働を買う財貨のほうであると述べることによってその問題をはぐらかしてしまうとともに、〔「通俗的な意味での」〕「真実価格」とは労働をも含めたすべてのものと交換に与えられる生活の必需品および便益品の量、「名目価格」は労働をも含めたすべてのものと交換に与えられる貨幣の量、といったように「真実」価格と「名目」価格という語に前とは別の意味を与えている、とみられるのであった。

さらにまた、スミスの議論では「生産に要する労働の量」と「購買しうる労働の量」が混乱した形で併行して存続しているとみるロールによれば、その混乱のゆえにスミスは、資本主義的生産という状況のもとにある社会に関しては、価値の唯一の源泉、価値の内在的尺度を労働に求めることが困難となり、「生産に要する労働の量」による交換価値の決定の妥当性を「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」に限定せざるをえなくなり、前者の社会状態については、そこでもなお価格の各構成部分の真実価値はそれが支配しうる労働量に等しいと主張しはするのであるが、事実上、初期的な生産費説を提出することとなった、とみられるのであった。

する (cheapen) であろう、ということ想定していたのであり、さらにまた、スミスがこの結果が到達されるメカニズム——すなわち、ヨリ容易に「得ることのできる」品物は、ヨリ豊富になるであろう、そして、需要が同じ速さで増加しないかぎり、価格 (price) は低下するであろう、というメカニズム——を理解していたということも明らかであるように思えるのである。⁽⁶⁾なお、スミスは、この「真実価格」についての議論においては事実上、長期の諸期間 (long periods of time) にわたっての「真実の費用」における諸変動〔したがって、生産効率における諸変化、生産の難易度の諸変化〕ということを取り扱っていたのであるが、このようにスミスが「真実価格」についての彼の議論において長期の諸期間にわたっての「真実の費用」における諸変動ということを取り扱っていたのだと主張することと、そのような諸変化をスミスが測定すること自体をよしとすることあるいはさらに、そもそもそのような測定は可能なものであるということ自体を認めることとは、まったく別のことであるのである。⁽⁷⁾事実スミスは、あらゆる商品の生産に伴う「労苦と骨折り」の量を直接的に測定することの困難性に直面していたのであった。そしてスミスの場合、それをうけて彼は、長期の諸期間にわたって不変の「真実価格」を保持してきたかあるいは不変の労働量を支配してきたか、あるいはそれら両方の要件をそなえてきた何かある商品を、捜し求めようとしたのであった。⁽⁸⁾そしてまたスミスは、そのような商品として、銀を退け、まず経験的な根拠から、穀物を選ぶとともに、さらに、事実上二つの道すじにそって、その選択にたいする理論的な支持を与えようとするのであった。⁽¹¹⁾

(注)

(1) Bladen [1938], pp.28-29, 30ff.

(2) ブレイドウンは、「あらゆる物の真実価格は……それを獲得するための労苦と骨折りである」というスミスの文言 (WN, p. 30. 大河内訳 <I>, 52ページ) を引用している。そしてブレイドウンによれば、これは、「真実価格」についての因果的説明を与えているものではなくて、「真実価格」を定義しているものである、とみられる。またそれに先立ってブレイドウンは、「時と場所のいかに問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価 (dear) であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかな労働で入手できるものは、安価 (cheap) である」というスミスの文言 (WN, p. 33. 大河内訳 <I>, 58ページ) を引用し、ここではスミスは「高価」および「安価」とは何を意味しているのかと

いうことを定義しているのであって、なぜ諸事物が高価あるいは安価であるのかというものを説明しようとしているわけではないのである、としている。Bladen [1938], pp. 30-31.

なお、ブレイドウンによれば、スミスにおける価値理論というものに関するたいていの誤解は、「真実価格」という言葉の彼の使用法を理解しそこなっているということから生じている、とされる。そして、たいていの現代の経済学者たちは、スミスは市場価格 (market price) の説明を意図していたにちがいないと、また、スミスは「真実価格と名目価格」についての章 [『国富論』第1篇第5章] における説明と「自然価格と市場価格」についての章 [『国富論』第1篇第7章] における説明という一貫することのない二つの説明を与えたと、臆断するのであり、またこのことは、ジード (C. Gide) とリスト (C. Rist) によって「前においては、『真実』価格は労働に基礎を置く価格を意味しているのであった。今は、『自然』価格が、その生産費で評価される財貨の価格として定義されている。名前の変更は大きな意味を持たない。スミスがその双方において追求していたものは、市場価格の変動の背後につねに隠れているあの真の価値であった。それは同一の問題である、しかし新しい解答が与えられているのである」(本書の「9」で使用された Gide & Rist [1909]でいえば、その pp. 94-95. 前掲邦訳(上)の111ページ)——また、「〔価値の問題についての〕二つの異なる同じように誤った解答が、彼によってつぎつぎに採用された、しかし彼は、それらのうちのいずれのものをとるかということを経験して実際には決定しなかった」(Gide & Rist [1909], p. 93. 邦訳(上), 108-109ページ。〔 〕内はブレイドウン)——といった文言ではっきりと述べられているのであるが、「真実価格」の問題と「自然価格」の問題とは同一の問題ではなかったということはいくら強く言っても言いすぎることはない、とされる。Bladen [1938], p.30, p.30n. 9.

またブレイドウンによれば、「真実価格」というものが以上でみてきたようなものとして定義されるときにのみ、スミスによる異なる諸時点における特定諸商品の「真実価格」の比較といったことは意味をなしうるのであり、もしスミスがその「価格」という用語を、経済学者たちによって使用されるようになってきた厳密な意味での「価値 (value)」と同義語として使用していたとするならば、そのときには、「価値にとって欠くことのできないことは、比較される二つの対象物が存在しなければならないということである。価値とは、単独にまた他事物との関係なしに考察された一事物の属性と断言されることはできないのである。……したがって価値とは、絶対的な (positive) あるいは内在的な (intrinsic) いかなるものをも指すのではなくて、二つの対象物が交換可能な商品として互いに相対する関係を指すにすぎないのである」というサミュエル・ベイリー (Samuel Bailey) の文言 ([Samuel Bailey], *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; Chiefly in*

- Reference to the Writings of Mr. Ricardo and His Followers* (London: R. Hunter, 1825; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, 1967)——本書で Bailey, *Dissertation* と略記されるもの——, pp. 4-5. 鈴木鴻一郎訳『リカド価値論の批判——価値の性質, 尺度, 及び原因に関する論文——』〔1825年原版の邦訳〕(日本評論社, 1941年), 3-4 ページ) は, スミスに対する批判となりうるものであり, たとえば, 1700 年における小麦の価値を1800年における小麦の価値と比較することはできず, 1700 年における小麦の価値を1700年における他の諸商品の価値と, また, 1800年における小麦の価値を1800年における他の諸商品の価値と, 比較しうだけであるのである, しかしスミスは「真実価格」を論じていたのであって「価値」を論じていたのではないのであり, 彼は事物一般また特定諸事物がより容易に「得ることができる」かという史的な問題を取り扱っていたのである, とされる。Bladen [1938], p. 31.
- (3) ブレイドゥンは, このような脈絡のなかでスミスは「等量の労働は, 時と場所のいかに問わず, 労働者にとっては等しい価値をもつもの」と言うことができよう。彼の健康, 体力, 精神が普通の状態で, また彼の熟練と技能が通常の程度であれば, 彼はつねに, 自分の安楽, 自由, 幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価 (price) は, それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと, つねに同一であるにちがいない。なるほど, その労働は, より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば, より小さい分量のこれらの財貨を購買することもあろう。だが, 変動するのは, それらの財貨の価値であって, それらを購買する労働の価値ではないのである」(WN, p. 33. 大河内訳くI), 57-58ページ) と述べた, と捉え, そして, その文言においてもスミスは「価値」という言葉をきわめてルーズに使用しているのであるが, その意味しているところはかなりはっきりしているのであって, 「変動するのはそれらの財貨の価値〔正確に言えば, 真実価格〕であって, 労働の価値〔正確に言えば, 不効用〕ではないのである」ということなのである, とする。Bladen [1938], pp. 31-32.

なお, ブレイドゥンは, このことに関連してつぎのような内容の指摘をくわえている。すなわち, スミスが価値という言葉で「正確に」使用していたにちがいないということを仮定することによってのみ, ベイリーの, マルサス (T. R. Malthus) に対するまた間接的にはスミスに対する, つぎのような批判, すなわち, 「彼〔マルサス〕は, アダム・スミスにならって, 労働はつねに同じ価値をもつものと, すなわち, 彼自身の定義に従えば, 交換にさいして他の諸対象物にたいする同一の支配力を保つと, 主張している。だがまた同じ論文において彼はより多量のあるいはより少量の貨幣または必需品を稼得する労働者について語り, そして, 変動するのは労働の価値ではなくて貨幣または必需品の価値であると主張している。あたかも, 労働は生産物または貨幣との関係で価値において変化することなしに, 生産物または貨幣が労働との関係で価値において変化しうるかのごとくである」という批判

20. V. W. ブレイドウン (1938年)

(Bailey, *Dissertation*, p.25. 邦訳, 21-22ページ。〔 〕内はブレイドウン)を正当化することが可能なのであり、また、価値という言葉のルーズな使用法を批判することは正当なことであろう。しかし、著者がある言葉を三つあるいは四つの異なる意味で使用していることがまったく明らかであるのに、その著者がその言葉を一つの意味でのみ用いていたと想定することによってその著者の労作を無意味なものと考えてしまうことは、正当なことでも有用なことでもないように思える。Bladen [1938], p. 32. Bladen [1938], pp. 27-28, p. 28n. 3 も見よ。

- (4) ブレイドウンはつぎのようなスミスの文言を引用している。「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行きわたるようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない。彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できる……その労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない。したがって、およそ商品の価値は、……その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。) Bladen [1938], pp. 32-33.

なお、ブレイドウンは、本文でみたような脈絡でスミスは「労働支配力」というものに注意を向けたと捉えるのであるが、同時にまたブレイドウンは、我々が本書の「14」でとりあげた P. H. ダグラス (P. H. Douglas) はここに、スミスの議論における、投下労働量による価値の因果的説明という「価値の理論」に加えての、労働による価値のもう一つの因果的説明、もう一つの「価値の理論」をみている、とみてつぎのようなダグラスの文言を引用している。「非常に異なった輪郭をもつ二つの学説……すなわち、労働凝固説あるいは労働費用説 (the labor-jelly or labor-cost theory) と労働支配力説 (the labor-command theory) が、存在する。……労働凝固説は、一対象物の価値はその生産に必要とされる労働単位の量によって決定されるとし、これに対して労働支配力説は、一対象物の価値はそれでもって購買されうる労働の分量によって決定されるとするのである。」(Douglas [1927], p. 88. 前掲邦訳, 17ページ。) Bladen [1938], p. 32n. 12.

なお、我々は、前で、『国富論』第1篇第5章においてスミスは一つには貨幣のペールを、人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているという実質的なプロセスにまで引きおろそうとしていたのだというブレイドウンの見方を見、そして、本文でみられたような脈絡でスミスは「労働支配力」というものに注意を向けたのだとしつつこの注4でみられたようなスミスの文言を引用するブレイドウンの議論を見たのであるが、ブレイドウンによればまた、トーマス・カーライル (Thomas Carlyle) の「6ペンス持っている人は、すべての人々に対して (6ペンスだけ) 君主である。すなわち彼は——6ペンスの範囲だけ——料理人をして彼の

ために料理することを、哲学者をして彼に教えることを、国王をして彼を守ることを、命じるのである」といった文言にも示されているような、実質的な経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとみる見方は、古典派の理論の展開また後の社会主義的理論の展開において大きな重要性をもつものであった、とされる。しかしまたブレイドダウンによれば、不思議なことにそのような見方は、価値についての議論のなかで使用されているけれども『国富論』では分配の問題にたいしてきわめて明確に適用されていたわけではなかった——ただし、『国富論』第1篇第6章中の「こうした事態のもとでは、労働の全生産物はつねに労働者に属するとはかぎらない」といったスミスの文言(WN, p. 49. 大河内訳〈I〉, 84ページ)のなかにそのような見方は暗に示されているのではあるが——とされる。だがまた同時にブレイドダウンによれば、「国富論草稿」のなかにはそのような見方についての見事に明確な詳述が存在するのであり〔なお、ブレイドダウンは、このことを示すものとして、William Robert Scott, *Adam Smith as Student and Professor, with Unpublished Documents, Including Parts of the "Edinburgh Lectures," a Draft of "The Wealth of Nations," Extracts from the Muniments of the University of Glasgow and Correspondence*, [Glasgow University Publications 46] ([Glasgow: Jackson], 1937; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, 1965)——本書で Scott, *Adam Smith* と略記されるのはこの文献——, pt. 3. "An Early Draft of Part of *The Wealth of Nations* (c. 1763)"——本書で ED と略記されるもの——中の, pp. 325-328 (水田 洋訳『国富論草稿』[1937年原版の邦訳] (日本評論社, 1948年)——以下これを、水田訳『国富論草稿』と略記する——, 46-53 ページ)に含まれている文章を引用している], そしてそこで示されているスミスの議論から、カール・マルクス (Karl Marx) の『資本論』第1巻中の搾取についての記述——そこでは、そのプロセスは、労働者階級はその生産物の一部を財産の所有者たちに引き渡さなければならない、あるいは、労働時間の1日〔労働日〕のうちの一部を自分たち自身のために〔必要労働時間〕、そして労働時間の1日のうちの一部を有産階級のために〔剰余労働時間〕働かなければならないものとして、みられる——へは、はなはだしい隔たりがあるわけではない、とされる。詳しくは Bladen [1938], pp. 34-35, p. 35n. 15 を見よ。

- (5) ブレイドダウンは、スミスがこのような考えをもっていたということは、アメリカの豊富な銀鉱山の発見の影響に関するスミスの一文からも窺われるとみて、つぎのようなスミスの一文を引用している。「それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなったので、それらの金属類が市場へもたらされたときに、購買または支配できた労働もいっそう少なくなった。」(WN, p. 32. 大河内訳〈I〉, 57ページ。) Bladen [1938], p. 33.

また、ブレイドダウンによれば、一見したところうえのスミスの一文は、スミスが

20. V. W. ブレイドウン (1938年)

〔投下〕労働価値説を「狩猟民族」にだけでなく、彼の住んだ「進歩した社会状態」にも適用可能なものとして受け容れていたということを示唆しているようにみえるけれども、彼がこの価値理論を受け容れはしなかったということは、それとは反対のことを示すつぎの彼の言説、すなわち、「また、ある商品の獲得または生産にふつつ用いられる労働の量は、その商品がふつつ購買し、支配し、またはこれと交換されるはずの労働の量を規制できる唯一の事情でもない」(WN, p. 49. 大河内訳<I>, 84ページ)というものからも明らかであり、さらにまたこのことは、『国富論』第1篇第7章において彼が一つの生産費説(an expenses of production theory)を説いているという事実からも、明らかである、とされる。Bladen [1938], p. 33.

- (6) なお、ブレイドウンは、彼の議論のこの脈絡のなかで「その商品を安価なものにする(cheapen)」という表現を用いているのであるが、その議論の脈絡からして、ここではそれは、「市場における需要と供給によって決定されるものとしてのその商品の価格(price)を安いものにする」ということを意味している、と解されるべきであろう。Bladen [1938], pp. 33-34 を見よ。

なおブレイドウンはさらに、確かにスミスは需要というものを無視してはなかった、として、「もしも……〔銀にたいする〕需要が世界全般での改良の進展(the general progress of improvement)によって増加し、他方、供給のほうはこれと同じ割合で増加しないならば、銀の価値(value)はだんだん上昇するであろう」といったスミスの文言(WN, p. 176. 大河内訳<I>, 293ページ。〔 〕内はブレイドウン)を引用している。Bladen [1938], p. 34.

- (7) なお、ブレイドウンは、彼の議論のこのような脈絡のなかでいま本文でみたような指摘をなすのであるが(Bladen [1938], p. 36)、ブレイドウンはまた他のところで、生産技術の改善につれての異時点での特定諸商品の「労働費用(labour cost)」における諸変化に関してなにごとかを知ることは興味のあることでであろうと主張してもよいかもしれないといった指摘をなしている。その指摘を含め詳しくはBladen [1938], pp. 29-30 を見よ。

- (8) すなわち、ブレイドウンによれば、スミスは諸商品の「真実価格」における諸変化は同一方向でのまたおおよそ同一の大きさでの「労働支配力」における諸変化を産み出すであろうということを想定し、また、より容易に「得ることのできる」品物はより豊富となるであろう、そして需要が同じ速さで増加しないかぎりその品物の市場での「価格」は低下するであろう、というメカニズムを理解していたスミスはその意味でいかなる一商品についてもその生産における効率の改善はその商品を安価なものにするであろうということを想定していた、とみられるのであり、さらにブレイドウンによれば、あらゆる商品の生産に伴う「労苦と骨折り」の量——あらゆる商品の「真実価格」の大きさ——を直接的に測定することの困難性を克服して長期の諸期間にわたっての諸商品の「真実の費用」の諸変化——諸商品の「真

実価格」の諸変化——を測定せんがためにスミスはさらに、長期の諸期間にわたって不変の「真実価格」を保持してきたかあるいは不変の労働量を支配してきたか、あるいはそれら両方の要件をそなえてきた商品を捜し求め、その商品のタームで他の諸商品を見ることによって、長期の諸期間にわたってのそれら他の諸商品の「真実の費用」の諸変化——それら他の諸商品の「真実価格」の諸変化——を測定しようとした、とみられるわけである。

- (9) ブレイドゥンは、スミスがそのようにしたことの理由として、「それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなったので、……それらの金属類が購買または支配できた労働もいっそう少なくなった」(W.N, p. 32. 大河内訳 < I >, 57ページ) といった事実上の内容をもつスミスの文言を引用している。 Bladen [1938], p. 36.
- (10) ブレイドゥンは、スミスのあげる経験的根拠を示すものとして、「穀物で納めることになっている地代は、貨幣で納めることになっている地代にくらべて、その価値をはるかによく保持してきた」(W.N, p. 34. 大河内訳 < I >, 60ページ) というスミスの文言を引用している。 Bladen [1938], p. 36.

また、ブレイドゥンは、このようなものとしてのスミスの議論に関連して、我々が本書の「8」でそのリプリント版を Davenport [1908] と略記しつつ取り扱った H. J. ダヴンポートの著書の第13章〔なお、その第13章の見出しは「延べ払いの標準 (The Standard of Deferred Payments)」〕を見ることを指示するとともに、金の実質価値 (real value) の上昇という意味で金の騰貴ということが言われるときには、その騰貴を、あらゆる種類の労働にたいして金をもつ購買力の増加というものによって測定されるものとみなそうといった内容の考えを含む A. マーシャル (A. Marshall) の証言を引用しつつ J. M. Keynes, ed., *Official Papers by Alfred Marshall* (London: Macmillan, 1926), pp. 32-33 を参照するよう指示し、さらに、C. M. ウォルシュの諸労作、とくに、我々が本書の「5」でとりあげた著書——Walsh [1903]——も見よう指示している。 Bladen [1938], p. 36n. 16.

- (11) ブレイドゥンは、スミスは一つには、「労働者の生活資料」である穀物を所有する人は労働を支配するということから、穀物を選ぶことにたいする理論的な支持を与えようとしている、とみて、つぎのようなスミスの文言を引用している。「それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値 (real value) により近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるだろう。ここでことわっておくが、私は、穀物の等量は、ほとんどの他のどのような商品の等量よりもより近似的に、このことをなすであろう、と言っているのである。というのは、穀物の等量ですらも、そのことを正確にはなしはしないであろうからである。労働者の生活資料は……場合によって非常に異なることがあるのである。」

(WN, p.35. 大河内訳 <I>, 61ページ。) Bladen [1938], p. 36.

また、ブレイドウンによれば、スミスはあとのほうでさらに、穀物を選ぶことにたいする理論的な支持を与えるべく、18世紀の農業革命にもかかわらず、穀物の「真実価格」は長期の諸期間にわたって安定的であったということを主張している、とされる。そしてブレイドウンは、そのことの例証として、『国富論』第1篇第11章における「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」——以下、「余論」と略記する——でスミスが示しているつぎのような文章を引用している。「そのうえ改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働を必要とするであろう……。というのは、耕作が進歩しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである。それゆえ、我々は、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる等量の土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表するであろう……ということを安んじて確信してよいだろう。」(WN, p. 187. 大河内訳 <I>, 309ページ。) Bladen [1938], pp. 36-37.

ただし、ブレイドウンによれば、変化する真実価格の尺度として穀物を選ぶことに対してスミスが与えている理論的な支持は非常に薄弱なものであるとされ、そしてさらに、たぶん真にやっかいなことは、真実価格の尺度といったようなものはそもそも存在しはしないということである、とされる。 Bladen [1938], p. 37.

- (12) Bladen [1938], pp. 30-37. なお、ブレイドウンによれば、『国富論』第1篇第11章の一つの大きな部分を構成している「余論」においては、価値という言葉が「真実価格」という言葉の同義語として使用され、そして銀の「穀物」価格（‘corn’ price of silver, 穀物タームでの銀の価格）における諸変化が銀の「真実価格」における諸変化を測定すると考えられているのであって、そこではスミスは一般的購買力という現代的な意味での貨幣価値といったものにおける諸変化を論じていたわけでも一つの指数問題を取り扱っていたわけでもない、とみられる。しかしまたブレイドウンは、このようにスミスはそこでは、真実価格の諸変化ということに関心をいっていたのであるが、異なる諸商品のあいだでの真実価格の諸変化における相違は、それらの諸商品の、諸交換価値の階層関係（hierarchy）における位置の諸変化を引き起こすであろうゆえ、この「余論」での銀あるいは家畜の真実価格についてのスミスの議論は事実上、このような意味でなぜある諸価値が変化してきたのかという変化する諸価値についての一研究を構成することとなっている、とみて、それに関連するスミスの議論を検討しようとしている。詳しくは、Bladen [1938], pp. 37-40 を見よ。

なお、ブレイドウンは、ここで我々が扱っている1938年の彼の論文において、諸事物の「真実価格」を論じる『国富論』第1篇の第5章と第11章の大半とは本質的

には生産理論のつづきであって、それらは「労働の生産力における改善」ということを取り扱っている、ということ、さらに、「商品の自然価格と市場価格」についての第1篇第7章でのまた『国富論』全体をつうじてのスミスの主要関心事は生産の適切な方向、最良の資源配分ということに関係するものであるからその第7章もまた、生産理論の一つの本質的部分である、ということ、を、主張しようとするのであり (Bladen [1938], pp. 28-29), そしてブレイドウンは、『国富論』第1篇の第5章においてスミスは「真実価格」についての彼の議論を概説しその議論を第11章において使用した、とするのであるが (Bladen [1938], p. 40), さらにまたブレイドウンは、そのような「真実価格」についての議論に加えスミスはまたうで示されたような事柄を主要関心事とする『国富論』第1篇第7章において「自然価格と市場価格」の理論を概説しているのであるが、そのスミスの議論自体は事実上、現代的な意味でのスミスの「価値理論 (theory of value)」を構成しており、それは、非常に現代的な性格をもった短期 (short run) 「市場」価格および長期 (long run) の、正常価格すなわち「自然」価格についての一理論を含んでいる、としつつ、そのようなものとしてのスミスの議論についての検討をなそうとするのであるが、それについては Bladen [1938], pp. 40-43 を見よ。

V.W. ブレイドウン (1938年) についての覚書

『国富論』第1篇第5章には事実上、人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているという実質的なプロセスにまで貨幣のバールを引きおろすこと、財貨の生産の難易の尺度、生産効率の諸変化の尺度、「真実の費用」の諸変化の尺度を見つけ出すこと、といった目的があったように思える、とみるブレイドウンによれば、たしかに第4章の末尾における価値問題に対する論究計画についてのスミスの言葉をその言葉どおりに受け取れば第5章は「交換価値」についてのスミスの所論の一部ということになるのであるが、そこではスミスは事実上、もっぱら、交換価値の問題というよりも事物一般また特定の諸事物がより容易に獲得することができるようになっているかという史的な問題にかかわる事柄を取り扱っていたのであり、そこで展開されている議論は本質的には、第1篇の第1章から第3章の分業論で展開された生産理論のつづきである、とみられるのであった。

そしてブレイドウンによれば、たしかにスミスの語法はルーズなものではあったけれども、スミスは、「それを獲得するための労苦と骨折り」と彼みずからが定義する事物の「真実価格」というものについての議論という形で、

実質的な経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとみつつ事実上、財貨の生産の難易の尺度、生産効率の諸変化の尺度、「真実の費用」の諸変化の尺度を示そうとしたのであった、とみられ、そしてそのスミスの議論は概ね以下のようなものとして捉えられるのであった。

すなわち、「それを獲得するための労苦と骨折り」としての事物の「真実価格」といった考えそのものは、全体としての社会という観点あるいはなんらかの孤立した自給自足的な小自作農のような観点からすれば、簡単かつ理にかなったものであるものであり、そしてスミスはそのような事物の「真実価格」の大きさの尺度として、すなわち、その事物を獲得することの難易の程度の一検査手段として、労働の不効用不変ということから、労働の継続期間——つまり、その事物を獲得するための労働の量——というものをあげようとするのであった。しかしながら分業が大いに進展しそしてたいいの生産が販売のためであって直接的な使用のためでないといった社会での諸個人について「それを獲得するための労苦と骨折り」としての事物の「真実価格」といった考えを当てはめることには困難が存在する。すなわち、たしかに、たとえば、「貨幣でもって……買われるものは、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものとまったく同じように、労働によって購買されるのである」といったスミスの文言は我々の大部分については理にかなわないものでもないかもしれない、だがそれは財産所得というものを無視しているのであり、そしてまたそれは、我々が我々の労働でもって購買しうる財貨の量は、我々の支配しうる労働の効率に、また同じように、我々の支配しうる労働の量そのものに、依存する、ということの意味している。このような事情をうけてスミスは、「労働支配力」というものに注意を向けることとなるのであった。たしかにスミスはある対象物の「真実価格」とその「労働支配力」とのあいだの通常の関係といったことについてはなんらかの注意をもって検討しているわけではない、しかし彼は、諸商品の「真実価格」における諸変化は、同一方向でのまたおおよそ同一の大きさでの「労働支配力」における諸変化を産み出すであろうということを想定していたのであった。また、商品の生産効率の上昇は当該商品の供給量の増加をもたらすであろうそしてその商品に対する需要が同一步調で増加しないかぎりその商品の市場での「価格」は低下するであろうというメカニズムを理解していたスミスは、いかな

る一商品についてもその生産における効率の改善は、その意味で、その商品を安価なものにするであろう、ということ想定していたのであった——いかなる一商品についてもその生産における効率の改善は、その商品の市場での「価格」の低下を産み出すであろう、ということ想定していたのであった——。なお、この「真実価格」についての議論において事実上、長期の諸期間にわたっての「真実の費用」における諸変化ということを取り扱っていたスミスは、あらゆる商品の生産に伴う「労苦と骨折」の量——あらゆる商品の「真実価格」の大きさ——を直接的に測定することの困難性を克服して長期の諸期間にわたっての諸商品の「真実の費用」の諸変化——諸商品の「真実価格」の諸変化——を測定せんがために、さらに、長期の諸期間にわたって不変の「真実価格」を保持してきたかあるいは不変の労働量を支配してきたか、あるいはそれら両方の要件をそなえてきた商品を探し求め、その商品のタームで他の諸商品を見ることによって、長期の諸期間にわたってのそれら他の諸商品の「真実の費用」の諸変化——それら他の諸商品の「真実価格」の諸変化——を測定しようと考えたのであった。そしてそのような商品としてスミスは、銀を退け、穀物を選んだのであった。スミスは、事実上このような内容をもつ「真実価格」についての彼の議論を『国富論』第1篇の第5章で概説し、そしてその議論を第11章で使用したのである、というわけである。

なお、またブレイドダウンによれば、スミスはうえのような形で長期の諸期間にわたっての「真実の費用」における諸変化ということを取り扱っていたのだと考えることと、そのような諸変化をスミスが測定すること自体をよしとすることあるいはさらに、そもそもそのような測定は可能なものであるということ自体を認めることとは、まったく別のことである、とされるときも、さらに、うえでみられたような機能を果たすものとして「穀物」を選ぶことに対してスミスの与えている理論的な支持は非常に薄弱なものであるであり、またたぶん真にやっかいなことはスミスの言うような「真実価格」の尺度といったようなものはそもそも存在しないということである、とされるのであった。

21. A. H. ジェンキンズ (1948年)

A. H. ジェンキンズ (A. H. Jenkins) は、1948年にその著作権が成立した彼の一労作 (Arthur Hugh Jenkins, *Adam Smith Today: An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, Simplified, Shortened and Modernized*, New York: Richard R. Smith, ©1948; reissue, Port Washington, N. Y. : Kennikat Press, 1969. なお、ここでは上掲の重版を使用するのであるが、ここで取り扱うジェンキンズムの研究の発表年の区分については上掲書の著作権の成立した年、1948年をとり、そして、以下では、上掲の重版を Jenkins [1948] と略記することとする) において、その労作の副題が示しているように、『国富論』においてスミスが展開している論述を、平易で短縮した形で、しかも現代風の形で、再現しようとするのであるが、そのような形でスミスの議論を示していく過程でジェンキンズは、『国富論』においてスミスはある特定の対象物の効用を表すものとしての「使用価値」と、その対象物を交換に供することによって得られる他の諸財貨を獲得する力としての「交換価値」とを区別し、そしてそれらのうちの「交換価値」の考察にむかい、そしてまた、その交換価値の考察の一環として、交換価値の真の尺度は何であるか、ということの問題にした、とみるのであった。⁽¹⁾そしてそのようなものとしての交換価値の尺度に関するスミスの議論についてジェンキンズは、つぎのような見方をとっている、といえよう。

① スミスはまず、人が富んでいたり貧しかったりするのとは人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかということによるのであるが、分業が徹底的に行われている文明国では、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さい部分にすぎず、彼はその圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするものであり、したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようと思わない人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しくなる、

それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度（measure）である，とする。さらにスミスはそれにつづけて、あらゆる物の真実価格（real price）、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にとって真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りであり、そして、あらゆる物が、それを所有している人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ち（worth）があるかといえば——換言すれば、その物の真実「交換価値」（real “value in exchange”）は——、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りであるのであって、貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分自身の肉体の労苦によって獲得するものとまったく同じように、労働によって購買されるのであり、労働こそが、すべての物にたいして支払われた最初の代価（first price）、本来の購買貨幣（original purchase-money）であったのであって、世界のすべての富（wealth）が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってであるのであり、そしてその富の価値は、この富を所有しそしてそれを他のなにかと交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである、とする。⁽²⁾

② しかしまたスミスは、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度であるけれどもそういった価値はふつう、労働の量ではなくて、貨幣で、表される、とする。⁽³⁾

③ しかしながらスミスはまた、貨幣自体は他の諸商品と同様にその価値において変動するのであって、⁽⁴⁾それ自体の価値において変動する一商品は他のいかなる物の価値の正確な尺度でもありえない、それにたいし、労働はそれ自体の価値において変動しないのであり、労働こそが、唯一の正確な価値尺度であるとともに唯一の普遍的な価値尺度——それによって時と場所のいかに問わず我々がさまざまな商品の価値を比較することのできる唯一の標準——である、とする。⁽⁵⁾

④ このようにスミスは、唯一の正確で普遍的な尺度は労働であるとするのであるが、価値尺度としての貨幣（金、銀、貴金属）と穀物（grain）とを比較した場合には、世紀から世紀にかけては後者が、年から年にかけては、前者が、ヨリ良い尺度である、とする。そしてその理由は、世紀から世紀に

かけては、等量の穀物は、等量の貨幣（金，銀，貴金属）よりもヨリいっそう同一量に近い労働量を支配するであろうし、年から年にかけては、等量の貨幣（金，銀，貴金属）は、等量の穀物よりもヨリいっそう同一量に近い労働量を支配するであろうから、ということであった。⁽⁶⁾

⑤ またスミスは、初期未開の社会状態では事物の交換価値はその事物の獲得、生産に費やされる労働量によって決定（fix）されるのであるけれども資本が蓄積され土地が占有されている社会状態においてはすべての商品の価格あるいは交換価値はその商品を産出し市場にもたらすのに要する労働、資本、土地に対する賃金、利潤、地代といったものから構成されるのであってそれらがすべての交換価値の三つの本源的源泉（sources）となる、としつつも、価格あるいは交換価値のそれらの構成部分の各々の真実価値そのものは、それらの各々が購買もしくは支配しうる労働量によって測定される、としている。⁽⁷⁾

（注）

(1) Jenkins [1948], p. 48.

(2) Jenkins [1948], pp. 49-50. WN, pp. 30-31 (大河内訳〈I〉, 52-53ページ)を参照せよ。なお、ジェンキンズによれば、スミスはこのように「それゆえ、労働はすべての商品の交換価値（exchangeable value）の真の尺度である」とし、さらにつけて、「あらゆる物の真実価格、すなわち、……」で始まる議論を展開しているのであるが、そこではスミスはただ、財貨の交換は労働の交換であるということ、したがってまた、貨幣の使用および貨幣タームでの価値の表示といったことは、便利さという目的のための、人間の一つの有用な工夫にすぎない、ということを示そうとしているだけなのであり、そして、そこで考えられていることは、あなたがある事物を売るときには、あなたは本当は、あなた自身の過去の労働を売っているのだ、また、あなたが買うときには、あなたは、だれか他の人の過去の労働を買っているのだ、あなたが買うものの費用とは、その当該のものとあなたが交換するもののなかにあなたが投入した労働であるのだ、といったことなのであり、そしてこのようなことは、どのような、価値の説明すなわち理論（definition or theory of value）とも関係はないのであって、事実スミスはそこでは、経済学における厳密な命題というよりもむしろ哲学的な議論にふけっているのである、とされる。そしてまたジェンキンズによれば、スミスの批評家たちがスミスを労働費用価値〔説〕論者（labor-cost-value economist）として分類するさい一部はそこでのスミスの議論にもとづいているということには疑いはないのであり、そしてスミスがそこで一つの価

値理論 (theory of value) をはっきり示しているのだと想定するときには、たとえば、労働は価値の一つの原因 (cause) ではあるが唯一の原因ではない、さらに、労働が価値の尺度であるといったことはなおさらない、といった批判、また、スミスはそこで「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、……」といった表現を用いているけれどもそれはスミスの誤りであってそこではスミスは真実「価格」のことを言おうとしていたのではなくて「あらゆる物の真実価値 (real value)」のことを言おうとしていたのである、なぜなら価格とは、ある所与の対象物の、ある所与の時点での、貨幣との関係における、価値であるからである、といった批判は、妥当しうるのであるが、スミスがそこで一つの値理論をはっきり示そうとしていたのだというようなことは信じがたい、とみられるのであった。Jenkins [1948], p. 50n. 2.

なお、ジェンキンズは以上のことに先立って他の箇所で、「費用 (cost)」, 「価格 (price)」, 「価値 (value)」という三つの密接に関連する言葉は、またとくに後の方の二者は、混同されやすいとして、それらの言葉自体の本来の意味ということに関して概ねつぎのような内容をもった説明を付そうとしている。すなわち、いまある製造業者が、むかし大いに使用されたある品物に対する市場がいまも存在すると誤って判断したとする。その場合、その製造業者は、労働者たちおよび材料の助けをかりて、5ドルの支出でその品物一つを生産するかもしれない。これが「費用 (cost)」である。そしてその製造業者は、間接費用と販売費および彼の利潤を考慮に入れて12.5ドルでその品物を売る広告をするかもしれない。これが「価格 (price)」である。しかし、だれもその品物を買おうとしないのであるから、その品物の「価値 (value)」(あるいは、「交換価値 (value in exchange)」) はゼロである。「費用」は、貨幣で表されることができ、借入金に対する利子のようななんらかの他の諸経費とともにある所与の品物あるいは商品の生産に費やされた賃金および地代を、意味する。「価格」あるいは「真実価格 (real price)」あるいは「自然価格 (natural price)」といったものは、これらの諸費用の合計に、たとえどのようなものであれとにかく売り手がその品物あるいは商品の販売から期待する利潤をプラスしたものであり、それは、ある事物がそれで売られるはずのところのものなのである。(価格もまた貨幣のタームで表される、したがって、貨幣は、価値をもつけれども、価格をもたない。) 他方、「価値」あるいは「交換価値」とは、ある事物が実際にそれで売られるであろうところのものなのであり、それは、自然価格に等しいかもしれないし、それより高いこともあるいはそれより低いかもしれない。それが、貨幣の形で、どれほどのものであるかということが、売り手が大きな、あるいは正常な、あるいはまた小さな利潤を得るか、あるいは売り手が損失をこうむりつつ販売しさえするか、ということを決定するのである。Jenkins [1948], p. 49 n. 1.

- (3) Jenkins [1948], p. 50. なお、ジェンキンズは、この間の事情についてのスミスの説明を再現しようとするのであるが、その内容は概ね以下のようなものとして示

21. A. H. ジェンキンズ (1948年)

すこともできよう。すなわち、二つの異なる労働量のあいだの割合を確定するのは困難な場合が多い。この割合を確定するためには、二つの異なった種類の作業に費やされた時間だけでつねに十分であるというわけではなく、耐え忍ばれた辛さや発揮された創意のさまざまな程度等々といった、異種類、異質労働の問題を考慮に入れなければならない。異なった種類の労働の異なった生産物の相互の交換においては、ある正確な尺度によってではなく、たとえ正確ではなくても日常生活の業務を処理していくには十分に近いようなおおその同等性を目安にして市場のかけひきや交渉によって、そのような労働の相違についてのいくらかの斟酌がなされるのが普通であるが、一つの労働量をもう一つの労働量と比較すること自体は非常に困難なことである。それに比べれば、ある商品をもう一つの別の商品のある一定量と比較することのほうがはるかに容易である。しかしまた物々交換というものは、その商品の、他のある一定の商品すなわち貨幣のある既知の量との交換よりも、大いに劣っているのであり、したがってまた商品の価値をその商品と交換に得られる貨幣の量によって評価することのほうが自然でかつ理解しやすいことであるのである。かくしてすべての商品の交換価値は、一般に、その商品と交換に得られる貨幣の量によって評価される、ということになるのである。Jenkins [1948], pp. 50-51.

- (4) なお、ジェンキンズは、歴史上の事実を引き合いに出しながらの貨幣の価値の変動に関するスミスの説明を再現しようとするのであるが、その内容はつぎのようなものとして示すこともできよう。すなわち、貨幣としての金、銀をとりあげれば、それらのものの価値は、その特定の時期にたまたま知られている諸鉱山の多産性ということにつねに依存するのである。そしてもし豊かな鉱山が発見されるとそれらの金属類を鉱山から市場にもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなるため、それらの金属類が市場にもたらされたときにそれらが購買、支配できる労働もいっそう少なくなる、つまり、金や銀でさえその価値において変動する、というわけである。Jenkins [1948], pp. 51-52.

- (5) この間の事情に関するスミスの議論のジェンキンズによる要約的叙述そのものについては、Jenkins [1948], pp. 51-53 を見よ。なお、そのなかにはジェンキンズのつぎのような内容をもった指摘も見いだされる。すなわち、労働者がみずからの生活を営むにさいして自分の必要とした欲求するものを交換によって得るために持っているものは、生産に供すべき労働だけであり、その意味で、労働は労働者自身にとっては価値において変動しないと言えるかもしれない。だが、一人の人間の1時間の労働は、もう一人の別の人間が同じだけの時間で生産する価値の100分の1も生産しないかもしれない。それゆえ、「人時 (man-hour)」といったような単位は、貨幣に代わる価値の尺度としては、とても使用されえないのであり、ある対象物のなかに存する労働の量といったものも、価格あるいは交換価値を定めるためには、用いられえないのである。(Jenkins [1948], p.52, p.52n. 3.) また、たしかに労働の

1 時間はどんな場所においてもどんな時代においても1時間であるということにはかわりはない。だが、1時間の労働の生産性そのものは広範に変動するかもしれないしまた事実変動するのである。スミスの言うようには労働でさえも唯一の正確で普遍的な尺度ではありえないのであり、またおそらく真に正確で普遍的な尺度といったようなものは存在しはしないのである。(Jenkins [1948], p. 53n. 4.)

- (6) Jenkins [1948], p. 53. なお、ジェンキンズは、スミスの議論でこのように世紀から世紀にかけてのあるいは年から年にかけての価値尺度といったことが問題になるのは地代の問題に関してである、とみつつ、事実上スミスの議論ではそのような地代の問題は日々の売買——人間生活の通常のまた一般的な取引——の問題よりもはるかに重要性の少ないもの、ということになっていると捉える。そして、ジェンキンズは、スミスは貨幣で表された価値はある所与の時と場所では正確なものであって、そのような日々の売買といった問題のためには貨幣で表された価値で十分であると考えるとともに、さらに、遠い場所の間での取引においてさえそのような貨幣で表された価値が考慮される唯一の事柄であると考えている、と捉えつつ、以後、事実上『国富論』第1篇第5章での、貨幣の制度、歴史その他の貨幣に関するスミスの議論を示そうとしている。Jenkins [1948], pp. 53-57 を見よ。
- (7) 詳しくは、Jenkins [1948], pp. 58-63 を見よ。

A. H. ジェンキンズ (1948年) についての覚書

スミスは『国富論』第1篇第5章の冒頭のパラグラフの末尾で「それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」という文言を示し、そしてそれにつづけて、「あらゆる物の真実価格、すなわち、……」で始まり「そしてその富の価値は……それで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである」で終わるパラグラフを示すのであるが、ジェンキンズによれば、スミスはそこでは、ただ、財貨の交換は労働の交換であるということ、したがってまた、貨幣の使用や貨幣タームでの価値の表示といったことは、便利さという目的のための、人間の工夫にすぎない、ということを示そうとしているだけであり、そしてそこで考えられていることは、あなたがある物物を売るときには、あなたは本当は、あなた自身の過去の労働を売っているのだ、また、あなたが買うときには、あなたは、だれか他の人の過去の労働を買っているのだ、あなたが買うものの費用とは、そのあなたが買うものを得るがためにあなたが交換に供するもののなかにあなたが投入した労働であるのだ、といったことなのである、とみられるのであった。そしてジェンキン

21. A. H. ジェンキンズ (1948年)

ズによれば、そのようなことは、どのような価値の説明とも、すなわち、価値の原因、決定といったことを取り扱うものとしてのどのような価値理論とも、関係はないのであって、事実そこではスミスは経済学における厳密な命題というよりもむしろ哲学的な議論にふけっているのである、とみられるのであった。

また、ジェンキンズによれば、スミスはまた異質労働の問題のゆえに二つの異なる労働量を互いに比較すること自体は非常に困難なことであって、真の価値尺度は労働であるのではあるが商品の交換価値はふつう労働ではなく貨幣で表されるということを認めつつも、それ自体の価値が変動する貨幣は正確な価値尺度ではありえないのであってそれ自体の価値において変動することのない労働こそが唯一の正確で普遍的な価値尺度であるとしたのであった、とみられるのであった。そして、ジェンキンズは、労働者がみずからの生活を営むにさいして自分が必要とした欲求するものを交換をつうじて得るために持っているものは生産に供すべき自分の労働だけであり、その意味では労働は労働者にとっては価値において変動するものでないと言えるかもしれない、とみつつも、同時にまた、スミスのいう尺度としての「労働」を事実上どちらかといえば「生産力」として捉えつつジェンキンズは、諸労働の間の生産性の相違、労働生産性の可変性ということのゆえに労働、人時といったようなものは正確で普遍的な尺度たりえないのであり、また、もともと真に正確で普遍的な尺度といったようなものはおそらく存在しはしないのだ、とするのであった。

さらにまたジェンキンズによれば、スミスはうえのように労働を唯一の正確で普遍的な価値尺度とするのであるが価値尺度としての貨幣（金、銀、貴金属）と穀物を比較した場合には、労働支配力の相対的安定性という理由から世紀から世紀にかけては後者が、年から年にかけては前者が、より良い尺度であるとした、とみられるのであった。

ただまたジェンキンズによれば、スミスがこのように世紀から世紀にかけてのあるいは年から年にかけての価値尺度といったことを問題にしているのは地代の問題に関してであるのであるがスミスは、そのような地代の問題は日々の売買の問題よりはるかに重要性の少ないものと考えとともに、貨幣で表された価値はある所与の時と場所では正確なものであるのであってそのような日々の売買といった問題のためには貨幣で表された価値で十分であ

り、また遠い場所の間での取引においてさえそのような貨幣で表された価値が考慮される唯一の事柄であると考えた、とみられるのであった。

なお、スミスの議論における「価格」を「交換価値」と同義的なものとして捉えつつジェンキンスはまた、スミスは事物の交換価値の原因、決定といったことを、初期未開の社会状態については投下される労働でもって、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態については産出し市場にもたらすのに要する労働、資本、土地に対する賃金、利潤、地代でもって、説明したのであるが同時にまたスミスは価格の構成部分としてのそれら賃金、利潤、地代の各々の真実価値そのものはそれら各々が支配しうる労働量という労働によって測定されるとしている、とみるのであった。

22. H. ミント (1948年)

H. ミント (H. Myint) は、その元の版が1948年に刊行された彼の一著書 (Hla Myint, *Theories of Welfare Economics*, [London: Longmans, Green & Co.; Cambridge, Mass.: Harvard University Press], 1948; reprint edition, New York: Augustus M. Kelley, 1965. なお、ここでは上掲のリプリント版を使用するのであるが、ここで取り扱うミントの研究の発表年の区分については上掲書の元の版が刊行された年、1948年をとり、そして、以下では、上掲リプリント版を Myint [1948] と略記することとする) のなかで彼の議論を展開する過程で、価値尺度に関するスミスの議論に関連して、以下のような見方をしている、といえよう。

① 価値尺度についてのスミスの議論は、国民分配分 (national dividend)、社会産出物 (social output)、社会の経済的厚生 (economic welfare of society) の、とくに、そのありうる変化の、指標に関する議論として、捉えることができる。⁽¹⁾

② スミスは労働を価値の真の尺度とするのであるが、それは、スミスを含む古典派経済学者たちの労働を重視する共通の出発点に拠っている。⁽²⁾ なおそのさい、スミスは、1 平均労働単位を遂行することの不効用は不変でありかつすべての人にとって同一であると仮定している。⁽³⁾

③ スミスは、「初期未開の社会状態」では諸商品の生産に「具現された (embodied, 実際に投下された)」労働量によって「価値」を測定しようとあるいはそれらの諸商品によって「支配される」労働量によって「価値」を測定しようと問題ではないが、発達した経済では、「支配される」労働量によって測定されなければならない、と考えた。⁽⁴⁾

〈補記〉

①で触れたように、ミントが価値尺度についてのスミスの議論を問題とするとき、そこではもっぱら、国民分配分、社会産出物、社会の経済的厚生、とくに、そのありうる変化の、指標についての議論として捉えるのであるが、

以下において、そのようなものとしてのスミスの所論についてのミントの検討を整理しておくこととする。

なお、そのようなものとしてのスミスの議論に関するミントの検討は、大きく分けて、つぎの三つのものから成っている、といえる。すなわち、(1)スミスの議論における、国民分配分の価値の、「具現された労働」尺度とあらゆるタイプの経済に妥当するものとしての「支配される労働」尺度、といった問題についてのもの、(2)そのようなあらゆるタイプの経済に妥当する尺度としての「支配される労働」という尺度によって測定される社会の「年々の生産物」(国民分配分)の「真実価値 (real value)」とはどのような内容のものであったのか、ということにかかわる問題についてのもの、(3)上記(2)のなかで検討されるスミスの議論のうち、とりわけ、社会の「年々の生産物」の「真実価値」を財貨の物量として捉えようとするものとしてのスミスの議論との関連での、社会産出物および社会の経済的厚生におけるありうる増加の指標としての「支配される」労働量というスミスの考えを支えている諸仮定、といったことにかかわる問題についてのもの、である。以下、その各々についてみていくこととする。

〔(1)の問題に関して〕：まず、(1)の問題に関しては、ミントはつぎのような見方を示している。それによれば、スミスは、労働が唯一の稀少生産要素でありしたがってまた労働が全国民分配分を受け取る初期未開の社会状態といった特殊な状況においてのみ、「具現された労働」と「支配される労働」とは相互に代替しうる、と考えた。それにたいし、発達した経済においては、「具現された」労働量は、分配分のうちの賃金となる部分の価値を測定することができるだけであり、地代および利潤となる分け前の範囲にまでおよぶ分配分の全価値を測定することはできない、とスミスは信じた。かくして、スミスの議論では、あらゆるタイプの経済に妥当する国民分配分の価値の一般的な尺度は、その国民分配分によって「支配される」労働量であって、その生産に「具現された」労働量ではない、とされることとなった。⁵⁾

〔(2)の問題に関して〕：つぎに、(2)の問題に関してミントはつぎのような見方を示しているといえる。それによれば、スミスの議論には、一方で④〔社会の〕「年々の生産物」の「真実価値」、社会の経済的厚生を、主観的なター

ムで捉えるといった考え方（ミントは、これを「主観的所得アプローチ (subjective income approach)」と呼んでもよい、としている）が存在するとともに、他方で④財貨の物量のタームで捉えるといった考え方（ミントは、これを「物的産出量アプローチ (physical output approach)」と呼んでもよい、としている）が存在し、しかもスミスはそれらの間で動揺しているのである。⁽⁶⁾

なお、ミントによれば、④の「主観的所得アプローチ」といった考え方は、スミスのつぎの文言すなわち「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえ、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分の肉体的労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである。〔その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦を我々からはぶいてくれる。〕それらはある一定量の労働の、価値を含んでおり、その一定量の労働の、価値を我々は、そのときそれと等しい量の労働の、価値を含んでいるとみなされるものと、交換するのである。労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。〔 〕内は引用にさいしてミントが抜かしている箇所。また、ミント自身はこの引用文においてもまた以下の引用文においても、必ずしもスミスの原典中の言葉の一つひとつをそのまま示しているわけではないのであるが、その場合には、ミントがあげている引用箇所に対応するスミスの原文にしたがうこととする) という文言によって示唆されている、とされる。すなわちミントによれば、この文言は、スミスが自然との人間の闘争の本質は、労働の物理的単位量中にあるというよりもむしろ主観的な不効用の支出の中にあるものと考えていたということを示唆しているのであり、そして、支出と収入とは互いに比肩するものであるにちがいないゆえ、この文言は、スミスは客観的な物的産出量という概念とは別個のものとしての、主観的な所得概念に到達することを試みていたのだ、ということ暗に意味している、とされるのである。そしてまた、ミントに

よれば、スミスが「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。〔労働の不効用というタームで〕彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない」（WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。〔 〕内はミント）と述べて、社会産出物の「価値」を測定するためのベースを提唱したとき、この考えはいつそう強められるのであった、とされる。⁽⁷⁾

他方、⑥の「物的産出量アプローチ」という考え方については、ミントは、つぎのような説明を示している。すなわち、ミントによれば、経済システムの理想的な組織についてのスミスの基本的な考えの主要な部分は、いわば満足の量は物的生産物の量に比例すると想定することによって、分析の物的なレベルにその基礎を置いていたのであり、そしてこのことは、主観的所得アプローチというよりもむしろ物的産出量アプローチを示唆しているのである、とされるのである。そしてまたミントによれば、ここでは「真実の (real)」という用語は、財貨の物量と同一のことを表しているように思えるのであり、またこのような考え方にしたがえば、スミスはたんにつぎのような理由から、すなわち、スミスは、ある所与の貨幣額で表される購買力 (purchasing power) がある程度減価するかもしれないようなときにもある所与の労働量で表される購買力は、その労働が生産に向けられるときに産み出すであろう実物財の総計以下には低下しえない、と信じていた、という理由から、労働を「真実価値 (real value)」の理想的な尺度と考えたように思える、とされるのであった。⁽⁸⁾

〔(3)の問題に関して〕：最後に、うえのようなものとしてのスミスの議論、とりわけうえの⑥のようなものとしてのスミスの議論に関連させつつミントは、社会産出物および〔社会の〕経済的厚生におけるありうる増加の指標としての「支配される」労働量というスミスの考えはつぎのような諸仮定に基づいているとして、その各々に関連してつぎのような指摘をなしている。

④それは、労働供給が完全に弾力的であるということ、および、社会産出物のうち〔「生産的」労働者にたいする〕賃金基金のためにとおかれる

部分が大きくなっていくかぎり、年々に支配されうる労働量は増加していくということ、を仮定している。このことは、スミスはある所与の年度についての社会産出物の正確な測定ということよりもむしろ、社会産出物の長期的な (long-term) 趨勢あるいは社会産出物の「通常価値または平均価値」に、関心を抱いていたということを、示唆している。あるいは少なくとも、スミスの議論は、着実に増加しつつある人口ということがあるときにその経済システムは拡大状態の途上にあるのだ、ということ、を、暗に述べている (WN, p. 54 [大河内訳 < I >, 92ページ] を参照せよ)⁽⁹⁾。

⑥我々の算術例では、計算を、労働者は収穫一定のもとで働くという仮定に基づかせていたのであるが、このことは、事実上、スミスの主張を実際よりも控え目に言っていることになる。すなわち、土地からの収穫逡減の法則に心を奪われていたその後の古典派の経済学者たちとは対照的に、スミスは、人口増加それ自体は技術的不可分性ということを克服することによって労働の平均的な物的生産量を向上させるであろうということ、を、信じていた。つまり、「労働者の数が多くなればなるほど、彼らはますます仕事のさまざまな種類や小部分に自然に分かれる」のであり、そしてこのことが、「より少ない量の労働でより多い量の製品を生産」させる、というのである (WN, p. 86 [大河内訳 < I >, 147ページ])⁽¹⁰⁾。

⑦スミスの議論では、ひとたびある一定量の労働が生産に「具現」されれば、それはつねに、経済的厚生という点でそれ自体に等しいものよりもより多くの (あるいは少なくともそれより下まわることのけっしてない) ものを一般に支配しうる場所の社会産出物を、生産しうるのであり、そしてこの余剰生産物は、地代および利潤という形で支払われる取り分に等しいということが、仮定されている。このことは、つぎの三つのことを含意している。
(i) まずそれは、たとえもし社会の経済的厚生が満足の量にあるとしても、これらの満足の量は、物的生産物の量におおよそ比例して増加するものとみなされてもよい、ということを含意している。(ii) それは、物的な社会産出物と社会的所得とのあいだには目につくほどの乖離はなにも存在しはしないということ、を、より正確に言うとならば生産と消費は同一速度で一致して進行させられるということ、をしたがってまた、マルサスのグラットは存在しないということ、を含意している。(iii) 最後に、それは、労働が「剰余」価値を創るのでありしたがってまた労働は発達した経済では「搾取」されるので

あるというマルクスの命題を、含意している。このことは、スミスは彼の時代の興隆しつつあった資本家階級の弁明者であったという一般に流布している社会主義者的な見解に対する反駁として、指摘するに値する。未開状態から発達した状態への社会の転換についてのスミスの説明を注意深く読めば、それは、マルクスの議論を否定しているというよりもむしろ確証しているかのようにみえるであろう(『国富論』第1篇第6章)。もしスミスが搾取についての議論を長々と展開しはしなかったとしても、それはたぶん、スミスは社会の様々な階級の間への全体としての社会の総経済的厚生⁽¹²⁾の分配ということよりもむしろ、全体としての社会の総経済的厚生の変動ということに、ヨリ多くの関心を抱いていたからである。あるいは、現代の経済学者ならそう言うであろうように、スミスは「分配厚生経済学 (the Distribution Welfare economics)」よりもむしろ「生産厚生経済学 (the Production Welfare economics)」に関心を抱いていたからである。いずれにせよ、スミスを階級闘争を攪乱する徒党の一員と称するまえに、人はつぎの力強い文言を思い起こすべきである。「下層の人々の生活条件がこのように改善されたことは、社会にとって利益とみるべきか、それとも不都合とみるべきか。答えは一目瞭然である。さまざまな種類の使用人、労働者、職人は、すべての巨大な政治社会の圧倒的大部分を構成している。この大部分の者の生活条件を改善することが、その全体にとって不都合とみなされるはずはけっしてない。どんな社会も、その成員の圧倒的大部分が貧しくみじめであるとき、その社会が隆盛で幸福であろうはずはけっしてない。」(WN, pp. 78-79. 大河内訳< I >, 133-134ページ。⁽¹³⁾)

(注)

(1) Myint [1948], pp. 15ff.

(2) ミントによれば、古典派経済学者たちの共通の出発点は、つぎの二つの命題に要約されうる、とされる。すなわち、(i) 経済プロセスの本質は天然資源にたいして人間労働をくわえることにあるのであるから、無視しうる例外を別とすれば富(wealth)の全品目は労働から生じる。天然資源を完成品に変容させることにおいて、労働はそれらに「価値」を授けるのであり、そしてそれは、経済財を自由財から区別するところの価値の入手ということなのである。したがって労働は価値ならびに富の、源泉(source)および尺度(measure)とみなされてもよく、そして、社会会計に関係する経済財は、労働の生産物に限られるべきである。(ii) 労働は、価値および経済的厚生の、貨幣よりも重要な尺度である。貨幣はたんに、「名目的な」

22. H. ミント (1948年)

標準、生産および消費の実質的なあるいは物的なプロセスをおおう「ベール」であるにすぎないのにたいし、労働はこれらのプロセスと密接にまたおのずと結びつけられる。それゆえ、貨幣のタームでの価値は、実物財の量におけるそれに対応する諸変化なしに大きくされたり小さくされたりするかもしれないのにたいし、労働のタームでの価値は、そのような歪曲をそれほどにはこうむりやすくないであろう。Myint [1948], p. 15.

(3) Myint [1948], pp. 15-16.

(4) その間の事情をミントはつぎのように説明している。それによれば、スミスはたとえ少し暗黙的にすぎるとしても、「初期未開の社会状態」では諸商品の生産に「具現された」労働量によって「価値」を測定しようと、あるいは、それらの商品によって「支配される」労働量によって測定しようと問題ではないとした。すなわち、そこでは労働が唯一の稀少生産要素であると仮定されていたため、労働は、全社会産出物をその賃金として受け取ることとなるであろう。したがって、「支配される」労働量は「具現された」労働量に等しいであろう。というのは、それらはたんに、同一の事柄の相対する面にすぎないからである。これにたいし、発達した経済では、資本と土地が稀少な要素となるであろう。したがってまた、それらは、社会産出物の分け前を要求するであろう。したがってそのときには、「具現された」労働量は、産出物のうち、賃金の形で支払われる部分だけの価値しか測定しないであろう。したがって、賃金だけでなく地代や利潤を含めた国民分配分の全価値を得るためには、それを、それが所与の賃金率で全体として「支配する」ことのできる総労働量によって測定しなければならないのである。Myint [1948], p.17.

(5) Myint [1948], p. 19. なお、ミントはつづけて、出典を明示することなしに引用文の形でつぎのような文言を示している。「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値 (real value) は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである。労働は、地代に分かれる部分の価値だけでなく、利潤に分かれる部分の価値をも測るのである。」Myint [1948], p. 19. [ただし、WN, p. 50 (大河内訳くI), 85ページ) には、つぎのようなスミスの文言が見いだされる。「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである。労働は、価格のなかの労働に分かれる部分の価値だけでなく、地代に分かれる部分の価値、および利潤に分かれる部分の価値をも測るのである。」]

(6) Myint [1948], pp. 19 ff.

(7) Myint [1948], pp. 19-20. なお、ミントは、いまみた『国富論』からの二つの引用文のなかに含まれている議論は算術的な例によって説明できるとして、つぎのような説明をなしている。すなわち、ある所与の社会産出物が現行の価格および賃金

水準のもとでは、1,000単位の労働を支配することができる（すなわち、 $\frac{\text{社会産生物の貨幣価値}}{\text{貨幣賃金率}} = 1,000$ ）と仮定する。そしていまもし、コンスタントでかつすべての人にとって同一であるところの1平均労働単位を遂行することの不効用が k で測定されうらば、そのときには、社会産出物を構成している諸商品は、 $k \times 1,000$ に等しいだけの満足量あるいは主観的所得を含んでいることになる、というのである。Myint [1948], p. 20.

- (8) Myint [1948], p.20. なお、ミントによれば、以上のような点から、ここでは、ある所与の年度の社会産出物がたとえば貨幣1,000ポンドを支配できるといった事実はいったん意味しないかもしれないが、ある所与の年度の社会産出物がたとえば1,000単位の労働を支配するという事実は、もしこれらすべての労働単位が「生産的に」使用されるならその社会は次の年度に1,000単位の労働の、物的生産物を保証されるであろうということを、意味するのであり、そして、この議論の意義は、発達した経済においては国民分配分によって「支配される」労働量は地代および利潤の形で支払われる分配分の部分の程度だけ、その国民分配分の生産に「具現された」労働量を超過するというスミスの命題（なお、ミントによれば、スミスは暗黙のうちに、社会産出物によって「支配される」労働量はつねに、たとえその生産に「具現された」労働量よりも多くはないということがあっても、少なくともそれを下まわることはないであろうということを仮定していた、とされている。Myint [1948], p. 17）を想起することによって、正しく理解されるであろう、とされる。そしてミントは、つぎにみるような仮定をもうけつつ、その議論の意義を以下のように説明している。すなわち、いま仮に、1,000単位の労働を支配するその時の社会産出物は、一般的な賃金財 W のタームで1,000単位の物的産出物からなっており、そしてそのうち 600 W 単位は賃金として支払われ、200 W 単位は地代として 200 W 単位は利潤として支払われる、とする。スミスにしたがえばこのような事態はつぎのことを意味する。(i) 1,000 W 単位のその時の社会産出物はいま1,000単位の労働を支配するのであるけれども、この1,000 W 単位の社会産出物は、その生産に「具現された」600単位だけの労働の生産物である、また、(ii) もしその支配される労働の全量が「生産的」目的に使用されたならば、すなわち、もし地代と利潤を構成する 400 W 単位が全部貯蓄されておりそして次年度の生産に再投資あるいは「具現され」たならば、その次年度の社会産出物は、非常に大きく増加させられたことであろう、ということである。すなわち、労働の収穫一定を仮定し、そして、600単位の労働が1,000単位の賃金財を生産しうらば、そのときには、1,000単位の労働は、 $\frac{1,000 \times 1,000}{600}$ ほぼ 1,666 W 単位を生産できるのであり、そして、労働の供給が労働1単位当たり 1 W の賃金で弾力的でありつづけると仮定すれば、そのときには、これは、社会に、1,666単位の労働に対する支配力を与

22. H. ミント (1948年)

えるのであり、そしてそれは、その労働量が生産するようさせられうるところの実物財一般の総計に対する支配力と対応関係をもつ、ということになるのである。

Myint [1948], pp. 20-21.

そして、以上のことから、ミントは、この第二の意味で「支配される」労働量によって測定される社会産出物の価値とは、その産出物に含まれる主観的な社会的所得の程度ではなく、もし支配される労働のすべてが「生産的」目的のために使用されていたならば次年度に予期されうる物的産出物の最大可能量の程度であり、そして、スミスは、満足量は物的生産物の量に比例するという彼の大きな想定と結びつけて、価値尺度についてのこの第二の見解を、頑健な議論として、社会の経済的厚生は貯蓄額の増加によってつねに増加させられうるということを示すために使用した (WN, p. 54. 大河内訳 < I >, 92ページ), とするのである。Myint [1948], p. 21.

なお、ミントによれば、スミスの議論では以上のようなものとしての「主観的所得アプローチ」という考え方と「物的産出量アプローチ」という考え方のうち、前者のアプローチは、次第に消えうせてしまい、後者のアプローチに取って代わられるようになっていくとされるのであるが (なお、ミントによれば、それはまた、生産的労働についてのスミスの学説における二重の要素という問題にたいしても重要な光明を投じるものである、とされ、そして、そのことにも関連して、ミントは、Myint [1948], chap. V, sec. II を参照するよう指示している。Myint [1948], p. 21), ミントはそれらの各々について、つぎのような検討をなしている。

まず、「主観的所得アプローチ」、主観的な社会的所得の指標としての「支配される労働」という価値尺度といったスミスの考え方についてのミントの所論はつぎのようなものである。それによれば、たとえ、満足量はある絶対的な意味で測定可能であり、1 標準労働単位を遂行することの不効用は不変でかつすべての人にとって等しいといった基本的な諸仮定を一応容認したとしても、もしある所与の社会産出物が1,000単位の労働を支配するならばそのときにはその社会産出物そのものはこれら1,000単位の労働を遂行するさいの総不効用に等しいだけの労働者たちにとっての満足量あるいは主観的所得に相当する [したがってまたそこではその主観的所得が、その社会産出物に対応するその社会の全体としての主観的所得ということになる], という命題を満足はいくように主張するには諸困難が存在する。これらの困難は、1,000単位の労働を支配する所与の社会産出物は、1,000単位の賃金財 W からなり、そのうち 600 W 単位は賃金として支払われ、地代と利潤として各々 200 W 単位が支払われるという先の例に立ち帰ることによって知ることができる。すなわち、(a) いま地主と資本家が、400 W 単位という彼らの取り分すべてを、「奢侈」サービスを生産する「不生産的」労働者に前払いすることによってすべて消費してしまうことを決定する、と仮定しよう。この場合には、主観的所得の尺度とし

ての支配される労働の量は、どのように作用するか。おそらく、「生産的」労働者へ賃金として支払われる 600 W 単位についてはそれほど問題はない。すなわち、労働 1 単位当たり 1 W 単位の率では、その賃金総額は、次年度に 1,000 W 単位を生産するであろう 600 単位の生産的労働を支配し、そして生産的労働者たちは、600 単位の労働を遂行する不効用に等しい主観的所得を〔今年度〕享受するであろう。だが、「不生産的」労働者に前払いされる 400 W 単位についてはどうであろうか。これらの労働者たちもまた 400 単位の労働を遂行するのに等しい主観的所得を〔今年度〕享受するであろう。しかしこれに加えて、地主と資本家もまた、彼らに対してなされる「奢侈」サービスから一定量の主観的所得を〔今年度〕受け取るであろう〔今年度に支払いを受けた不生産的労働者は今年度中に「奢侈」サービスを生産し、その支払いをなした者は今年度中にそのサービスを享受し満足を得る〕。したがって、我々がここで仮定している条件のもとでは、〔今年度の社会産出物から今年度得られる〕社会の総主観的所得〔社会の総満足〕は、「奢侈」サービスあるいは不生産的消費から得られる〔主観的〕所得の量だけ、1,000 単位の労働を遂行する不効用に等しいものを、超過しなければならないということとなる。したがってまた、この場合には、スミスは、「奢侈」サービスを排除することによってのみ、彼の命題を主張することができるということとなり、そしてまたそのような排除は、社会の全体としての〔主観的〕所得へのアプローチということに反するものなのである。(b) 他方、地主と資本家が、400 W 単位の彼らの全（純）所得を再投資することを決定する、と仮定しよう。この場合には、「奢侈」サービスは生産されないものであるから、主観的な社会的所得は、1,000 単位の「生産的」労働を遂行するのに等しいものによって測られてもよいかもしれない。だが、次年度に支配される労働量にはどのようなことがおこるであろうか。収穫一定のもとでは、今年度生産に「具現」される 1,000 単位の「生産的」労働は、次年度、 $\frac{1,000 \times 1,000}{600}$ ほぼ 1,666 W 単位を生産するであろう。ところで、この 1,666 W 単位は、労働供給が 1 W 単位の賃金率のもとで完全に弾力的でないかぎり、1,666 労働単位を支配しないであろう。短期では、かなりの失業労働の予備が存在するという状態からはじめないかぎり、このような仮定は満たされそうにない。たとえば、もし初年度に支配される 1,000 単位の労働が完全雇用の状態を示すなら、そのときには、第 2 年度における社会産出物の 1,666 W 単位への増加は、支配される労働量あるいは雇用量を増加させはしないであろう。そしてもし社会産出物の全部が利用可能な労働供給と交換されると仮定するならば、その増加は、賃金率を 1 W 単位から $\frac{1,666}{1,000} \div 1 \frac{2}{3}$ W 単位へと引き上げる効果をもつだけであろう。かくして我々は、社会産出物が「支配」する労働量によって測定されるその社会産出物の価値は、その社会産出物の物的な

22. H. ミント (1948年)

大きさがどうであろうと、したがってまたそれに対応する「ものとして捉えた場合の」主観的所得の大きさがどうであろうと、所与の労働供給(ここでの例では1,000単位)によって規定されるという結論に到達することになってしまう。Myint [1948], pp. 21-23. [なお、ミントによれば、この(b)でみたような難点をのがれるためのスミスの方法は、議論を、長期の(long-term)調整に移すことであったのであり、そしてそれはつぎのようなものであったとされる。すなわち、我々の例(b)においては、スミスは、賃金率が第2年度に $1\frac{2}{3}W$ 単位へと引き上げられるのであるから、そのことは、人口を刺激するという効果をもつであろう、と言うことであろう。適当な(またどちらかといえば長い)タイム・ラグののちに、社会産出物および社会的所得における増加は、人口および「支配される」労働量における増加によって示されるであろう。かくして、社会的所得の変動の趨勢の指標とみなされるべきものは、ある所与の年度における支配される労働の量ではなく、年々に支配される労働の量の趨勢である。社会が年々ますます多くの、あるいは一定の、あるいは減少する労働量を、「支配する」のに応じて、社会の経済的厚生は、増加しているか、一定であるか、あるいは減少しているか、であろう。「どんな国でも、その繁栄の最も決定的なしるしはその住民数の増加である」(WN, p. 70. 大河内訳Ⅰ, 119ページ)のである。Myint [1948], p. 23.]

他方、「物的産出量アプローチ」というスミスの考え方についてのミントの所論はつぎのようなものである。それによれば、物的産出量アプローチの観点からの価値尺度に関してスミスが言わなければならなかったことは、「文明国では、その交換価値が労働だけから生じるような商品はほんの少数であって、圧倒的大部分の商品〔の交換価値には、〕地代と利潤が〔大いに〕寄与している。だから、その国の労働の年々の生産物は、つねに、その生産物を産出し、調製し、市場に運ぶのに用いられた労働よりもはるかに多くの量の労働を、購買または支配するに足りるであろう。もしその社会が〔年々に〕購買できるはずの労働のすべてを年々用いるとすれば、労働の量は年ごとに大きく増大するだろうから、すべてのあとの年の生産物は前の年〔のそれ〕にくらべて、非常に大きい価値をもつことになるだろう。だが、年々の生産物の全体が勤勉な人々を扶養するために用いられる国などというものはどこにもない。怠け者がどこでもその一大部分を消費するものである。この全生産物がそうした二つの異なる階層の人々のあいだに年々分割される割合が異なるのに応じて、その通常価値または平均価値は、年々増加するか減少するか、それとも年から年へとひきつづき同じであるか、そのいずれかになるにちがいない」(WN, p. 54. 大河内訳Ⅰ, 92ページ。〔 〕内は引用にさいしてミントが抜かしている箇所)という文言のなかに集中的に示されている。ここでの議論は、また、先の我々の数字例に立ち帰ることによって説明できる。なおその例では、1,000単

位の労働を支配するある所与の年度の社会産出物は、1,000 *W* 単位であり、そのうちの 600 *W* 単位は賃金として支払われ、400 *W* 単位は地代および利潤として、あるいは地主および資本家の純所得として、残されるのであった。このような状況から出発すれば、典型的なケースと考えられうる三つの可能性がある。(i) 資本家と地主が、400 *W* 単位の彼らの全純所得を再投資してそれらを「生産的」労働者に前払いすることを、決定するかもしれない。この場合には、すでにみたように、次年度における社会産出物は、収穫一定のもとで計算すれば、約 1,666 *W* 単位へと、増加するであろう。(ii) 資本家と地主が、400 *W* 単位の彼らの全純所得を消費してそれらを消耗のサービスを行う「不生産的」労働者に前払いすることを、決定するかもしれない。この場合には、前年度と同じように600単位の「生産的」労働が生産に「具現」されるのであるから、次年度における社会産出物は1,000 *W* 単位で一定に留まるであろう。(iii) 資本家と地主が、400 *W* 単位の彼らの純所得をたんに消費するだけでなく、「彼らの資本に食い込む」ことを、決定するかもしれない。いま、「前年度 600 *W* 単位を「生産的労働者」に前払いすることによって今年度得られることとなった1,000 *W* 単位の今年度の（総）所得のうち、400 *W* 単位ではなく 600 *W* 単位が「不生産的」労働者に前払いされ 400 *W* 単位だけが「生産的」労働者のためにとっておかれるとしよう。その場合には、収穫一定のもとでは、次年度の社会産出物は $\frac{1,000 \times 400}{600}$ 、約 666 *W* 単位へと減少するであろう。ところで、

うえてみたスミスの文言に示されているように、スミスは、資本家と地主が彼らの全純所得を「生産的」目的に再投資するということは期待できないと信じていた。それゆえ実際には、その経済システムは、ケース (i) で示される上限には到達しないであろう。他方スミスは、「自分の暮らしの改善をめざしての、人間の一樣で恒常不断的の努力こそは、私人の富裕はもとより公的な国の富裕が根源的につくり出される原理である。この努力は、政府の濫費や行政上の最大の過誤があるにもかかわらず、改善をめざす事物自然の進歩を維持するにたりるほど強力な場合が多い」(*WN*, p. 326. 大河内訳〈I〉, 536ページ)、ということを指摘している。それゆえまたその経済システムは、ケース (iii) で表される下限へと沈んでしまうことはおそらくなく、ケース (ii) の停滞の状態とケース (i) の上限とのあいだを、変動するであろう。かくしてスミスはつぎのように結論することとなる。すなわち、良き経済政策の基本原理は、経済システムを、最大の経済進歩率の状態を示すケース (i) によって表される上限のできるだけ近くにまで引き上げるために、貯蓄を奨励することである、と。Myint [1948], pp. 23-25.

(9) Myint [1948], p. 25.

(10) Myint [1948], p. 25.

(11) ミントによれば、たぶんこの仮定はスミスの議論における最も興味深い仮定であ

22. H. ミント (1948年)

る, とされる。Myint [1948], p. 25.

- (12) ミントは、我々が本書の「19」で扱った E. ロール (E. Roll) の著書の初版の pp. 152-153 を参照するよう指示している。Myint [1948], p. 26. (なお、我々がその「19」で Roll [1938] として略記したものの pp. 149-151, また、邦訳 (上) として示したものの190-192ページが、ほぼその部分をカバーしていると思える。)
- (13) Myint [1948], pp. 25-26.

H. ミント (1948年) についての覚書

ミントによれば、古典派経済学者たちの共通の出発点は、つぎのような二つの考え、すなわち、(i) 経済プロセスの本質は天然資源にたいして人間労働をくわえるということにあるのであり、それ故、無視しうる例外を別とすればすべての富は労働から生じるのであり、労働は、天然資源を完成品に変容させることにおいて、経済財を自由財から区別するところの「価値」をもたらすのであって、それゆえ労働は価値ならびに富の源泉および尺度とみなされてもよく、また、社会会計に関係する経済財は労働の生産物に限られるべきである、(ii) 労働は、価値および経済的厚生、貨幣よりも重要な尺度である、すなわち、貨幣はたんに、「名目的な」標準、生産および消費の実質的なあるいは物的なプロセスをおおう「ベール」であるにすぎないのにたいし、労働はそれらのプロセスと密接にまたおのずと結びつけられるのであり、貨幣タームでの価値は、実物財の量におけるそれに対応する諸変化なしに、大きくなったり小さくなったりしやすいのにたいし、労働タームでの価値は、そのような歪曲をそれほどこうむりやすくはない、といった二つの考えに要約されるのであり、そしてスミスも、労働を重視するこのような出発点に拠りつつ、労働を価値の真の尺度とした、とみられるのであった。

なお、ミントによれば、そのさいスミスはたとえ少し暗黙的にすぎるとしても、「初期末開の社会状態」では諸商品の生産に「具現された (embodied, 実際に投下された)」労働量によって「価値」を測定しようとするいはそれらの諸商品によって「支配される」労働量によって「価値」を測定しようとする問題はないが稀少な生産要素として労働だけでなく資本および土地も考慮に入れられるべき発達した経済、利潤および地代も存在する発達した経済では、「価値」は、「支配される」労働量によって測定されなければならないと考えた、とみられるのであった。

ところで、ミントは、価値尺度についてのこのようなスミスの議論を、国民分配分、社会産出物、社会の経済的厚生、とくに、そのありうる変化の、指標についての議論として捉えようとするのであった。

まず、ミントは、スミスの議論における国民分配分の測定ということに関して、つぎのような見方を示すのであった。すなわち、ミントによれば、スミスは、労働が唯一の稀少生産要素でありしたがってまた労働が国民分配分のすべてを受け取ることとなる初期未開の社会状態といった特殊な状況においてのみその国民分配分の価値の大きさは「具現された」労働量によっても「支配される」労働量によっても同じように測定されうるが、地代および利潤の存在する発達した経済においては、「具現された」労働量という尺度は国民分配分のうちの賃金となる部分の価値を測定するだけであって地代および利潤となる部分をも含めた国民分配分の全価値を測定するわけではない、それゆえ、あらゆるタイプの経済に妥当しうる国民分配分の価値の一般的尺度とは、その国民分配分によって「支配される」労働量である、と考えた、とみられるのである。

ミントは、このようにスミスは国民分配分の価値の一般的尺度を「支配される」労働量に求めた、とみるのであるが、同時にまたミントは、スミスの議論には、その一般的尺度としての「支配される」労働量によって示されるものとしての社会の「年々の生産物」（国民分配分）の「真実価値」、社会の経済的厚生、の内容そのものということに関しては、二つの異なる捉え方が示されている、とみるのであった。すなわち、ミントによれば、スミスは一方で、経済的厚生は満足^①の量にあると考え、そのような視点から社会の経済的厚生、社会の「年々の生産物」の「真実価値」を捉えようとする（「主観的所得アプローチ」）のであるが、他方で、たとえ経済的厚生は満足^①の量にあるとしてもその満足^①の量は物的生産物の量におおよそ比例すると考えることによって実物財の物量といった視点から社会の経済的厚生、社会の「年々の生産物」の「真実価値」を捉えようとした（「物的産出量アプローチ」）、とみられるのであった。そしてまた事実上、自然との人間の闘争の本質は主観的な不効用の支出ということにあると考えつつスミスが示した前者の捉え方においては「支配される」労働量は、「社会のその『年々の生産物』が支配^②しうる主観的な不効用の量^③」という満足^④の量（「主観的所得」の大きさ）の指標を提供し、後者の捉え方においては「支配される」労働量は社会のそ

22. H. ミント (1948年)

の「年々の生産物」の実物財の物量そのもの（「物的産出量」）についての指標を提供するという事となっており、とみられるのであった。さらにまたミントによれば、スミスは、社会の経済的厚生、社会の「年々の生産物」の「真実価値」についてのこれら二つの考え方の中で動揺していたのであるが、スミスの議論では事実上、前者の考え方は次第に消えていき後者の考え方が支配的なものとなっている、とみられるのであった。

なお、ミントは、1 平均労働単位を遂行することの不効用は不変でありかつすべての人にとって同一であるとスミスは仮定していた、とするのであるが、そのミントによれば、たとえ満足¹の量はある絶対的な意味で測定可能で、また、1 標準労働単位を遂行することの不効用は不変でかつすべての人にとって等しいといった基本的な仮定を一応容認したとしても、社会の「年々の生産物」の「真実価値」、社会の経済的厚生を、満足²の量、社会の「主観的所得」の大きさの観点から捉えてその指標を「支配される」労働量に求めるというやり方³には、諸難点、たとえば、「不生産的」労働がなされるケースをうまく扱えないといったような難点がある、とみられるのであった〔なお、ミントは事実上、「生産的」労働者への賃金支払いとその「生産的」労働者による生産物の仕上がりとの間には1年間のタイム・ラグがあり、それにたいし「不生産的」労働者への賃金支払いと、その「不生産的」労働者の労働用役の提供およびその享受とは、同一年度内に完結する、という前提のもとで議論を展開しているのであった〕。すなわち、いま仮に、発達した一経済においてある年度に、その経済の構成員のあいだに分配されうところの、1,000単位の労働を支配しうるその経済の「生産物」が生産され、そのうち、600単位の労働を支配しうる分け前が「生産的」労働者に支払われ、400単位の労働を支配しうる分け前を地主と資本家が地代と利潤として受け取り、しかも彼らはその地代と利潤のすべてを「不生産的」労働者に支払うとする。そこでは、たしかに、生産的労働者は600単位の労働を遂行する不効用に等しい不効用を支配しうるという満足（「主観的所得」）を受け取り、不生産的労働者は400単位の労働を遂行する不効用に等しい不効用を支配しうるという満足（「主観的所得」）を受け取り、彼らは合計で1,000単位の労働を遂行する不効用に等しい不効用を支配しうるという満足を受け取る、ということとなる。だが、その年度におけるその一経済の「生産物」の「真実価値」を満足⁴の量の視点から（その年度におけるその一経済の全体としての「主観的

所得」の大きさの視点から）捉え、またそのような角度からその一経済の経済的厚生を捉える場合には、それらの生産的労働者および不生産的労働者の受け取るその満足（「主観的所得」）に、さらに、それらの不生産的労働者によるサービス（「奢侈」サービス、消耗的サービス）からうえの地主および資本家が受け取る満足（「主観的所得」）も加えられるべきである。しかしながらこういった事態は「支配される」労働量という尺度では取り扱えない、というわけである。

なお、すでにみたように、ミントは、スミスの議論では、社会の「年々の生産物」の「真実価値」、また社会の経済的厚生への、このようなアプローチは次第に消えうせてしまい、物的生産物の量という視点からのアプローチに取って代わられることとなっている、とみるのであるが、この後者のアプローチについてのミントの検討のなかには、事実上つぎのような内容をもった彼の指摘を見いだすことができるのであった。すなわち、ここでは、「支配される」労働量によって測定され、その大きさについての指標が提供されるものそのもの、「真実価値」の内容は、実物財の物量ということになるのであるが、この意味での「支配される」労働量という価値尺度についてのスミスの議論はさらに、もしその社会の物的生産物総計によって支配されうる労働量のすべてが「生産的」労働として雇用されるならば、その社会は次の年度に最大可能な程度でのより多くの物的生産物産出高を確保できるということを示すのであり、そして、満足の量は物的生産物の量に比例すると考えるスミスは、このような意味での「支配される」労働量という価値尺度についての考え方を、社会の経済的厚生は、地主および資本家が彼らの純所得としての地代および利潤を、「不生産的」労働の雇用という形での消費ではなくて、「生産的」労働の追加的雇用という形での貯蓄、再投資に用いることによって、つねに増加させられうるということを示すために使用したのであり、良き経済政策の基本原理は、経済システムを、その経済の物的生産物のできるだけ多くが「生産的」労働の雇用に向けられるときに達成されるはずの最大の経済進歩率を示す状態というものに近づけるために、貯蓄を奨励することである、と考えたのであった。

なお、1平均労働単位を遂行することの不効用は不変でかつすべての人にとって同一であるとスミスは仮定していたといったようなミントの指摘はすでにみたところであるが、ミントはさらに、うえにみられるような社会産出

22. H. ミント (1948年)

物さらに社会の経済的厚生におけるありうる増加の指標としての「支配される」労働量といったスミスの考えは、事実上、つぎのような諸仮定に基づいている、とするのであった。すなわち、ミントによれば、まずそれは、労働供給が完全に弾力的であるということ、また、社会産出物のうち〔「生産的」労働者にたいする〕賃金基金のためにとおかれる部分が大きくなっていくかぎり、年々に支配されうる労働量は増加していくということを、仮定している、とされるのであった——そしてミントによれば、このことは、スミスはある所与の年度についての社会産出物の正確な測定ということよりもむしろ、社会産出物の長期的な趨勢あるいは社会産出物の「通常価値または平均価値」ということに、関心を抱いていた、ということを示唆しているのであり、あるいは少なくとも、スミスの議論は、着実に増加しつつある人口ということがあるときにその経済システムは拡大状態の途上にあるのだということを、暗に意味している、とされるのであった——。また、ミントによれば、スミスの議論では、ひとたびある一定量の労働が生産に「具現」されれば、その一定量の労働はつねに、経済的厚生という点でそれ自体に等しいものよりもより多くの（あるいは少なくともそれを下まわることのけっしてない）ものを一般に支配しようとするところの社会産出物を、生産しうるのであり、そしてこの余剰生産物は、地代および利潤という形で支払われる取り分に等しい、ということが仮定されている、とされるのであった——そしてミントによれば、このことは、(i) たとえもし社会の経済的厚生というものが満足の量にあるとしても、これらの満足の量は、物的生産物の量におおよそ比例して増加するものとみなされてもよい、ということ、また、(ii) 物的な社会産出物と社会的所得とのあいだには目につくほどの乖離はなにも存在しないということを、より正確に言うと生産と消費は同一速度で一致して進行させられるということ、したがってまたマルサスのグラットは存在しないということ、最後に (iii) 労働が「剰余」価値を創るのでありしたがってまた労働は発達した経済では「搾取」されるのであるというマルクスの命題を、含意している、とされるのであった——。また、ミント自身は労働の収穫一定という仮定のもとに算術例を用いつつスミスの議論を検討したのであるがそのミントによればさらに、スミス自身は人口増加それ自体は技術的不可分性ということを克服することによって労働の平均的な物的生産量を向上させるであろうということを信じていた、とされるのであった。なお、ス

ミスの議論についてのうえでみてきたミントの理解からすれば、人口の変化が考えられうるような期間におけるそのような人口増（＝労働者数増）による労働の平均的な物的生産性の向上ということは、ある期における社会産出物によって「支配される」労働量のすべてが「生産的」労働として雇用されるときには、そのような労働生産性の向上がなかった場合にくらべてより大きな規模で、その社会をして次の期に最大可能な程度でのより多くの物的生産物産出高を確保することを可能にするのであり、しかもそこでは実物財タームでの賃金率は一定であるから、その物的生産物総計によって「支配される」労働量も、労働生産性の向上がなかった場合にくらべてより大きな規模で、増加する、ということになるのであろう。ただし、労働生産性と「支配される」労働量とを掛けたものが次の期にその社会が確保できる最大可能な物的生産物産出高ということになるのであるから、異なる期における異なる「支配される」労働量そのものが、そのまま、それぞれの期の次の期にその社会が確保できる異なる最大可能な物的生産物産出高そのものの、またそれらのものの比較のための、安定的な指標となりうるのは、労働生産性が一定のとき、ということになるはずであるのであるが、ミントは事実上このようなことにはことさら言及しようとはしなかったのであった。

23. J. F. ベル (1953年)

1953年に刊行された J. F. ベル (J. F. Bell) の一著書 (John Fred Bell, *A History of Economic Thought*, New York: Ronald Press, 1953. 以下, Bell [1953] と略記する) のなかで, ベルはつぎのような内容の所説を示している, といえよう。

まずベルによれば, スミスは, 価値とは, 効用 (すなわち商品がもつ欲望充足力——ただし限界効用概念ではなくて総効用概念——) と「その対象物の所有がもたらす他の財貨にたいする購買力」という二つの異なる意味, 換言すれば, 「使用価値」つまり主観価値と, 「交換価値」つまり客観価値という二つの異なる意味をもつとし, そのことを水とダイヤモンドの価値のパラドックスによって例証し, そしてそのうちの「交換価値」についての考察を行うのであるが, そのさいスミスは, 第一にこの交換価値の真の尺度あるいは商品の真実価格 (real price) とは何であるか, つぎに真実価格の構成要素は何であるか, そして最後に価格がある一定の諸時点において他の諸時点におけるよりも高かったり低かったりするといったことをもたらす諸力とは何かということを解明することによって, 商品の交換価値を規制 (regulate) する諸原理を考察したいと述べている, とされる。⁽¹⁾

そして, 「商品の真実価格と名目価格について, すなわち, 商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」という『国富論』第1篇第5章に付されている表題がその第5章で示されている分析への一つの手掛かりを与えているとみるべしによれば, スミスは, あらゆる事物の購買力の真の尺度すなわちあらゆる事物の交換価値の真の尺度はその当該事物の貨幣での価格ではなく, その当該事物が購買者をして支配することを可能にさせるであろうところの労働の量であるとした, とされる。すなわち, ベルによれば, スミスは, 売り手の観点からすれば, その売り手が売る品物は, 彼がその品物と交換に受け取る対応物の労働購買力に応じて大きな価値をもつものであったり小さな価値をもつものであったりするものであり, また買い手の観点からすれば, その買い手が買う商品は, その商品が彼からはぶく労働あるいはその

商品が購買する他人の労働次第で、大きな価値をもつものであったり小さな価値をもつものであったりするのではあると考えた、とされる。そしてまたベルによれば、スミスはこのように労働を価値の尺度 (measure) とするとともに、労働をすべての価値の本来的原因 (cause) ともし、労働のみがすべての商品の価値をあらゆる時と場所において比較し評価しうるところの究極のまた真の標準であり、労働が商品の真実価格であって貨幣はその名目価格にすぎないとするのであるが、さらにスミスは他方で、生産に費やされる時間の相違、熟練、辛さ、創意等々における相違が存在するかもしれないということから、二つの異なる労働量のあいだの比率を確定することは困難であるということをも認め、そして、いかなる正確な尺度も一般には用いられることはできないとするのであるが、同時にまた、交換の比率は「正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」(WN, p. 31. 大河内訳 < I >, 55ページ) 調整されるとしている、とされる。⁽³⁾

(注)

(1) Bell [1953], p. 172.

(2) このことを示すものとしてベルはつぎのようなスミスの文言をあげている。「労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(WN, pp. 30-31. 大河内訳 < I >, 53ページ。) Bell [1953], pp. 172-173.

(3) Bell [1953], pp. 172-173. なお、ベルは、事実上『国富論』第1篇第5章におけるスミスの価値分析について概ね以上のような説明をなしたのちそれにすぐつづいて、そのようなものとしてのスミスの議論に関して、「だが、この、労働のタームでの価値の説明 (explanation) は、『資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態のもとにおいて』適用できるのである、『労働量のあいだの比率が……これらの物〔諸対象物〕を相互に交換するにあたっての原則 (rule) を提供しうる唯一の事情であると思われる』(WN, p. 47. 大河内訳 < I >, 80ページ。〔 〕内はベル) のはそのような社会においてのみである」と述べ (Bell [1953], p. 173. 傍点は中川)、以下、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態に適用できるものとして提示されたものとしての別のタームでの価値についてのスミスの説明とし

て、賃金、利潤、地代という価格における三つの要因、自然価格およびその決定、市場価格とその決定、自然価格と市場価格の関係等々についてのスミスの議論をとりあげている。Bell [1953], pp. 173-174.

以上のように、ベルは、商品の交換価値を規制する諸原理の考察をスミスはまず商品の交換価値の真の尺度は何であるか、あるいは、商品の真実価格は何かであるかという問題を解明することから始め、そのような問題にたいしてスミスは労働を価値の本来的原因とみなし、商品の真実価格は労働であり真の価値尺度は「支配される労働」であるとするいっぽうで、労働の質の相違等の問題のゆえにスミスは交換の比率は「市場のかけひきや交渉」によって調整されるとした、とするのであるが、ベルは以上のようなものとしてのスミスの議論を、「労働のタームでの価値の説明」として一括して捉え、そしてそのようなものとしての「労働のタームでの価値の説明」を、「労働量のあいだの比率が……これらの物〔諸対象物〕を相互に交換するにあたっての原則を提供しうる唯一の事情であると思われる」というスミスの考え方と事実上同一視するのであった。そしてまたベルは、スミスはそのような労働のタームでの価値の説明は「初期未開の社会状態」にのみ適用できるのだとして資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態については別のタームでの説明をしている、とみるのであった。ところで、スミスの議論についてのこのような捉え方によれば、真の価値尺度としての労働という考えと諸対象物を相互に交換するにあたっての原則を提供しうるものとしての労働量のあいだの比率という考えとが「労働のタームでの価値の説明」として同一視されることによって、スミスの議論におけるいわゆる「価値尺度の問題」は「価値決定あるいは価値規制の問題」と同一視されることになる、そしてまた、そのような意味での真の価値尺度としての労働の妥当性は「初期未開の社会状態」に限定されることとなる、ということもできよう。

J. F. ベル (1953年) についての覚書

ベルによれば、他財貨にたいする購買力としての事物の「交換価値」というものを規制する諸原理についての考察をなす過程でスミスは、労働が価値の本来的原因であり、商品の真実価格は労働であって商品の交換価値の真の尺度はその商品が購買者をして支配することを可能にさせるであろうところの労働の量である、といった考えを示すとともに、同時にまたスミスは、労働の質の相違等の問題のゆえに二つの異なる労働量のあいだの比率を確定することは困難であることを認めつつ、交換の比率は「正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」調整されるとした、とみられるのであった。

ただし、ベルの所説においては事実上、そのようなものとしての「労働量という価値尺度」といったスミスの議論は「労働量のあいだの比率による価値の規制」についての議論といわば同じものとして捉えられつつそのスミスの議論は「労働のタームでの価値の説明」として扱われるのであり、そしてベルは、スミスの議論ではそのようなものとしての「労働のタームでの価値の説明」の妥当性は「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」に限定されている、とみるのであった。

24. J. A. シュムペーター (1954年)

J. A. シュムペーター (J. A. Schumpeter) は、1954年に刊行された彼の一著書 (Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York: Oxford University Press, 1954. 以下, Schumpeter [1954] と略記する。東畑精一訳『経済分析の歴史』(全7冊, 岩波書店, 1955-1962年) のなかで, スミスは『国富論』第1篇第4章で, 分業—物々交換—貨幣という連鎖を完結し, つづいて「交換価値」を「使用価値」から完全に切り離し, そして第5章では(カンティロン <R. Cantillon> の「富 (richesse)」の定義から出発して) 貨幣のタームで表現されている価格よりもより信頼のできる交換価値の尺度を発見することを企てる, とするのであるが⁽¹⁾, さらにシュムペーターは, そのようなものとしての交換価値の尺度についてのスミスの議論に関連して, 以下のような内容の指摘をなしている。

① スミスは, 交換価値 (value in exchange) を価格 (price) と等置しつつ, また, 「貨幣での価格」が純然たる貨幣的変動に応じて動揺することを看取して, 異場所間比較ならびに異時点間比較という目的のために, それぞれの商品のこの貨幣価格または「名目価格」に代えて, 我々がたとえば貨幣賃金と区別されるものとしての実質賃金 (real wages) について語るのと同じ意味での (たとえば『国富論』第1篇第5章第9パラグラフを見よ) 真実価格 (real price) ——すなわち, すべての他の諸商品のタームでの価格——をもちだしてくる。⁽²⁾

② そしてスミスは, 彼の時代にすでに発明されていた指数方法を知らなかったため, これらの真実価格をさらに転じて, (穀物がその役割を果たすか否かを考察したのちに) 労働のタームで表現されている価格に置きかえる。換言すれば, スミスは, ニュメレール——L. ワルラス (Marie Esprit Léon Walras) によって一般的に用いられるようにされた表現法を用いるとすれば——として, 商品たる銀や商品たる金の代わりに, 商品たる労働を選び出すのである。⁽³⁾

③ このことは有用であるかもしれないし有用でないかもしれない、しかし、このこと自体にはなんの論理的異論も存しはしない。⁽⁴⁾

④ ところが、スミスはこの考えを伝えるにさいしてはなはだしくもたつくのであり、そのうえ、それを違った意味での価値や真実価格 (real price) の本質に関する哲学と混同しているため——あらゆる物の真実価格としての「労苦と骨折り」(『国富論』第1篇第5章第2パラグラフ)や、「それ自身の価値がけっして変動することのない」唯一のものたる労働(第7パラグラフ)等に関する有名な教義を見よ——、彼の基本的には簡単な考えがリカードウ(D. Ricardo)によってすら誤解され、よって、スミスは商品価格を生産費によって説明(explain)しようとしていたのだということは『国富論』第1篇第6章からまったく明らかであるにもかかわらず——なお、その第6章ではスミスはその生産費を、「すべての交換価値の本源的源泉であると同時にすべての収入の本源的源泉」(WN, p. 52. 大河内訳〈I〉, 88-89ページ)としての賃金、利潤および地代に分けている——、「価値の因果的説明, 「価値規制」の事情の説明を与えるものとしての」一つの労働価値説——もしくはむしろ三つの相互に相容れない労働「価値」説——がスミスに帰されることとなった。⁽⁵⁾

(注)

(1) Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 391ページ。

(2) Schumpeter [1954], p. 188, p. 188n. 19. 邦訳, 第1分冊, 391-392ページ, 393ページ注19。

(3) Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。なお、1952年に公表された一論文のなかで G. J. スティグラー (G. J. Stigler) は、スミスの価値尺度(理想的には貨幣賃金, 近似的なものとして穀物価格)は現代の指数と同一の問題に答えることを意図されていた、すなわち、どのようにして、貨幣価値における諸相違を除去し、またそうして、「実質的」諸変化 (“real” changes) を突き止めるか、ということである、としている。George J. Stigler, “The Ricardian Theory of Value and Distribution,” *Journal of Political Economy*, vol. 60 (no. 3, June 1952), p. 205. (なお、スティグラーの上記論文は、George J. Stigler, *Essays in the History of Economics* (Chicago & London: University of Chicago Press, 1965)——以下、スティグラーのこの著書は、Stigler [1965] と略記する——に所収されているのであるが、その Stigler [1965], p. 193 を見よ。)

(4) Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。

(5) Schumpeter [1954], pp. 188-189. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。なおシュムペーターはこのことに関連してつぎのような内容をもった説明をくわえている。それによれば, 商品価値ないし価格を表現する単位として——労働はけっしてそれ自身の価値において変動しないという(妥当でない)論拠あるいはその他の論拠に基づいて——労働時間ないし労働日を選ぶことは, それ自体としては, 交換価値ないし価格についてのどんな特定の理論をも意味するものではないのであり, それはあたかも商品価値ないし価格を表現する単位として雄牛を選ぶことが, なんら, 交換価値ないし価格についての雄牛説を意味しないのと同様である。ところがスミスはこの点をはっきりと認識していたようには思えないし, また彼は, 若干の箇所では疑いもなく, 彼が労働をニューメレールとして用いるということはまさにある一つの価値理論 (theory of value) を意味するかのようになり, 論じていた。そのため, ①「ある商品が交換しうる労働の量」, ②「その商品を生産するのに要する労働の量」, ③「労苦と骨折り」, というスミスの議論に存在する三つの考えが[なお, シュムペーターによれば, スミスの議論においては, それらのうちの前のほうの二つのものは繰り返し混同されているように見受けられ, また, 最後の「労苦と骨折り」は「あらゆる物の真実価格 (real price)」とされるのであるが, それは, 少なくとも後代における概念すなわち労働の不効用に等置されるものと解釈される限りでは, 前のほうの二つのいずれの尺度とも一致するものではない, とされる], スミスのいっていた三つの労働価値説ないし労働価格説でもあると想像されることとなった。しかしながら, 第一のものは, 価値現象の説明 (explanation) としては論理的に役立ちえない——それは, そのようなものとしては, 循環論法を意味する——ため, また, スミスは不効用のテーマを展開する努力をなさなかった故に我々は第三のものを無視することができるため, 結局実際に我々に残されるものは第二のもののみということになる。ところがスミスは——リカードやマルクス (K. Marx) とちがって——, 「商品の生産に要する労働の量」が価値あるいは価格を「規制 (regulate) する」という命題を, はっきりと, 労働以外には他のなんらの分配上の分け前をも考慮に入れる必要のない「初期未開の社会状態」に, 限定して, この第二の考え方については, そのような特殊な場合を除いてなんらの妥当性をも要求しなかったのであった。それゆえ我々は, スミスは労働という要因を強調したにもかかわらず彼の価値理論はけっして労働説ではないのだ, という結論に到達するのである。Schumpeter [1954], pp. 188-189n. 20. 邦訳, 第1分冊, 393-394ページ注20。

また, シュムペーターは, 他の箇所において, 「アダム・スミスは (第1篇第5章), 市場において一商品が支配しうる労働の量が, その商品の貨幣での価格のもっとも有用な代用物であると考えている, すなわち彼は労働をニューメレールとして選んでいるのである。原理的には, この決定にたいしてはなんの反対もありえない」(Schumpeter [1954], p. 310. 邦訳, 第2分冊, 650ページ) とし, そしてこのこと

に関連して、彼は、さきにみた説明と類似した説明をくわえている (Schumpeter [1954], pp. 310-311. 邦訳, 第2分冊, 650-652ページ)。そこにはつぎのような内容をもった所説が含まれている。

① スミスがこのような決定をなしたとしても、そのこと自体は、彼が労働価値説を主張したということの意味しているわけではなく、それは、我々が雄牛をニューメレールに選ぶことが雄牛価値説を主張しているわけではないということと同様である。ところがスミスは、彼のその決定にたいしてさらに深い意味を要求するかのように見える非常に多くの議論を費やして、その決定の論拠を求めている。たとえば、「……それ自身の価値がけって変動することのない労働だけが」すべての商品の価値の「究極で真の標準である」とか、「それは、すべての商品の真実価格 (real price) である」あるいは「唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度である」といったものである (WN, pp. 33, 36. 大河内訳 I > 58ページ, 63ページ)。しかしこれらはいずれも誤ったものである。

② さらに、スミス自身が、あるものをニューメレールに選ぶことが意味することと意味しないことについてあまり明確でなかったように思えるため、後代の経済学者の多くがスミスの実際に意味していたことを誤解したり、彼ら——とりわけリカードウ——が、スミスは商品のなかに入り込む労働の量とその商品が購買しうる労働の量とを混同していたとして非難したりしたのは、ほとんど無理もないところである。しかしながらこのような非難ははずれており、また、その非難ははずれているということは重要である。というのは、その非難は結局、スミスが〔価値を説明するものとしての「投下労働量」と「支配労働量」とを混同するといった〕理屈に合わないことをしているということでスミスを非難していることになっているから〔その非難ははずれている、すなわち、スミスはそこでは事実上、価値の説明の問題ではなくてニューメレールの問題を取り扱っているのである〕、また、商品の価値の説明として、その商品と交換されるもの——たとえばそれがなんであれ——を用いるということは、〔価値〕理論の歴史における最悪のあやまちの一つであろう〔さきでみた循環論法というシュムペーターの指摘はこのことに対応しているのである〕から〔価値理論の点からみて、ニューメレールとしての労働（支配労働）を価値を説明するものとしての支配労働として捉えてなされている非難ははずれたものであるということそのこと自体が、重要なことなのである〕。(なお、シュムペーターによればまた、リカードウはつねにスミスを誤解していたわけではないのであって、リカードウは、他のものの交換価値がそうであるのと同様労働の交換価値も変動から免れないのだということを主張しもしたのである、ただしそのことは、労働を経時的に機能するニューメレールにするということに関してのみ、関連性をもつのである、とされる。Schumpeter [1954], p. 310 n. 18. 邦訳, 第2分冊, 652ページ注18。)

③ また、価格を表現する単位として1時間の労働とか1日の労働を選ぶことが、

労働価値説の採択を意味するわけではないのと同様に、それはまた、生産における労働の役割の強調や労働の請求権あるいは労働の不当待遇にたいする強調といったことを意味するわけでもない。また、たしかにそのような強調は『国富論』のなかに多く見られはするのではあるが、そのようなものは、一信仰告白としてあるいは社会倫理における一議論としてではなくて経済的現実についての一分析用具としてみた場合の価値についての理論にとっては、全く関係のないものである。

J. A. シュムペーター (1954年) についての覚書

シュムペーターは、スミスは『国富論』第1篇第5章において、貨幣のタームで表現されている価格よりもより信頼のできる交換価値の尺度を発見しようとした、とみるのであった。そして、シュムペーターによれば、「交換価値」を「価格」と等置するとともにその異場所間比較ならびに異時点間比較といったことを考えているスミスは、「貨幣での価格」は純然たる貨幣そのものにおける変動ということからも動揺するということから、商品の貨幣価格または「名目価格」に代えて、すべての他の諸商品のタームでの価格としての当該商品の「真実価格 (real price)」という考えをもちだすのであるが、当時すでに発明されていた指数方法を知らなかったスミスはさらに、「真実価格」を穀物のタームで表現することの当否を考察したのち、労働のタームでの価格としての「真実価格」といった考えを示したのであった、とみられるのであった。そしてシュムペーターは、そこでの問題は事実上、貨幣に代わる「ヌメレール」を選び出す問題であったのであり、そしてスミスはヌメレールとしての穀物を検討したのち、貨幣、商品としての金、銀に代わるヌメレールとして、商品としての労働を選び出したのであり、商品によって「購買される労働」の量によってその商品の「真実価格」を表すことを選んだのである、とみるのであった。

しかしまたシュムペーターによれば、ヌメレールとしての労働の有用性ということとは別としてそのようにヌメレールとして労働を選ぶこと自体にはなんら論理上の問題はないのではあるが、ヌメレールとして労働を選ぶという基本的には簡単なこの考えを伝えるにさいしてスミスは非常にもたついた議論を展開したのであり、さらに、事実上そのような内容の問題を取り扱う議論を、たとえばあらゆる物の真実価格 (real price) としての「労苦と骨折り」といったような言葉にもみられるような価値、真実価格の本質につ

いてのいわば形而上学的な議論と混同しつつ、たとえば、それ自身の価値がけって変動することのない労働のみがすべての商品の価値の究極で真の標準であるとか、労働はすべての商品の真実価格 (real price) であるとか、労働は唯一の正確な価値尺度であるとともに唯一の普遍的な価値尺度であるといったような誤った議論にもみられるように、ニューメレールとして労働を選ぶという決定がさらに深い意味をもつかのような印象を与える多くの議論を費やして、その決定の論拠を示そうとしている、とされるのであった。そしてまたこのような事情は、『国富論』第1篇第6章でのスミスの議論からも明らかなようにスミス自身は商品価格を賃金、利潤、および地代という生産費によって説明しようとしていたにもかかわらず、後代の経済学者たちによって、価値の因果的説明、「価値規制」の事情の説明を与えるものとしての一つの労働価値説——あるいは、むしろ、「支配労働量」、「投下労働量」、「労苦と骨折り」、による説明という三つの相互に相容れない労働価値説——をスミスが示したと解されることとなった原因ともなっている、とみられるのであった。

なお、シュムペーターによれば、「支配労働量」そのものは価値現象の説明としては、循環論法を意味することとなる——商品の価値の説明として、たとえそれがなんであれその商品と交換されるものを用いるということは、価値理論の歴史における最悪のあやまちの一つである——なのであって、それはもともと価値現象の説明としては論理的に役立ちえないものであるが、スミスの議論では基本的には、「支配労働量」は事実上、価値現象を説明するものとしてではなくて価値の大きさ、「真実価格」の大きさを表すものとして、「購買される労働」、「支配される労働」はニューメレールとして、選ばれているのであり、また、「労苦と骨折り」といったものは、少なくとも労働の不効用というものと等置されるものとして解される限りでは「支配労働量」や「投下労働量」といったものと一致するものではないのであるが、スミスはこの不効用のテーマを展開する努力はなさなかったのであるからスミスの議論に関する限りではそれを無視することができるのであり、さらに、価値規制の事情を説明するものとしての「投下労働量」の妥当性はスミスの議論では「初期未開の社会状態」に限定され、そのような特殊なケース以外についてはその妥当性は主張されていないのであり、それゆえ結局労働という要因をスミスは強調しはしたけれども価値の因果的説明、価値規制の事情の説

24. J. P. シュムペーター (1954年)

明を与えるものとしての彼の価値理論そのものは労働価値説ではなかったということとなる、とみられるのであった。だがまた同時にシュムペーターによれば、あるものをニューメレールに選ぶことが意味することと意味しないことについてあまり明確でなかったスミスは、ニューメレールとして労働を選ぶという基本的には簡単な考えを伝えるにさいしてうえで触れられたような性格をもった議論を展開したのであり、また事実、いくつかの箇所ではスミスは、労働をニューメレールとして用いるということはまさに一つの価値理論を意味するかのように論じていたのであって、そのような事情からすれば、後代の経済学者たちがスミスの実際に意味していたことを誤解したり、スミスは「投下労働量」と「支配労働量」とを混同していたと解したりしたとしても、それはほとんど無理もないことである、とみられるのであった。

ただしまたシュムペーターによれば、ニューメレールとして労働を選ぶこと、商品価値ないし価格を表現する単位として労働時間ないし労働日を選ぶこと自体は、そのような単位として雄牛を選ぶことが雄牛価値説の採択を意味するわけではないのと同じように、労働価値説の採択を意味するわけではないのであり、またそれ自体は、生産における労働の役割の強調や労働の請求権あるいは労働の不当待遇にたいする強調といったことを意味するわけでもないのである、そしてまた、たしかにそのような強調は『国富論』のなかに多く見られるのではあるがそのようなものは、一信仰告白あるいは社会倫理における一議論としてではなくて経済的現実についての一分析用具としてみた場合の価値についての理論にとっては、全く関係のないものである、とされるのであった。

25. J. P. ヘンダースン (1954年)

1954年に公表された J. P. ヘンダースン (J. P. Henderson) の一論文 (John P. Henderson, “The Macro and Micro Aspects of the *Wealth of Nations*,” *Southern Economic Journal*, vol. 21 (no. 1, July 1954), pp. 25-35. 以下, Henderson [1954] と略記する) のなかには, ヘンダースンのつぎのような見方を見いだすことができる。

① スミスは労働を真の価値尺度としたのであるが, 彼がそのように効用よりも労働を尺度としたのは, 彼はもともと微視的世界 (microcosm) よりもむしろ巨視的世界 (macrocosm) に関心を抱いていたからである。⁽¹⁾

② また, リアル・タームでの国民総生産の評価とは, 穀物と貨幣のどちらが財貨の真実価値のより良い尺度であるかということに関する彼の長い議論においてスミスが解決しようと試みたところの, 指数問題 (index problem) なのであった。⁽²⁾

(注)

(1) ヘンダースンは概ね以下のような考え方をしているといえる。それによれば, スミスは生産と交換の研究をなそうとしたのであるが, そしてまた, 交換を研究するために(1)交換価値の真の尺度 (measure) および源泉 (source) の確定, (2)真実の交換価値の構成部分の分析, (3)いくつかの諸財貨がそれらの真実価値以外の価値で交換されることを引き起こす事情の理解, といった三つの問題をたてたのであるが, スミスはその交換システムの分析においては, 経済にはたらく物的諸力 (material forces) によって決定される根本的かつ絶対的な価値を明らかにしようとしていたのであり, そして彼は, 市場の特定の事情のためになんらかの諸商品はそれらの真実価格 (real price) 以外の価格で交換されるかもしれないということ, しかしまた, 市場価格からは独立的に, 生産過程に由来する絶対的な価値が存在するということ, を, 想定していた。物的に決定 (determine) されたがってまた測定可能な (measurable) そのような価値は, 諸個人がそれらの諸商品に帰するかもしれない使用価値からは独立的でありつづけることであろう。交換価値そのものは市場が諸商品に対して与えるものであるが以上のような考えを抱くスミスはさらに, その交

25. J. P. ヘンダースン (1954年)

換価価値を生産ということにかかわるものと^{●●●}同義のものとみなしたのであった。この価値は生産過程において発生するのであり、労働がこの価値の源泉であり、リアル・タームでの国民総生産 (gross national product) は生産的労働の物的成果なのである〔なお、ヘンダースンによれば、古典学派は全体的にサービスという貢献を不生産的労働として無視する傾向があった、とされる〕。ところでスミスは、真実価値 (real value) の尺度として、効用よりむしろ労働を使用した。これは、スミスが微視的世界よりも巨視的世界に関心を抱いていたからである。すなわち、スミスは、使用価値とは諸個人が諸商品に関してもつ意識 (ideas) や知覚 (perceptions)、およびそれらの諸商品から引き出されるべき見積もられた満足といったものに依存するゆえに、使用価値は生産の諸条件からは独立的なものである、と考えた。ヒューム (D. Hume) さらにそれに先立つロック (J. Locke) によって示されたものとしてのスミスの時代の一般的な哲学上の枠組みにおいては、意識や知覚といったものは、実在物質 (matter) が精神に反応を起こさせることの結果なのであったのであり、それらは個人的なものであったのであり、それゆえ、特定の個人に関してのみ意味のあるものであったのである。したがって、効用にまつわる諸観念は、それらからはいかなる一般的なあるいは抽象的な価値も仮説的に述べられないところの、加算することのできない、従属的な、変数であったのである。そこでスミスは、経済的因果律を独立的で客観的な諸力に求め富の源泉を生産における労働に帰するというロック、シャーフツベリ (3rd Earl of Shaftesbury)、ハチスン (F. Hutcheson) さらにヒュームといった伝統にそいつつ、労働を真の尺度としたのである。Henderson [1954], pp. 29, 30-31, 33, p. 31n. 22. (スミス、古典学派における、「生産的労働」と「不生産的労働」についてのヘンダースンの見方については、Henderson [1954], p. 27 も——なお、そこには、「生産的」とは、有形の財貨の生産に貢献する労働への強調ということに伴いつつ諸商品の実際の創造ということを含意していた、といった見方も示されている——、また、「使用価値」と「交換価値」については、Henderson [1954], pp. 29-30 も、見よ。なお、ヘンダースンのこの論文における、スミスの議論での全体としての経済システムについての分析と微視的な分析との関係についてのヘンダースンの見方そのものについては、Henderson [1954], pp. 25-26 も見よ。そこには、概ねつぎのような内容をもつものとして示すこともできるであろうようなヘンダースンの所説を見いだすことができる。すなわち、『国富論』は、全体としての経済システムの成り行きについての理論と特定諸商品の価格づけについての理論を統合しようとする妥当で首尾一貫した試みを構成するのであるが、スミスを含めて古典派経済学者たちはこの統合という問題にたいして、個々の消費者や生産者という個々の経済主体に関する基本的公理から分析を展開しようとする「限界革命」以後の効用分析とは異なって、個々の価格は経済システムの決定因であるよりはむしろ経済システムの関数である、とい

う立場から、アプローチしたのであった。古典派の理論は、ニュートン (I. Newton) の労作のなかにその最も完全な表現を与えられた機械論的法則の時代に定式化されたものであり、それは全体としての経済システムについての諸問題を取り扱い、部分分析を一般分析にとつての補助的なものとみなしたのであって、個々の経済主体そのもの、特定諸商品の価値・価格といったことについての分析、微視的分析は、特殊なものについての研究であつたのであり、また本質的に、全体としてのシステムの巨視的な運動 (macroscopic movement) の枠内でその地位を占めるといったものであるのであった。——たとえば、ヘンダーソンによれば、スミスは厳密に微視的な現象についての議論を持っていたけれども、そこでのスミスの価格理論は、現代の用語でいえば、価格は、市場の状況が特定諸商品の移転にたいして及ぼす影響を反映する、といったようなものであるものであり、スミスはこれらの影響を、偶然の出来事、自然的原因、行政上の法規、商業や製造業等における秘密、最も重要なものとしての独占といった五つの範疇から捉え、また、独占価格はどんな場合にも買い手から搾り取ることのできる最高価格であつてこの価格は自然価格 (natural price) あるいは真実価格 (real price) からの乖離が最も大きいとして独占の影響を指摘するのであるが、この独占、独占価格が問題にされるのは、独占による高価格そのものというよりも、むしろ、独占、独占による高価格がファンドの誤用や将来の投資額の減少に導くような分配の歪曲を引き起こすことになればそれによって年々の生産物フローの大きさ、生産される交換価値総額の大きさが減少させられることになるという意味で、独占が問題にされているのであり、独占の問題は、いわば、全体としての経済システムについての問題としての「成長」問題にかかわるものということになるのである、とみられるのであった。Henderson [1954], p. 34.——)

なお、以上のことからわかるように、ヘンダーソンのこの論文では、「真実価格 (real price)」、「自然価格 (natural price)」、「真実価値 (real value)」という用語は、真実の交換価値 (real exchange value) を表し、そして、その真実の交換価値が、うえてみた絶対的な価値に相当する、ということになっているようである。Henderson [1954], p. 30 も見よ。

- (2) Henderson [1954], p. 31n. 22. つまりヘンダーソンは、穀物と貨幣のどちらが財貨の真実価値のより良い尺度であるかということについてのスミスの議論も、巨視的な分析の一環をなすものであつてそれはリアル・タームでの国民総生産の評価における指数問題にかかわるものである、とみているのである。

J. P. ヘンダーソン (1954年) についての覚書

ヘンダーソンは、『国富論』は経済についての巨視的分析と微視的分析と

を統合しようとするものであるとともに同時にまたそこでは微視的分析は巨視的分析を補助するものという地位を占めるものであって巨視的分析が中心的地位を占めている、とみるのであるが、彼はまた事実上、スミスの議論にあらわれる「真実価格 (real price)」、「自然価格 (natural price)」、「真実価値 (real value)」とは真実の交換価値 (real exchange value) を表し、そしてその真実の交換価値が、生産過程に由来し経済にはたらく物的諸力によって決定される根本的かつ絶対的な価値に相当すると捉えつつ、その議論を展開するのであった。

そしてヘンダーソンは「効用」と「労働」とを対立的な概念として捉えつつ、スミスが「労働」をそのような価値の真の尺度としたのも、スミスが微視的世界、微視的分析よりもむしろ巨視的世界、巨視的分析にヨリ多くの関心を抱いていたからである、とみるのであるが、そこでのヘンダーソンの論理はつぎのようなものとして把握できるかもしれないであろう。すなわち、微視的世界、微視的分析よりもむしろ巨視的世界、巨視的分析にヨリ多くの関心を抱くスミスにとっては、商品から引き出される効用そのものは、その商品の生産ということと直接的なかかわりをもつものではなく、またそれは、その商品という実在物質が人間の精神に反応を起こさせることによって生じるものであり、それは、個人的なもの、特定の個人ということについてのみ意味を持ちうるものであって、それは、いわば従属的な変数であるとともに加算することもできないものであるゆえそれから一般的なあるいは抽象的な価値に到達することはできない、ということになる。これにたいし、市場の特定の事情のためになんらかの諸商品はその真実価格〔真実価値、真実の交換価値〕以外の価格で交換されるかもしれないがそのようなこととは独立的に生産過程に由来する絶対的な価値が存在するということを想定しつつ交換システムについてのみずからの分析のなかで、経済にはたらく独立的で客観的な物的諸力によって決定されるところの、個人性の限界を克服した独立的で測定および加算可能なそのような根本的かつ絶対的な価値を明らかにしようとしたスミスは、真実の交換価値〔真実価値、真実価格〕に相当するものとしてのこの絶対的な価値は生産過程において発生し、その価値の源泉は労働であり、リアル・タームでの国民総生産とは「生産的」労働の物的成果であると事実上考えつつ、真の価値尺度を「労働」としたのであり、またそうすることによって、個人性の限界を克服した加算可能な一般的な価値とし

ての真実の交換価値〔真実価値〕を、また、生産される真実の交換価値〔真実価値〕総額を、表示することができる、と考えたのである。

さらにまたヘンダースンの示す議論によれば、穀物と貨幣のどちらが財貨の真実価値のヨリ良い尺度であるのかということについてのスミスの議論も、巨視的な分析の一環をなすもの、ということになるのであった。すなわち、ヘンダースンによればスミスの議論では事実上リアル・タームでの国民総生産とは生産的労働の物的成果ということになるのであるが、穀物と貨幣についてのそのようなスミスの議論は事実上、生産的労働の物的成果としてのそのようなリアル・タームでの国民総生産の大きさについての評価における指数問題ということにかかわるものである、とみられるのであった。

26. É. ジャム (1956年)

É. ジャム (É. James) は、その初版そのものは1956年に刊行された彼の著書 (Émile James, *Histoire sommaire de la pensée économique*, 2^e édition, revue et augmentée, Paris: Éditions Montchrestien, 1959. 久保田明光, 山川義雄訳『経済思想史』(上, 下), 岩波書店, 1965—1967年) のなかで、つぎのような見方を示しているといえる。⁽¹⁾

富裕のうちに金属の蓄積をみないで、「生活のあらゆる必需品と便益品」の蓄積を、み、また、そのような意味での国民の富がもたらされる「元本」を土地にではなくて国民の労働に求めるスミスは、一方で農業、工業、商業での労働といったような各種の労働の間でのその生産力ということに関しての等級づけさらに生産的労働と不生産的労働との区別といったことをなしつつも、価値の最善の尺度を労働とし、「それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である」(*WN*, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58ページ) と述べるのであるが、それ自体は、重商主義的な考えをもつ18世紀のあまりにも熱心な金属主義者たちすなわち可変的尺度を推奨しているとスミスが非難した人々、および穀物 (blé) を基本の尺度とみなそうと考えている人々にたいする、付随的な答弁なのであった。⁽²⁾

(注)

(1) 以下での議論は、若干の箇所を除いて、本文で示された邦訳書に基づくものである。ただし、その邦訳書ではその底本そのものは、1959年に Domat-Mon [t] chrestien から出された原著第2版と記されている (邦訳 (上), 「訳者序文」, iii ページ)。

また, Éditions Montchrestien から出されたものとして記されている原著初版そのものから得られる情報からすれば、その原著初版の刊行年は、日本の国立国会図書館の推定と同様1955年とできそうであるのではあるが、本書で使用するうえの邦訳書では、原著初版は、1956年に Domat-Montchrestien から出されたものとして記されており (邦訳 (上), 「訳者序文」, iv ページ)、さらに、本文にあげた原著第2版の原著者「序文」および邦訳書の原著者「序文」の冒頭パラグラフには、「私

の『経済思想史概要』(*Histoire sommaire de la pensée économique*)の初版はかなり早くに品切れとなってしまった。しかし、我々は本書に手を加えずに、再版できようとは考えていない。……1956年のときの論述のあちらこちらに……訂正が加えられた」という文言が現れてもいる。このような事情からまた、ここでは、原著初版の刊行年を、邦訳書に示されている年にしたがって1956年としておくこととした。

なお、本章「26」では第2版にみられるジャムの見方を取り上げるのであるが、そのジャムの研究の発表年の区分については、うえの事情から初版の刊行年とすることとなった1956年をとり、そして、以下では、本文で示された原著第2版をJames [1956]と略記することとした。

- (2) James [1956], pp. 80-81. 邦訳(上), 114-116ページ。なお、ジャムは、事実上いまみたような内容をもつものとしても把握できるような見方を示したのち、さらにそれにつづけて、「しかし労働は価値の原因(cause)なのであろうか。不幸なことに、この大問題についてのスミスの取り扱い、はなはだ拙劣であった。彼はまずはじめに、『価値』という言葉はつぎの二つの意味をもっている、ということを目指している。すなわち、あるときには、それはそれぞれの物の有用性を考慮した、一物の他物に比較しての評価を示し、あるときには、それは評価された物の所有によって与えられる、他財を購買する力を表す、と。かくしてスミスはその当時の多くの著者たちにならって、『使用価値(valeur en usage)』と『交換価値(valeur en échange)』とを区別した。彼は……〔水とダイヤモンドを例に用いつつ使用価値と交換価値について〕付言している。…しかし彼は、『価値のパラドックス』にはほとんど注意をはらわなかった。彼にとっての主要な問題は、交換価値(valeur d'échange)の問題であった。すなわち、交換価値は市場において何に依存するのか、ということであった」(James[1956], pp. 81-82. 邦訳(上), 116ページ。〔〕内は中川)とし、以下、その問題に関係するものとしてのスミスの議論を検討しようとしている。(James[1956], pp. 82-83. 邦訳(上), 116-118ページ。) もちろんこのことから、ジャム自身がスミスの議論における「価値尺度の問題」と「価値の原因、価値は市場において何に依存するのか」という問題」との論理的な関係といったことについてどのような考えをもっているのかということは明らかではない。しかし少なくとも、ジャムは、前者の問題についてのスミスの議論と後者の問題についてのスミスの議論とを、つまり、「価値尺度についてのスミスの議論」と「価値の原因、価値の決定因についてのスミスの議論」とを、区別している、ということとは可能であろう。

なお、ジャムはつぎのような指摘もなしている。『国富論』の第1篇第4、第5、第6章は読みにくい。なぜならば、スミスは十分にしっかりした術語をもっていないからである。彼は交換価値(valeur d'échange)、交換しうる価値(valeur échangeable)、真実価格(prix réel)、自然価格(prix naturel)という言葉、区別し

26. É. ジャム (1956年)

ないで使っている。彼が言わんとしたことを理解するには、次の点を認めなければならない。すなわち、価格は交換価値（あるいは『交換しうる価値』）の外的な現れであると思われていたこと、価格は財貨と貨幣との間の比（名目価格）、あるいは種々の財貨の間の比と考えられうること、最後に真実価格はそれ自体、真実価格と市場価格の二つの側面をもっていること、これである。」(James[1956], p. 82 note 6. 邦訳（上）、121ページ注4。)

É. ジャム (1956年) についての覚書

ジャムによれば、スミスは「交換価値」、「交換しうる価値」、「真実価格」、「自然価格」という言葉を区別しないで使用しており、またスミスの議論を理解するためには「価格」は「交換価値」（あるいは「交換しうる価値」）の外的な現れであると思われていたこと、「価格」は財貨と貨幣との間の比（「名目価格」）あるいは種々の財貨の間の比と考えられうること、「真実価格」はそれ自体、「真実価格」と「市場価格」の二つの側面をもっていること、といったことが認識されなければならない、とされるとともに、スミスは、各々の物の有用性を考慮した一物の他物に比較しての評価としての「使用価値」と、評価された物の所有によって与えられる他財貨を購買する力としての「交換価値」とを、区別するのであるが、使用価値と交換価値との間の「価値のパラドックス」そのものには殆ど注意をはらわなかったのであり、スミスにとっての主要な問題は交換価値の問題なのであった、とされるのであった。

そして、価値尺度についてのスミスの議論を事実上、「価値の原因、価値の決定因」についてのスミスの議論と別個のものとして取り扱うジャムによれば、富裕を金属の蓄積としてではなく「生活の必需品と便益品」の蓄積として捉えるとともにそのような意味での富の源泉を土地にではなくて国民の労働に求めるスミスは、一方で生産力ということに関しての各種の労働の間での等級づけさらに生産的労働と不生産的労働との区別といったことをなしつつも、価値の最善の尺度を労働に求め、そして、「それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である」と述べるのであるが、それ自体は、18世紀のあまりにも熱心な金属主義者たちすなわち可変的尺度を推奨しているとスミスが非難した人々、および穀物を基本の尺度とみなそうと考えている人々にたいする付随的な答弁なのであった、とみられるのであった。

27. R. L. ミーク (1956年)

R. L. ミーク (R. L. Meek) は、1956年にその初版が刊行された彼の一著書 (Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 2nd edition, London: Lawrence & Wishart, 1973 [1st edition 1956]). なお、ここでは上掲の第2版を使用するのであるが、ここで取り扱うミークの研究の発表年の区分については、同じ出版社から上掲書の初版が刊行された年、1956年をとり、そして、以下では、上掲書第2版を Meek [1956] と略記する。水田 洋、宮本義男訳『労働価値論史研究』〔初版の邦訳〕、日本評論新社、1957年) のなかで、K. マルクス (K. Marx) の『剰余価値学説史』によりつづ価値の「尺度」という言葉そのものが意味する事柄に言及しながら、E. キャンナン (E. Cannan) が編集した『グラスゴウ大学講義』における価値尺度についてのスミスの議論にも言及しているのであるが、⁽¹⁾『国富論』における価値尺度についてのスミスの議論に関連してつぎのような見方を示している。⁽²⁾

① 『国富論』での価値についてのスミスの議論は社会のなかでの分業についての彼の議論から始まるのであるが、スミスは、「他財貨を購買する力」としての「交換価値」の真の尺度を確定したのちに、またそののちにのみ、その交換価値を規制 (regulate) または決定 (determine) するものについての最終的な問題にすすむことができる、と考えた。⁽³⁾

② 分業によって特徴づけられる社会では商品の交換は本質的には、社会的労働の交換である、ということが、スミスの出発点であった。それゆえ、商品の価値の「真の尺度」は、市場でその商品と交換されるであろうところの他の諸財貨に体化された (embodied) 労働の量であると、スミスが結論するだろうと思われてきたかもしれない。だが、実際に彼が結論したのは、商品の価値の「真の尺度」は、市場でその商品と交換されるであろう労働の量〔現在の労働の量〕である、ということであった。⁽⁴⁾

③ このようにスミスは商品の「真実価値」をその商品の売り上げで雇いうる〔現在の〕労働の量への関連において測定しようとしたのであるが、これは、スミスがおそらく価値の問題をかなり発達した資本主義経済に特有の

基本的経済諸過程への関連において考察することから始めそしてスミスは特に資本主義的蓄積過程の分析に関心をもっていた、ということに由るところが大きい。⁽⁵⁾

④ 価値の「真の尺度」としての支配労働というスミスの概念は、その起源においては、資本主義のもとでの蓄積という特殊な問題についての分析へのスミスの関心の産物であるという点がかかなり多かったようなのであるが、『国富論』においては、この概念は、社会的分業が「徹底的に行きわたっている」あらゆる種類の社会に適用しうることを意図された一般的な形で表現されているのであり、そしてたまたもしも「真の尺度」についての彼の議論は本質的にはこの基礎概念をこのようにして一般化するという試みからなっているのだということが察知されないならば、スミスの価値理論は正しく理解されえないのである。⁽⁶⁾

⑤ この一般化の過程には、二つの主要な段階がある。第一にスミスは、経済組織のあらゆる特殊の形態を捨象することによって、分業によって特徴づけられるあらゆる社会においては（資本主義社会においてだけでなく）商品がその所有者にたいしてもつ「真の値打ち」または「真実価値」は、彼がその商品によって支配しうる他の人々の労働の量に依存するのだということを、示そうとする。⁽⁷⁾ 第二にスミスは、商品の原価 (*cost*) と商品の「真の値打ち」または「真実価値」との間の基本的な区別を一般的な言葉で組み立てて、それが（資本主義社会だけでなく）どんな社会で生産された商品にもあてはまるようにしようとする。⁽⁹⁾

⑥ スミスはそれからさらにすすんで、彼の尺度は、貨幣のペールを貫いて交換の外的現象の奥に横たわる一定の基本的社会関係にまで到達するという意味で、実際に、真の尺度なのだ、と主張する。⁽¹⁰⁾

⑦ 最後に、スミスは、「それ自身の価値がたえず変動するような商品は、他の諸商品の価値の正確な尺度とはけっしてなりえない」ということから、「労働」が不変性という性質をもつということを示そうとつとめる。そしてこのことを示すために、彼は、ある所与の量の労働に対して労働者にそのときどきに支払われる財貨の量がたまたま変わるとしても、実際に変わるのはいずれの財貨の価値であってその労働の価値ではない、と主張しなければならなかった。⁽¹¹⁾

⑧ 他方、労働時間が相対的「価値」の指標 (guide) として正しく用いら

れうるようになるためには労働のさまざまな種類あるいは等級に適当な比重が与えられなければならないという考えは、『国富論』よりもはるかに古いものであった。⁽¹²⁾そしてまた、利潤生活者と賃金生活者との基本的区別が樹立されたのちは、賃金生活者という階級のなかでの「身分」の違いは、たんに熟練の差を反映するかぎりのものを除いて、価格の決定の問題には多かれ少なかれ無関係なものとなり、以前には生産に関係する人々の広汎な階級のなかに存在したそのほかの「身分」的差異の大部分は、いわば、資本家階級と賃金労働者階級との基本的な社会的区別のなかに解消されるにいたった。そこで、おおざっぱに言えば、ひとたび労働力が商品となりそしてそれがかなり競争的な条件のもとで売られるようになると、価値の問題に関連して本当に考慮に入れられるべき労働の質的な差異はただ、熟練と強度の差にもとづくものだけ、ということになるのであった。⁽¹³⁾

⑨ とはいえ、熟練度や強度の異なる労働が入り込んでいる場合にさまざまな商品の相対価値を労働のタームで評価するという問題は、依然としてたいへん困難な問題である。スミスはまずこの問題を、価値尺度についての章『国富論』第1篇第5章]のはじめに近いところで論じ、またふたたび、つぎの章で、「初期未開の社会状態」のもとにおける価値の決定についての議論の途中で、この問題に立ち戻った。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

⑩ なお、それらの箇所におけるスミスの表現は、たしかにいくつかの点ですこし不十分である。しかし全体としての彼の議論は、実際には、時折言われるような循環論法という非難に値するとは思われない。すなわち、スミスは、熟練労働の不熟練労働へのあるいは強度のまさった労働の強度の劣った労働への理論的な還元が、市場において当該の労働者たちが実際に受け取る報酬を考慮することによって行われるべきだ、ということを示唆しているのではないのである。彼が言っているのはただ、(a)理論上は、調整が行われなければならない、ということ、(b)実際には、調整は「ある正確な尺度によってではなく、市場のかけひきや交渉によって」なされるのだ、ということなのである。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

〈補記〉

以上、『国富論』における「真の価値尺度」さらに「異質労働の問題」についてのスミスの議論に関するミークの所説の内容をみてきたのであるが、

その過程で、「支配しうる労働」を価値の「真の尺度」とするというスミスの決定のなかにスミスの価値理論に関連する諸困難性のうちのたいていのものがその起源をもっていたという内容のミークの指摘もみたのであった(本章の前出注4)。この補記では、ミークのそのような指摘は具体的にはどのような内容のことを指していたのかということをも、みておくこととする。

ミークによれば、『国富論』での価値についてのスミスの議論は、社会のなかでの分業についての彼の議論から始まり、そして、商品が価値をもつのはその商品が社会的労働の生産物であるという事実のためであると信じるスミスは、この意味での労働を価値の「源泉」または「原因」とみなすのであるが、同時にまたスミスは、価値の「源泉」または「原因」をそのようなものとみなしつつも、商品の価値を「規制するもの」または「決定するもの」という最終的な問題そのものにすすむためにはその前に商品の価値の「真の尺度」を確定することが必要であってそれを確定したのちのみうえの最終的な問題にすすむことができると考えたのであった、とみられるのであった。そしてミークによれば、スミスは価値尺度についての章〔『国富論』第1篇第5章〕のなかで価値の「真の尺度」を支配労働とし、そしてそののち、つぎの章〔『国富論』第1篇第6章〕でスミスが価値の「規制(regulation)」と呼んだものについての問題へと向かった、すなわち、商品の「真実価値」はその商品が支配するであろう労働の量によって測定されるのであるが、ではこの「真実価値」はどのように規制されるのか、換言すれば、その商品が、それより多くもなく少なくもなくまさにそれだけの量の労働を支配することを決定するのは何か、という問題へと向かったのであった、とされるのであった。そしてまたミークによれば、そのような脈絡のなかで展開されることとなった価値の規制についてのスミスの議論そのものは、主として需要の側からこの問題に取り組もうとするような現代諸理論とはほとんど共通のものをもたないものであったのであり、それは結局のところ、一つの「費用説(cost theory)」として分類されるべきものであった、とみられるのであった。⁽¹⁸⁾しかしまた同時にミークは、その種の理論としてはスミスの理論はある重要な諸欠陥をもっていたのであり、そしてそれらの欠陥はすべてその起源を、スミスが「支配しうる労働」を価値の「真の尺度」として選んだということに、⁽¹⁹⁾もっているのである、とし、つぎのような指摘をなすのである。

④ 第一に、スミスの「真の尺度」は、価値理論のなかへ不必要な二分法(dichotomy)の導入を、もたらした。一方の方法は産出を評価するのに用いられ、他方の方法が、投入を評価するのに用いられることとなった。つまり、産出の価値は、それが購買または支配するであろう労働の量によって評価されるのにたいし、投入の価値は、事実上、その産出を生産するのに要する労働の量で評価されるのであった。そして、可能な蓄積の適切な尺度とスミスがみなしたのは、これら二つの労働量のあいだの差なのであった。しかしながら、実際には、生産過程における価値差額の出現がおのずから明らかになるのを許すようなやり方で投入と産出とを「労働」に還元するもう一つのそしてもっと満足のいく方法が存在するのであり、そしてこの別の方法すなわちマルクスの方法(そして、ある程度はリカードウの方法)とは、産出を、それを生産するのに要した全労働量で評価し、そして投入を、その産出を生産するのに用いられた資本財と原材料と人間エネルギーとの生産に要した労働量で評価する、といったものである。⁽²⁰⁾

⑤ 第二に、スミスの理論は、我々につぎのように言うことを求める。すなわち、労働の価値はとにかく不変であって、したがって、ある商品が支配するであろう労働量の変化は、つねに、その商品の価値における変化を示すものと解しうるのであり、たとえその商品の生産諸条件にはまったく何事も起こらずただ現行賃金率が変化しただけだとしてもそうなのである、ということである。しかしながら、リカードウのいうように、労働の価値は「他のすべての物と同じく、社会状態のあらゆる変化とともに一様に変動する供給と需要との割合によって、影響されるばかりでなく、また労働の賃金が支出される食物やその他の必需品の価格の変動によっても影響されるのであるから」⁽²¹⁾、それは、事実、変化するのである。⁽²²⁾

⑥ 第三に、そして第二の点と関連して、スミスの理論は、我々につぎのように言うことを求める。すなわち生産物の価値は、その生産の諸条件の変化にかかわらずなく、その生産物が一方で賃金に他方で利潤および地代に分けられるその分割の変化とともに、変化するのだ、ということである。いま、労働が賃労働となる以前の、スミスのいう「初期末開の社会状態」、において、ある特定の商品を生産するのに10時間の労働がかかる、としよう。その場合には、その商品が購買または支配するであろう労働の量もまた10時間であろう。ところが、いま、資本が蓄積され土地が占有されているとし、しか

も、その商品を生産するには依然として10時間の労働を要するとしよう。その場合には、労働の産物の分け前をもらう権利をもつようになった新たな諸階級に、利潤と地代が支払われなければならないという事実のために、その商品が購買または支配するであろう労働の量は、いまや、10時間よりも多いであろう。それゆえ、その商品の生産の技術的諸条件は同一のままであっても、スミスの意味でのその商品の価値は、増大したのだと言われなければならないのである。これにたいし、リカードはつぎのように主張したのであった。すなわち、スミスがそう言う傾向があったように、「利潤と地代とが支払われなければならないとなれば、これらのものが、諸商品の生産に必要な単なる労働量とは無関係に、それらの商品の相対価値にいくらかの影響をおよぼすかのように」⁽²³⁾言うのは、まったく間違いである、と。⁽²⁴⁾

(注)

- (1) ミークによれば、我々が価値の「尺度」について語るとき、つぎの二つのことのいずれかのことを(あるいは多分その両方を)意味しうるのであり、その一つは、フィートざしが長さの尺度であり、ぜんまい秤が重さの尺度であるのと同じ意味での「尺度」、もう一つは、価値のまさに内容 (stuff) あるいは実体 (substance) を測定するだけでなくある意味でその内容または実体を[●]体現 (embody) するところの、一種の内在的「尺度」(inherent “measure”) を意味するものとしての「価値の尺度」、ということである、とされる。Meek [1956], p. 51, p. 51n. 2. 邦訳, 53-54ページ, 54-55ページ注2。

また、『グラスゴウ大学講義』での価値尺度についてのスミスの議論へのミークの言及はつぎのようなものである。すなわち、『講義』の「価値の尺度としての貨幣」を取り扱っている節〔第2部第2篇第8節「価値の尺度および交換の媒介物としての貨幣について」〕ではスミスは貨幣をうえにみた二つの意味のうちの最初の意味の尺度として考察した。だが、それにつづく節〔第9節「国民の富裕は貨幣に存するのではないということ」〕のはじめではスミスは、「我々は、貨幣を価値の尺度たらしめたのは何であるかを示した。しかし注意すべきは、貨幣ではなくて労働が、価値の本当の尺度だということである」(Adam Smith, *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms: Delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, Reported by a Student in 1763*, edited with an Introduction and Notes by Edwin Cannan (Oxford: Clarendon Press, 1896; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, 1964) ——本書で Smith, *Lectures* [ed. Cannan] と略記されるもの——, p. 190. 高島善哉, 水田 洋訳『グラスゴウ大学講義』[1896年原版の邦訳] (日本評論

社、1947年）——以下これを、高島・水田訳『グラゴウ大学講義』と略記する——、364ページ）と述べている。このことにたいして、ここではスミスは「尺度」という言葉を第二の意味で使っているのだということ、そして『国富論』の「労働〔価値〕説」の萌芽がこの言葉のなかに見いだされるということが、ときどき提言されてきた。この提言のなかに真理の一要素があるということは可能である、だが、スミスがその「講義」を行ったときに価値の「本当の尺度」としての労働というこの考え——それは、18世紀の著作家たちの著作のなかできわめてしばしば出合う考えである——を、富裕は貨幣に存するという重商主義的見解に対して用いるべき都合な武器といった程度のもをはるかにこえる何物かであるとみなしたのだということを示す実際の証拠は、なにも存在しはしない。〔なお、ミークによれば、いまみた重商主義的見解に対する批判という目的のためにこの考えが使用されたとという事実が、18世紀においてこの考えがますます普及したことの理由の一つ、ただし副次的な理由、である、とされる。〕『講義』においてスミスは、彼が結局のところ商品の価値の貨幣的表現とみなすこととなったところの商品の「自然価格」の輪郭を描くために、長いあいだかかった。だがこの段階ではまだスミスは、究極的に「自然価格」を決定する深層の諸力に達するために市場の外的現象という表面の下の十分に深いところにまで入り込んでいたわけではなかったのである。Meek [1956], pp. 50-51, p. 51n. 4. 邦訳、53-54ページ、55ページ注4。

- (2) なお、ミークは、Meek [1956] 中の、「『国富論』における価値理論 (The Theory of Value in the "Wealth of Nations")」という表題の付された第2章3では、それを、「(a)価値の『真の尺度』 (The "Real Measure" of Value)」、「(b)価値を『規制するもの』 (The "Regulator" of Value)」、「(c)効用と需要の役割」、「(d)熟練労働の不熟練労働への還元」という四つの小見出しのもとに分けて、議論を展開している。そのような事情からもうかがえるように、ミークが『国富論』における「価値理論」というとき、彼はその「価値理論 (theory of value)」という言葉を用いて、どちらかといえば「価値尺度についての議論」とは別個なものとしての「価値の因果的説明を与えるもの」としてよりもむしろ、「価値尺度についての議論」をも含めた価値の理論として用いており、そこでは、「価値尺度についての議論」も「価値理論」の一構成要素ということになっている、ようである。
- (3) ミークは概ねつぎのような説明をしている。それによれば、スミスは『国富論』第1篇第1章から第3章で分業の問題を取り扱っているのであるが、第2章および第3章ではマニファクチャー内分業と社会的分業のうちほとんどまづ社会的分業を問題にしている。そしてこの分析のなかから価値についての彼の議論が始まるのである。すなわち「社会的分業の行われる」文明社会では、各労働者は、他のすべての労働者のために働き、また、彼らに依存する。こういう事情のもとでは、労働が投下 (expend) されて生産された有用な物体を所有することは、慣習的に、

27. R. L. ミーク (1956年)

その所有者に、「他の財貨を購買する力」をもたらす、言い換えれば、その物体は交換価値を得る、というのである。スミスの議論が意味するのは、その物体が、個々人の別々の労働の生産物の相互交換によって特徴づけられかつそれに依存するところの社会における個人のまたは諸個人が構成する集団の、労働の生産物である、というその事実のために、その物体が、この交換価値を得るのだ、ということである。商品の交換は、本質的には、社会的活動の交換であり、交換の行為のなかにあられる諸商品間の価値関係は、本質的には、生産者としての人間と人間との関係の反映なのであり、価値は、のちにマルクスが述べることとなったように、一つの社会的関係なのであるが、スミスも、価値とは商品が社会的労働の生産物であるという事実によってその商品に与えられるところの属性であると考える傾向を、実際にもっていた。そしてまさにこの意味において、またこの意味においてのみ、スミスは労働を、価値の「源泉 (source)」または「原因 (cause)」とみなしたのであった。ところで、もし我々が、商品は、それが社会的労働の生産物であるために価値をもつのだと言うにとどまるならば、我々は、その商品が交換において他の諸商品をひきよせる力の源泉を定義したにすぎないのであって、その商品がもつこの力の程度がどのようにして規制されるかあるいは決定されるかを、まだ説明していないのである。〔ミークによれば、価値原理 (value-principle) とは、一商品が「他の諸財貨を購買する力」をもつのはなぜかということを説明しうるだけでなく、それが実際にもっているまさにそれだけのこの力を、なぜもっているのかということを説明しうるものでなければならず、この意味で、価値原理とは、性格上、量的 (quantitative) であるべきである、とされる。なお、ミークによれば、シュムペーター (本書の「24」で取り扱われた Schumpeter [1954] の p. 590——前掲邦訳、第4分冊、1240-1241ページ——) は、うえの二つのことが「厳密には同一のことではない」ということを認識していた数少ない経済思想史家の一人である、とされる。しかしまた同時に、だがシュムペーターはスミスの価値理論の解釈にとってこのことがいかに重要なことであるかということをはっきりと理解していたようには思われない、とされる。〕ところで、もし我々が、商品の生産に用いられた労働をその商品の価値の源泉としてだけでなくその商品の価値のまさに実体を構成するものともみなし、またその結果、その商品が、「凝結し」または「結晶した」牽引力のある種の集合体ともいふべきものとみられるならば、我々は、はるかに解決に近づくこととなる。すなわちその場合には、商品が価値を得るのは、その商品が社会的労働の生産物であるからだけでなく、そうである程度においてでもある、と結論していいであろう。我々は、その商品の牽引力の程度はその商品の生産に使用された社会的労働の量と直接に結びついて変化する、と言ってもよいであろう。換言すれば、その商品の牽引力の決定者 (determinant) を、その商品自体の生産の諸条件よりも遠くに求めることなしに、見いだしうるのである。しかしながら、スミスは、普通

の場合には、この問題を、まったくこのように見たわけではなかった。たしかに彼は、商品の生産に社会的労働が投下されたためにその商品が価値をもつにいたったのだと信じていた、だが、彼は、この労働を、その商品の価値の実体をなすものとはみなさなかつたのである。スミスの考察の仕方によれば、商品が価値を得るのは、その商品が社会的労働の生産物であるからなのであるが、しかしながら必ずしもそうである程度においてではなかつた。その商品の価値の程度がどのようにして規制されるかを見いだすためには人はまずその商品の価値が本来どのようにして測られるべきかを見いださなければならない、とスミスは信じたのである。そして、スミスの意見では、その商品の価値の尺度は、その商品の生産の諸条件への注目によって、確かめられえないのであつた。価値の尺度は、その商品の生産の諸条件のなかにではなく、むしろ、その商品の交換の諸条件のなかに、求められるべきであるとされるのであつた。それはちょうど、我々が磁石の牽引力を、それが受けた磁化の量を調べることによってではなく、それが実際に引き付けうることがわかつた物体の重量を測ることによって、測定しようとするのと同じである。スミスは、商品の交換価値の「真の尺度」は、その商品が正常な場合に市場で示すところの、実際の「他の財貨を購買する力」を考慮することによって、確かめられるにちがいない、としたのである。そして、このようにしてその商品の価値の「真の尺度」を確定したのちに、またそののちにのみ、人は、その商品の価値を規制または決定するものについての最終的な問題へとすすむことができるのであつたのである。Meek [1956], pp. 60-63, 62n. 3. 邦訳, 66-71ページ, 70ページ注1。

- (4) Meek [1956], pp. 63-64. 邦訳, 71ページ。 スミスのこの決定に関連してミーケはつぎのような所説を示している。それによれば、ここでの中心的な問題はつぎのことである。すなわち、あなたがある商品を市場で売ってその売り上げを他のなにかを買うのに使用する場合、あなたはつねに、実際には、労働と労働を交換しているのである、したがって、あなたの商品があなたにとって有する「真の値打ち (real worth)」または「真実価値 (real value)」はその商品がそのような交換においてあなたをして支配するようにさせることのできる「労働」の量によって測定されるのだ、と、もっともらしく言うことができる。だが、あなたの商品を売るその売り上げであなたが買う「他のなにか」は、ある一定量の労働の現在の用役であるかもしれない、また、過去においてある一定量の労働が投下されたところの他の商品であるかもしれない。そして、これら二つの労働量は、スミスがよく知っていたように、必ずしもつねに同一であるわけではなく、事実、両者が同一であるのは自己の生産手段をもつ独立小生産者による生産にもとづく社会においてのみであろう。では、もしあなたが、あなたの商品の「真実価値」——すなわち、その商品があなたをして支配するようにさせることのできる「労働」の量——を測定しようとするならば、あなたはそれを、その商品の売り上げで雇いうる現在の労働 (present

27. R. L. ミーク (1956年)

labour) の量への関連において測定しようとするのか、それとも、あなたがその売り上げて買いうる他の商品のなかに体化されている過去の労働 (past labour) の量への関連において測定しようとするのか。もしあなたが、スミスがそうしたように諸商品の交換は本質的には人々がそれらの商品のなかに体化した異なる労働の交換であるという考えから価値の分析を始めるならば、あなたの選択は論理的に、うえの二つのもののうち後者に向かうように思われる。しかしスミスは、前者のものを採用したのであった。Meek [1956], p. 64n. 1. 邦訳, 71-72ページ注1。

また、ミークによれば、スミスが価値の「真の尺度」を支配しうる商品に体化された労働よりもむしろ支配しうる労働としたというこの決定のなかに、スミスの価値理論に関連する諸困難のうちのたいていのものが、その起源をもっていた、とされる。Meek [1956], p. 64. 邦訳, 71ページ。

なお、ミークによれば、多くの注釈者がやってきたようにスミスが「支配労働」尺度を体化労働という価値の規制者の代用品たらしめようとしたのだと言うのは正しくなく、スミスが言ったことはただ、〔資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態〕という昔には体化された労働の量が支配しうる労働の量を(したがって価値を)規制したということ、そして、〔資本の蓄積と土地の占有の行われる〕現代では自然価格の諸構成要素が、支配しうる労働の量を規制する、ということ、だけであり、明らかに、「支配労働」尺度は、昔にも今にも適用しうるものであるということを、意図されていた、とされる。Meek [1956], pp. 71-72n. 4. 邦訳, 81ページ注4。〔なお、すでにみたように、ミークによれば、スミスは、商品のこの「自然価格」をその商品の〔交換〕価値の貨幣的表現とみなした、とされる。Meek [1956], p. 51. 邦訳, 54ページ。本章「27」の前出注1, また, Meek [1956], p. 74, 邦訳, 84ページも見よ。〕

- (5) ミークによれば、価値の「真の尺度」としての支配労働という考えそのものは、そのような考えが生まれた社会すなわち労働力が商品となった資本主義社会のきわめてはっきりしたしるしを身につけている、すなわち、そのような社会においてのみ人々は商品の「真の値打ち」をその商品の、労働自体を購買する力(その商品の、労働の生産物を購買する力と区別された)と結びつける可能性があるのである、とされるのであるが(Meek [1956], p. 65. 邦訳, 72-73ページ)、ミークは、スミスの議論における、「真の尺度」としての支配労働と資本主義的蓄積過程の分析に関してつぎのような説明を示している。それによれば、スミスは、資本主義的蓄積過程は、生産の継続的な諸期における資本家による「生産的」賃労働の雇用という観点から考えるときにのみ正しく理解されうる、と信じていた。すなわち、最初の期に、資本家が、需要があるらしいと彼が信じた商品を生産するためにある一定数の労働者を雇い、そしてこれらの商品がとにかく生産されて、市場に出され、そしてそれらが売られる価格は、通常、賃金費や原材料費等々を償うだけでなく「自然」率で

の利潤と地代を提供するに十分であった、とする。このように、この「自然」価格の実現過程においてなんの支障もおこらなかったと仮定し、さらにまた、賃金率にとるにたりるほどの上昇がなかったと仮定すると、資本家にとっては、つぎの生産期において、すぐ前の期よりも多くの数の「生産的」労働者の用役を支配することが可能になる。彼の動員可能な労働量へのこの可能的な追加の程度が、彼（および彼の地主）がその新しい期において行いうる蓄積の尺度とみなされえた。そして、各々の個々の資本家の場合に本当であったことは、全体としての国民にとっても、本当であるのであった。ところで、スミスにとっては、この過程の正しい分析のためにはつぎのような価値原理（value-principle）すなわち当該のさまざまな物的諸生産物を一つの共通要素に還元しそうしてまた投入と産出との間の継続的な差に量的な意味を与えることを可能にする価値原理、の利用が必要であるということは、明らかであったにちがいない。また、こういうやり方で蓄積過程を考察しそしてすでに前でも見たやり方で価値の一般問題を考察した人にとっては、価値の「真の尺度」たりうるものは、ほとんど直ちに現れたにちがいない。すなわち、商品の生産を、自分みずからそれらの商品を消費したいとかそれらの商品を生活資料と交換したいとかいうためではなく利潤を得つつそれらの商品を売りそして資本を蓄積したいがために、組織する資本家的雇用者、このような資本家的雇用者の観点からすれば、これらの商品の「真実価値」のもっとも適当な尺度は、それらの商品の販売からあげられる売り上げによって彼がつぎの生産期に支配することのできる賃労働の量であると思われるのも、もっともなことであろう。それらの商品が支配する賃労働の量が大きければ大きいほど、彼の動員可能な労働量に対して彼が追加しうるものも大きく、したがってまた、蓄積されうる額も大きいであろう。それゆえ、もし我々が「労働」という言葉で、諸商品の売り上げが市場で雇うであろう賃労働の量を意味するものとすれば、資本家にとっては、「労働」がその諸商品の価値の「真の尺度」であると思われるのも、もっともなことなのである。〔なお、ミークによれば、他の商品と交換されるよりもむしろ実際に労働と交換される商品の部分が増大するにつれて——すなわち、おおざっぱに言えば、独立生産者による商品生産が資本主義的商品生産に取って代われそして労働力がますます商品に転化されるにつれて——このような考えのもっともらしさははっきりと増大したであろう、とされる。ただし、また同時にミークによれば、そのように言うこと自体は、スミスがこの考えを彼の「真の尺度」の基礎として使用したという点で正しかったのだということを言っているわけではないのであって、事実、その考えの彼の使い方は、マルクスがリカードウ（D. Ricardo）についてなしたのと同じ種類の批判、つまり、リカードウがまだ、価値を説明することだけにかかわっているときに、したがって、まだ、商品を取り扱っているにすぎないときに、リカードウは突然、資本主義的生産関係のより高度な発展から生じる諸条件に飛び込むといった批判〔Marx, *Mehrwert* Ⅱ〕、

S. 206, 大内・細川訳『剰余価値学説史』〈Ⅱ〉, 269ページを見よ]と同種類の批判を受けるのが正当である、とされる。]このような価値尺度の助けによって、投入と産出の間の量的な価値の差——資本主義的生産過程において生じた剰余すなわち「純収入」の尺度とみなされてももっともな差——が明らかにされるようなやり方で投入と産出の双方を共通の要素(「労働」)に還元することが可能だ、とスミスは信じたのである。一国の生産物(the national product)が購買したりあるいは支配したりするであろう労働の量(すなわちその生産物の価値)は、一般に、それを生産するのに要する労働の量よりも(すなわちその生産物の原価〈cost〉よりも)大きいのであり、そしてこれら二つの労働量の間の差が、その社会がつぎの生産期に行いうる蓄積額の尺度なのであったのである。Meek [1956], pp. 65-66, p. 66n. 2. 邦訳, 73-75ページ, 74ページ注2。

- (6) Meek [1956], pp. 66-67. 邦訳, 75ページ。なお、ミークによれば、スミスが求めていたものは、あらゆる種類の社会におけるあらゆる商品交換に適用できるような価値の「真の尺度」についての抽象的な一般論であったのであり、また、スミスが輪郭を描いたような高度に発展し分化した社会は、マルクスが述べたように、その社会自体の生産の諸条件の表現として役立つだけでなく同時に過去のあらゆる形態の社会で支配的であった組織と生産諸条件についての洞察を得ることを可能にするような抽象的な諸範疇を生み出す能力を特にもつのであったのであるが、他面おなじくマルクスが強調したように、最も抽象的な諸範疇でさえ、それらはあらゆる時代に適用しうるにもかかわらず、まさにその抽象という限界のゆえに、歴史的諸条件の産物でもあるのであって、それらの歴史的諸条件に対してのみまたそれらの条件のもとでのみ、十分に適用されうるのであり [Karl Marx - Friedrich Engels Werke, Bd. 13. hrsg. von Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED (Berlin: Dietz Verlag, 1961)——本書で *Marx-Engels Werke*, Bd. 13 と略記されるもの——, „Karl Marx, Aus dem handschriftlichen Nachlaß,“ „Karl Marx, Einleitung [zur Kritik der Politischen Ökonomie],“ S. 636, 大内兵衛, 細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻(大月書店, 1964年)——以下これを、大内・細川訳『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻と略記する——, 「カール・マルクス遺稿から」, 「マルクス〔経済学批判への〕序説」, 632ページを見よ], そして、若干の抽象概念は、表面上はすべての時代に安全に適用しうるかのようにみえながらも実際にはそれらを生み出した特定の社会に固有な産物であるという程度が非常に大きいがため、それらを以前の諸社会構成に適用しようといういかなる企ても誤謬と混乱に陥らざるをえないということになるのであって、労働力が商品となった資本主義社会というそれが生まれた社会のきわめてはっきりとしたしるしを身につけている価値の「真の尺度」としての支配労働という考えも、その一つの例である、とされる。Meek [1956], pp. 64-65. 邦訳, 72-73ページ。

- (7) Meek [1956], p. 67. 邦訳, 75ページ。 スミスがこのことをなしているものとしてミックは『国富論』のつぎのような文章を引用している。「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行きわたるようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない。彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に応じて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない。したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。) Meek [1956], p. 67. 邦訳, 75-76ページ。
- (8) 本章の前出注5を見よ。
- (9) Meek [1956], p. 67. 邦訳, 76ページ。 スミスがこのことをなしているものとしてミックは、本章の前出注7でみた『国富論』第1篇第5章冒頭パラグラフに示される文章の直後にづく第2パラグラフに含まれるつぎの文章を引用している。「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にとって真に費やさざるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまつた人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといへば、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。傍点の付されている箇所は、ミックがイタリック体にしてゐる箇所。) Meek [1956], p. 67. 邦訳, 76ページ。

なお、我々は本書の「15」において、いまみたスミスの文言を引き合いに出しつつ E. キャンナンがスミスは当該事物によってその所有者がはぶくことのできるものと、その事物が他の人々に課することのできるものという二つの尺度が異なる帰結をもたらしようということに気付いていないとしているのをみたのであるが(本書前出「15」の、①, 注2), ミックは、スミスの議論における「それによって彼自身がはぶくことのできる」労働の量と「それによって他の人々に課することのできる」労働の量とのやや混乱した同一視ということについてはこれまでにある程度の量の注釈がくわえられてきた——ミックはその一例として、我々が本書の「15」で取り扱ったキャンナンの著書の〔初版〕p. 165 を、見るよう指示している——としつつ、スミスの議論におけるそのような同一視の背後にある想定といったことをつぎのように示そうとしている。すなわち、いまもしある商品の所有者がその商品売ることに決めるとすれば、彼はその売り上げでたとえば20日の労働を雇うるか

27. R. L. ミーク (1956年)

もしれない。これが、彼の商品が「他の人々に課することのできる」労働の量である。他方、20日というその時間に、彼が雇う労働者たちは、彼のために、たとえば50足の靴をつくるかもしれない。スミスは単純に、もしその商品所有者がみずから50足の靴をつくらなければならなかったとすれば、労働者たちが費やすのと同じ時間すなわち20日かかったであろう、と想定する。こうして、彼の商品は、20日の労働を「他の人々に課し」、したがってそれだけの労働を「彼自身がはぶく」のである。Meek [1956], pp. 67-68n. 2. 邦訳, 76ページ注2。

- (10) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 76ページ。スミスがこのような主張をなしているものとしてミークは、本章の前出注9でみた『国富論』の文章につづくつぎの文章をあげている。「貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである。その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦を我々からはぶいてくれる。それらはある一定量の労働の、価値を含んでおり、その一定量の労働の、価値を我々は、そのときそれと等しい量の労働の、価値を含んでいるとみなされるものと、交換するのである。労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(WN, pp. 30-31. 大河内訳< I >, 53ページ。) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 77ページ。

- (11) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 77ページ。スミスがこのような主張をなしていることを示すものとしてミークは、『国富論』のつぎの文章をあげている。「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購買することもある。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。……それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(WN, p. 33. 大河内訳< I >, 57-58ページ。) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 77ページ。

- (12) ミークはその例として、教会法学者の体系における「公正価格 (just price)」の決定をあげ、そして、それらの体系においては直接生産者の社会的身分や彼の熟練さ

らに彼の労働の強度が彼の生産物の「公正価格」の決定にあたって重要な役割を演じるものとししばしば主張された、としている。また、ミークによれば、社会的身分の問題は資本主義の発展につれてしだいに重要性を減じていったのであるが、18世紀においてさえスミスの先駆者のうちのある人々は依然として商品の価格はしばしばその直接の生産者の身分によってある程度は変わるものだということを示唆しているのが見いだされる、とされる。その例としてミークは、商品の価値についてのハチスン (F. Hutcheson) のつぎのような内容の文章をあげている。「価値はまた、我々にある諸財貨あるいは技術的な諸仕事を提供する人々がその国の習慣に従って置かれるべき地位の高さによって、上昇する。そのような地位において維持されうる人々は、卑しい地位におけるよりも少ないし、そして、彼らの地位の高さと費用は、彼らの諸財貨や諸労務 (services) のより高い価格によって、維持されなければならない。」 (Francis Hutcheson, *A System of Moral Philosophy*, 2 vols. (Glasgow: R. and A. Foulis; London: A. Millar, T. Longman, 1755), vol. 2, p. 55.) Meek [1956], pp. 74-75. 邦訳, 85ページ。

(13) Meek [1956], pp. 74-75. 邦訳, 85-86ページ。

(14) ミークは、スミスが第5章においてこの問題を論じている箇所としてつぎの文章をあげている。「二つの異なった労働量のあいだの割合を確かめるのは困難な場合が多い。二つの異なった種類の作業に費やされた時間だけでは、この割合を必ずしも決定することはできない。そのために耐え忍ばれる辛さや、そのために行使される巧妙さのさまざまな度合いも、同じく計算に入れなければなるまい。1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働くばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。だが、辛さにせよ、巧妙さにせよ、その正確な尺度を見つけ出すのは容易なことではない。実際のところ、異なった種類の労働のさまざまな生産物を相互に交換するにあたっては、両方について、いくらかの斟酌が加えられるのが普通である。といっても、それはある正確な尺度によってではなく、正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等待性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって調整されるのである。」 (WN, p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。) Meek [1956], pp. 75-76. 邦訳, 86ページ。

(15) Meek [1956], pp. 75-76. 邦訳, 86-87ページ。なお、ミークは、スミスが第6章でこの問題に立ち戻っている箇所として、つぎの文章をあげている。「もしある種の労働が他の労働よりもきびしい場合には、この特別の労苦にたいして、いくらかの斟酌が当然なされるであろう。そして、一方の1時間分の労働の生産物は、他方の2時間分の労働の生産物と交換されることもしばしばあるだろう。」「あるいはまた、ある種の労働がなみなみならぬ技能と創意を必要とするなら、人々はそのよう

な才能を高く評価して、そうした労働の生産物にたいして、それに用いられた時間に相当する価値以上のものを当然与えるであろう。そのような才能は、長期にわたる勤勉の結果でなければほとんど獲得できないものであって、それらの才能の産物をもつ高い価値は、それらの才能を獲得するのに費やされるにちがいない時間と労働とにたいする妥当な報償にはかならない場合が多い。社会の進歩した状態においては、普通以上の辛さや、すぐれた熟練に対するこの種の斟酌が、労働の賃金についてなされるのが通例であって、おそらくごく初期未開の時代にも、これと同種のなにかが行われていたにちがいないのである。」(WN, p. 47. 大河内訳 I), 80-82ページ。) Meek [1956], p. 76. 邦訳, 86-87ページ。

(16) このことに関しては、我々がすでに取り扱ったものとしては、たとえば、本書前出の「14」のなかでみた P. H. ダグラスの所説(本書の「14」の、①, 注2。Douglas [1927], pp. 81-88. 前掲邦訳, 7-16ページ)を、参照せよ。

(17) Meek [1956], p. 76. 邦訳, 87ページ。なお、ミークによれば、スミスは理論的調整がなされるべきやり方について詳しく述べてはいないが、もしスミスがこのことをさらに手を加える必要のあるほどに重要なものと考えていたならば彼がたどったかもしれない道すじを、彼はいくつか示している(少なくとも熟練労働の不熟練労働への還元については)、とされる。そしてミークは、熟練労働の不熟練労働への理論的な還元という理論的調整においてスミスがたどったであろう道すじをつぎのようなものとして示している。それによれば、スミスはおそらく、大多数の場合において熟練の違いはほとんどまったく教育と習練によるのだということを強調したのであろう、すなわちスミスは、たいていの才能と熟練は生まれつきのものというよりもむしろ獲得されたものだ、と信じていたのである、そしてもしそうであるとすれば、すぐれた熟練が生得の能力にもとづくという比較的まれなケースは捨象されえたであろう、そして、熟練労働と不熟練労働との調整は、たんに習練の労働費用を考慮することによってなされえたであろう、とされる。〔そして、ミークによれば、本章の前出注15でみた文章においてスミスが、まさった才能をもつ人々の生産物の価値の優越は「それらの才能を獲得するのに費やされるにちがいない時間と労働とにたいする妥当な報償にはかならない場合が多い」というときには、彼はまいったこのことを考えていたように思える、とされる。〕 Meek [1956], pp. 76-77. 邦訳, 87-88ページ

なお、ミークは、スミスは熟練労働の不熟練労働への還元という問題に、とくにヨリ関心をもっていたとするのであるが、強度のまさった労働の強度の劣った労働への還元の問題に関してミークはつぎのような指摘をなしている。それによれば、強度のまさった労働の強度の劣った労働への還元は、熟練労働の不熟練労働への還元と同じ程度の難しさを示さない。というのは、ひとつには、一国のなかのさまざまな産業における労働の平均強度の違いは、平均熟練度の違いほどには大きくはな

さそうであるからであり、また、そのような違いが存在する場合には、『国富論』第1篇第10章での賃金格差についての所論においてスミスが考察したいいくつかの事情によって、それらの違いはある程度つぐなわれそうであるからである。それでもなお残存する強度の違いは、たぶん、平均的労働者を彼自身の産業から他の産業へ移しそしてそこで彼の平常の強度をもって働くよう指示することによって（もしこの程度の工夫が必要と思われたならば）、取り扱われえたかもしれない。そのときには、強度のまさった労働の強度の劣った労働への還元は、相対的な物理的生産性のたんなる比較を基礎として行われえたであろう。なお、我々が、異なる国々における強度の通常程度における違いを考察するときには、この問題は、明らかにもっと重要である。Meek [1956], pp. 76-77n. 3. 邦訳, 88ページ注1。

- (18) 以上の間の事情については、いままでにみてきたミークの所説に加えて、Meek [1956] 第2章3中の、「(b)価値を『規制するもの』」という小見出しの付された部分 (Meek [1956], pp. 69-71. 邦訳, 78-81ページ)、そして、『国富論』においてはスミスは水とダイヤモンドの「価値のパラドックス」の例証を示しつつ、「効用」、「有用性」としての「使用価値」を「他の財貨を購買する力」としての「交換価値」と区別しようとし「使用価値」は「交換価値」としての「価値」の決定者ではないことはもちろんその必要条件ですらないとしようとしたとみつつ『国富論』での価値の決定についてのスミスの議論における「効用」、「需要」といったことが取り扱われている「(c)効用と需要の役割」という小見出しの付されている部分 (Meek [1956], pp. 72-74. 邦訳, 81-85ページ)、さらに、Meek [1956], pp. 77-78, 邦訳, 89ページを見よ。

なお、ミークは、この「費用説 (cost theory, 生産費説)」という言葉を、生産者が当該商品の生産をつづける甲斐があるためには償われなければならない「費用」(利潤を含む)といった角度から商品の価格の問題を取り扱うすべての理論を含むものとして、使用する、としている。そしてまたミークによれば、そのような「費用説」には、均衡価格は生産費によって決定されるということを言っているにすぎない「費用説」もあれば、それよりすすんで、生産費自体の究極的決定要素を追求している「費用説」もある、とされる。(Meek [1956], p. 77n. 3. 邦訳, 89ページ注1。) なおまたミークによれば、スミスは、現代では価値の「規制者」はもはや体化された労働の量ではなく、現代における価値のその「規制者」はむしろ、価値の貨幣的表現である「自然価格」——供給と結びついて（有効）需要によってその水準が規制される「市場価格」から区別されるものとしての「自然価格」——を構成する賃金と利潤と地代の各均衡水準が決定される仕方を考察することによって求められるべきである、と信じていたのであり、そしてこの問題についてのスミス自身の諸考察は、自然価格の諸構成要素が価値の独立の決定因と正当にみなされうるという想定のおかげにたって行われていたように思える、またとにかくそのようにみ

27. R. L. ミーク (1956年)

ることが、賃金と利潤と地代が「すべての交換価値の……三つの本源的な源泉」であるというスミスの言説 (WN, p. 52. 大河内訳〈I〉, 88-89ページ) についての唯一可能な解釈であるように思われるのである、とされる。(Meek [1956], pp. 71, 73-74, 邦訳, 81ページ, 84ページ, を見よ。)

(19) Meek [1956], pp. 77-78. 邦訳, 89ページ。

(20) Meek [1956], p. 78. 邦訳, 89-90ページ。ただしミークによれば、もしマルクスがスミスの(およびリカードの)著作を利用できずそして彼らの誤謬から学ぶことができなかったならば、マルクスはこの別の方法に到達しえなかったかもしれない、とされる。Meek [1956], p. 78. 邦訳, 90ページ。

(21) Ricardo, *Principles* (ed. Sraffa) p. 15. 堀訳『原理』, 17ページ。

(22) Meek [1956], p. 78. 邦訳, 90ページ。

(23) Ricardo, *Principles* (ed. Sraffa), p. 23n. 堀訳『原理』, 26ページ注2。

(24) Meek [1956], pp. 78-79. 邦訳, 90-91ページ。ただし、ミークは、スミスが「支配しうる労働」を価値の「真の尺度」としたがゆえに彼の議論は以上のような欠陥をもつこととなったとするのであるが、他方で、それでも少なくともスミスは、尺度の不変性の必要性を認識し、また、熟練労働の不熟練労働への還元という問題を提出した(また部分的には解決した)という名誉を与えられるべきである、という価値理論史上の評価を与えている。Meek [1956], p. 81. 邦訳, 93ページ。

なお、価値についてのスミスの議論の価値理論史上における評価、位置そのものということに関しては、ミークはうえのような見方に加えて、さらに、概ねつぎのような見方を示している、といえる。それによれば、スミスの歴史的使命は、マルクスが十分に察知していたように、第一に、「ブルジョア社会の内部構造に入り込む」ことを企てること、第二に、「ブルジョア社会のこの内部構造が外に現れるその実際の形態を描き、外的に現れるとおりにその諸関係を示し、また一部には、さらにこれらの現象にたいして学名命名法とそれらに対応する抽象的観念とを見つげ出す」という、二重のものであったのであるが〔Marx, *Mehrwert* 〈II〉, S. 162, 大内・細川訳『剰余価値学説史〉〈II〉, 211ページを見よ〕、スミスの時代において本質的に新しいものであったこの仕事は新しい道具を必要としたのであり、そしてこれらの新しい道具のうちもっとも重要なものの一つで、そのとき発展しつつあった新しい社会経済的諸関係の分析を助けるためにきわめて意識的に展開されたものが、『国富論』第1篇に提示された価値理論であった。そしてスミスは正確にかつ論理的に、価値現象を、つぎの事実、すなわち、分業によって特徴づけられるすべての近代社会においては諸個人はある種の市場で彼らの労働の生産物を相互に交換する独立の商品生産者としての資格において互いに関係づけられるのだという事実、と結びつけることから始めた。ここからスミスは、価値の「真の尺度」の探求へと進んだ。(不幸にも、彼が選んだ尺度は、それが遂行することを要求された任

務に適してはいなかった。)さらにつぎの段階として、商品を生産するのに用いられた労働の量がその商品の価値(「真の尺度」で評価された)を規制するのにいくらかでも役立つとすればそれはどの程度であるかと、スミスはみずからに尋ねた。この問題にたいしてスミスは一方で、体化された労働の量が直接的に、前資本主義社会における商品の価値を規制し、また、体化された労働の量の変化は、あらゆる形態の社会において、商品の価値の変化を引き起こすであろうとしたのであるが、「支配しうる労働」を価値の「真の尺度」とするスミスは、「資本の蓄積と土地の占有の行われる」現代においては、支配しうる労働の量は必然的に体化された労働の量よりも大きいということから、価値は、もはや後者によって規制されることなく〔ただし、ミークは、『国富論』のある箇所——*WN*, pp. 312-313 (大河内訳< I >, 513 ページ)——では、体化された労働の比率が、現代における「金銀の価値と他のあらゆる種類の財貨の価値とのあいだの割合」を支配するものとしてはっきり描かれている、ということを指摘している。Meek〔1956〕, p. 81n. 1. 邦訳, 94 ページ注 1。なお、ミークによれば、価値の「規制者」を探索するさいにスミスが求めていたものは、「〔諸商品を〕相互に交換するにあたっての〔一つの〕原則 (rule) を提供しうる事情」(*WN*, p. 47. 大河内訳< I >, 80 ページ。〔 〕内はミーク)であったのであり、そしてスミスは事実上、体化された労働の量がこの厳密な意味において交換価値の「規制者」として認められるべきであるならば支配労働の量が体化された労働の量とともにしかも同一方向に変化するというだけでなく、これら二つの労働量がつねに正確に等しいということも、示されるべきであるということから、このことが実際に示されうかどうかを尋ねようとしたのであった、とみられるのであった。Meek〔1956〕, pp. 69-70. 邦訳, 79 ページ〕、むしろ、商品の「自然」価格を構成する賃金、利潤、および地代によって、規制されるのだ、とすることによって、この問題に十分に答えることができなかった。(スミスは、生産の領域で人々が相互にむすぶ基本的諸関係が交換の領域において彼らが入る諸関係を究極的に決定するという考えの表現をその本質とする労働価値説を、十全に展開することができなかった。)だが、スミスはこの問題をこのように尋ねた最初の人であったように思われるのであり、そして、彼がそれを尋ねたという事実は、彼がそれに十分に答えられなかったという事実よりも、はるかに重要なのである。事実、労働価値説は、スミスから大きな貢献を受けているのであって、それゆえ、彼がそれを「拒否」したのだと主張することは、労働価値説の誤解であるだけでなくスミスの重要な貢献を過小評価するものであり、少なくとも重大な限定がつかないかぎり、そのようなことをほのめかすことは、ばかげているほどなのである。Meek〔1956〕, pp. 45, 79-81. 邦訳, 46 ページ, 91-94 ページ。

R. L. ミーク (1956年) についての覚書

ミークによれば、「価値尺度」という言葉は、一方での、たとえばフィートざしが長さの尺度、ぜんまい秤が重さの尺度といったのと同じ意味での「尺度」、他方での、価値のまさに内容あるいは実体を測定するだけでなくある意味でその内容または実体を体现する一種の「内在的尺度」、という二つのことのいずれかのことを、あるいは多分その両方のことを、意味しうるのであり、そして、『グラスゴウ大学講義』のなかでスミスが事実上、貨幣をうえの二つの意味のうちの最初の意味での尺度として考察したあとで「貨幣ではなくて労働が、価値の本当の尺度である」としていることにたいして、スミスはここでは「尺度」という言葉をうえの第二の意味で使用しているといったこと、また、そこには『国富論』のなかにみられる「労働〔価値〕説」の萌芽が見いだされるといったことが時として言われてきたのではあるが、スミスがその時点で価値の「尺度」としての労働というこの考えを、富裕は貨幣に存するという重商主義的見解に対する武器といった程度のもの以上のものとみなしていたということを示す実際の証拠はなにもない、とされるのであった。しかしまたミークによれば、スミスの歴史的使命そのものは、「ブルジョア社会の内部構造に入り込む」ことを企てること、さらに、「ブルジョア社会のこの内部構造が外に現れるその実際の形態を描き、外的に現れるとおりにその諸関係を示し、また一部には、さらにこれらの現象にたいして学名命名法とそれらに対応する抽象的観念とを見つけ出す」こと、という二重のものであったのであり、そしてスミスの時代において本質的に新しいものであったこの仕事は新しい道具を必要としたのであるが、これらの新しい道具のうちのもっとも重要なものの一つで、そのとき発展しつつあった新しい社会経済的諸関係の分析を助けるためにきわめて意識的に展開されたものが、『国富論』第1篇に提示された価値理論 (theory of value) であった、とされるときともに、『国富論』での「真の価値尺度」についてのスミスの議論そのものは、そのようなものとしての価値理論のなかで、つぎのような脈絡において展開されることとなっている、とみられるのであった。

すなわち、スミスは『国富論』第1篇第1章から第3章で分業の問題を取り扱うのであるが第2章および第3章ではマニュファクチャー内分業と社会的分業のうちほとんどもっぱら後者の分業を問題にするのであり、そしてこ

の分析のなかから価値についてのスミスの議論が始まるのである。そして、スミスはまず、そのような分業によって特徴づけられる社会において商品が「他財貨を購買する力」としての「交換価値」をもつのは、その商品が社会的労働の生産物であるという事実のため、その商品の生産に社会的労働が投下されたため、であって、その価値とはそのような事実によってその商品に与えられる属性であると考え、その意味での労働を価値の「源泉」または「原因」とみなしたのであった。しかしスミスはその労働を、その商品の価値の実体をなすものとはみなさなかつたのであった。〔なお、ミークによれば、もし、商品の生産に用いられたその労働をその商品の価値の源泉としてだけでなくその商品の価値の実体をなすものとみなし、その結果、その商品を、「凝結し」または「結晶した」牽引力のある種の集合体ともいふべきものとしてみるならば、商品が価値を得るのは、その商品が社会的労働の生産物であるからだけでなく、そうである程度においてでもある、ということとなり、その商品の価値の程度はその商品の生産に使用された社会的労働の量と直接に結びついて変化することとなるのであって、その商品の価値の程度の決定者をその商品自体の生産の諸条件より遠くに求めることなしにまさにそのなかに求めうるということになる、とみられるのであった。〕 スミスの議論では、商品が価値を得るのは、その商品が社会的労働の生産物であるからなのではあるが、必ずしもそうである程度においてはなかつたのである。〔ミークはまたこの脈絡において、一商品が「他の諸財貨を購買する力」をもつのはなぜかということの説明すること——価値の「源泉」または「原因」を説明すること——と、その商品が実際にもっているまさにそれだけのこの力をなぜもっているのかということの説明すること——価値の「規制」または「決定」を説明すること——とは、「厳密には同一のことではない」ということを、また、スミスの価値理論の解釈におけるこのことの重要性を、指摘するとともに、さらに、「価値原理 (value-principle)」とは量的なものでなければならず、それはうえの価値の「源泉」さらに価値の「規制」を説明できなければならない、とするのであった。〕 そしてこのことに対応して、スミスの議論は、その商品の価値の程度、大きさそのものを測定してその程度、大きさそのものを確定したうえで、どのような事情からその商品の価値はその程度、大きさのものとなっているのか、その商品の価値を規制するものは何か、という問題へとすすむ、という形をとるということになっているのであ

って、そのような最終的な問題にすすむためには、その前に商品の価値の「真の尺度」が確定されなければならないということになるのである。そしてここでは、商品の価値のそのような「真の尺度」は、その商品の生産の諸条件のなかにではなくてむしろその商品の交換の諸条件のなかに求められた、すなわちスミスは、その商品が正常な場合に市場で示すその商品の実際の「他財貨にたいする購買力」を考慮してその商品の価値の「真の尺度」を確定しようとしたのであった、というわけである。

『国富論』におけるスミスの価値理論のなかで「真の価値尺度」についての議論が展開されることとなったその脈絡、その議論の展開のされ方等に関してミークは概ね以上のような内容をもった見方を示すのであるが、そのようなものとしてのスミスの「真の価値尺度」についての議論そのものの内容に関してさらにミークは、つぎのような内容の把握をなすのであった。

すなわち、ミークによればまず、価値についてのスミスの議論の出発点は、社会的分業によって特徴づけられる社会では商品の交換は本質的には社会的労働の交換であって、商品の交換は本質的には人々がそれらの商品のなかに体化した異なる労働の交換である、ということであった、そしてそのような論理からすれば、商品の価値の「真の尺度」は、市場でその商品と交換される他の商品に体化された労働の量——その商品の売り上げで買いうる他の商品のなかに体化されている過去の労働の量——、ということになりそうところを、スミスは、その「真の尺度」を、市場でその商品と交換されうるであろう労働の量——その商品の売り上げで雇いうる現在の労働の量——としたのであるが、スミスがそのようにしたのは、彼が価値の問題を、事実上、かなり発達した資本主義経済に特有の基本的経済諸過程への関連において考察することから始めそして彼は特に資本主義的蓄積過程の分析に関心をもっていたということに由るところが大きかった、すなわち、資本主義的蓄積過程を生産の諸期における資本家による「生産的」賃労働の雇用という観点から捉えて資本家の動員可能な労働量への可能的な追加の程度が個々の資本家さらに全体としての一国が新しい期において行いうる蓄積の尺度となるという考えをもちつつ、うえでみてきたような形で価値の一般問題を考察しようとしたスミスにとっては、諸商品がその売り上げで雇いうる賃労働の量、雇いうる現在の労働の量こそが、それらの諸商品の価値の「真の尺度」ということとなった、とみられるのであった。〔なお、ミークによれば、スミスは

そこでは、価値を説明することだけにかかわっているときに、したがってまた、商品を取り扱っているにすぎないときに、突然、資本主義的生産関係の高度な発展から生じる諸条件に飛び込んでしまっている、とされるのであった。〕

しかしまた同時にミークによれば、価値の「真の尺度」としての支配労働というスミスの考えは、このように、その起源においては、資本主義のもとでの蓄積という特殊な問題についての分析へのスミスの関心の産物であるという点がかかなり多かったようなものではあるが、『国富論』ではこの考えは、社会的分業がくまなく行われているあらゆる種類の社会に適用しうることを意図された一般的な形で表現されているのであり、そしてまた、スミスの価値理論を正しく理解するためには、「真の尺度」についてのスミスの議論は本質的にはこの基礎的な考えをそのように一般化するという試みからなっているということを認識しなければならない、とされるのであった。そしてミークによれば、スミスはその一般化の試みを、まず、経済組織のあらゆる特殊の形態を捨象することによって社会的分業によって特徴づけられるあらゆる社会においては（資本主義社会においてだけでなく）商品がその所有者にたいしてもつ「真の値打ち」または「真実価値」は、その所有者がその商品によって支配しうる他の人々の労働の量に依存するのだということを示そうとし、さらに、商品の原価と商品の「真の値打ち」または「真実価値」との間の基本的な区別を一般的な言葉で組み立てて、それが（資本主義社会だけでなく）どんな社会で生産された商品にもあてはまるようにしようとする、といった二つの主要な段階にわたってなそうとした、とみられるのであった。〔ただし、ミークによれば、スミスが求めていたものは、あらゆる種類の社会におけるあらゆる商品交換に適用できるような価値の「真の尺度」についての抽象的な一般論であったのであり、また、スミスがその輪郭を描いたような高度に発展し分化した社会は、たしかに一面で、その社会自体の生産の諸条件の表現として役立つだけでなく同時に過去のあらゆる形態の社会で支配的であった組織と生産諸条件について洞察を得ることを可能にするような抽象的な諸範疇を、生み出す能力を持つものではあったけれども、他面で、最も抽象的な諸範疇でさえ、それらはあらゆる時代に適用しうるにもかかわらずまさにその抽象という限界のゆえに、それらはまた歴史的諸条件の産物でもあるのであって、それらの歴史的諸条件に対してのみまたそれらの条件

のもとでのみ、十分に適用されうるものであり、そして若干の抽象概念は、表面上はすべての時代に安全に適用しうるかのようにみえながらも実際にはそれらを生み出した特定の社会に固有な産物であるという程度があまりにも強いがために、それらを以前の諸社会構成に適用しようといういかなる企ても誤謬と混乱に陥らざるをえないということになるのであって、労働力が商品となった資本主義社会というそれが生まれた社会のきわめてはっきりとしたしるしを身につけている価値の「真の尺度」としての支配労働という考えも、その一つの例であるのであり、そのような資本主義社会においてのみ、人々は商品の「真の値打ち」をその商品の、労働自体を購買する力（その商品の、労働の生産物を購買する力と区別された）と結びつける可能性があるのである、とされるのであった。]

さらにまたミークによれば、スミスはそれからさらにすすんで、彼の尺度は、貨幣のバールを貫いて交換の外的現象の奥に横たわる一定の基本的社会関係にまで到達するという意味で、実際に真の尺度であるのだ、ということを主張し、さらにまた、「それ自身の価値がたえず変動するような商品は、他の諸商品の価値の正確な尺度とはけっしてなりえない」ということからスミスは、「労働」が不変性という性質をもつということを示そうとつとめ、またそのことを示すために、ある所与の量の労働に対して労働者にそのときどきに支払われる財貨の量がたまたま変わるとしても、実際に変わるのはこれらの財貨の価値であってその労働の価値ではないと主張しなければならなかった、とされるのであった。[なお、ミークは、尺度とは不変性をそなえたものでなければならないということのスミスが認識したこと自体は、スミスの功績として認められるべきである、とするのであった。]

なおまたミークによれば、労働時間が相対的「価値」の指標として正しく用いられうるようになるためには労働の異なった種類あるいは等級について適当な比重が与えられなければならないという考え自体は『国富論』よりもはるかに古いものであったけれども労働力が商品となりそしてそれがかなり競争的な条件のもとで売られるようになると価値の問題に関連して本当に考慮に入れられるべき労働の質的差異は熟練と強度の差にもとづくものだけということになった、しかし熟練度や強度の異なる労働が入り込んでいる場合にさまざまな商品の相対価値を労働のタームで評価するという問題自体は依然として困難な問題であるのであったのであるが、スミスは価値尺度につい

ての章〔『国富論』第1篇第5章〕のはじめに近いところおよびつぎの章のなかの「初期未開の社会状態」のもとにおける価値の決定についての議論の途中でこの問題を論じている、とされるのであった。そしてミークによれば、この問題についてのそこでのスミスの議論そのものはいくつかの点で不十分なものではあったけれども、スミスは熟練労働の不熟練労働へのあるいは強度のまさった労働の強度の劣った労働への理論的な還元が市場において当該の労働者たちが実際に受け取る報酬を考慮することによって行われるべきだということを示唆しているわけではないという意味で、この問題についての全体としてのスミスの議論にたいしては、実際には、循環論法という非難はあてはまらないのであり、スミスはそこでは、(a)理論上は、調整が行われなければならない、ということ、(b)実際には、調整は「ある正確な尺度によってではなく、市場のかけひきや交渉によって」なされる、ということ、を、言っているのである、とされるのであった。だがさらにまたミークによれば、たしかにスミスは理論的調整がなされるべきやり方については詳しく述べてはいないけれどももしスミスがこのことをさらに手を加える必要のあるほどに重要なものと考えていたならば彼がたどったかもしれない道すじを、彼はいくつか示しもしているものであり（少なくとも、熟練労働の不熟練労働への理論的な還元という理論的調整については——なお、ミークによれば、スミスは強度のまさった労働の強度の劣った労働への還元の問題よりも熟練労働の不熟練労働への還元の問題にヨリ関心をもっていた、とみられるのであった——）、スミスには、さきで触れられたような尺度の不変性の必要性を認識したという名誉にくわえて、熟練労働の不熟練労働への還元という問題を提出した（また部分的には解決した）という名誉も与えられるべきである、とされるのであった。

「真の価値尺度」についてのスミスの議論そのものの内容さらにそれと関連をもつ「異質労働の問題」についてのスミスの議論に関してミークは概ね以上のような把握をなしたのであるが、さらにミークによれば、うえのような支配労働を「真の価値尺度」とするスミスの議論では結局のところ、産出の価値はその産出が支配するであろう労働の量によって評価され、投入の価値はその産出の生産に要する労働の量によって評価され、そしてそれら二つの労働量の間の差が可能な蓄積の尺度、ということになっているのであるが、実際には、産出の価値をその産出の生産に要した全労働量で評価し、投入の

価値をその産出を生産するのに用いられた資本財と原材料と人間エネルギーとの生産に要した労働量で評価する、といったように生産過程における価値差額の出現がおのずと明らかになるのを許すようなやり方で投入と産出とを「労働」に還元する方法が存在するのであって、スミスはこの意味で事実上、不必要な二分法を導入することとなった、とされるのであった。またミークによれば、尺度の不変性の必要性を認識するとともに売り上げで支配しうる労働の量——売り上げで雇いうる現在の労働の量——を「真の価値尺度」としようとするスミスの議論では、労働の価値は不変で、そして商品が支配するであろう労働量の変化はつねにその商品の価値における変化を示すということになるのであるが、〔その商品の売り上げで雇いうる現在の労働の量といった脈絡で考えられるものとしての〕労働の価値そのものは実際には不変的なものではなくて可変的なものであるものであり、そしてまたそのようなスミスの議論に従えば生産諸条件一定のままでの現行賃金率の変化によるその商品の支配労働量の変化も、その商品の価値の変化ということになってしまうのである、とされるのであった。さらにまたミークによれば、支配労働を「真の価値尺度」としようというスミスの論理に従えば、労働が賃労働となる以前の、スミスのいう「初期未開の社会状態」では商品の生産に要した労働量とその商品が支配するであろう労働量は一致するが資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態では労働の産物のなかに占める新たな分け前としての利潤と地代の存在のゆえに、商品の生産に要した労働量が「初期未開の社会状態」におけるのと同じであってもその商品が支配するであろう労働量はそれよりも大きくなる、したがってその商品の価値は増大してしまうことになる、この意味で、ここでも、その商品の生産の技術的諸条件が同一であるときにその商品の価値自体は増大してしまうということになってしまう、とされるのであった。

このようなことにもみられるように、ミークによれば、スミスがそのような支配労働という尺度を「真の価値尺度」としたことが、価値についてのスミスの議論に関連する諸困難のうちのたいていのものの起源となっていた、とみられるのであったのであり、また、以上のミークの議論からすれば、スミスのいう「真の価値尺度」としてのこの支配労働という尺度は、この覚書の最初でみた意味での「内在的尺度」というわけでもないということになるであろうし、さらに、その尺度は労働力が商品となった資本主義社会という

それが生まれた社会のきわめてはっきりとしたしるしを身につけているのであって、その尺度は、スミスの意図に反して、資本の蓄積と土地の占有に先立つ「初期未開の社会状態」にもそれらが行われる社会状態にも同じように安全に適用しうるもの、あらゆる種類の社会におけるあらゆる商品交換に適用しうるもの、というわけではない、ということになるであろう。さらにまた、そのような尺度を「真の価値尺度」としようとするスミスの議論では、生産の領域で人々が相互にむすぶ基本的諸関係が交換の領域において彼らが入る諸関係を究極的に決定するという考えの表現をその本質とする労働価値説が十全に展開されえないこととなった、ということになるのであった。

ただし、すでにみたようにミークは、スミスによる尺度の不変性の必要性の認識および熟練労働の不熟練労働への還元という問題の提出（そしてその問題の部分的解決）ということを積極的に評価しようとしたのであり、さらにミークによれば、先でみたような事実上の歴史的使命をもったスミスは、価値現象を、社会的分業によって特徴づけられるすべての近代社会においては諸個人はある種の市場で彼らの労働の生産物を相互に交換する独立の商品生産者としての資格において互いに関係づけられるという事実と、結びつけることから価値についての議論を始めるという適切かつ論理になかった道すじを取り、そしてスミスは実際、価値とは商品が社会的労働の生産物であるという事実によってその商品に与えられる属性であると考えの傾向をもっていたのであり、また、たしかにスミスは体化された労働の量による価値の規制という考えが資本の蓄積と土地の占有に先立つ「初期未開の社会状態」だけでなくそれらが行われる社会状態にも適用されうるということを示すための論理を見いだすことはできなかったのではあるけれども、体化された労働の量が価値を規制するのにいくらかでも役立つとすればそれはどの程度であるのかといった形でこの問題を尋ねた最初の人物がスミスであったように思えるのであり、そして彼がそれを尋ねたという事実は、彼がそれに十分に答えられなかったという事実よりもはるかに重要なことであって、事実、労働価値説はスミスから大きな貢献を受けているのであり、それゆえ彼が労働価値説を「拒否」したのだと主張することは労働価値説の誤解であるだけでなくスミスの重要な貢献を過小評価するものであり、少なくとも重大な限定がつかないかぎり、そのようなことをほのめかすことは、ばかげているほどなのである、とみられるのであった。

28. H. M. ロバートスンと W. L. テイラー (1957年)

ももとは1957年に公表された H. M. ロバートスン (H. M. Robertson) と W. L. テイラー (W. L. Taylor) の一共同論文 (H[ector] M. Robertson and W[illiam] L. Taylor, “Adam Smith’s Approach to the Theory of Value,” in *Essays in Economic Thought: Aristotle to Marshall*, edited by Joseph J. Spengler and William R. Allen, Chicago: Rand McNally, ©1960, pp. 288–304. [Reprinted from *Economic Journal*, vol. 67 (no. 266, June 1957), pp. 181–198.] なお、ここでは上掲書所収の上掲論文を使用するのであるが、ここで取り扱うロバートスンとテイラーとによる研究の発表年の区分については、上掲の彼らの共同論文がもともと公表された年、1957年をとり、そして、以下では、上掲書中の彼らの共同論文を、Robertson & Taylor [1957] と略記することとする) においてロバートスンとテイラーがその議論を展開する過程で、彼らは、『国富論』でのスミスの議論における「使用価値」と「交換価値 (value-in-exchange)」を「効用 (utility)」と「価値 (value)」として捉え⁽¹⁾、また、『国富論』におけるスミスの注意は市場価値の一時的な決定ということよりもむしろ諸国民の富 (*Wealth of Nations*) の変動の原因についての長期的な説明ということに向けられていた、といった見方を示しているのであるが⁽²⁾、彼らはまた、『国富論』における価値尺度に関するスミスの議論ということに関連をもつ次のような見方も示している、といえる。

① 『国富論』においてスミスは、物質的厚生 (material welfare) にたいする社会および社会的諸制度の影響を研究していたのであり、彼は、1人当たり実質国民所得を決定する社会的諸原因に関心を抱いていたのであり、そして『国富論』は実際にそのような問題を考察するものとして構築されていたのであるが、このような意図およびそれを具体化した『国富論』の構造⁽³⁾ということから、諸国民の「富」および特にその増進をリアル・タームで測定するために、経時的な確固たる比較を可能にするようななんらかの不変の価値標準が必要となった⁽⁴⁾。

② スミスは、貨幣でよりもむしろ穀物で長期の (long-term) 計算をする

ことの好都合さを論じた。そしてそれは、穀物のほうがより一層それ自体の価値の安定性を維持しそうである、という根拠によるものであった。⁽⁵⁾

③ しかしながら、不変の価値標準を見つけ出すという問題に対する解答としては、スミスは、「労働」を全面的に支持したのであり、そしてそうすることに対してスミスが与えている理由は、明らかに、労働の不効用あるいは労働の真実の費用（real cost）に関するある一定の心理的な仮定に基づいており、またその仮定はたしかに不正確なものではあるが、不変の価値標準を労働に、しかもたんなる労働ではなくて市場において支配される労働の量に求めるスミスは、⁽⁷⁾そこでは、価値とは究極的な意味においては対象物が尊重されるその尊重（esteem）ということの意味するという事実上の認識に立ちつつ、商品が尊重されるその尊重における諸変化についての最も確かな尺度を提供するものとして、二つの異なる時点においてその商品によって支配される労働の量というものを選ぼうとしたのであったのである。⁽⁸⁾

④ なお、労働者にとって彼の労働の真実の費用はつねに同一のままであるということに関するスミスの諸仮定のもとでは、支配される労働量は価値の標準尺度を提供することであろうけれども、このことは、価値を決定（determine）するものは何かという問題とは関係のないものとみなされなければならない。というのは、何故にある品物の価格はある所与の労働量を支配するようなものであるべきなのかということに関しては、いかなる満足のいく説明も提供されないからである。ところがスミスは、このような意味で価値尺度の問題と価値決定の問題とは異なる性質のものであるにもかかわらず、別の道すじで「労働」を正常な（normal）価値あるいは「自然的な（natural）」価値の問題に結びつけようという試みによって、これら二つの問題の異なる性質を不明瞭にしてしまった。⁽⁹⁾

⑤ しかしながら、このような難点が存在するとはいえ、スミスは、彼の「支配される労働」という尺度を、諸国民の富の本質と諸原因についての本物の研究という経済学の発展に寄与した『国富論』の試みのための、ひとつの用具として使用しようとしたのであり、そして事実、その尺度は、実質国民所得の測定のための、あるいは、生産物産出高の変化を厚生の変化と関連づけるための、土台を、提供したのである。⁽¹⁰⁾

（注）

28. H. M. ロバートソンと W. L. テイラー (1957年)

- (1) Robertson & Taylor [1957], p. 290.
- (2) Robertson & Taylor [1957], p. 298.
- (3) このことについてのロバートソンとテイラーの説明については, Robertson & Taylor [1957], pp. 298-299 を見よ。
- (4) Robertson & Taylor [1957], p. 299. なお, ロバートソンとテイラーによれば, スミスの〔E. キャンナン (E. Cannan) 編〕『グラスゴウ大学講義』のなかにはハチスン (F. Hutcheson) から受け継がれた「稀少性」および「有用性」という概念に基づく価値の問題へのアプローチが見いだされるのであるが, スミスは『国富論』において, 稀少性および有用性といった考えを棄てたり市場の諸力を除外したりしたわけではないが価値にたいする彼のアプローチの力点という点で, 「労働」および「生産費」を強調する方向へと向かった, とされる。そして, ロバートソンとテイラーは, スミスがそうしたことの大きな理由は, スミスは『国富論』において彼の注意を諸国民の富の変動の原因の長期的な (long-term) 説明, 物質的厚生にたいする社会および社会的諸制度の影響, 1人当たり実質国民所得を決定する社会的諸原因といった問題に向けたことにある, とみている。すなわち, そのような問題を考察するにあたっては, 諸国民の富およびその変化の測定ということが必要となるのであるが, 「稀少性」および「有用性」といった概念に基づく価値の問題へのハチスンらのまたそれを受け継いだスミスの初期のアプローチから説明される市場価格, すなわち, 市場におけるつかの間の気まぐれや流行に, 供給と需要との間の一時的な諸関係に依存する市場価格は, リアル・タームでの, 諸国民の「富」の測定およびその異時点間の比較という目的のためには満足のいくものではないと思われた, というのである。Robertson & Taylor [1957], pp. 288-301.
- (5) Robertson & Taylor [1957], p. 300.
- (6) 不変の価値標準として労働を選んだことに対してスミス自身が与えている理由を示すものとして, ロバートソンとテイラーは, 『国富論』のつぎのような文章を引用している。「ところで, 人間の足の大きさとか, 一尋^{ろくろ}の長さとか, 一握りの量とか, というようなそれ自身の量がたえず変動する量の尺度は, けっして他の物の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように, それ自身の価値がたえず変動するような商品も, 他の諸商品の価値の正確な尺度とは, けっしてなりえない。等量の労働は, 時と場所のいかんを問わず, 労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康, 体力, 精神が普通の状態で, また彼の熟練と技能が通常程度であれば, 彼はつねに, 自分の安楽, 自由, 幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は, それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと, つねに同一であるにちがいない。なるほど, その労働は, より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば, より小さい分量のこれらの財貨を購買することもある。だが, 変動するのは, それらの財貨の価値であって,

それらを購買する労働の価値ではないのである。時と場所のいかに問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかな労働で入手できるものは、安価である。それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格 (real price) であり、貨幣はその名目価格であるにすぎないのである。」(WN, pp. 32-33. 大河内訳 < I >, 57-58ページ。) Robertson & Taylor [1957], p. 300.

(7) なお、ロバートスンとテイラーは事実上、スミスがたんに労働ではなくて市場において支配される労働の量を不変の価値標準としていることそれ自体は、スミスが稀少性や有用性といったものにかかわる市場諸力というものを除外していたわけではないということを示している、とみている。それについては Robertson & Taylor [1957], pp. 300-301 を見よ。

(8) Robertson & Taylor [1957], pp. 300-301. なお、ロバートスンとテイラーは、本章「28」の前出注6でみたスミスの文章にくわえて、つぎのようなスミスの文章も引用している。「あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとするに人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。……その貨幣、またはそれらの財貨は……ある一定量の労働の、価値を含んでおり、その一定量の労働の、価値を我々は、そのときそれと等しい量の労働の、価値を含んでいるとみなされるものと、交換するのである。……世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(WN, pp. 30-31. 大河内訳 < I >, 52-53ページ。傍点の付されている箇所は、ロバートスンとテイラーがイタリック体にしてある箇所。) Robertson & Taylor [1957], p. 301.

なお、ロバートスンとテイラーは、『国富論』におけるスミスによる「真実価格 (real price)」と「名目価格 (nominal price)」との区別ということに言及するのであるが、彼らは、そこでのスミスの議論における「真実価格」の大きさは不変の価値標準によって測定されるものであって、そしてそのような価値標準を提供するものとしてスミスは「穀物」を、さらに最終的には「労働」しかも「支配される労働」を全面的に支持した、とみている、ということもできる。それについては、たとえば Robertson & Taylor [1957], pp. 300-301 を見よ。

(9) Robertson & Taylor [1957], p. 301. なお、ロバートスンとテイラーは、スミスのその試みにおいては、未開社会という単純化されたモデルからより発達した社会という現実的なモデルへ、非論理的な移転が試みられた、とし、さらにつぎのよう

な説明をくわえている。それによれば、商品の「自然」価格の、すなわち市場への供給の継続を確保なものにするのに必要な総要素支払いに等しい商品の「自然」価格の、諸構成部分の評価ということにさいして、スミスは生産に費やされる (expended) あるいは生産に具現される (embodied) 労働の量を未開社会における商品の特定の価値の唯一の拠り所 (source) としたのであった、しかしまた、ヨリ発達した社会の場合には、「自然的な」利潤と「自然的な」地代がそれに付け加えられなければならないのであった。だが彼は、これらの付加されるべき諸要因についてのいかなる満足のいく説明をも与えはしなかったのである。そしてスミスはここに、リカードウ (D. Ricardo) (リカードウは、スミスの意図に関して、ここで提示された見解とは違った見解を持っていたように思える) が論理的に一貫したものにしようとしてかえっていっそう混乱をひどくさせるようになってしまったところの混乱状態を、残すこととなったのである。Robertson & Taylor [1957], p. 301.

- (10) Robertson & Taylor [1957], pp. 301-302. なお、ロバートスンとテイラーは、つぎのような説明を加えている。それによれば、異なる国々における1人当たりの相対的な経済的厚生を測定しようといういくつかの工夫に富んだ試みは、結局のところ、「支配される労働」というスミスの測定尺度のたんなる洗練化にすぎないということがわかるかもしれない。たとえば、もし人がコーリン・クラークの「国際単位」(Colin Clark's "International Units") のタームで比較実質実収賃金 (comparative real earnings) の測定を試みたとすれば、労働の実収賃金を、1925年から1934年の期間にもとづく一定のドル価格で評価された商品バスケットのタームで、評価するということになるであろう。これは、諸商品とそれと交換できる労働量とを結びつけるところの、スミスによって提出された関係にたいする逆の関係、であるにすぎない。だが、人は、たんに我々にはできないのだといった態度をとることで満足している人々にたいするクラークの苛立たしさということには、共感することもできる。Robertson & Taylor [1957], p. 304n. 39.

またロバートスンとテイラーは、つぎのような指摘をなしている。すなわち、「彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常程度であれば、その人間の労働の生産物産出高は、彼が労働はうんざりするものであると考えるということによって制限されるということは、ありうるのではないであろうか。」Robertson & Taylor [1957], p. 302.

H. M. ロバートスンと W. L. テイラー (1957年) についての覚書

ロバートスンとテイラーは、『国富論』でスミスが言う「交換価値」を「価値」、「使用価値」を「効用」として捉えるのであるが、彼らによれば、『国富論』でのスミスの関心そのものは、諸国民の富の変動の原因についての長期的な

説明、物質的厚生に対する社会および社会的諸制度の影響の研究、1人当たり実質国民所得を決定する社会的諸原因の究明といったことに向けられていたのであり、価値の尺度についてのスミスの議論もそのような脈絡のなかで展開されているのであって、その議論は事実上、諸国民の「富」およびその変化をリアル・タームで測定して経時的な確固たる比較を可能にするような不変の価値標準の問題についての議論であった、とみられるのであった。

そして、ロバートスンとテイラーによれば、スミスはその問題に関して、貨幣よりも穀物で長期の計算をするほうが、穀物のほうがより一層それ自体の価値の安定性を維持しそうであるという理由から、より好都合であるとしつつも、「価値」とは究極的な意味においては対象物が尊重されるその尊重ということの意味するといった事実上の認識に立つスミスは、不変の価値標準を見つけ出そうというその問題に対する解答としては、労働の不効用（あるいは労働の真実の費用）に関する不正確な仮定に基づきつつ「労働」を、しかも、「支配される労働」を、全面的に支持した、とみられるのであった。

なお、ロバートスンとテイラーによれば、労働者にとっての彼の労働の不効用（労働の真実の費用）は不変であるということに関するスミスの諸仮定のもとでは、（事実上、異時点において当該商品によって支配される労働量というものはその商品が尊重されるその尊重における諸変化についての尺度を提供する、といった意味で）「支配される労働」は価値の標準尺度でありうるかもしれないとしても、それ自体は、なぜそれだけの量の労働が支配されるのかという事情を説明しうるもの、価値の決定の事情を説明しうるものではないのであるが、スミスは別の道すじで「労働」を正常な価値あるいは「自然的な」価値の問題に結びつけようと試みることによって、「価値の尺度」の問題と「価値の決定」の問題という二つの問題の異なった性質を不明瞭にしてしまった、とみられるのであった。

しかしまたロバートスンとテイラーによれば、スミスの議論は以上で触れられたような難点をもつとはいえ、スミスの「支配される労働」という尺度は、実質国民所得の測定のための、あるいは、生産物産出高の変化を厚生の変化と関連づけるための、ひとつの土台を提供したのであり、また事実、異なった国々における1人当たりの相対的な経済的厚生を測定しようとする現代おこなわれているいくつかの試みは、結局のところ、「支配される労働」というスミスの測定尺度のたんなる洗練化にすぎない、とみられるのであった。

29. L. ロビンズ (1958年)

1958年に刊行された L. ロビンズ (L. Robbins) の一著書 (Lionel Robbins, *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*, London: Macmillan; New York: St. Martin's Press, 1958. 以下, Robbins [1958] と略記する) のなかでロビンズはつぎのような見解を示している。

① いずれにせよ古典派の議論に関するかぎり、価値尺度として労働を使用するという考えは、『国富論』にさかのぼる。その第 1 篇第 5 章において、「労働は……すべての商品の交換価値の真の尺度である」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52 ページ) と述べられている。⁽¹⁾

② しかしながら、スミスによるこの考えの展開は曖昧なものであった。彼は、彼の尺度を、ある商品がそれを生産するのに費やさせる (cost) とところの労働の量というタームと、その商品がそれと交換に支配するであろうところの労働の量というタームの両方のタームで、語ったのであった。ところで、これらの概念は同一のものではないということは明らかである。ある商品と交換される労働の量が広範囲にわたって変動するときにも、その商品が費やさせる労働の量は一定に留まるかもしれないのである。⁽²⁾

(注)

(1) Robbins [1958], p. 67.

(2) Robbins [1958], p. 67. なお、ロビンズは以上でみた見解を Robbins [1958] の第 3 章第 7 節(b)「価値の尺度 (The Measure of Value)」の中で示しているのであるが、それに先立つ同じ節の(a)「価値の原因 (The Cause of Value)」において、スミスの議論にも言及しつつ価値の決定因に関する問題を取り扱っている。このことからして、スミスの議論自体における「価値の原因、価値の決定」の問題と「価値の尺度」の問題との関係についてのロビンズの見方ということとはともかくとして、少なくとも、ロビンズ自身はそれらの問題を別のものとして捉え、スミスの議論についてもそのような視点に立って言及している、といえよう。

L. ロビンズ（1958年）についての覚書

ロビンズは、価値の原因、決定因の問題と価値の尺度の問題とを別の問題として捉え、そして、古典派の議論に関するかぎり価値尺度として労働を使用するという考えは『国富論』にさかのぼるのであるがスミスは彼の尺度を、概念的には別のものである「商品の生産に費やされる労働の量」と「商品が支配する労働の量」という両方のタームで語っており、その意味でスミスによる価値尺度としての労働という考えの展開は、曖昧なものであった、とするのであった。

30. S. アムビラジャン (1959年)

1959年に刊行された S. アムビラジャン (S. Ambirajan) の一著書 (S. Ambirajan, *Malthus and Classical Economics*, Bombay: Popular Book Depot, 1959. 以下, Ambirajan [1959] と略記する) のなかでのアムビラジャンの議論によれば、『国富論』におけるスミスの価値理論 (theory of value) は効用としての「使用価値」と他財貨にたいする購買力としての「交換価値」との区別から始まるのであり、またスミスは分析の対象をそのうちの交換価値に限定するとともに一国の富 (wealth) を、交換価値をもつ事物に限定した、とされるのであるが⁽¹⁾、アムビラジャンは、そのようなものとしてのスミスのその価値理論をさらに、「自然価格」と「市場価格」に関するものとしての価格決定についての議論と、価格 (price) の背後に存在しそして価格によって表現されるものとしての「交換」価値についての議論とに分けて考察し、そしてさらに後者の問題についてのスミスの議論を、価値の源泉 (source) および価値の尺度 (measure) に関するものとして捉えて、つぎのような指摘をなしている。

① スミスは、労働がすべての富の「したがってまた交換価値の」源泉であるとした⁽⁴⁾。他方、価値の尺度については、スミスは、金や銀は価値の変動にさらされるものとして却下し、労働は最も重要な生産者でありまた事物の費用あるいは代価の尺度であるものはその事物を獲得することの労苦と骨折りであるということから、労働こそが「すべての商品の交換価値の真の尺度」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52ページ) である、とした⁽⁵⁾。

② しかしながら、スミスの議論には、「投下労働価値説」 (the embodied labour theory of value) と「支配労働価値説」 (the commanded labour theory of value) という二種類の労働価値説が存在するのである。「投下労働価値説」によれば商品の価値は、その商品の生産に費やされる (spent) 労働量に対応する⁽⁶⁾。だが、文明化が進むにつれて、労働は唯一の価値尺度ではなくなるであらう。商品の価値は、労働者に対してだけでなく資本家に対してもなされなければならない諸支払いの総計を包含するのであ

⁽⁷⁾ ここでは、投下労働価値説は適用できないであろう、そして、なんらかの商品を所有するがそれを他の商品と交換することを欲する人物にとってのその商品の価値は、「その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい」(WN, p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ) こととなる。未開社会では、支配される労働 (commanded labour) と体化される労働 (embodied labour) とは等しかったにちがいない、しかし、文明化の進行とともに、企業者 (entrepreneur, 企業家)⁽⁸⁾ の用役 (services) が報酬を与えられなければならないであろうがゆえに、したがってまた支配される労働は、労働費用と企業者の「用役にたいする」費用にも対応しもするであろうがゆえに、支配される労働は体化される労働よりも大きくなるであろう。⁽⁹⁾

(注)

- (1) Ambirajan [1959], pp. 97-98.
- (2) 前者の議論についてのアムビラジャンによる考察については、Ambirajan[1959], pp. 98-100 を見よ。
- (3) Ambirajan [1959], p. 100.
- (4) Ambirajan [1959], p. 100. アムビラジャンによれば、重農主義者がすべての富の源泉を土地と考えたのにたいしスミスは労働のみが生産力をもつと考えたのであり、事実、『国富論』は「国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを本来的に供給する源 (fund) である」(WN, p. lvii. 大河内訳〈I〉, 1ページ) で始まっている、とされる。Ambirajan [1959], p. 98.
- (5) Ambirajan [1959], p. 100.
- (6) アムビラジャンはつぎのようなスミスの文章を引用している。「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態のもとにおいては、種々の物の獲得に必要な労働量のあいだの比率が、これらの物を相互に交換するにあたっての原則 (rule) を提供しうる唯一の事情であったと思われる。」(WN, p. 47. 大河内訳〈I〉, 80ページ。) Ambirajan[1959], p. 100.
- (7) このことを示すものとしてアムビラジャンはつぎのようなスミスの文言を引用している。分業と資本 (stock) の使用ということを意味する進歩した状況のもとでは、「労働の全生産物はつねに労働者に属するとはかぎらない。彼は、多くの場合、彼を雇用する資本 (stock) の所有者とそれを分け合わなければならない。……どんな国でも、その土地がすべて私有財産になってしまうと、地主たちは、他のすべての人々と同じように、自分たちが種子をまきもしなかった場所で収穫したが、土地の自然の生産物にたいしてさへ地代を要求する」(WN, p. 49. 大河内訳〈I〉, 84ページ)。Ambirajan[1959], p. 100.

- (8) アムビラジャンによれば、企業者をそのように「企業者 (entrepreneur)」と命名したのはのちの J. B. セー (J. B. Say) であったけれども、スミスは「企業者」の存在を暗に示していた、とされる。Ambirajan [1959], p. 101.
- (9) Ambirajan [1959], pp. 100-101. なお、以上でみてきたアムビラジャンの指摘からして、アムビラジャンがスミスの議論における価値尺度と言う場合、そこでは「価値の測定の問題」と「価値の決定、規制の問題」との区別、関係といったことは問題にされず、アムビラジャンは、スミスの議論における価値尺度の問題を、価値の測定と同時に価値の決定、規制の問題として捉えている、といえる。あるいは、アムビラジャンにとっては、価値の測定と価値の決定とは同じ問題であり、それは価値尺度の問題であった、ともいえる。

S. アムビラジャン (1959年) についての覚書

アムビラジャンによれば、『国富論』におけるスミスの価値理論は「使用価値」と「交換価値」との区別から始まり、そしてスミスは分析の対象を交換価値に限定するとともに一国の富を、交換価値をもつ事物に限定した、とみられるのであった。

さらにまたアムビラジャンは、そのようなものとしてのスミスのその価値理論をさらに、「自然価格」と「市場価格」に関するものとしての価格決定についての議論と、価格の背後に存在しそして価格によって表現されるものとしての交換価値そのものについての議論とに分けて考察し、そしてさらに後者の問題についてのスミスの議論を、価値の源泉および価値の尺度に関するものとして、捉えるのであった。

そしてアムビラジャンによれば、スミスは価値の、源泉および真の尺度を労働に求めたのではあるがその価値尺度に関してスミスは、資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期末開の社会状態については当該事物の生産に費やされる労働の量を、資本の蓄積と土地の占有の行われる社会状態については当該事物によって購買または支配される労働の量を、その事物の価値の尺度としたのであった、とみられるのであった。なお、アムビラジャンは、前者の考えにたいして「投下労働価値説」という言葉を、後者の考えにたいして「支配労働価値説」という言葉を与え、そして事実上、スミスの議論における「価値尺度」を、価値の大きさの規制、決定ということにかかわりなくたんに価値の大きさを測定するものというよりも、価値の大きさを規制し同時にその大きさを測定するものとして、取り扱うのであった。

31. R. ルカッチマン (1959年)

1959年にその著作権が成立した R. ルカッチマン (R. Lekachman) の一著書 (Robert Lekachman, *A History of Economic Ideas*, New York, etc.: McGraw-Hill, 1st McGraw-Hill paperback edition, 1976; ©1959. なお、ここでは上掲のペーパー・バック版を使用するのであるが、ここで取り扱うルカッチマンの研究の発表年の区分については、上掲書の著作権が成立した年、1959年をとり、そして、以下では、上掲ペーパー・バック版を Lekachman [1959] と略記することとする) のなかでのルカッチマンの議論によれば、スミスは『国富論』第1篇第4章の末尾において価値の問題に到達し、水とダイヤモンドの価値のパラドックスに触れたのち、交換価値の問題に専心して取り掛かることを、すなわち、交換価値はどのようにして測定されるか、またその構成部分は何であるか、さらに、何故に市場価格はときとして自然価格すなわち本当の交換価値を上まわったり下まわったりするのかという問題に専心して取り掛かることを、約束したのであり、そして『国富論』第1篇の残りの諸章はスミスの価値理論 (theory of value) の中心部を含んでいた、とされるのであるが、⁽¹⁾ ルカッチマンは、それらの諸章で展開されているスミスの議論についての検討をなす過程で、つぎのような指摘をなしている。

① スミスは、「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」では、当該商品と交換されるところの商品を生産するのに必要とされる労働量が、その当該商品の価値を決定 (determine) するとしたのであるが、⁽²⁾ 他方、資本が蓄積され土地が占有されるようになると資本家と地主という社会の所得にたいする二つの追加的な要求者が出現するため、労働者はもはや全生産物にたいする全面的な権利を享受しないこととなるが、それでもなおすべての種類の所得の真実価値すなわち賃金、利潤および地代の真実価値は「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって」(WN, p. 50. 大河内訳 <I>, 85ページ) 測定 (measure) される、とした。⁽³⁾

② また、スミスによれば、市場が異なった種類の熟練についておおよそ

31. R. ルカッチマン (1959年)

の調整をなすのではあるが、大体のところ、1時間の労働は、それがいつ、また、だれによって、実行されようとも、おなじ1時間の労働なのであった。そして、スミスがこのように考えた理由は平等主義的なものであった。すなわち、彼の言う労働という真の尺度とは、労苦と骨折りつまり休息するよりも働くことに伴う実際の苦痛といった精神的なものであったのであり、そして、人々はお互いに異なっているよりもヨリいっそうお互いに類似しているために、これらの苦痛は等しくなる傾向がある、というものであった。⁽⁴⁾

(注)

- (1) Lekachman [1959], pp. 90-91.
- (2) Lekachman [1959], p. 91. ただし、ルカッチマンによれば、スミスの労働量による説明自体のなかには、スミスはある生産物を生産するのに必要とされる労働の量がその生産物の価値を決定するというを言おうとしたのか、それとも、当該生産物と交換される生産物を生産するのに必要とされる労働の量がその当該生産物の価値を決定するというを言おうとしたのかといったことにかかわる混乱は存在した、とされる。Lekachman [1959], p. 95.
- (3) Lekachman [1959], p. 91. なお、ルカッチマンによれば、『国富論』第1篇には、主に未開社会にはあてはまるが他の場所にはそぐわないようにも思われるある純粋な労働量説 (a pure labor-quantity theory)、その各々の自然率での賃金、利潤および地代の合計として現実の価格が説明される生産費説 (a cost-of-production theory)、そして、供給および需要という力に基づく市場価格理論 (a market-price theory) という三つの価値理論が含まれており、そしてスミスはこれら諸理論のあいだを揺れ動いただけでなく、彼はまた、ときとして同一章句のなかで、彼の価値理論を、価格の基本的な傾向の説明と価格の変化の測定という二つの異なる目的のために、使用しようとしたのであり、また、純粋な労働量説を放棄してしまったあとでさえ、労働は利潤および地代の価値を測定するかもしれないという望みに執着した、とされる。Lekachman [1959], p. 95.
- (4) Lekachman [1959], p. 91.

R. ルカッチマン (1959年) についての覚書

ルカッチマンによれば、スミスは『国富論』において水とダイヤモンドの価値のパラドックスに触れたのち、交換価値の問題に専心して取り掛かることを約束したのであるが、『国富論』第1篇には事実上、純粋な労働量説、生産費説、需要と供給による市場価格理論という三つの価値理論が含まれて

いたのであり、そしてスミスはこれらの理論のあいだを揺れ動いただけでなく、スミスはまた、彼の価値理論を、価格の基本的な傾向の説明と価格の変化の測定という二つの異なる目的のために使用しようとした、とされるのであった。

なお、ルカッチマンによれば、スミスの労働量による説明自体のなかには、スミスは当該事物の生産に要する労働量はその当該事物の価値を決定するということを言おうとしたのか、それとも、当該事物と交換される他の事物の生産に要する労働量はその当該事物の価値を決定するということを言おうとしたのかといったことにかかわる混乱が存在したのではあるが、スミスは、価値の決定を説明するものとしてのそのような混乱を伴った彼の労働量説を放棄してしまったあとでさえ、労働は賃金の価値にくわえて、利潤および地代の価値を測定するかもしれないという望みに執着した、とみられるのであった。

また、ルカッチマンによれば、スミスは異なった種類の熟練についての市場によるおおよその調整ということに言及しているのではあるがスミスが労働を真の尺度とする場合、そこで言われている労働という尺度は労苦と骨折りつまり休息するよりも働くことに伴う実際の苦痛といった精神的なものであったのであり、そしてスミスは人間相互の異質性よりも類同性を重視することからこれらの苦痛はすべての人間にとって等しくなる傾向があると考え、この意味ですべての労働は大体のところ同じものであり、大体のところ、1時間の労働は、それがいつ、また、だれによって、実行されようとも、おなじ1時間の労働なのであるとした、とみられるのであった。

32. D. F. ゴードウン (1959年)

1959年に公表された D. F. ゴードウン (D. F. Gordon) の一論文 (Donald F. Gordon, "What Was the Labor Theory of Value?" *American Economic Review*, vol. 49 (no. 2, Papers and Proceedings of the Seventy-first Annual Meeting of the American Economic Association, May 1959), pp. 462-472. 以下, Gordon [1959] と略記する) のなかでゴードウンは、マルクス (K. Marx) も、また、古典派の時代のいかなる主要な経済学者も、現代の語法で「労働価値説 (labor theory of value)」と呼ばれるものはもっていなかったけれども、スミス、リカードウ、マルクスという三人の最も著名な労働〔価値〕説論者と言われる人々は労働〔価値〕説という用語のうえの語法でのそれとは異なったしかもまったく明確な意味で、労働〔価値〕説と的確に呼ばれうるものをもっていた、ということを示そうとするのであるが、その議論の過程でゴードウンはつぎのような指摘をなしている。

① スミス、リカードウ、マルクスらのもっていた労働価値説すなわち「絶対価値の労働説」に共通する考えは、どんな経済財にも、いかなる他の経済財とも関係なしに、ある絶対的な数が付されうるであろう、ということ、そして、これらの絶対的な数は、その商品が購買する労働時間 (labor time) であるかまたはその商品が「包含 (contain) する」労働時間である、ということである。したがって、「絶対価値の労働説」と呼ばれてもよいものを解釈するさいには、これらの数と、交換比率によって表されるところの関連はするけれどもまったく別な数の組み合わせ、とのあいだの区別をなすことが、非常に重要である⁽⁴⁾。また、これらすべての労働〔価値〕説は規範的な提案であるということを認識することは、たぶん、より重要なことでさえある。すなわち、それらの説は、その主張者たちが意識していようが意識していまいが、あの哲学上の立場をもっているのである。ただし、それらの説は、すべての生産物は労働者のものになるべきだということをとくに唱道しているといった単純な意味で規範的であるのではなく、社会会計の単位についてのすべての提案は規範的なものであるというより一般的な意味で、規範的なもの

なのである。⁽⁵⁾

② 『国富論』では、絶対価値というこの考えは、第1篇第5章において展開されている。すなわち、スミスは、この章において、とりわけ、あらゆる商品にたいしてある絶対的な数——その商品を購入するのに必要とされる労働時間の量——をあてがうことを提案している。そしてスミスがそのようにしたことの根拠は、1時間の労働の苦痛費用 (pain cost) あるいは心理的不効用にはある一定の不変性が存在する、ということであった。⁽⁶⁾

③ スミスは、商品の絶対価値を、通常、「真実価格 (real price)」と呼び、ときとして、「真実価値 (real value)」と呼ぶのであるが、スミスにとっては、この絶対価値は、現代の厚生経済学がなしているのと幾分似かよった機能を果たしている。すなわち、この絶対価値は、スミスをして、個人あるいは社会が時および場所の移りかわりをつうじて暮らし向きが向上しているか否かを査定することを、可能にするのである。⁽⁷⁾

④ 「絶対価値の労働説」とは、なんらかの経験的な関連性をもつ厳密に定義されたモデルにおいて価値の解明を論理的に導き出そうとするものではない、それゆえ、そのような「絶対価値の労働説」のなかに現代の相対価格理論に代わるものを見いだそうとする試みからは、大きな混乱が生じうる。スミス、リカードウ、マルクスの「絶対価値の労働説」というこれらすべての三つのケースにおいては、経済財に絶対的な数をあてがうのは、価値判断を含んだ数字上の比較をなすという目的のためであったのである。⁽⁸⁾

⑤ 「絶対価値の労働説」は、社会会計に関する単位についての他の提案と同様に、価値判断を含む規範的な性格をもつのであるが、⁽⁹⁾「絶対価値の労働説」の規範的性質は、その主唱者たちによって提出された弁護の性格のなかにはっきりと見られる。たとえば、スミスは、労働時間は労働者にとってはつねに等しい価値をもつと「言うことができよう」ということを主張しうるにすぎないのであり、彼は、苦痛費用という我々の直感的な感じに訴えることへとすすみ、そして、ヨリ詩趣に富んだ言説をもって彼の所説を引き続き述べるのである。⁽¹⁰⁾

⑥ 我々は、通常の意味では、これらの労働説の「妥当性」を論議することはできない。しかし我々は、それらのものを我々自身の直感的な判断と比べることはできる。1時間の労働は、不効用や何やかやをつうじて、ともかくも、ある不変な大きさの精神的なウエイト (moral weight) をもつ、と考

32. D. F. ゴードン (1959年)

えられてもよいという労働説に関するスミスの見解は、現代世界のことさら深く思考することのない常識によって広く受け入れられており、また、学識者でさえつぎのような考えに、すなわち、これこれの数の諸商品について1時間の労働が1900年に購買したよりもはるかに多くのものをおなじく1時間の労働が購買するという事実のなかにはなんらかの規範的な意義が存在するのだという考えに、抵抗するのは困難であるということを知っている。現代の人々も、スミスとともに、1時間の労働の購買力というものが一つのより意味のある変数であると感じざるをえないのである。⁽¹²⁾

(注)

- (1) ゴードンによれば、「価値理論 (theory of value)」という語句の現代の意味によれば「労働価値説」とは、おそらくつぎのような命題すなわち、諸商品は、もし必要とあらば石器時代にまでさかのぼっての資本財の創造に必要なとされた労働量をも含めて、それらの商品の生産に必要なとされた諸労働量と逆の関係になる比率で交換される、という命題をさす、とされる。そしてゴードンはこの命題を、「相対価格の労働説 (the labor theory of relative price)」と呼ぶ。(Gordon [1959], p. 462.) それにたいしてゴードンは、スミス、リカードウ (D. Ricardo)、マルクスがもっていたものとしての労働価値説を「絶対価値の労働説 (labor theories of absolute value)」と呼ぶ。(Gordon [1959], pp. 466-467.)
- (2) それについてのゴードンの説明については、Gordon[1959], pp. 462-466 を見よ。
- (3) Gordon [1959], p. 462.
- (4) ゴードンによれば、このことは、スミスの議論のなかでみられるような二つの絶対的な数のあいだの比率が必然的にある交換比率に等しいといったケースにおいてさえ、真実である、とされる。Gordon [1959], p. 467.
- (5) Gordon [1959], pp. 466-467.
- (6) Gordon [1959], p. 467. なお、スミスがそのようにした根拠を示すものとしてゴードンは、『国富論』のつぎのような文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態で、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働は、より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば、より小さい分量のこれらの財貨を購買することも

あろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購入する労働の価値ではないのである。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58ページ。) Gordon [1959], p. 467.

- (7) Gordon [1959], p. 467. リカードウおよびマルクスの議論についてのこのような観点からのゴードウンの検討については, Gordon [1959], pp. 467-470 を見よ。
- (8) Gordon [1959], p. 470. なお, ゴードウンによれば, たとえばこんにちの国民生産物のような社会会計のいかなる単位も, 同じような価値判断を含んでいる, とされる。そしてそれに関連してゴードウンはつぎのような説明を示している。それによれば, 生産高とはその最も「物的な」側面だけにおいてさえ, さだかでない問題を含んでいるのであり, そして, 我々がある経済の総生産物を計算するためのルールを提案するときには, 我々は, さまざまな諸構成要素——つねにまったく多くの物的な内容をもつ諸構成要素——にたいする価値ウエイトを, 提案しているのである。ウエイトとして相対価格を使用するといった現行の慣行は, 我々が頑固にしかしまぎらわしく物的生産高と呼ぶものに到達するための, ありうる多数の「もっともらしい」規範的諸提案のうちの一つの提案にすぎないのであり, 「絶対価値の労働説」も一つの別の提案なのである。Gordon [1959], p. 470.
- (9) ゴードウンはつぎのような説明をくわえている。それによれば, 価値的あるいは規範的諸提案の根本的な哲学上の立場に深く立ち入らなくとも, それらの提案は非規範的な諸公理から厳密に演繹されることもできなければ, また, 通常の意味において, いかなる経験的根拠もそれらの提案に関係づけられることもできないということは, 明らかである。ところで, 論理的で経験主義的な (logico-empirical) 伝統に染まりそして心のうちに現代の相対価格理論の, 経験的一般法則とすっきりした定理をもちつつ諸労働〔価値〕説にアプローチする現代の批評家たちは, それらの労働〔価値〕説を混乱の絶望的な寄せ集めとして退ける傾向がある。またより同情的であったとしてさえ彼らは, 労働価値説のなかには大きな形而上学的要素が含まれているのではないかと疑う傾向がある。これはたしかに真実である, ただし, 鉱工業生産指数も同様に形而上学的要素をもつというのと幾分同じ意味で, 真実なのである。Gordon [1959], p. 470.

また, リカードウの絶対価値概念についての M. ブラウグ (M. Blaug) の「しかしながらこのことのうちには形而上学的なものは何ら存在しない。絶対価値は単に社会会計の一つの単位にすぎない」(Mark Blaug, *Ricardian Economics: A Historical Study* (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1958), p. 36. 馬渡尚憲, 島 博保訳『リカードウ派の経済学——歴史的研究——』(木鐸社, 1981年), 58ページ) という所見にたいして, ゴードウンは, むしろ, 「このことのうちには形而上学的な何かが存在する。というのは, それは社会会計の一つの単位であるからである」と言うべきである, としている。Gordon [1959], p. 470n. 16.

32. D. F. ゴードウン (1959年)

- (10) Gordon [1959], pp. 470-471. リカードウ, マルクスについては, Gordon [1959], p. 471 を見よ。

なお, ゴードウンによれば, 相対価格についての論理学的で経験主義的な理論と絶対価値についての規範的な理論とのあいだの本質的な相違を明らかにできなかったということが, スミス, リカードウさらにマルクスの議論についての諸評釈における混乱のひとつの大きな原因であった, とされる。たとえば, スミスは一つの事象に関して労働費用説 (a labor cost theory), 労働支配力説 (a labor command theory) および生産費説 (a cost-of-production theory) という三つの理論をもっていたということで, 批評家たちによって非難されてきた, だが実際には, スミスは, 相対価格については, 相対価格についての未開モデルおよび相対価格についての文明化された生産費モデルといったもっと具合の良い明確なものをもっているのである, とされる。Gordon [1959], p. 471.

リカードウ, マルクスに関しては, Gordon[1959], pp. 471-472 を見よ。

- (11) これについてはゴードウンはつぎのような説明を加えている。すなわち, もしそうでなかったら, 我々がこんにち見せられているように, ソビエト連邦と合衆国とではパンひとかたまりあるいは靴1足を稼いで得るのになん分必要かとこったことを示す表といったものを見せられるようなことはなかったであろう (そしてまた, もし我々が諸商品の選択において過度に不注意ではないとすれば, その表は, 合衆国のほうが暮らし向きがよいということを我々に示している)。Gordon [1959], p. 472.
- (12) Gordon [1959], p. 472.

D. F. ゴードウン (1959年) についての覚書

ゴードウンは, スミスの議論には, 一方で, 交換比率, 相対価格の決定に関しては相対価格についての未開モデルと相対価格についての文明化された生産費モデルというはっきりとしたものが存するとともに, 他方で, 他の経済財には関係なしにどんな経済財にもある絶対的な数, スミスの場合には当該経済財を購入するのに必要とされる労働時間の量, が付されうという考え, 絶対価値という考え (『国富論』ではこの絶対価値という考えは第1篇第5章で展開されており, そしてスミスはこの絶対価値を通常, 「真実価格 (real price)」と呼び, ときとして「真実価値 (real value)」と呼んだ) が存在するのであり, この意味での労働価値説つまり「絶対価値の労働説」は交換比率, 相対価格についての労働説つまり「相対価格の労働説」と本質的に性質を異にするのであり, それらのものは区別して考えられるべきである,

とするのであった。

そしてゴードウンによれば、スミスが財貨にたいしてうでみたような労働時間の量という絶対的な数をあてがうことを提案したその根拠は1時間の労働の苦痛費用あるいは心理的不効用にはある一定の不変性というものが存在するというのであったのであるが、スミスにとってはこのような数のあてがわれる絶対価値というものは、彼をして個人あるいは社会が時間および場所の移りかわりをつうじて暮らし向きが向上しているか否かを査定することを可能にするといった現代の厚生経済学がなしているのと幾分似かよった機能を果たすものであったのであり、財貨に絶対的な数をあてがおうとしたのは価値判断を含んだ数字上の比較をなすという目的のためであった、とされるのであった。

なお、ゴードウンによれば、事実上社会会計に関する単位についての提案を意味するこの「絶対価値の労働説」は、社会会計に関する単位についての他の提案と同様に、価値判断を含む規範的な性格をもつものであったのであり、またその性格のゆえに我々は通常の意味ではこの労働説の「妥当性」ということを論議することはできないのではあるが、1時間の労働はともかくもある不変な大きさの精神的なウエイトをもつと考えられてもよいというスミスの見解は、現代においても受け入れられているところがある、とみられるのであった。

33. M. ブラウグ (1959年)

1959年に公表された M. ブラウグ (M. Blaug) の一論説 (Mark Blaug, "Welfare Indices in *The Wealth of Nations*," *Southern Economic Journal*, vol. 26 (no. 2, October 1959), pp. 150-153. 以下, Blaug [1959] と略記する) においてブラウグは、『国富論』を偏見なく読めば、スミスが労働価値説 (a labor theory of value) を定式化しようとしたが商品の労働購買力とその商品の生産に具現された (embodied) 労働量とを混同し生産物の労働価格 (labor-price) と生産物の労働費用 (labor-cost) という全く別の事柄を同一視したという見解が誤りであることが分かるとし、そして、スミスは価値の尺度 (measure) と価値の原因 (cause) とのあいだの相違に十分に気付いていたのであり、また、スミスは価値の原因にはあまりかわりあわず、なんらかの時点における相対価格がなぜそのようなものであるのかといった価値理論 (value theory) の伝統的な問題はただ手短な取り扱いを受けただけであり、スミスはむしろ実質所得の不変の尺度を発見することに関心を抱いていたのだ、とする⁽¹⁾。そしてまたブラウグは、この尺度についてのスミスの議論すなわち「労働という測定尺度」についてのスミスの議論は、こんにち適切にも、指数問題を克服しようという努力を含む主観的厚生経済学 (subjective welfare economics) へのひとつの企てとみなされているが、従来のところ、スミスの厚生標準 (standard of welfare) を議論するにさいして概略的なものをこえて進んだ批評家はほとんどいない、とするのであるが⁽²⁾、そのようなものとしてのスミスの議論を取り扱おうとするこのブラウグの研究のなかには、以下にみられるような見方が見いだされる、といえる。

ブラウグによれば、スミスは、労働標準 (a labor-standard) を、資本蓄積率の指標 (index) と主観的所得の大きさの指標という二つの別個な意味で使用し、そしてスミスの議論は、発展しつつある経済においてはこの二つの指標は同一のものになるということを示すことに向けられている、とされる。⁽³⁾

まず、ブラウグは、資本蓄積率の指標としての労働標準というスミスの考えを、つぎのようなものとして示している。それによれば、そこでのスミス

の考えは、資本蓄積は賃金単位（不熟練労働の現行貨幣賃金率）で表された国民生産物の貨幣価値におけるある明確な趨勢を伴う、というものである。すなわち、『国富論』第2篇第3章において、「生産的労働」は、生産の次の周期 (cycle) においてより多くの労働を稼働させることができることの蓄蔵可能な富 (wealth) の諸品目とくに賃金財を生産する活動として、定義されている。このことは、すべての価値を現行の賃金単位で測定すれば、生産的労働は、それに体化された (embodied) 労働の価値を超える価値をもった物的産出物を生産するということ⁴⁾を、言っているのである。もちろんこのことは、そのような労働は通常、その維持および置換の費用を超える価値余剰 (value-surplus) を産み出すということ⁵⁾を言っているにすぎない。さて、もしこの「純収入 (net revenue)」がつねにすみやかに再投資されそして労働の供給が完全に弾力的であるならば、総産出物によって支配される賃金単位数の上昇傾向は保証される (WN, p. 54. 大河内訳 < I >, 92ページ)。資本と労働とは固定的な比率で結合される (WN, p. 421. 大河内訳 < II >, 116ページ) のであるから、雇用量は、資本の増加と同一歩調で増加するであろう。実質賃金が一定であれば、産出高の増大は、労働指標 (labor-index) の正の傾向ということになるにちがいない。スミスは、増大する労働力 (labor force) は増加する実質所得の「決定的なしるし」であるということ⁵⁾を、言いたかったのである (WN, p. 70. 大河内訳 < I > 119ページ)。

つぎにブラウグは、主観的所得の大ききの指標としての労働標準というスミスの考えを、つぎのようなものとして示している。それによれば、スミスは一方で、「初期未開の社会状態」という状況のもとにおいて実質所得をどのように測定するかという問題を提出している。事実上この状況は、生産物〔物的生産物、物的産出物〕に体化された個人的労働がこれらの生産物の購買しうる労働と一致するといった単一要素世界である。そのような状況のもとにおいては、人は、彼自身の労働用役の価値に応じてあるいは他の人々の労働にたいする彼の購買力に応じて、「富んでいたり貧しかったり」ということとなる。というのは、それら二つのものは等しいからである。ところが財産所得の発生とともに、この一致は破られる。いまや、実質所得は、他の人々の生産物にたいする支配力とともにのみ、変化する。しかしながら、労働はめんどろなものであるため、すべての人は、「労苦と骨折り」からのがれてそれを他の人々に課そうと努める (WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52-

53ページ)。ある意味で、生産物でもって購買されるものは、他の人々の「労苦と骨折り」なのである。またそれゆえ、実質所得の増加は、財貨にたいするより大きな購買力だけでなく労働にたいするより大きな購買力をも、意味するのである。個人の所得について真であることは、総計としての所得についても真である。すなわち、一国の富 wealth (所得 income と解釈せよ)は、その全体としての生産物によって支配される賃金単位数によって測定されるのである。⁽⁶⁾

ブラウグは、以上がスミスの議論の骨子でありそしてそこでは、資本蓄積は、労働指標における正の変化を引き起こすことによって、主観的厚生における増加ということになるとされている、とするのである。⁽⁷⁾そしてブラウグはさらに、そのようなものとしてのスミスの議論に関連してつぎのような諸点を指摘している。

① 測定の標準は、測定されるものの変化を正確に表すためにはその標準自体が不変なものでなければならない。ところが一見したところ賃金単位はこの条件を満たすことができない。すなわち賃金単位は、賃金財の価格や労働の需給におけるすべての変化とともに変動するのである。⁽⁸⁾

② だがしばらくの間、かりに、貨幣賃金および実質賃金が変わらないままに留まるとしよう。その場合、どのような意味で、賃金単位が主観的厚生の不変の標準を提供することになるのであろうか。明らかにつぎのような意味においてである。すなわち、我々はさらにまた、努力 (effort) 1 単位当たりの労働の平均的不効用はいかなる時にもすべての個人にとって不変であると仮定できる、という意味においてである。すなわちスミスは、「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい〔尊重〕価値 ([esteem] value) をもつものと言うことができよう」(WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 57ページ。[] 内はブラウグ) と、言うのである。この仮定はたしかに大胆な仮定である。人時 (man hour) 当たり主観的犠牲の不変な支出ということは、努力供給の弾力性 1 あるいは努力タームでの所得への需要の弾力性 1 を、含意しているのである。これは、長期における厚生評価に関する分析にとっては、まずい仮定である。というのは、成長しつつある経済において所得の努力価格 (effort-price) が低下しつつあるということそれ自体が、厚生改善におけるひとつの主要な要素であるからである。⁽¹⁰⁾

③ だが、スミスのこういった仮定を一応認めてみることにしよう。しか

しましたその場合にも、そういった所得の努力価格は、実際に機能を果たすことのできる測定標準のタームでもって表現されなければならないのであって、そのことにはつぎのような二つの難事が存在するのである。その一つは、代表的な貨幣賃金単位 (representative money wage unit) を選ぶというものであり、もういっぽうは、実質賃金を表現するために安定的な価値係数 (value-coefficient) を選ぶというものである。第一のものに関連しては、スミスは、相対的な賃金についての章 (『国富論』第1篇第10章) において、異なる職業の時間当たり賃金率における相違にもかかわらず完全競争が、労働の不効用の諸単位にたいする貨幣収入を平準化する傾向をもつということを示している。市場が、さまざまなタイプの労働をある共通の標準に還元するのである。したがって、原理的には、代表的な貨幣賃金単位は設定されるのである。⁽¹¹⁾第二のものに関連しては、スミスはつぎのような議論を示している。すなわち、銀の価値は「ただしここでは事実上、銀の労働購買力とならんで銀の生産物購買力という意味での銀の価値は」「年から年にかけては」さらに「半世紀またはまる1世紀の間」でさえ相対的に安定しているから、適度な長さの暦上の諸期間 (calendar periods) については、銀タームでの名目的な賃金単位で十分であろう (WN, p. 36. 大河内訳〈I〉, 62-63ページ)。しかし、もっと長い諸期間については、穀物賃金単位 (corn-wage unit, 穀物タームでの賃金単位) がより適している。穀物価格は短期 (short run) では鋭く変動し、しかも、貨幣賃金と同じ方向にか同じ振幅で変動することはまれであるのではあるが (WN, pp. 36, 74, 75, 83, 85. 大河内訳〈I〉, 62-63ページ, 126ページ, 127-128ページ, 141-142ページ, 145-146ページ), 「世紀から世紀にかけては」、穀物価格はいちじるしく安定的である (WN, pp. 36-37, 477, 482. 大河内訳〈I〉, 62-63ページ, 大河内訳〈II〉, 210-211ページ, 218-220ページ) のである。その理由は、費用を低落させるような農業上の諸改良が「農業の主要な用具」である家畜の価格の上昇によって「多かれ少なかれ相殺される」からである (WN, pp. 187, 219-224, 240. 大河内訳〈I〉, 309ページ, 355-363ページ, 388-389ページ)。しかも穀物は「人々の基本的な生活資料」であるから、穀物の貨幣価格は長期 (long run) では貨幣賃金を支配するのである。「世紀から世紀にわたる場合は、銀よりも穀物のほうがすぐれた尺度である。というのは、世紀から世紀にかけては、等量の穀物のほうが等量の銀よりも同一量に近い労働を支配するであ

ろうからである」(WN, pp. 37, 187, 476. 大河内訳〈I〉, 63ページ, 309-310ページ, 大河内訳〈II〉, 210ページ⁽¹²⁾)。議論は完全である。〔長期では、〕リアル・タームでの賃金単位すなわち穀物で測られた普通労働の賃金も、貨幣タームでの賃金単位〔その大きさは、長期では穀物の貨幣価格によって支配され、そして穀物の貨幣価格自体は、長期ではいちじるしく安定的であるのであった〕も、時間をつうじて不変的であり、そして、労働のある不変的な不効用を反映するのである。⁽¹³⁾

④ しかしながらスミスは他方で、「時と場所のいかに問わず、獲得するのにわずかな労働を費やさせるものは安価 (cheap) である」ということを疑わなかった。そうだとすれば、人時当たり産出高が上昇するにつれて、諸財貨の「真実価格 (real prices)」は穀物と比べて相対的に低下することとなるであろう、そしてそのことは、それらの財貨はヨリ少ない労働しか支配しないであろうということを意味しているのである。同様に、年々の総生産物によって支配される賃金単位の数も低下する傾向をもつこととなるであろう。諸商品によって支配される労働は、実質所得にたいする労働の購買力と逆の関係にあるのであるから、このことは十分に筋道がたっている。ところがこの線にそった推論は、主観的厚生のスミスの正の指標と全く矛盾することになる。そしてその矛盾は、スミスのその正の指標は不変の実質賃金ということと、技術進歩に相対して収穫一定ということとを、仮定しているという事実⁽¹⁴⁾に、帰因しているのである。

⑤ リカードウ (D. Ricardo) 流に言えば、厚生の向上とは「富 (riches)」の増加を意味するかもしれないしあるいは「価値 (value)」の低下を意味するかもしれない。そして、その場合の「富」の増加のひとつとは、こんにち我々が「資本の拡張 (capital widening)」と呼ぶものすなわち資本係数および労働係数不変のままでの産出高の増加であるのにたいして「価値」の低下とは、労働の平均生産性の上昇を、あるいは、スミスの言い方では産出物1単位当たり支配される労働の量の減少を、指し示しているのである。なお、リカードウは「富」それ自体は経済的厚生にとって筋違いのものとしてかたづけたのであるが、スミスもリカードウもともに「価値」を労働の平均生産性の逆指標としてしたがってまた経済的厚生の逆指標として取り扱っているという点では、本質的には、一致している。しかし、リカードウが厚生を産出物1単位当たりの人間努力を最小化する問題とみなしているのにたいし、

スミスは厚生を、実質所得にたいする労働の潜在的購買力を最大化する問題とみなしているのである。そしてスミスの標準は、その標準がヨリ明示的に主観的所得に結びつけられているというまさにその理由のゆえに、ヨリ多数の疑わしい仮定に依存している⁽¹⁶⁾のである。

⑥ しかしまたその反面、もし適切に理解されさえするならば、スミスの労働標準には具合の悪いところはないのであって、具合の悪いのは、ただ、スミスがそれを乱雑に適用したということなのである。実際のところ、いままでも指摘されてきたように、1人当たり経済的厚生の国際比較を行うための現代の諸方法は、スミスの厚生経済学の応用以外の何物でもないのである。たとえば、ソビエトの生活水準とアメリカの生活水準は、その二国のおのおのにおいて特定の諸物品をその時価で買うためには現行の率で報いられる労働何時間が必要とされるであろうかということをつねることによって、比較されるかもしれない。このような方法は、なかならず、ソビエト連邦における労働の不効用はアメリカ合衆国におけるのと同じであるということ、を、仮定しているのである。あるいはまた、実質実収賃金 (real earnings) は、一定のドル価格で評価されたある所与の賃金財バスケットのタームで、比較されるかもしれない (コーリン・クラークの国際単位 Colin Clark's International Units) のであり、これもまた同様な諸仮定を含んでいるのである。なお、いかなる人も、確かな見解が経済的厚生に関して形成されうするためにはこれらの方法は労働の生産性の比較および資本の生産性の比較——さらに、所得分布 personal income distribution (これは、古典派の経済学者たちが全く看過したところの厚生の一つの局面である) の比較——によって補充されるべきであるということ、を、否定しはしないであろう。⁽¹⁷⁾

(注)

- (1) Blaug [1959], p. 150. なお、他方でブラウグはまた、『国富論』における諸論題の配置順序がスミスの目的についての誤解をまねくこととなったとし、そして、つぎのような内容の指摘をなしている。すなわち、第1篇第4章は「財貨の相対価値または交換価値」の決定 (determination) を分析することを約束して終わっている、しかしそれにつづく第5章はそれよりもむしろ、貨幣価格の変化を評価するための異時点間の標準 (standard) を明らかにすることを試みており、資本は過去に支出された労働に還元されうするという考えを受け入れずに単純な生産貨幣費用説 (a

33. M. ブラウグ (1959年)

simple money-costs of production theory) で終わっている第6, 第7章までは相対価格の決定は議論されない, そして, 第6, 第7章からのこの結論も第5章で提示された「労働物差し (labor-yardstick)」には影響を及ぼしはしない, だが, もし第5章が第6, 第7章の先にはなくそれらの後にあったならば, 以上のことはもっとはっきりしていたであろう, というのである。Blaug [1959], p. 150.

- (2) なおブラウグによれば, H. ミントの分析 (我々が本書の「22」で取り扱った Myint [1948] の chap. 2. なお, ミントの所説については, 本書のその「22」も見よ) はひとつの注目に値する例外であるとされるのであるが, 同時にそれもまたつねに不明確さのないものであるというわけではなかった, とされる。(Blaug [1959], p. 150.) またブラウグはさらに, これに関連して, ミントの研究のほかに, すでに本書の「18」で触れられた M. ボウリー (M. Bowley) の著書, 「24」で触れられた J. A. シュムペーター (J. A. Schumpeter) の著書, および, 「28」で触れられた H. M. ロバートソン (H. M. Robertson) と W. L. テイラー (W. L. Taylor) の共同論文を参照するよう指示している。(Blaug [1959], p. 150n. 2.)

- (3) Blaug [1959], p. 150.

- (4) なお, ブラウグによれば, サービスは非耐久的であるため蓄積されえないということから物的産出物のみが考えられている, とされる。また, ブラウグによれば, 知識の伝達という重要な例外を伴いながらもこのことは確かに本当である, しかし, それがどのような重大な影響を及ぼすかということは, 別の問題である, とされる。Blaug [1959], p. 151n. 3.

- (5) Blaug [1959], pp. 150-151. なお, このことに関してブラウグはさらにつぎのような指摘を加えている。すなわち, しかしながらスミスは他方で, 「労働の報酬がよいということ」は増加する実質所得の決定的なしるし〔増加する実質所得の「必然的結果」, 「自然的徴候」〕であるということも, 言いたかった (WN, p. 73. 大河内訳〈I〉, 124ページ)。だがこのことはひとつのジレンマをつくり出す。すなわち, 実質賃金が上昇しつつあるときには, 正の投資率は必ずしも賃金単位にたいする総産出物の購買力における増加を意味するわけではないのであり, 事実, もし実質賃金が労働の平均生産性と同一速度で上昇するならば, 労働標準は, 経時的にいかなる変化をも示しはしないであろう。Blaug [1959], p. 151.

なおまた, 資本蓄積率の指標としての労働標準というスミスの考えについてのブラウグの以上のような議論そのものは, つぎのようなものとして示すこともできるかもしれないであろう。

すなわち, 事実上, スミスの議論においては, 生産物とは物的生産物, 物的産出物, 財貨としての生産物が考えられていたのであって, 国民生産物, 一国の生産物は一国において生産された全体としての物的生産物, 物的産出物, 財貨としての生産物であったのであり, そしてそのような生産物は「生産的労働」によって生産さ

れる、ということになっているのであるが、知識の伝達という重要な例外を伴いながらもサービスを非耐久的であるため蓄積されえないものとみて物的産出物のみを考えつつ議論を展開するスミスは事実上、「生産的労働」を、次の生産期にヨリ多くの労働を稼働させることができる場所の蓄蔵可能な富の諸品目とくに賃金財を生産する労働、としたのであって、そこでは事実上、すべての価値を現行の賃金単位（不熟練労働の現行貨幣賃金率）で測定すれば、生産的労働は、それに体化された労働の価値を超える価値をもった物的産出物を生産し〔（貨幣タームでの物的産出物生産高）／（賃金単位）＞（それだけの物的産出物生産のための貨幣賃金支払総額）／（賃金単位）〕、生産的労働は通常、その維持および置換の費用を超える価値余剰、「純収入」を生み出す、といったことが考えられていたのであった。そして事実上スミスの議論では、その価値余剰、「純収入」が資本として充用されて投資されるときに資本の蓄積が行われたことになり、資本ストックに対するその蓄積分の比、資本ストックの増加率が資本蓄積率ということになるわけであるが、資本蓄積率の指標としての労働標準というスミスの考えは、資本蓄積は、賃金単位で表された国民生産物の貨幣価値におけるある明確な趨勢を伴う、というものであった。すなわち、たとえば、（第1期における貨幣タームでの一国の生産物）／（賃金単位）＜（第2期における貨幣タームでの一国の生産物）／（賃金単位）のときには、それは、第1期と第2期との間に資本の増加、資本蓄積があったということを示す、というわけである。そしてそこでのスミスの論理は事実上つぎのようなものとして捉えられるはずのものであるのであった。すなわち、うえの「純収入」のすべてあるいはその一部が資本として充用されて投資されると資本が増加し、資本蓄積がなされたことになるのであるが、資本と労働〔生産的労働〕とは固定的な比率で結合されるとするスミスの議論からすれば、資本の増加そのものは、それと同一率での労働雇用量の増加を意味することとなる。なお、このようなことが言えるためには、労働をいくらかでも入用だけ調達することができるということが必要となるのであるが、もし労働の供給が完全に弾力的であるとすれば、その必要性は満たされることとなる。すなわち、その場合には、他の事情に変化がないかぎり、経時的に不変な貨幣賃金率したがって経時的に不変な大きさの賃金単位のもとでいくらかでも入用な労働が供給される、ということになるであろう。そしてまた、そのさいさらに、もし実質賃金〔率〕が一定であるとすれば、賃金単位で表された一国の生産物の貨幣価値〔（貨幣タームでの一国の生産物）／（賃金単位）＝その一国の生産物が支配しうる賃金単位数〕の増加は、それと同一率での、一国の生産物〔物的生産物、物的産出物〕そのものの量の増加を意味することになるであろう。そしてさらにまた、もし労働の平均生産性が一定であるとすれば、そこでは、一国の資本に増加があれば、それと同一率での一国の労働の雇用量の増加、さらに、それらと同一率での、一国の生産物そのものの量および賃金単位で表された一国の

33. M. ブラウグ (1959年)

生産物の貨幣価値の増加、が存在することとなるのであり、したがってまた、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数の増加の存在は、一国の資本の増加の存在、一国の労働の雇用量の増加の存在、一国の生産物そのものの量の増加を表すということになるのである。(それゆえまた、事実上貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数の増加がそのようなことを表すとするスミスのそのような議論では、事実上、資本と労働とは固定的な比率で結合されるとともに労働の供給が完全に弾力的、経時的に不変な貨幣賃金率したがって経時的に不変な大きさの賃金単位のもとでいくらかでも入用な労働が供給されうる、ということだけでなく、さらに、実質賃金率一定、労働の平均生産性一定、ということが仮定されている、ということになる、あるいは、そういったことが仮定されているときに、うえのようなものとしてのスミスの議論は成り立ちうる、ということになるのである。)そしてさらにまた、うえのような労働雇用量の増加は、労働によって生活する人々の増加、一国の労働力の増加を可能にするのであって、スミスは、増大する労働力は増加する〔一国の〕実質所得の「決定的なしるし」であるということを言いたかったのである。(ただし、スミスはまた他方で、「労働の報酬がよいということ」は増加する実質所得の決定的なしるし〔増加する実質所得の「必然的結果」,「自然的徴候」〕であるということも、言いたかったのであった。ところが、もし実質賃金〔率〕が一定ではなくて上昇しつつあるならば、正の投資率は必ずしも、総産出物が支配しうる賃金単位数の増加を意味するわけではない、ということになってしまうのであり、また事実、もし労働の平均生産性も一定ではなくて実質賃金〔率〕と労働の平均生産性とが同じ率で上昇するならば、労働標準は、経時的にいかなる変化をも示しはしない、ということになってしまうのである。)

(6) Blaug [1959], p. 151.

(7) Blaug [1959], p. 151.

(8) Blaug [1959], p. 151.

(9) ブラウグによれば、ひとたびこのことが認められれば、労働が一時的にヨリ多くの賃金財を受け取る場合には、「変動するのはそれらの財貨の〔尊重〕価値であって、それらを購買する労働の〔尊重〕価値ではない」(*WN*, p. 33. 大河内訳くI), 57-58ページ。〔 〕内はブラウグ)ということが言われうるのであり、非常に多くの評釈者たちを困惑させてきたこのスミスのことばは、その文脈においては完全に論理的なのである、とされる。Blaug [1959], p. 151n. 6.

(10) Blaug [1959], pp. 151-152. ここではブラウグはおそらくつぎのようなことを言っているであろう。

スミスの議論では事実上、一国の実質所得の増加とは、一国が全体としてもつことのできる生産物〔物的生産物、物的産出物〕にたいするヨリ大きな購買力を意味すると同時に一国が全体としてもつことのできる労働にたいするヨリ大きな購買力

を意味し、そしてその一国の実質所得は〔貨幣タームでの〕一国全体の生産物によって支配される賃金単位数〔(貨幣タームでの一国の生産物) / (賃金単位)〕によって測定される、ということになるのであった。なお、資本蓄積率の指標としての、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数といったスミスの議論を取り扱ったさいにみられたように、労働標準についてのスミスの議論では事実上、他の諸仮定とともに労働の供給は完全に弾力的、貨幣賃金率一定したがって賃金単位の大きさ一定でしかもいくらかでも入用な労働が実際に供給、支配、雇用されうる、ということ、また、実質賃金率一定ということも仮定されている、ということになるのであった。(ただし、実際には、賃金単位の大きさは、賃金財の価格や労働の需給におけるすべての変化とともに変動するのではあるが。)そして、さらにまたスミスの議論では事実上、努力1単位当たりの労働の平均的不効用はいかなる時にもすべての個人にとって不変、人時当たり主観的犠牲の不変な支出、ということが仮定されていたのであった。ところで、そのような大胆な仮定そのものは、つぎのようなことを含意している。すなわち、努力を供給して(努力としての労働を供給して、不効用を伴うものとしての労働を供給して)その見返りとして所得を得る人にとっては、努力の供給(努力としての労働の供給、不効用を伴うものとしての労働の供給)は所得への需要を意味すると考えれば、努力供給者(努力としての労働の供給者、不効用を伴うものとしての労働の供給者)をして努力供給量の増加、所得需要量の増加を引き起こさせるためには、努力1単位当たりの報酬率(努力としての労働1単位当たりの賃金率、不効用を伴うものとしての労働1単位当たりの賃金率)不変のままで努力供給量の増加率に等しい率での所得額の増加があればよいのであり、しかもそこでは努力1単位当たりの報酬率不変であるのであるから、その所得額の増加そのものは、それと同一率での、努力タームでの所得額〔(所得額) / (努力1単位当たりの報酬率)のもとで、分母の値一定〕の増加、ということになるのであって、それゆえまた、たとえば、努力供給量、努力タームでの所得への需要量のある率で増加させるためには、努力を供給する見返りに与えられるべき努力タームでの所得額(支配しうる努力単位数で表された所得額)にそれと同じだけの率での増加があればよい、ということとなる、といったことである。このような意味で、人時当たり主観的犠牲の不変な支出という仮定は、努力供給の弾力性1あるいは努力タームでの所得への需要の弾力性1、ということを含意しているのである。かくして、たとえば、一国の生産物そのものの量が、したがって一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力という内容を伴った一国の所得がある率で増加している場合、そこではまた、増加したその所得そのものは、努力1単位当たりの報酬率(努力としての労働1単位当たりの賃金率、不効用を伴うものとしての労働1単位当たりの賃金率)不変のままでその所得が許す範囲内でいくらかでも努力(不効用を伴うものとしての労働)を支配しうるのであるから、一国の努力

33. M. ブラウグ (1959年)

タームでの所得（支配しうる努力の単位数で表された一国の所得）、一国の所得の努力価格（支配しうる努力の単位数で表された一国の所得）も、うえのような内容を伴った一国の所得の増加の率と同じ率で、増加、向上している、ということとなり、そしてその一国の努力タームでの所得の増加、一国の所得の努力価格の向上は、一国が支配しうる労働不効用・主観的犠牲の増加、一国の主観的所得の増加、一国の主観的厚生の上昇を示す、ということも可能となる、ということになるのである。（スミスの議論では事実上、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数の増加は、その増加率と同一率での一国に存在した資本蓄積を指し示すとともに、その支配される賃金単位数の増加はまた、その資本蓄積によるそれと同一率での、一国の生産物そのものの量の増加したがって一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力という内容を伴った一国の所得の増加の存在と同時に、一国が全体としてもつことのできる労働不効用・主観的犠牲にたいする購買力の増加の存在を、指し示すということになっているのであり、またこのような意味でスミスの議論では、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数という労働標準は、資本蓄積率の指標を提供するとともに主観的所得の大きさの指標を提供する、ということにもなっているのである。）ただし、うえのような大胆な仮定に基づくうえのような議論そのものは、長期における厚生評価ということにとっては、まずいものである。すなわち、たとえば、一国の生産物そのものの量の増加したがって一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力という内容を伴った一国の所得の増加が事実上あったとしても、もし、うえでみた意味での努力供給の弾力性あるいは努力タームでの所得への需要の弾力性が1でなくて、一国の生産物そのものの量の増加→一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力という内容を伴った一国の所得の増加率を超える率での努力1単位当たりの報酬率の上昇（不効用を伴うものとしての労働1単位当たりの賃金率の上昇）が同時にあったならば、一国の努力タームでの所得、一国の所得の努力価格によって示されるものとしての一国の主観的所得水準、主観的厚生水準は低下してしまったということになってしまうのであるが、実際には、生産物そのものの量の増加→生産物にたいする購買力という内容を伴った所得の増加と同時にその増加率を超える率での努力1単位当たりの報酬率の上昇（不効用を伴うものとしての労働1単位当たりの賃金率の上昇）が存在するような成長しつつある一国経済における一国全体としての所得の努力価格の低下それ自体は、厚生改善におけるひとつの主要な要素でもあるのである。

(11) Blaug [1959], p. 152. ただし、ブラウグによれば、この議論にたいしては、賃金構造が経時的に硬直的であるか否かということが問題となりうるのであり、この視点からの異議は可能である、とみられる。Blaug [1959], p. 152n. 7.

(12) ただし、ブラウグは、『国富論』の「過去4世紀間における銀の価値の変動に関

する余論」の全体は穀物賃金〔穀物タームでの賃金〕の長期的不変性 (long run constancy) という考えを正当化することに向けられてはいるが、これが、けっして簡単化のためのひとつの仮定ではないといえるかどうかを判断することは困難である、とし、そして、つぎのような指摘をなしている。すなわち、スミスはある箇所で、規則正しく記録された穀物価格の時系列データと比べて貨幣賃金についての時系列データが非常に不足しているということについて述べており、そしてスミスは、この事実のゆえにのみ我々は「労働の時価とつねに正確に同一割合にあるからというのではなく、ふつう入手できるもののなかでは、その割合にいちばん近づきうるものであるという理由から」穀物価格にたよらざるをえないのだということを示唆している (WN, p. 38. 大河内訳〈I〉, 65-66ページ), というのである。Blaug [1959], p. 152n. 8.

(13) Blaug [1959], p. 152.

(14) Blaug [1959], p. 152. ここではブラウグはつぎのようなことを言っているのであろう。すなわち、スミスの議論では、長期においては穀物価格は安定的であり、また、穀物は「人々の基本的な生活資料」であるゆえ長期では穀物価格は貨幣賃金率を支配し、長期では穀物の労働購買力は安定的であって、長期では、貨幣タームで示されるものとしての賃金単位の大きさも穀物タームでの賃金単位の大きさも不変的で、しかも、労働のある不変的な不効用を反映する、ということになるのではあるが、他方でスミスはまた、「時と場所のいかんを問わず、獲得するのにわずかな労働を費やさせるものは安価である」ということを疑わなかったのであった。そうだとすれば、穀物については、それを獲得するために投入されなければならない労働量は安定的、ということになり、またそのことは、穀物生産における人時当たり産出高は安定的であるということを意味することとなる。そこで、もし他の諸財貨の生産において人時当たり産出高が増加すれば、それらの財貨の「真実価格」は、穀物に比べて相対的に低下することとなる。そして、穀物タームでの賃金単位の大きさは不変であるのであるから、それらの財貨のタームでみた場合の賃金単位の大きさは増加、労働1単位が支配しうるそれらの財貨の量は増加することとなり、それらの財貨は、ヨリ少ない労働量（賃金単位数）しか支配しえない、ということとなるであろう。また、年々の総生産物のなかには穀物以外のものも含まれているであろうから、他の事情に変化がないかぎり、年々の総生産物によって支配される賃金単位の数も同じように、そのような人時当たり産出高の増加がなかった場合に比べて相対的に減少することになるであろう。そこでは、そのような人時当たり産出高の増加自体は、年々の総生産物によって支配される賃金単位数を減少させる方向へと作用するのである。したがって、年々の総生産物そのものの増加による、年々の総生産物によって支配される賃金単位数の増加傾向よりも、そのような人時当たり産出高の増加による年々の総生産物によって支配される賃金単位数の減少傾向の

33. M. ブラウグ (1959年)

方が強いときには、年々の総生産物それ自体が増加している場合でも、その年々の総生産物によって支配される賃金単位数は減少してしまうということになるのである。諸商品によって支配される労働量と、労働を提供することの見返りとして与えられるべき諸商品の量とは、逆の関係にある、この意味で諸商品によって支配される労働は、実質所得にたいする労働の購買力と逆の関係にある、のであるから、このような議論は十分に筋道のたったものでありうる。ところが、この線にそった推論は、主観的厚生のスミスの正の指標と全く矛盾することとなる。すなわち、ここでは、年々の総生産物そのものの増加が、年々の総生産物によって支配される賃金単位数の増加としてあらわれ、そしてその支配される賃金単位数の増加が、主観的厚生の向上を指し示す、ということになっているのである。そしてこの矛盾は、主観的厚生の正の指標というそのスミスの議論では事実上、実質賃金〔率〕不変ということ、さらに、人時当たり産出高不変、収穫一定ということが仮定されている、ということに帰因しているのである。

なお、ブラウグはつぎのような指摘を加えている。すなわち、実際には、スミスは、人口増加は分業の範囲を拡大することによって1人当たり産出高を高めるであろうということを感じていた。そしてこの傾向それだけでも、産出高へのあらゆる追加はより少ない追加的賃金単位〔数〕しか支配しないであろうということ、を、ほのめかしているのである。Blaug [1959], p. 152.

- (15) Blaug [1959], p. 152. なお、ブラウグはここでは事実上、「資本係数」、「労働係数」をそれぞれ、資本と産出高との間の限界量間の関係、労働と産出高との間の限界量間の関係ではなく、生産物1単位当たりの資本量、生産物1単位当たりの労働量として考えつつ、「資本の拡張」を資本係数および労働係数不変のままでの産出高の増加として示しているのである。したがってそこでは、生産物1単位当たりの資本量（資本係数、資本・産出高比率）および生産物1単位当たりの労働量（労働係数、労働・産出高比率）不変のままでの資本と労働の比例的増進による産出高の増加としての、「資本の拡張」による産出高の増加、ということが考えられているわけである。したがってまたそこでは、その労働係数の逆数である労働の平均生産性は、経時的に不変、ということになるのである。

なお、いうまでもなく、ここでは「資本」によって事実上、生産要素としての「労働」にたいする生産者財とりわけ機械設備のような耐久的資本のことが意味されているのであり、また、労働の平均生産性に増大がありうるとすれば、それは、資本・労働比率の上昇によるものか、あるいは、資本・労働比率一定のもとでの生産関数の変化によるもの、ということになるのである。

- (16) Blaug [1959], pp. 152-153. ここではブラウグはつぎのようなことを言っているのである。すなわち、リカードウ流に言えば、厚生の向上とは、「富」の増加〔享受しうる必需品、便益品および娯楽品の量の増加〕を意味するかもしれないしある

いは「価値」の低下を意味するかもしれない。そして、その場合の「富」の増加のひとつとは、事実上こんにち我々が「資本の拡張」と呼ぶものによって達成されるもの、すなわち、産出物1単位当たりの資本量（資本係数、資本・産出高比率）および産出物1単位当たりの労働量（労働係数、労働・産出高比率）不変——したがって、資本係数の逆数としての資本の平均生産性および労働係数の逆数としての労働の平均生産性は、不変——のままで資本と労働の比例的増進による産出高の増加によって達成されるものであった。これにたいし、そこでの「価値」の低下とは、労働の平均生産性の上昇、あるいは、スミスの言い方では産出物1単位当たり支配される労働の量の減少を、指し示していたのである。なお、リカードは、「富」それ自体は経済的厚生にとって筋違いのものとしてかたづけたのであり、事実上、「厚生」を産出物1単位当たりの人間努力〔産出物の生産にあたって産出物1単位当たり投下されなければならない努力としての労働の量、不効用を伴うものとしての労働の量〕を最小化する問題とみなしつつ、「価値」を、労働の平均生産性の逆指標として、したがってまた経済的厚生の逆指標として、取り扱ったのであった。他方、スミスは、リカードが「厚生」を産出物1単位当たりの人間努力を最小化する問題とみなしたのにたいし、事実上、実質所得にたいする労働の潜在的購買力（*potential purchasing power*）〔なお、ブラウグは、「実質所得にたいする労働の潜在的購買力」ということによって事実上、生産に労働が投下されてその見返りとしてその労働が獲得しうる可能性をもつ実質所得の最大限を画するものとしての、労働の投下をつうじて産み出されることとなった全体としての現実の実質所得、といったことを意味しているのであろう、したがってまたそこでは、一国全体としてみた場合には、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力の大きさそのものは、一国の実質所得の大きさに等しく、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力の内容そのものは一国の実質所得ということになる〕を最大化する問題とみなしたのであった。また、スミスは、「時と場所のいかんを問わず、獲得するのにわずかな労働を費やさせるものは安価である」ということは疑わなかったのであって、そこでは、もし労働の平均生産性に上昇があれば、「価値」は低下する、スミスの言い方では産出物1単位当たり支配される労働の量が減少する、逆に言えば、労働1単位当たり支配しうる産出物量、労働1単位当たり産出物購買力が増加する、ということになるのである。したがって、いまもし実質所得を産出物購買力という観点からのみ捉えたとすれば、たとえ一国の実質所得が支配しうる労働の量そのものには何の変化も存在しなかったとしても、もし、労働の平均生産性に上昇があつて労働1単位当たり支配しうる産出物量、労働1単位当たり産出物購買力に増加が存在していたならば、そこでは、一国の実質所得、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力そのものは増大していた、したがって一国の経済的厚生水準に上昇が存在していた、ということになるはずである。それゆえまたこの脈絡においては、「価

33. M. ブラウグ (1959年)

値」は労働の平均生産性の逆指標であるとともに経済的厚生 of 逆指標でもありうる、ということになるはずであり、またその意味では、スミスはリカードと一致するということにもなりうるのである。だが他方で、スミスの議論では事実上、実質所得ということには産出物〔物的産出物、物的生産物〕購買力ということと同時に労働不効用・主観的犠牲購買力、主観的所得ということが意味されており、そして、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力の大きさ、つまり、一国の実質所得の大きさは、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数によって測定されるのであった。そこでは、その賃金単位数、したがって、支配しうる労働の量が一定であれば、一国の生産物そのものの量およびそれに対応する一国の産出物購買力、また、一国の労働不効用・主観的犠牲購買力、主観的所得は、一定でなければならない、そしてまたその賃金単位数に増加があれば、その増加率は、一国の生産物そのものの量の増加による一国の産出物購買力の増加率と同時に一国の労働不効用・主観的犠牲購買力、主観的所得の増加率を、指し示さなければならないのである。すなわち、スミスの議論では事実上、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数の増加、したがってまた一国の実質所得の増加、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力の増加そのものは、資本の蓄積によって引き起こされるのであって、一国の資本蓄積が最大化されるときに、一国の産出物購買力であると同時に一国の労働不効用・主観的犠牲購買力、主観的所得であるところの一国の実質所得、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力が、その上限に到達している、一国の経済的厚生が最大化されている、ということになるのであり、そして、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数の増加率が、一国に存在した資本蓄積のその蓄積率を、また、一国の生産物購買力〔物的生産物購買力、物的産出物購買力〕および主観的所得の増加率を、指し示す、ということになっているのである。しかしまた同時に、主観的所得ということとより明示的に結びついたスミスのそのような標準がそのような役割を果たしうるものといえるためには、事実上、より多数の疑わしい仮定が必要とならざるをえない、ということになるのである。

なお、ブラウグはさらに、つぎのような説明を加えている。それによれば、たとえばもし実質賃金が時間をつうじて変化するならば、スミスの全議論は崩れ去ってしまう。また、諸商品は、たんに貨幣賃金が増加してしまったためにより少ない労働しか支配しないかもしれないし、あるいは、賃金財の価格が低下してしまったために〔貨幣賃金が増加してしまったのではなくて、賃金財の価格が低下して賃金財としての諸商品の価格が低下してしまったために、したがってさらにまた、賃金財をその構成要素として含んでいる諸商品の全体としての貨幣価値が低下してしまったために〕より少ない労働しか支配しないかもしれない。ところが、それから結果として生じてくる、投資へのしたがってまた総産出物によって支配される賃金単位数〔数〕の趨勢への、影響は、この二つの場合において非常に異なるであろう。この

難点は、実質賃金と貨幣賃金との両方が長期において不変に留まる傾向があるときにのみ、消え去るのである。Blaug [1959], p. 153.

また、ブラウグによれば、いまみたこのことが、スミスへのリカードウの不同意の根源である、とされる。このことに関するリカードウのスミスへの批判およびそれについてのブラウグの論評については、Blaug [1959], p. 153, p. 153n. 10 を見よ。なお、そこには、つぎのようなブラウグの指摘が含まれている。すなわち、リカードウの体系においては、資本蓄積は穀物価格の上昇を招き、実質賃金は不変に留まるが貨幣賃金は穀物価格とともに上昇し、そしてこれが地代の上昇と利潤の低下を引き起こす、とされているのであり、そしてリカードウは、「スミス博士の全著作をつうじての誤謬は、穀物の価値は不変であると想定していることにある」(Ricardo, Principles [ed. Sraffa], p. 374. 堀訳『原理』, 430ページ)、としてスミスを批判する。しかしながら、「世紀から世紀にかけての」穀物価格の安定性ということへのスミスの確信は、1815年の穀物法といったような政策手段についての分析とは関係のないものであったのであり、結局のところ、リカードウの目的はスミスの目的ほど野心的なものではなかったにもかかわらず、リカードウは、スミスがリカードウ的な問題とかかわりあってたと仮定することによってスミスの標準にたいして筋違いの批判をなしたのであり、彼は、スミスの標準は長期的な比較のためにしかもたいへんな長期 (huge long run) のために使用されるよう意図されているのだという事実を、無視しているのである。

(17) Blaug [1959], p. 153.

M. ブラウグ (1959年) についての覚書

ブラウグによれば、『国富論』での諸論題の配置順序がスミスの目的についての誤解をまねくこととなったということは確かではあるけれども、スミスが価値の規制、決定を因果的に説明するものとしての一つの労働価値説を定式化しようとしたが商品の労働購買力と商品の生産に具現された労働量とを混同し生産物の労働価格と生産物の労働費用という全く別の事柄を同一視したとみるのは誤りであり、スミスは価値の尺度ということと価値の原因ということとのあいだの相違には十分に気付いていたのであり、そしてスミスは価値の原因ということにはあまりかわりあわず、なんらかの時点における相対価格がなぜそのようなものであるのかといった価値理論の伝統的な問題はただ手短な取り扱いを受けただけであってスミスはむしろ実質所得の不変の尺度を発見するということに関心を抱いていたのである、とみられるのであった。さらにまたブラウグによれば、貨幣価格の変化を評価するための

異時点間の標準を明らかにすることを試みる『国富論』第1篇第5章のなかで「労働という測定尺度」といった考えが示されているのであるが、この「労働という測定尺度」についての議論そのものは、指数問題の克服への努力を含む主観的厚生経済学への一つの企てとみなすことができる、とされ、スミスは事実上「実質所得」の不変の尺度を彼の「労働という測定尺度」に求めるのであるが、スミスの議論では事実上、その労働標準は資本蓄積率の指標と主観的所得の大きさの指標という役割を果たすこととなっており、しかもそのスミスの議論は、発展しつつある経済においてはそれら二つの指標は同じものになる、すなわち、資本蓄積はスミスの労働標準のタームで示された一国の生産物の増大を引き起こし、そしてその増大は同時に一国の主観的所得、一国の主観的厚生を増大を指し示す、ということを示すことに向けられていた、とみられるのであった。

そして、このような視点からスミスの「労働という測定尺度」を捉えようとするそのブラウグの議論のなかには、事実上以下のような内容をもつものとして理解することもできるであろうような見方が見いだされるのであった：

スミスの議論では、一国の資本蓄積率は、賃金単位（不熟練労働の現行貨幣賃金率）で表された一国の生産物の貨幣価値の増加率に反映されるといったように、一国の資本蓄積は、賃金単位で表された一国の生産物の貨幣価値の増加の趨勢を伴う、といったことが考えられていたのであった。すなわち、資本と労働とは固定的な比率で結合されるしたがって資本の増加はそれと同一率での労働雇用量の増加を意味することになるといったことと共に労働の供給は完全に弾力的、貨幣賃金率一定したがって賃金単位の大きさ一定でしかもいくらかでも入用な労働が実際に供給、支配、雇用されうる、ということが、そしてまたそれに加えて、実質賃金率および労働の平均生産性一定、ということが、事実上仮定されていることにもなるスミスの議論では、一国の資本に増加があれば、それと同一率での労働雇用量の増加、さらに、それらと同一率での、一国の生産物そのものの量および賃金単位で表された一国の生産物の貨幣価値の増加、が存在する、ということとなっているのであって、そこでは、賃金単位で表された一国の生産物の貨幣価値〔(貨幣タームでの一国の生産物) / (賃金単位)〕の増加、貨幣タームでの一国の生産物によ

て支配される賃金単位数の増加の存在は、その一国に存在したそれと同一率での資本蓄積を指し示すとともに、その支配される賃金単位数の増加の存在はまた、それと同一率での、その一国において実際に雇用された労働量の増加、さらに、その一国の生産物そのものの量の増加を、指し示す、ということになっているのである。またさらに、労働雇用量の実際の増加は、労働によって生活する人々の増加、一国の労働力の増加を可能にするのであり、そして、増大する労働力は、増加する一国の実質所得の「決定的なしるし」、ということにもなっているのである。（ただし、ブラウグによれば、スミスはまた他方で、「労働の報酬がよいということ」は増加する一国の実質所得の決定的なしるし、増加する一国の実質所得の「必然的帰結」、「自然的徴候」であるということも、言いたかったのであった、だが、もし実質賃金率が一定でなくて上昇しつつあるならば、たとえ一国の資本に増加があったとしても、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数は必ずしも増加するというわけではない、ということになってしまうのであり、また事実、もし労働の平均生産性も一定でなくて実質賃金率が労働の平均生産性と同じ率で上昇するならば、労働標準は、経時的にいかなる変化をも示しはしない、ということになってしまう、とされるのであった。）なお、事実上、生産物をもつば物的生産物、物的産出物、財貨としての生産物として捉えるスミスの議論においては、うえのような資本蓄積のファンドをもたらしものそれ自体は、物的生産物を生産する「生産的労働」、しかも、それに体化された労働の価値を超える価値をもった物的生産物を生産して「純収入」を産み出すものとしての「生産的労働」であったのであり、そして、その純収入のすべてあるいは一部が資本として充用されて投資されるときに資本ストックが増加し、資本蓄積がなされたことになる、ということになっているのであった。

さて、このように、スミスの議論では事実上、一国の資本蓄積は、その蓄積率と同一率での、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数の増加を引き起こすのであって、後者の増加率はそのまま、その一国に実現された資本蓄積率を指し示し、そして、うえの賃金単位数の増加の存在そのものはまた、それと同一率での、その一国において実際に雇用された労働量の増加、さらに、その一国の生産物そのものの量の増加をも、指し示すとともに、労働雇用量の実際の増加そのものは労働によって生活する人々の

増加、一国の労働力の増加を可能にするのであり、そして増大する労働力は、増加する一国の実質所得の「決定的なしるし」、ということになっているのであるが、「実質所得」の測定方法そのものということについては、スミスの議論には事実上つぎのような考えが示されていたのであった。すなわち、生産物に体化された個人的労働量がそれら生産物の購買しうる労働量と一致する単一要素世界を意味する「初期末開の社会状態」という状況のもとでは、個人自身の労働用役の価値とその個人の、他の人々の労働にたいする購買力とは等しいのであって、そこでの個人の实質所得は、その個人自身の労働用役の価値に依じてと同じように、その個人の、他の人々の労働にたいする購買力に依じて、大きかったり小さかったりする。だが、財産所得の存在する社会での個人の实質所得の大きさは、その個人の、他の人々の生産物にたいする支配力とともにのみ、変化する。しかしまた同時に、労働はめんどろなものであるため人は「労苦と骨折り」からのがれてそれを他の人々に課そうと努めるのであって、ある意味で、生産物でもって購買されるものは、他の人々の「労苦と骨折り」なのである。かくして、実質所得の増加とは、財貨にたいするより大きな購買力を意味するのであるがそれはまた同時に、労働にたいするより大きな購買力をも意味するのである。個人の实質所得について真であることは、一国全体としての実質所得についても真である。一国の実質所得の増加とは、その一国が全体としてもつ生産物にたいするより大きな購買力を意味するのであるがそれはまた同時に、その一国が全体としてもつ労働にたいするより大きな購買力をも意味するのである。かくしてスミスの議論では、一国の実質所得の大きさは、賃金単位で表されたその一国の生産物の貨幣価値、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数、によって測定され、そしてその増加は、一国の実質所得の増加を意味する、ということになっているのである。

ところで、スミスの議論では事実上、うえてみられたように一国の実質所得の増加とは、その一国が全体としてもつ生産物にたいするより大きな購買力を意味すると同時にそれはまたその一国が全体としてもつ「労苦と骨折り」としての労働（努力としての労働）にたいするより大きな購買力をも意味する、ということになっていたのであるが、そのさいそのスミスの議論ではまた、努力1単位当たりの労働の平均的不効用（努力としての労働1単位当たりの労働の平均的不効用）はいかなる時にもすべての個人にとって不変、人

時当たり主観的犠牲の不変な支出ということが、すなわち、労働に伴う不効用は経時的に不変ということが、事実上仮定されていたのであった。そしてその大胆な仮定そのものは、労働者をして努力としての労働、不効用・主観的犠牲を伴うものとしての労働の供給量の増加を引き起こさせるためには、努力としての労働1単位当たりの賃金率一定のままで労働供給量の増加率に等しい率での賃金額の増加があればよい、そのような賃金額支払いが可能である範囲内では賃金率一定のままでいくらかでも努力としての労働の供給量の増加は可能である、ということを含意しているのである。かくして、スミスの議論では、すなわち、事実上、資本と労働とは固定的な比率で結合されるしたがって資本の増加はそれと同一率での労働雇用量の増加を意味することとなるといったこと、また、労働の供給は完全に弾力的、貨幣賃金率一定のもとでいくらかでも入用な労働が実際に供給・支配・雇用されうる、といったこと、さらに、実質賃金率一定また労働の平均生産性一定といったことが仮定されていることになるとともに、さらにまた、いまみたようなことを含意するところの努力1単位当たりの労働の平均的不効用はいかなる時にもすべての個人にとって不変、人時当たり主観的犠牲の不変な支出、といったことも事実上仮定されていることになるスミスの議論では、資本蓄積は、その蓄積率と同一率での労働雇用量の増加、さらに、それらと同一率での、一国の生産物そのものの量の増加したがってまた一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力という内容を伴った一国の所得の増加を引き起こすとともに、さらにまた、増加したその所得そのものは、努力としての労働1単位当たりの賃金率不変のままでその所得が許す範囲内でいくらかでも努力としての労働を支配しうるのであるから、そこでは、一国の努力タームでの所得（一国の、努力としての労働のタームでの所得、支配しうる努力としての労働の単位数で表された一国の所得）、一国の所得の努力価格（一国の所得の、努力としての労働のタームでの価格、支配しうる努力としての労働の単位数で表された一国の所得）も、うえのような内容を伴った一国の所得の増加の率と同じ率で、増加、向上している、ということとなり、そしてその一国の努力タームでの所得の増加、一国の所得の努力価格の向上は、一国が支配しうる労働不効用・主観的犠牲の増加、一国の主観的所得の増加、一国の主観的厚生の上昇を示す、ということとなるのである。（ただしまたブラウグの議論の示すところからすれば、たとえば、一国の生産物そのものの量

33. M. ブラウグ (1959年)

の増加したがって一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力という内容を伴った一国の所得の増加が事実上あったとしても、もしそれらの増加の増加率を超える率での努力としての労働1単位当たり賃金率の上昇が同時にあったならば、一国の努力タームでの所得、一国の所得の努力価格によって示されるものとしての一国の主観的所得水準、主観的厚生水準は低下してしまったということになってしまうのであり、そして、実際には、生産物そのものの量の増加したがって生産物にたいする購買力という内容を伴った所得の増加と同時にその増加率を超える率での努力としての労働1単位当たり賃金率の上昇が存在するような成長しつつある一国経済における一国全体としての所得の努力価格の低下それ自体は、厚生改善におけるひとつの主要な要素でもあるのである、ということにもなるのであった。)そして、そのスミスの議論では、一国に存在したそのような資本蓄積率、またその資本蓄積による一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力ということの意味する一国の所得であると同時に一国が全体としてもつことのできる努力としての労働にたいする購買力ということの意味する一国の所得(一国の努力タームでの所得、一国の所得の努力価格)でもあるものとしての一国の実質所得の増加率は、賃金単位(不熟練労働の現行貨幣賃金率)で表された一国の生産物の貨幣価値〔(貨幣タームでの一国の生産物)/(賃金単位)〕の増加率によって、つまり、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数の増加率によって、指し示される、ということになっているのであった。すなわち、スミスの議論では、賃金単位で表された一国の生産物の貨幣価値の増加率、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数の増加率は、一国に存在した資本蓄積率を指し示す、ということになっているのであるが、事実上、貨幣賃金率および実質賃金率は経時的に不変したがってまた努力としての労働1単位当たり貨幣賃金率および実質賃金率は経時的に不変ということとなっているそのスミスの議論ではまた、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数の増加そのものは、その増加率と等しい率での一国の生産物そのものの量の増加によってのみ生じることとなるのであって、その賃金単位数の増加率はまず一方で、一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力としての一国の所得の増加率と等しくなる、ということとなるのであるが、その賃金単位数の増加率はまた他方で、一国が全体としてもつことのできる努力

としての労働にたいする購買力としての一国の所得（一国の努力タームでの所得，一国の所得の努力価格），一国が全体としてもつことのできる労働不効用・主観的犠牲にたいする購買力としての一国の主観的所得の増加率と等しい，ということになっているのである。

なお，うえでみられたようにスミスの議論では事実上，努力1単位当たりの労働の平均的不効用はいかなる時にもすべての個人にとって不変，人時当たり主観的犠牲の不変な支出，つまり，労働に伴う不効用は経時的に不変，また，貨幣賃金率および実質賃金率も経時的に不変，といったことも仮定されていたということになるのであるが，そのスミスの議論ではまた事実上，異なった質・種類の労働には異なった大きさの不効用が伴いうるということが認められてもいたのであった。したがってそこでは，貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数による一国の主観的所得の大きさの測定が可能となるためには，異なった大きさの不効用を伴う様々な質・種類の労働のうちある大きさの不効用を伴うある質・種類の労働にたいする貨幣賃金率，賃金単位の大きさを確定することができなければならない，ということにもなる（代表的な貨幣賃金単位を選ぶという問題）。そしてこの問題に関しては，スミスの議論では事実上，異なった質・種類の労働には異なった大きさの不効用が伴いうるのであるが競争的な市場での貨幣賃金率格差が，その異なった質・種類の労働に伴う不効用の大きさの格差を反映すると考えられていたのであって，そこでは，原理的には，代表的な貨幣賃金単位を設定することは可能であったのである（ただし，ブラウグによれば，そこには，賃金構造が経時的に硬直的であるか否かという問題はある，とみられるのであった）。かくしてスミスの議論では事実上，一国が全体としてもつことのできる労働不効用・主観的犠牲にたいする購買力としての一国の主観的所得という意味での実質所得の大きさは，貨幣タームでの一国の生産物によって支配される代表的な賃金単位数の数によって測定されるのであり，その主観的所得の大きさは，ある不変な大きさの不効用を伴う代表的な労働を何単位支配できるかということによって把握され，そしてその支配される代表的賃金単位数の増加は，一国の主観的所得の増加を指し示す，ということになるのである。

他方，スミスの議論では事実上，一国の実質所得ということには，うえのような一国が全体としてもつことのできる労働不効用・主観的犠牲にたいす

る購買力としての一国の主観的所得ということと同時に、一国が全体としてもつことのできる生産物にたいする購買力としての一国の所得ということが含まれており、そして後者の意味での一国の実質所得も、前者の意味でのそれと同様、貨幣タームでの一国の生産物によって支配される賃金単位数〔(貨幣タームでの一国の生産物) / (賃金単位)] で測定され、また、その支配される賃金単位数の経時的な変化は、それと同じ方向でかつ同じ率での、一国の生産物そのものの量したがって生産物購買力としての一国の所得の変化を指し示しするのであった。それゆえそこでは、賃金単位はある大きさの生産物購買力をもつとともにその生産物購買力の大きさ自体は経時的に不変、ということになっているのである。では、賃金単位がもつその経時的に不変な生産物購買力の大きさそのものは、どのようにして示されるべきか(実質賃金を表現するために安定的な価値係数を選ぶという問題)。この問題に関しては、スミスは事実上、短期では銀の労働購買力および銀の生産物購買力(銀の価値は)相対的に安定しているということから、短期では、銀タームでの名目的な賃金単位で十分であろう、と考えた。すなわち、短期では銀1単位当たりの、不変の不効用を伴うものとしての労働にたいする購買力は相対的に安定しているゆえ、短期では、銀の単位数で示される名目的な賃金率(貨幣賃金率)の大きさは経時的に相対的に安定している。また、短期では、銀1単位当たりの生産物購買力の大きさも経時的に相対的に安定しているゆえ、短期では、銀の単位数で示される経時的に相対的に安定した大きさの名目的な賃金率(貨幣賃金率)それ自体が、経時的に相対的に安定した大きさの生産物購買力を指し示していることになる。短期では、貨幣タームで示されるものとしての賃金単位(銀タームでの名目的な賃金単位)の大きさは経時的に相対的に安定的で、労働のある不変な不効用を反映するとともに、その賃金単位のもつ経時的に不変な生産物購買力の大きさは、経時的に相対的に安定した銀(貨幣)の量(銀タームでの名目的な賃金単位の大きさ)そのものによって指し示されている、というわけである。他方、長期については、スミスは事実上、穀物賃金単位(穀物タームでの賃金単位)がより適していると考えた。すなわち、スミスは、長期では穀物価格はいちじるしく安定的であり、また、穀物は「人々の基本的な生活資料」であるゆえ長期では穀物価格が貨幣賃金率を支配する、と考えるのである。したがってそこでは、長期においては、貨幣賃金率は穀物価格によって支配され、そしてその穀物

価格がいちじるしく安定的であるのであるから、長期では、貨幣賃金率の大きさが経時的にいちじるしく安定的であり、しかもそのいちじるしく安定的な大きさの貨幣賃金率は、経時的にいちじるしく安定的な量の穀物にたいする購買力をもつ、ということになる。長期では、貨幣タームで示されるものとしての賃金単位の大きさは経時的にいちじるしく安定的で、労働のある不変な不効用を反映するとともに、その賃金単位のもつ経時的に不変な生産物購買力の大きさは、経時的にいちじるしく安定した穀物という生産物の量(穀物賃金単位の大きさ、穀物で測られた賃金単位の大きさ、穀物タームでの賃金単位の大きさ)によって表現されうる、ということになるのである。したがってまた長期においては、たとえば支配労働量タームでの一国の生産物の増加は、いちじるしく安定的に、支配穀物量タームでの一国の生産物の増加として捉え直すことも可能であり、あるいはまた逆に、支配穀物量タームでの一国の生産物が増加しているときには、その増加といちじるしく安定的な対応関係を保ちつつ支配労働量タームでの一国の生産物も増加しているはず、ということになるのである。(ただし、ブラウグによればまた、スミスの議論における穀物賃金〔穀物タームでの賃金〕の長期的不変性ということとは簡単化のための仮定でないといえるか否かを判断することは困難である、とされるとともに、スミスはある箇所、規則正しく記録された穀物価格の時系列データと比べて貨幣賃金についての時系列データが非常に不足しているという事実のゆえにのみ、「労働の時価とつねに正確に同一割合にあるからというのではなく、ふつう入手できるもののなかでは、その割合にいちばん近づきうるものであるという理由から」穀物価格にたよらざるをえないのだということを示唆している、ともされるのであった。)

かくして、スミスの議論では、異なった質・種類の労働に伴う異なった大きさの不効用という問題を克服してある不変な大きさの不効用を伴うある代表的な質・種類の労働にたいするものとしての、貨幣タームで示されるものとしての賃金単位を設定することは可能であり、そして、短期では、貨幣タームで示されるものとしてのその賃金単位の大きさは、経時的に安定的であるとともに、経時的に安定的な大きさのその賃金単位それ自体は、経時的に安定的な大きさの生産物購買力を指し示し、また、長期でも、貨幣タームで示されるものとしてのうへの賃金単位の大きさは、経時的に安定的であるとともに、経時的に安定的な大きさのその賃金単位は、経時的に安定的な量の穀

物という生産物にたいする購買力を指し示すのであったのであり、そして、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数は、一方で生産物購買力を意味すると同時に他方で労働不効用・主観的犠牲購買力を意味するものとしての一国の実質所得の大きさを指し示し、また、その支配しうる賃金単位数の増加は、一国の生産物そのものの量の増加による一国が全体としてもつことができる生産物購買力としての一国の所得の増加を指し示すとともに、一国の所得の努力価格の上昇、一国が支配しうる努力としての労働の量の増加、一国が支配しうるある代表的な質・種類の労働の不効用量の増加、一国の主観的所得、一国の主観的厚生を増加を指し示す、ということになるのである。

ただし、スミスの議論ではうえのように事実上、長期においては穀物価格は安定的であり、また、穀物は「人々の基本的な生活資料」であるゆえ長期では穀物価格が貨幣賃金率を支配し、長期では穀物の労働購買力は安定的であって、長期では、貨幣タームで示されるものとしての賃金単位の大きさも穀物タームでの賃金単位の大きさも不変的で、しかも、労働のある不変的な不効用を反映する、ということになるのではあるが、他方でスミスはまた、「時と場所のいかに問わず、獲得するのにわずかな労働を費やさせるものは安価である」ということも疑わなかったのであった。したがって、もしこの論理にしたがうならば、長期では穀物を獲得するのに費やさなければならない労働量は不変的、穀物生産における人時当たり産出高は不変的、ということとなる。しかしまた他方で、もし他の諸財貨の生産において人時当たり産出高が増加すれば、それらの財貨は穀物に比べて相対的に安価になる、ということともなる。それゆえそこでは、穀物タームでの賃金率は不変的であるのであるからそれらの財貨のタームでみた場合の賃金率は上昇することとなり、それらの財貨は、ヨリ少ない労働量（賃金単位数）しか支配しえないということになるであろう。また、一国の生産物のなかには穀物以外のものも含まれているのであるから、他の事情に変化がないかぎり、一国の生産物によって支配される賃金単位数も同じように、そのような人時当たり産出高の増加がなかった場合に比べて相対的に減少することになるのであって、そこでは、そのような人時当たり産出高の増加は、一国の生産物によって支配される賃金単位数を減少させる方向へと作用することになるであろう。したがって、一国の生産物そのものの量の増加による、一国の生産物によって

支配される賃金単位数の増加傾向よりも、そのような人時当たり産出高の増加による一国の生産物によって支配される賃金単位数の減少傾向の方が強いときには、一国の生産物そのものの量それ自体が増加している場合でも、一国のその生産物によって支配される賃金単位数は減少してしまうことになるのである。もっとも、諸商品によって支配される労働量と、労働を提供することの見返りとして与えられるべき諸商品の量とは、逆の関係にある、この意味で諸商品によって支配される労働量は、実質所得にたいする労働の購買力と逆の関係にある、のであるから、このような議論は十分に筋道のたったものでありうる。だが、主観的厚生 of 正の指標としての労働標準というスミスの議論では、一国の生産物そのものの量の増加が、一国の生産物によって支配される賃金単位数の増加としてあらわれなければならない、そしてその支配される賃金単位数の増加は一方で、一国が全体としてもつ労働不効用・主観的犠牲にたいする購買力の増加、一国の主観的所得の増加、一国の主観的厚生水準の向上を指し示す、ということになっているのである。したがって、このことが可能となるためには、それら他の財貨の生産においても、穀物の生産におけるのと同じように、人時当たり産出高が不変的、それらの財貨と穀物との間の交換比率が不変的でなければならない、穀物タームでの賃金率が不変的であるのと同じように、それらの財貨のタームでの賃金率も不変的で、等量のそれらの財貨は不変的な量の労働（賃金単位数）を支配しうるものでなければならない。すべての種類の生産物の生産において、人時当たり産出高不変、収穫一定で、実質賃金率不変でなければならないのである。（ただし、ブラウグによれば、実際にはスミスはまた、人口増加は分業の範囲を拡大することによって1人当たり産出高を増大させるであろうということを信じていたのであったのであり、そしてこの傾向それだけでも、産出高へのあらゆる追加はより少ない追加的賃金単位数しか支配しえないであろうということを、ほのめかしているのである、とされるのであった。）

なお、このようなスミスの議論における関心事そのものは、事実上、長期の、しかもたいへんな長期の、比較を可能にするような標準ということであった。また、スミス自身は事実上、「厚生」を、実質所得にたいする労働の潜在的購買力を、つまり一国全体としてみれば一国の現実の実質所得を、最大化する問題とみなしていたのであった。しかしまたそこでの実質所得の内容は、生産物購買力であると同時に労働不効用・主観的犠牲購買力、主観的

33. M. ブラウグ (1959年)

所得でもあるのであった。そしてスミスの議論では事実上、そのようなものとしての実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力の大きさ、つまり一国の実質所得の大きさそのものは、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数によって測定される、ということになっているのであった。そしてまたそのスミスの議論では事実上、貨幣タームでの一国の生産物が支配しうる賃金単位数の増加、したがってまた一国の実質所得の増加、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力の増加は、資本の蓄積によって引き起こされるのであって、一国の資本蓄積が最大化されるときに、一国の生産物購買力であると同時に一国の労働不効用・主観的犠牲購買力、主観的所得である一国の実質所得、実質所得にたいする一国の労働の潜在的購買力が、その上限に到達している、一国の経済的厚生が最大化されている、ということになるのであり、また、貨幣タームでの一国の生産物の支配しうる賃金単位数の増加率が、一国に存在した資本蓄積のその蓄積率を指し示すとともに、一国の生産物購買力および主観的所得の増加率を指し示す、ということになっているのであった。そして、スミスのそのような標準が実際にそのような役割を果たすものでありうるためには、事実上、実質賃金率および貨幣賃金率一定といったことを含めていままでにみられてきたような多数の（しかも疑わしい）仮定が必要とならざるをえない、ということになるのではあるが、その反面、そういった点を含めてもし我々がスミスの議論を適切に理解するならば、スミスのその議論において真に具合の悪いのは、スミスの労働標準それ自体というよりもむしろスミスがその標準を乱雑に適用しようとしたという点にある、ということにもなるのであって、事実、1人当たり経済的厚生の国際比較を行うための現代いわれている諸方法のいくつかのものは、スミスのな厚生経済学の応用以外の何物でもないものであり、そしてそれらの方法もまた、労働の生産性の比較および資本の生産性の比較、さらに、所得分布——これは、古典派の経済学者たちが看過したところの厚生の一つの局面——の比較によって、補充されなければならないのである。

34. E. ウィットカー (1960年)

1960年に刊行された E. ウィットカー (E. Whittaker) の一著書 (Edmund Whittaker, *Schools and Streams of Economic Thought*, Chicago: Rand McNally; London: John Murray, 1960. 以下, Whittaker [1960]と略記する) では、スミスは水とダイヤモンドの価値のパラドックスに言及することをつうじて、「ある特定の対象物の効用を表す」ものとしての「使用価値」と、「その対象物を所有することがもたらす他の財貨にたいする購買力を表す」ものとしての「交換価値」とを区別し、そしてそのうちの「交換価値」の考察へと進んだ、とされるのであるが⁽¹⁾、その著書においてウィットカーは、価値尺度についてのスミスの議論を、つぎのようなものとして捉えている、といえる。

① スミスは「商品の真実価格 (real price) と名目価格」とのあいだの、あるいは、「商品の労働での価格と商品の貨幣での価格」とのあいだの区別づけに注意を払ったのであるが (『国富論』第1篇第5章)、彼は、「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる」のであるけれども労働が専門化されるようになってしまったあとでは「一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない」と、述べる (WN, p. 30. 大河内訳<I>, 52ページ) とともに、労働が「すべての商品の交換価値の真の尺度である」、「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」と、述べ (WN, p. 30. 大河内訳<I>, 52ページ)、さらにすすんで、「あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえ、それによって彼自身ははぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」と、述べる (WN, p. 30. 大河内訳<I>, 52-53ページ) のであった。⁽²⁾

② しかしながら、異質労働の問題⁽³⁾のゆえに、スミスは、「たとえ労働は

すべての商品の交換価値の真の尺度ではあっても、それらの商品の価値がふつう評価されるのは、労働によってではない」ということを、認めたのであった (WN, p. 31. 大河内訳 < I >, 55ページ)。彼は、異なった質の労働の間の釣り合った関係といったことを確定するにはある問題が存在するという⁽⁴⁾ことを、知っていたのである。ただし彼は、労働の質の相違ということに起因するそのような問題は「ある正確な尺度によってではなく」「日常生活の業務を処理してゆくには」十分な「市場のかけひきや交渉によって」調整される、と述べたのではあるが (WN, p. 31. 大河内訳 < I >, 55ページ)。⁽⁵⁾

③ さらにまたスミスは他方で、貨幣の価値の不安定性ということに注目し、そして、穀物で支払われる地代は経時的に、貨幣で支払われる地代よりも安定的であるということを指摘したのであった。だがそれでもなお彼はやはり、労働が「唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度である、言い換えると労働は、いついかなるところでも、様々な商品の価値を比較することのできる唯一の標準である」ということを断言するのであった (WN, p. 36. 大河内訳 < I >, 63ページ)。⁽⁶⁾

④ スミスは、明らかに、その時々においてだけでなく経時的にも交換価値の基準として (as the basis for exchange values) 役立つようなある共通の価値尺度を見つけ出すことを、望んでいたようである。スミスは、実際には労働は一般に行われている交換においては価値を測定しはしないということ⁽⁷⁾を、認めていた、しかし彼は、なんらかの意味で労働は貨幣よりも本源的な価値尺度であると考えていたのである。

(注)

(1) Whittaker [1960], p. 104.

(2) Whittaker [1960], p. 106.

(3) ウィットカーは、事実上この問題を、つぎのような形で示そうとしている。すなわち、たとえば、ある医者が彼自身のためにテーブルを作るのに費やしたであろう労働は、ある熟練した家具製作者が同じようなテーブルを製造するのに費やしたであろう労働とは非常に異なる。実際問題として、その家具製作者はおそらく、医者がテーブルを作るのに費やした作業よりも少ない作業でより良い品物を生産したことであろう。(Whittaker [1960], p. 107.) つまり、「労働」を価値尺度とする場合には、この例にもみられるように、「労働」の質の相違という困難な問題がある、というわけである。なお、ウィットカーがあげているこの例では、労働は、もっぱら

生産力として捉えられており、また、労働の質の相違は、労働の生産力の相違として捉えられている、といえよう。

- (4) 事実上、このことを示すものとしてウィットカーはつぎのようなスミスの文章を引用している。「1時間の辛い作業におけるほうが、2時間のやさしい仕事におけるよりも、いっそう多くの労働があるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむばあいのほうが、平凡なわかりきった業務で1ヶ月働くばあいよりもいっそう多くの労働があるかもしれない。」(WN, p.31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。) Whittaker [1960], p. 107.
- (5) Whittaker [1960], pp. 106-107.
- (6) Whittaker [1960], p. 107.
- (7) Whittaker [1960], p. 107. なお、ウィットカーはこの点に関してつぎのような指摘をくわえている。すなわち、確かに、歴史は、貨幣が経時的には非常に当てにならない価値標準であったということを、示している。しかしながら、「すべての商品の交換価値の真の尺度 (real measure)」といったような言葉の使用は、いったい「真の尺度」とは何なのかという問題を提起する。すなわち、我々がこんにち「実質賃金 (real wages)」あるいは「実質所得 (real income)」について語るとき、我々が言おうとするものは、その賃金あるいはその所得が購買するであろうところの財貨の量である。これは「財貨標準 (goods standard)」と呼ばれてもよいかもしれない。ところが、労働標準は、歴史的には、財貨標準とは非常に異なる諸帰結を与えてきた。というのは、生産効率の向上とともに、労働は、ヨリ多くの財貨を支配するようになってきたからである。財貨標準によれば、我々は、労働がヨリ高価になってきた (すなわち、労働はヨリ多くの財貨を購買するようになった)、と断言するのであり、労働標準によれば、財貨がヨリ安価になってきたということになるのである。「リアル」なものについてのどちらの定義がヨリ良い定義なのかということ、我々はいかにして決定すべきなのであろうか。Whittaker [1960], p. 107.

なお、ウィットカーのこの指摘からすれば、彼は、スミスの議論では商品の真の交換価値はその商品がどれだけの労働を購買できるかということによって測定されるという意味で労働が真の尺度とされている、とみているともいえようが、ここでのウィットカーの所論においては、スミスの言う真の尺度としての労働とは商品の生産に必要とされる労働の量ではなくてその商品によって支配される労働の量なのだといったようなことそのものに関する明示的な言及はなされていない。

なお、ウィットカーは「価値の尺度としての労働 (Labor as a Measure of Value)」という見出しのもとに、事実上以上でみられてきたような内容をもつ議論を示していたのであるが、そのウィットカーはまた、それにつづく「価格の構成部分 (Components of Price)」という見出しを付した箇所の冒頭の部分で、『国富論』第1篇第6章において「商品の価格の構成部分 (the component parts of the price of

34. E. ウィットカー（1960年）

commodities)」を論じるさいスミスは交換の実際の基準としての労働（labor as the practical basis of exchange）を「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」へと追いやっているようであった、とするとともに、スミスはそのような段階のもとでは「労働の全生産物は労働者に属し、そしてある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量が、その商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量を規制（regulate）できる唯一の事情である」（WN, pp. 47-48. 大河内訳〈I〉, 82ページ）と述べ、また、「たとえば狩猟民のあいだで、1匹のビーバーを仕留めるのに、1頭の鹿を仕留める労働の2倍がふつう費やされているとすると、ビーバー1匹はとうぜん、鹿2頭と交換される、すなわち、鹿2頭に値することになるであろう」（WN, p. 47. 大河内訳〈I〉, 80ページ）といった例証を与えていたのである、としている。Whittaker [1960]. p. 108.

E. ウィットカー（1960年）についての覚書

ウィットカーによれば、スミスはその時々においてだけでなく経時的にも「交換価値の基準として」役立つような価値尺度を見つけ出そうとし、そしてスミスはその価値尺度を、貨幣さらに穀物にではなく、「労働」に求めた、とみられるのであった。また、ウィットカーによれば、スミスは、異質労働の問題は「市場のかけひきや交渉」による調整ということによって処理されるとしつつも実際には労働は一般に行われている交換においては価値を測定するわけではないということを認めていたのではあるけれども、なんらかの意味で労働は貨幣よりも本源的な価値尺度であると考えていたのだ、とみられるのであった。

しかしまたウィットカーは、「労働標準」は歴史的には「財貨標準」とは非常に異なった帰結を与えることとなってきたとしつつ、当該事物の購買しうる財貨の量で測定するのと労働の量で測定するのといずれがその事物の「リアル」価値をより良く表現すると考えるべきなのか、あるいは「リアル」なものとは財貨のタームで考えるべきなのかそれとも労働のタームで考えるべきなのか、といった内容をも持つ問い掛けをなすのであった。

なお、ウィットカーは、スミスは「商品の真実価格と名目価格」とのあいだの、あるいは、「商品の労働での価格と商品の貨幣での価格」とのあいだの区別づけに注意を払った、とし、さらにまた、たとえばいまみたように、購買しうる財貨の量としての「財貨標準」と対比する形でスミスの議論における「労働標準」ということに論及している、といった事情からみても、ウ

ウィットカーは、スミスの言う価値尺度としての労働の量を、購買しうるすなわち支配しうる労働の量と捉えている、あるいはそれを当然のことと考えている、とともれるのではあるが、「価値の尺度としての労働」という見出しの付された箇所でのウィットカーの議論のなかには、スミスの言う価値尺度としての労働の量とは支配しうる労働の量のことであったのであってそれ以外のものではなかったのだといったようなことを問題にする明示的な言及そのものは存在しはしないのであった。

ただし、それにつづく「価格の構成部分」という見出しの付された箇所でのウィットカーの議論のなかには事実上、「ある商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量」を規制するものをスミスは何に求めようとしたのかといったことにかかわる論及が見いだされもしたのであった。そしてまたそこでは事実上、それを規制するものとしての「その商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量」という考えは「交換の実際の基準としての労働」という考えとして捉えられとともに、「ある商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量」を「その商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量」のみが規制するのは「労働の全生産物が労働者に属するところの資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」においてのみであるとスミスは考えようとした、とみられていたのであった。

35. W. フェルナー (1960年)

1960年に刊行された W. フェルナー (W. Fellner) の一著書 (William Fellner, *Emergence and Content of Modern Economic Analysis*, New York, etc.: McGraw-Hill, 1960. 以下, Fellner [1960] と略記する。松代和郎訳『近代経済分析——その発生過程と内容——』, 創文社, 1965年) のなかでフェルナーは、スミスは「土地の占有と資本の蓄積に先立つ初期未開の社会状態」のもとでは、労働費用 (labor cost) が唯一の費用であり、それゆえまた諸価格 (互いに比しての、すなわち、価格諸比率) は様々な財貨のなかに体化 (embody) されている労働の量によって決定される (↔労働の質の違いを考慮して解釈されるべき一命題) と主張し、労働が交換価値 (exchange value) の規制者であったとするのであるがスミスがその中で生活していたような種類の経済に対しては、労働がある意味で本源的なものであるということを述べながらも、労働は交換価値の唯一の規制者ではなくなったとして土地、労働および資本の用役という三つの生産要素による接近法を示唆した、とみるのであるが¹⁾、価値尺度についてのスミスの議論に関してフェルナーは、つぎのような見方を示している。

スミスは、諸商品の価格諸比率が労働含有量のみによって決定 (determine) されない (「規制 (regulate)」されない) 現代の状況においてさえも、ある財貨が市場において購買しうる労働の量は、それが交換されうる金やその他のなんらかの財貨の数量よりも、その価値のより本源的な尺度 (measure) であるということを示唆している。たとえば、下着の3倍の交換価値をもつ傾向のある1足の靴は、一般に下着に体化されているものの3倍の労働を体化しているのではないが (それは下着に体化されているものの3倍より以上、あるいは以下の資本を体化しており、したがってまた3倍の労働を体化してはいない、であろう)、スミスによれば、その靴が3倍の労働を買うと言う時には、それが3倍の量の金あるいはその他の財貨を買うと言う時よりも、下着の価値に比しての靴の価値について、我々はより基本的な事実を述べることになる、というわけである。また我々が靴の、あるいは下

着の価値を、歴史的にあるいは国際的に跡づける時、我々は、異なった時点と場所においてこれらの商品が買いうる労働の量を指示することによって、なんらかの第三の財貨のタームでその価値を表すよりも、ヨリ有意義な比較に到達する。これは不変の価値尺度としての人間努力 (human exertion) の 1 単位 (1 時間の仕事) がもつ直観的意義に訴えようとするものである。スミスは、土地の占有と資本の蓄積が始まって以来労働は唯一の価値の規制者ではなくなったとはいえ、それはもっとも本源的な価値の尺度であると考えていたのであり、彼は、ある商品が購買しうる労苦 (toil) ないし努力 (effort) がその商品の価値をある絶対的な意味で「測定する」と考えていたのである。⁽²⁾

(注)

(1) Fellner [1960], pp. 102-103. 邦訳, 131-132ページ。なお、フェルナーによれば、古典派の価値分析では「交換価値 (value in exchange)」は「使用価値 (value in use)」(効用, utility) から区別されていた、とされるとともに、「實際上すべての古典派の価値分析は交換価値 (value in exchange) に、すなわち価格 (price) にかかわっていた」、とされるのであった。Fellner [1960], p. 96, p. 96n. 1. 邦訳, 123ページ, 123ページ注 1。

(2) Fellner [1960], pp. 103-104. 邦訳, 132-134ページ。

W. フェルナー (1960年) についての覚書

古典派の価値分析においては「交換価値」は「使用価値」(効用) から区別されていたとするとともに實際上すべての古典派の価値分析は「交換価値」に、すなわち「価格」にかかわっていた、とみるフェルナーによれば、スミスは、土地の占有と資本の蓄積が始まって以来各々の商品のなかに体化されている労働の量、労働費用が各々の商品の「価格」を、したがってまた諸商品がそれに従って交換されるところの諸商品間の価格比率を決定、規制する唯一の事情ではなくなったけれども、それでも、商品が市場において購買しうる労働の量という意味での労働、しかも、商品が購買しうる労苦ないし努力という意味での労働がもっとも本源的な価値尺度であって、それによって、その商品の価値がある絶対的な意味で測定される、と考えていたのであり、不変の価値尺度としての人間努力の 1 単位 (1 時間の仕事) がもつ直観的意

35. W. フェルナー（1960年）

義に訴えようとするそのスミスの議論では、各商品の「交換価値」を（すなわち「価格」を）そのような労働の量で表すことによって、各商品が市場において購買しうる金その他のなんらかの第三の商品の数量で表す場合よりも、一商品の交換価値と他の商品の交換価値との比較においてより基本的な事実を述べることができるとともに、各々の一商品の交換価値に関する異時点間および異場所間でのより有意義な比較に到達しうると考えられていた、とみられていた、ということになるであろう。

36. O. H. テイラー (1960年)

1960年に刊行された O. H. テイラー (O. H. Taylor) の一著書 (Overton H. Taylor, *A History of Economic Thought: Social Ideals and Economic Theories from Quesnay to Keynes*, New York, etc.: McGraw-Hill, 1960. 以下, Taylor [1960] と略記する) では, スミスは, 財貨の「価値」のもととなりそしてその「価値」を決定するものという問題にアプローチするにさいし, まず, 後代の経済学者が「効用」と呼ぶこととなったものとしての財貨の「使用価値」と, 市場での交換における当該財貨の他の諸財貨にたいする「支配力 (power to command)」, つまり当該財貨の単位数量にたいして他の人々が交換においてすすんで提供しようとする他の諸財貨の諸数量としての「交換価値」とを, 区別することから始め, そして, 「限界」概念をもっていなかったためにいわゆる「価値のパラドックス」を解決できずに, その「価値のパラドックス」をつうじて, 誤って, 使用価値を, 交換価値の基礎 (foundation, basis) でないとして退けるのであるが, スミスは, 交換価値の基礎の探究をさらにすすめるのに先立って, まず, 交換価値の真の尺度⁽¹⁾という別の問題をとりあげている, とされるのであるが⁽¹⁾, そのようなものとしてのスミスの価値尺度についての議論に関して, テイラーはつぎのような見方を示している。

① この脈絡においてスミスは, ひとつの「労働説」を提示する。しかしながら, その「労働説」とは, 交換価値を決定^{決定}するものは何かということについての「労働説」ではなく, それと区別されるべきひとつの別の考えである。ここで問題となるのは, 体化された労働 (labor-embodied) という価値の決定因ではなく, 支配される労働 (labor-commanded) という価値の尺度なのであり, スミスはここでは, 事物が「支配する」人間労働の量が, その事物の交換価値の理想的な, 安定的な, あるいは信頼のできる尺度である⁽²⁾, あるいは, そのような尺度を提供する, ということを主張したのである。

② さらにスミスは, 「支配される」労働時間の不変な価値というこの考えを支持するために, 労働を遂行するにあたってある労働者がこうむるある

所与の量の「労苦と骨折り」はその労働者自身の心あるいは意識においてある不変な、あるいは一定の、主観的な価値を持つといった非常に疑わしい議論を、提示する。⁽³⁾

③ しかしながら最終的にはスミスは、ある一定数の一様もしくは等しい客観的な単位へと分けることのできる等質的な労働といった基本となるべきものが存在しないということから、彼の支配労働価値尺度を、理論的には理想的なものではあるが実際には用いることのできないものとして、放棄する。⁽⁴⁾

④ さらにまたスミスは、貨幣よりも変動することの少ないあるいは伸縮性の少ない測定物差しの追求をなおも続け、労働の代わりに、より実際の、次善の測定物差し、労働者の主食である「穀物 (corn, grain)」へと、向かうのであり、彼は、穀物はすべての商品のうちにあって（一般に、他の諸財貨にたいする）それ自身の交換価値の例外的に高度な相対的安定性を有するということを主張し、また、経済史および経済統計へと迂回することによってこのことを説明しようとするのである。⁽⁵⁾

⑤ しかしながら結局のところ、以上の議論ののち、交換価値および価格についての彼の一般的な理論 (theory) のなかで、スミスは実際には、概して彼の支配労働価値尺度を活用してはいないのと同じように彼の穀物尺度も活用してはいないのである。彼は、むしろ、長期的には当該財貨を生産するための貨幣費用によって決定されるものとしての競争的に生産される財貨の貨幣価格についての理論もしくは説明 (explanation) にすぎないもので、終わっているのである。⁽⁶⁾

(注)

(1) Taylor [1960], pp. 102-104.

(2) Taylor [1960], pp. 104-105. テイラーは、スミスがそのような主張をなした事情をつぎのようなものとして示している。それによれば、スミスは、ある事物が市場で支配するであろう貨幣の量すなわち貨幣でのその事物の市場価格は、たんに、その事物の「名目価格」にすぎないのであり、その事物の「真実価格 (real price)」ではない、と述べる。ここで彼の言おうとしていることは、貨幣それ自体は、異場所間および異時点間で、それ自体の価値つまりその単位当たり購買力において気まぐれに変化するため、貨幣は、貨幣以外の諸事物の価値を測定するためのひとつの確固としたあるいは信頼のできる測定物差しではない、ということである。彼は、

それ自体がある一定のあるいは不変の価値をもつなんらかの事物を捜し求めた、そうすれば、他の諸事物と交換されるであろうところのこの事物の単位数が、それら他の諸事物の価値を真に測定あるいは表現するであろう。そして彼は、事物が「支配する」であろうところの、つまり、事物がそれと交換されるであろうところの人間労働の量が、その事物の交換価値のこの理想的な、安定的な、あるいは信頼のできる尺度 (measure) である、あるいは、そのような尺度を提供するということを、主張した。財貨がその所有者に対して真に意味するものは（彼にとってのその使用価値は別として）、その財貨が彼をして購買または支配することを可能にするところの他の人々の労働の量なのである。これが、しばしば錯覚を起こさせるあるいは錯覚を引き起こす貨幣での「名目価格」とは対照的に、その財貨の「真実価格」なのである。Taylor [1960], pp. 104-105.

なお、「体化された労働」については、テイラーによれば、使用価値を交換価値の基礎でないと退けるとともにその基礎を探究しようとするスミスの議論のなかには、相対価格としての交換価値の基礎をなしその交換価値の根本的な原因 (cause)、決定因 (determinant) となっているものを「体化された労働」に求めようとする考えが示されているのではあるが、スミスはそのような考えの妥当性を「土地の占有と資本の蓄積に先立つ初期未開の社会状態」、原始的経済という状況に限定していた、とみられている。それに関しては、Taylor [1960], pp. 104, 106-109 を見よ。

(3) Taylor [1960], p. 105.

(4) Taylor [1960], p. 105.

(5) Taylor [1960], p. 105. なお、テイラーは、穀物価値のこの相対的安定性についてのスミスの説明に関連してつぎのような二点を指摘している。それによれば、①スミスはつぎのような説明をなしている。すなわち、食糧（穀物）が一時的に豊富で安価であるときにはいつも、人口の大部分を占める労働者階級は順境にあり、そしてより高い出生率とより低い死亡率を展開する。人口がふだんよりも速く増加するため、穀物需要は急速に増加し、そしてまもなく、あるより高い価格 (price) で供給に釣り合うこととなり、そしてこのことが、穀物価格をその長期的な平均水準のもとへと引き上げる。また逆に、穀物が不足して高価であるときにはいつも、人口増加はおそめられ、そして、穀物需要は、通常的に増大している供給とくらべて相対的にゆるみ、価格をしてその平均水準へと低下させることとなる。このような、穀物価値の長期的な平均的安定性 (long-run average stability) を説明するスミスの理論は、食糧供給と人口増加についての後のマルサス理論のひとつの非常に興味のある先取りである。②つぎのこともまた、興味があり、また、特徴的でもある。すなわち、スミスは、この一片の理論を提示しているだけでなく、主に、以前の長い期間 (long period) にわたっての借地の穀物地代の相対的安定性ということについての、経験的すなわち歴史的・統計的証拠でもってその理論を支援しているのであ

り、彼は、借地の穀物地代は借地の貨幣地代よりもはるかに少ししか変動も上昇もしてこなかったということを、示しているのである。Taylor [1960], p. 105.

- (6) Taylor [1960], pp. 105-106. なお、本文で言及されているその「交換価値および価格についてのスミスの一般的な理論」についてのテイラーの把握そのものに関しては、Taylor [1960], pp. 106-112 を見よ。

O. H. テイラー (1960年) についての覚書

事実上、交換価値の原因、決定を説明しうる交換価値の基礎となるものを探究する問題と交換価値の尺度の問題とは別個の問題であるという認識にたつテイラーによれば、スミスは、財貨の「価値」のもととなりその「価値」を決定するものは何かという問題にアプローチするにさいして、まず、後代の経済学者が「効用」と呼ぶこととなったものとしての財貨の「使用価値」と、市場での交換における当該財貨の他の諸財貨にたいする支配力、当該財貨の単位数量にたいして他の人々が交換においてすすんで提供しようとする他の諸財貨の諸数量としての「交換価値」とを、区別することから始め、そして、「限界」概念をもっていなかったためにいわゆる「価値のパラドックス」を解決できずに、その「価値のパラドックス」をつうじて、誤って、使用価値を、交換価値の基礎でないとして退けるのであるが、スミスは、交換価値の基礎の探究をさらにすすめるのに先立って、まず、交換価値の真の尺度という別の問題をとりあげた、とみられるのであった。

そして、テイラーによれば事実上、スミスが事物の交換価値の真の尺度というこの問題を取り扱うさい、スミスは、尺度となるものそれ自体の価値つまりその単位当たり購買力の安定性ということから、当該事物が市場で支配するであろう貨幣の量ではなくて、当該事物が市場で支配するであろう労働の量がその事物の価値を真に測定あるいは表現するとし、理想的・安定的・信頼しうる尺度として支配労働価値尺度を主張したのであり、スミスはここでは、原始的経済においてのみ妥当しうるものとして交換価値の基礎の探究の問題といった脈絡のなかで言及されることとなる「体化された労働」という考えとは別個なものとしての「支配される労働」を、真の価値尺度とし、そして、それで表現された価格すなわちある事物が市場で支配するであろう労働の量、労働時間で表現された価格が、その事物が市場で支配するであろう貨幣の量で表されたその事物の「名目価格」に対するものとしてのその事

物の「真実価格」であるとした、とみられるのであった。

しかしまたテイラーによれば事実上、このようにスミスは、価値つまり単位当たり諸事物に対する購買力・支配力の安定性ということから、「支配される貨幣」ではなくて、「支配される労働」を諸事物の交換価値の真の尺度とするのであり、そしてまたこのような考えを支持するためにスミスはさらに、労働を遂行するにあたって労働者がこうむるある所与の量の「労苦と骨折り」はその労働者自身の意識においてある不変な主観的価値をもつといった疑わしい議論を提示するのであるが、異質労働の問題ということのゆえにスミスは結局のところ、彼の支配労働価値尺度を、理論的には理想的なものではあるが実際には使用することのできないものとして放棄することとなった、とみられるのであった。

またテイラーによれば事実上、貨幣よりも安定的な測定物差しの追求をなおも続けるスミスは、労働者の主食である穀物の、他の諸財貨にたいする購買力・穀物価値の長期における高度な相対的安定性ということを主張するとともに、食糧供給と人口増加についての後のマルサス理論を先取りするような議論の展開およびそれを裏付ける歴史的・統計的証拠の提示によってその主張の根拠を示そうとし、支配される「労働」に代わるより実際の、次善の尺度として、支配される「貨幣」に対するものとしての支配される「穀物」という穀物尺度を主張しようとした、とみられるのであった。

ただし、テイラーによれば事実上、ではスミスは交換価値および価格についての彼の一般的な、理論あるいは説明のなかで彼のより実際の、次善の尺度としてのこの穀物尺度を活用したのかといえ、スミスはそこではどちらかといえ、長期的には当該財貨を生産するための貨幣費用によって決定されるものとしての競争的な条件のもとで生産される財貨の貨幣価格についての理論あるいは説明にすぎないものを提示することで終わっているのであって、実際にはそこでは、概して彼の支配労働価値尺度が活用されてはいないのと同じように彼のこの穀物尺度も活用されてはいないのである、とみられるのであった。

37. A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年)

1960年に公表された A. K. ダース・グプタ (A. K. Das Gupta) の一論文 (A. K. Das Gupta, "Adam Smith on Value," *Indian Economic Review*, vol. 5 (no. 2, August 1960), pp. 105-115. 以下, Das Gupta [1960] と略記する⁽¹⁾) においてダース・グプタは、スミスの価値分析における主要な関心は価値の尺度を見いだすことにあったのであって、ある程度の一般性をもった説明的な仮説としての価値についてのある一般的な「理論」を提示することにあったのではなく、生産費アプローチでさえ、それはある限られた意味ではひとつの理論とみなされるけれども、ひとつの社会的事実としての価値を説明することを意図されてはいなかった、ということ、また、「価値理論 (theory of value)」は、スミスの経済分析体系にとっては補足的なものにすぎない、つまり、「価値理論」は、リカードウ (D. Ricardo) の体系や新古典派の体系の核心を構成しているようには、スミスの体系の核心を構成してはいない、ということ、を示そうとするのであるが⁽²⁾、ダース・グプタは、価値尺度についてのスミスの議論に関連して以下のような諸点を指摘している、といえる。

① スミスは、「使用価値」と「交換価値」という二つの価値概念があると述べる。前者は商品の「効用」を表し、後者はその商品がもつ「他財貨を購買する力」を表す。スミスの経済学の題材を構成するのはこの「交換価値」である⁽³⁾。また、スミスによればこの「交換価値」は、測定可能な数量であって、たんなる比率といったものではなかったのであり、そして、彼が価値に関する議論において主に努力をかたむけたのはこれの尺度の発見ということであったのである⁽⁴⁾。

② ところでスミスは、「交換」価値を、「その対象物の所有がもたらす他の財貨にたいする購買力」と定義するのであるが (WN, p. 28. 大河内訳 I), 50ページ), この意味での X の価値は、 X が市場で購買することのできる Y, Z 等々の数量である。したがって、その価値は、それが交換されるすべての他の商品のタームで測定されうるのである。では、これらの他の諸商品は、それ自体が不変なものであるところのある共通の標準 (standard) で

まとめられうるのか。そのような標準が存在しなかったら、すべての特定の商品は、その商品が購買できるところの他の諸商品が存在するのと同じだけの数の諸価値をもつこととなるであろう。このような考慮から、スミスは、「労働支配力尺度 (labour command measure)」へと導かれるのである。⁽⁵⁾

③ しかし、何故に、労働なのか。標準としてなにか他の商品が選ばれえなかったのか。スミスは、とくに金、銀および穀物の、価値尺度としての資格を考える。しかし、それらはそれらの価値において変化し、そして時にはより安価でありまた時にはより高価であるということを、知る。またスミスによれば、労働もまた、より多くの量の他財貨を購買したりより少ない量の他財貨を購買したりするかもしれない、「だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである」。労働は、労働者が「彼の健康、体力、精神が普通の状態に」ありまた「彼の熟練と技能が通常の数に」あるかぎりにおいては、「彼の安楽、自由、幸福」の犠牲というタームで、労働者にとってある不変の価値を保持する、と考えられるのであり、「それゆえ、それ自身の価値が⁽⁶⁾け⁽⁶⁾っ⁽⁶⁾て⁽⁶⁾変⁽⁶⁾動⁽⁶⁾す⁽⁶⁾る⁽⁶⁾こ⁽⁶⁾の⁽⁶⁾な⁽⁶⁾い⁽⁶⁾労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のい⁽⁷⁾か⁽⁷⁾ん⁽⁷⁾を⁽⁷⁾問⁽⁷⁾わ⁽⁷⁾ず、評価し比較することのできる究極で真の標準である」、とされるのである (WN, p. 33. 大河内訳くI), 57-58ページ。傍点の付されている箇所は、ダース・グプタがイタリック体にしてある箇所⁽⁶⁾。なお、スミスは、「労苦と骨折り」ということに言及している。これはしばしば、スミスの体系における価値へのある独立したアプローチとみなされる⁽⁷⁾。しかし、この「労苦と骨折り」というのは、うえてみたような主観的なタームでの労働という概念を明瞭にするために使用された一つの表現にすぎないのであって、「労苦と骨折り」をもってスミス自身は価値についての一つの独立した説明としようとしたのではなく、それは、価値尺度としての「労働支配力」という基本的概念を根拠づけるために用いられた補助物なのである。⁽⁸⁾

④ さて、以上のように商品の価値とは測定可能な数量であり、そしてその尺度はその商品が交換において支配する労働にあるとしよう。ではその場合に、どのようにして、「名目価格」(貨幣での価格、貨幣価格)を「真実価格」(〔交換〕価値)へ転換するのか。この問題に対する解答が、スミスの価値分析のもっとも重要な局面を構成するのであり、そしてその解答は事実上つぎのようなものであるといえる。すなわち、いま w は当該商品に体化

(embody) された労働量にたいして支払われる総賃金, \bar{w} は労働 1 単位当たりの賃金, さらに, r と p は, それぞれ当該商品を生産するにさいしての土地および資本の使用にたいして支払われる地代および利潤を, 表すとすれば, 土地の占有と資本の蓄積に先立つ「初期未開の社会状態」では $\frac{w}{\bar{w}}$ によって, 土地の占有と資本の蓄積の行われる進歩した社会では $\frac{(w+r+p)}{\bar{w}}$ によって, それぞれ, 当該商品によって支配される労働の量, すなわち, 当該商品の「真実価格」, 交換価値が表される, といったものである。⁽⁹⁾

⑤ 「貨幣での価格」の「労働での価格」へのこの後者の転換原理は, 完全に一般的な原理であり, 個々の商品に適用しうると同じように全体としての産業にも適用することができる。そして, この原理がスミスの体系において意義をもつのは, まさしくこの広範な——全体としての産業の広さにまでの——適用ということである。スミスは個々の商品の価値から始めているけれども, 彼は実際, ついには全体としての諸商品の価値にまで進んでいる。⁽¹⁰⁾ ここにおいてもまた, 社会の年々の生産物の一部を地主や資本家が受け取り, 一部分のみが労働者のもとへ帰属するかぎり, 全体としての財貨によって支配される総労働は, それらの財貨を生産するのに費やされる (spent) 総労働を超過する。いま, W で全体としてのその経済にとっての総賃金を, R で総地代を, P で総利潤を表すとすれば, 労働支配力尺度の公式は, $\frac{(W+R+P)}{\bar{w}}$ ということになる。ところで, 総賃金, 総地代, 総利潤の合計

$(W+R+P)$ は, 要素費用表示の国民所得として知られているものである。

したがって, この拡大された公式 $\frac{(W+R+P)}{\bar{w}}$ は, 労働のタームで国民所得を測るもの, あるいはケインズ (J. M. Keynes) 流に言えば, 「賃金単位」のタームで国民所得を測るもの以外の何物でもないのである。⁽¹¹⁾

⑥ ところで, 価値分析の脈絡におけるスミスの主要な関心は, 価値尺度を見いだすこと, すなわち, 一商品の価値の尺度を発見したそれからさらにすすんで諸国民の富 (wealth) の尺度を発見することにあつたのであって, 一般的な価値理論を提供するということではなかった, 価値についての他の諸概念は付随的なものにすぎないのであって, それらの諸概念の意義は, 尺度という主要問題との関連でみられるべきである, このことはスミスのいう

「労苦と骨折り」についてと同様スミスの生産費アプローチについてもいえるのであり、そしてスミスはこの尺度を労働に見いだしたのであった。⁽¹²⁾

⑦ なお、スミスのこの労働尺度は、シュムペーターの考えているようにワルラス (M. E. L. Walras) の体系にあらわれるニューメレールという概念の先駆的なものであるわけではない。⁽¹³⁾ スミスの労働尺度とワルラスのニューメレールは表面的には類似しているけれども、それらは同一の含意も同一種類の意義も持たないのである。⁽¹⁴⁾

⑧ スミスの労働支配力価値尺度は、経済成長ということを中心的な問題として取り扱う『国富論』において、集計にかかわる問題に対するスミスの方法という意義をもつのであり、そしてそれはそのような意味で、スミスの体系においては、経済変化のプロセスについてのひとつの理解への鍵を提供するのである。⁽¹⁵⁾

〈補記1〉

なお、ダース・グプタは、スミスの労働支配力尺度についてのうのような認識に基づきつつ、具体的に、そのようなものとしての労働支配力尺度との関連でスミスの議論における経済進歩、経済成長ということを説明しようとしているのであるが、ダース・グプタのその説明の要旨は以下のようなものである。

産業の収入がその時々によりられるその生産的使用の大きさしだい、一経済は成長的であったり、停滞的であったり、あるいは衰退的であったりする。ところで、一社会の人口は年々増加する傾向をもつゆえ、もし年々の産出物の適当な部分が余剰の労働を生産的に雇用することへと向けられるとすれば、ますます多くの労働量にたいする支配力を手に入れるためのしがつてまた進歩のための余地が、つねに存在することとなる。⁽¹⁶⁾ このことを前で見た式を用いて説明すればつぎのようになる。いま、 w が経時的に一定に留まる、たとえば、生存費水準に留まる、と仮定しよう。⁽¹⁷⁾ また、ある所与の期間 (t_0) のあいだに雇用される労働量は $\frac{W}{w}$ であるとしよう。当該産出物によって支配される労働は必ずそれだけのその産出物に体化された労働よりも大きいとすれば、この場合、その結果として生じてくるその期間における価値ター

ムでの産出高は、 $\frac{W}{\bar{w}}$ よりも大きな $\frac{(W+R+P)}{\bar{w}}$ ということになるであろう。

さて、もし次の期間 (t_1) において産業の全収入 ($W+R+P$) が「生産的労働」の雇用にすなわち資本形成に向けられるならば、そのときには明らかに、期

間 t_1 に雇用される労働量は、 $\frac{R+P}{\bar{w}}$ だけ期間 t_0 において雇用された労働量を、

超過するであろう。 W' を $W+R+P$ に等しいとして期間 t_1 における雇用を、

$\frac{W'}{\bar{w}}$ で示そう。この $\frac{W'}{\bar{w}}$ は、仮定によりその価値が、支配される労働で測

って $\frac{W+R+P}{\bar{w}}$ をこえるところの、産出物を産み出すことになるであろう。

その新しい価値を $\frac{W'+R'+P'}{\bar{w}}$ としよう。期間 t_2 ではさらに、雇用される

労働の総計は、 $\frac{W'+R'+P'}{\bar{w}} = \left(\frac{W''}{\bar{w}}\right)$ ということになるであろう、そして

それは、それに先立つ期間 [t_1] において雇用された労働の総計よりも大きいのである。このようにして、その経済は連続的な成長プロセスをもつこととなるであろう、そして、その成長率は、各々の期間において産出物に体化された労働をこえるその産出物の「価値」の超過に依存するのである。⁽¹⁸⁾

ところで、地主と資本家の所得のすべてが「貯蓄」されるという仮定は支持することはできない。すなわち、「怠け者がどこでも」その一部を消費するのである。そしてこのことがおこる程度だけ、成長の速度は遅らされるのである。たとえば、各々の期間における所得のある割合、 $(1-s)$ 、が浪費的な消費に支出され、割合 s が貯蓄されるとしよう。そのときには、雇用される労働量が $\frac{W}{\bar{w}}$ である期間 t_0 からふたたび始めるとすれば、期間 t_1 に雇

用される労働量は $\frac{s \cdot W'}{\bar{w}}$ 、期間 t_2 ではそれは $\frac{s \cdot W''}{\bar{w}}$ 、等々といったこととなる。

このような状況のもとでの成長率は s の値に依存することになるであろう。すなわち、 s の値が大きければ大きいほど、生産的に雇用される労働量が年々増加してゆく可能性がそれだけ大きくなるであろう。もし、 $\frac{s \cdot W'}{\bar{w}} >$

$\frac{W}{\bar{w}}$, $\frac{s \cdot W''}{\bar{w}} > \frac{s \cdot W'}{\bar{w}}$, 等々であるならば、その経済はなお、正の成長率をもつ

であろう。他方、もし、 $\frac{W}{\bar{w}} = \frac{s \cdot W'}{\bar{w}} = \frac{s \cdot W''}{\bar{w}} = \dots$ であるならば（我々のいまの仮定のもとではこのことも一つの可能性としてありうる）、そのときには、その経済はゼロの成長率をもつことになるであろう。また、もしも、資本家や地主が彼ら自身の収入を食いつぶしたうえに賃金にまで食い込み、それゆえそれにつづく各々の期間において生産的労働を雇用するための資力が低下する傾向にあるならば、その経済は負の成長率をもちさえるであろう。⁽¹⁹⁾

以上が経済成長についてのスミスの図式の大まかなアウトラインである。スミスが交換価値という概念を利用するのは、主に、この脈絡においてなのであり、そして、労働支配力尺度の意義が存在するのはまさにここにおいてなのである。⁽²⁰⁾

〈補記 2〉

なお、以上において我々が取り扱った1960年のダース・グプタの論文に対して、ダース・グプタ自身は、1961年に、概ね以下のような内容をもつものとして把握することもできるであろうような補遺（A. K. Das Gupta, "Adam Smith on Value: A Postscript," *Indian Economic Review*, vol. 5 (no. 3, February 1961), pp. 285-287. 以下、Das Gupta [1961]と略記する）を著している。

① どのようにスミスの労働支配力価値尺度が彼の成長理論と関連づけられるかということを示そうという1960年の論文での試みにおいては、賃金率は生存費水準で一定であるという仮定をもうけた。事実、この仮定は、スミスの人口理論に基づく彼の「長期的 (long run)」賃金理論から演繹されうるであろうところのものである。だがスミスは、資本蓄積の結果として生じる賃金の上昇ということを考慮に入れる「短期的 (short run)」賃金理論も持っている。それによれば、もし蓄積が人口増加の速度よりも速く進行するならば賃金は上昇し、逆の場合には賃金は低下するのである。しかしながらスミスによれば、賃金の最低水準は、労働の維持費によって定められるのであり、そして、賃金がこの最低水準をこえて上昇するときにはいつでも労働者が増殖する傾向があるという理由のゆえに賃金はこの最低水準に向かう傾向があるのである。⁽²¹⁾

② だがたとえそうであっても、過渡的な諸期間のあいだにおいては、この最低水準をこえての賃金の上昇ということは、考えられないことはない。それを阻止しようと試みる資本家たちの団結ということを加えてもそうである。蓄積は、資本家たちの団結力を弱めると考えられるのであり、そして蓄積は、過渡的には、賃金を高めうるのである。⁽²²⁾

③ しかしながら、スミスの成長理論に関連づけられるものとしての1960年の論文で用いられた労働支配力尺度のための公式は、このような過渡的な賃金変動という現象をも取り扱うことができるのである。⁽²³⁾

(注)

- (1) なお、ここで使用するこの文献ではその執筆者名は A. K. Das Gupta として表記されているわけであるが、その後その執筆者自身は A. K. Dasgupta という表記法をとっているようである。それについては、たとえば、A. K. Dasgupta, *Epochs of Economic Theory* (Oxford: Basil Blackwell, 1985), p. 41n.6 を見よ。そこには、この論文の執筆者名が A. K. Dasgupta として表記されているのが見いだされる。なお、上掲書そのものはまた、A. K. ダスグプタ著、水上健造、長谷川義正訳『経済理論の変遷』（文化書房博文社、1992年）という形でその邦訳が出されているのであるが、その邦訳の91ページ注6も見よ。
- (2) Das Gupta [1960], p. 105.
- (3) Das Gupta [1960], p. 105. なお、ダース・グプタによれば、限界という概念を持っていなかったためにスミスはこれら二つの概念の間の関係を理解することができなかったということはよく知られているけれども、スミスの準抛枠という観点からすれば限界効用という概念——新古典派の価値分析の基礎——はまったく筋違いのものであるように思える、とされる。Das Gupta [1960], pp. 105-106n. 2.
- (4) Das Gupta [1960], pp. 105-106, 108. なお、ダース・グプタは、このことに関してつぎのような説明をくわえている。それによれば、交換価値とは、単にひとつの比率 (ratio) を意味するのかもしれないし、あるいはまた、ひとつの絶対的な数量 (quantity) を意味するのかもしれない。その相違は重要である。もし我々が〔交換〕価値をひとつの比率と考えるならば、その尺度を探求するということは、明らかに当を得たことではない。Y に関して X の価値が上昇すれば、X に関して Y の価値が低下することになる。もしそのようなことがおこるとすれば、我々は、その交換比率が X に有利にそして Y に不利に変化しているということだけを知ることになっているのであり、そして、それで問題は終わるのである。我々は、いずれの商品からその変化が起こっているのかということを探ねないのである。我々の分析の観点からすれば、そのような研究は単によけいであるだけでない、すなわち、それ

は無意味なのである。なお、このような態度が、サミュエル・ベイリー (Samuel Bailey) のいわゆる相対主義的学説に導かれている「新古典派」の経済学者たちの価値分析を、特徴づけているのである。しかしながら、スミスがその問題を考察しようとしたその仕方は、このようなものではない。スミスによれば、価値とは、測定可能なものなのであり、それはたんなるひとつの比率というものではないのである。そして、彼が発見しようと主に努力をかたむけているのは、これの尺度なのである。まさしく最初に、交換価値の概念を導入しつつ、スミスは、「諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために、私はつとめて……この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するかということを、明らかにしようと思う」と言っているのである (WN, p. 28. 大河内訳 < I >, 50ページ)。Das Gupta [1960], pp. 105-106.

- (5) Das Gupta [1960], p. 106. ダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52ページ。) Das Gupta [1960], p. 106.
- (6) Das Gupta [1960], p. 107.
- (7) Das Gupta [1960], p. 107. ダース・グプタは, Maurice Dobb, *Political Economy and Capitalism: Some Essays in Economic Tradition*, [2nd ed., rev. (London: Routledge & Kegan Paul, 1940)], p. 13, とくに p. 13n. (岡 稔訳『政治経済学と資本主義』[1950年に出された増刷の邦訳], 岩波書店, 第12刷 1966年 [第1刷 1952年], 12ページ, 12-13ページ注1), および, 我々が本書の「24」で取り扱った Schumpeter [1954] の p. 188n. (前掲邦訳, 第1分冊, 393-394ページ注20) を参照するよう指示している。Das Gupta [1960], p. 107n. 7.
- (8) Das Gupta [1960], pp. 107-108. このことについてのダース・グプタの説明をもう少し詳しく示せば、それはつぎのようなものである。すなわち、「労苦と骨折り」というこの表現が現れる一節は、労働支配力尺度についての最初の明確な記述のすぐあとにつづくものであり、そしてそれはつぎのようなものである。「あらゆる物の真実価格, すなわち, あらゆる物がそれを獲得しようとする人にとって真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるかといえば、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである」(WN, p. 30. 大河内訳 < I >, 52-53ページ)。ところで、『国富論』には、スミスが「真実価格 (real price)」という言葉を価値 (value) と同義語

として使用しているということを示す証拠は豊富に存在するのであり、このことは、『国富論』第1篇〕第5章の表題を見ただけでもわかる。真実価格は、その表題が示しているように、貨幣での価格である「名目価格」とは別のものとしての、労働での価格なのである。したがって、「労苦と骨折り」は主観的なタームでの労働という概念を明瞭にするために使用された一つの表現にすぎないということは明らかである。1時間の労働において「耐え忍ばれる辛さ」や「用いられる創意」の程度の相違ということのゆえに、「人時 (man-hour)」のタームでの労働という単位を示すことで満足せずに、スミスは、もう少し深く掘り下げ、そして、彼が労働の主観的な相対物 (counterpart) とみなすものを持ち出すのである。その積極的な局面では、労働は、「労苦と骨折り」を伴い、その消極的な局面では、それは、「安楽、自由、幸福」の引き渡しを表すのである。スミスの体系における価値分析の目的という観点からみてそのアプローチがいったい有益なものあるいは必要なものでさえあると考えられるか否かということは、別の問題である〔ダース・グプタは、個人的にはそれは有益なものでも必要なものでもないと思う、とする〕。いずれにしても、スミス自身は「労苦と骨折り」をもって価値についての一つの独立した説明 (explanation) としようとしたのではないということには、ほとんどどんな疑いもありえない。「労苦と骨折り」そのものは「労働支配力」という基本的概念にとつての補助的なものであるということとは明らかであるように思える。

- (9) この転換原理についてのダース・グプタの説明はつぎのようなものである。それによれば、資本が蓄積されずまた土地が占有されていず、したがって労働が唯一の稀少な生産要素であるといった「初期未開の社会状態」という限定的なケースでは、商品の価値は、その商品の生産に投下 (bestow) される労働量によって直接的に測定 (measure) されることができる。すなわち、この単純なケースでは、生産されるもののすべてが賃金として労働者に帰属することとなり、そして、市場においてその商品によって支配される労働はその商品に体化 (embody) された労働に等しくなるのである。賃金が商品の販売から得られる唯一の所得形態であるかぎりでは、 $\frac{w}{w}$

はその商品によって支配される労働の量であり、そしてまたそれはその商品に体化された労働の量でもあるのである。「こうした事態にあっては、労働の全生産物は労働者に属する。そしてある商品の獲得または生産にふつう用いられる (employed) 労働の量が、その商品がふつう購買し、支配し (command), またはそれと交換されるべき労働の量を規制できる唯一の事情である」(WN, pp. 47-48. 大河内訳くI), 82ページ)。(なお、ダース・グプタによれば、スミスが鹿とビーバーの交換の例を示しているのはこの脈絡においてなのであり、このいわゆる「初期未開の社会状態」においては商品の価値はその商品の生産に投下された労働量によって直接的に測定されることができ、そこでは、市場においてその商品によって支配

される労働量とその商品に体化された労働量は等しくなるということとなるが、このケースについてのスミスの論述においては、「労働費用 (labour cost)」と「労働支配力 (labour command)」とは二つの独立したアプローチであるのではなく、一方つまり「労働費用」は地代も利潤も存在しない社会という特殊な状況での他方つまり「労働支配力」からの派生物なのであり、したがって、交換価値は相対的労働費用によって決定 (govern) されるという意味での労働価値説に類似したものに対してスミスが、直接的に、主唱者としての責任を有すると考えるのは誤っている、とされる。Das Gupta [1960], p. 108n. 8.] しかしながら、進歩した社会、つまり、資本が蓄積され土地が占有され、したがって、賃金のほかに他の要因が生産費に入ってくる進歩した社会では、いまみたようには直接的に労働での価格を導き出すことはできない。商品に体化された労働は交換において支配される労働よりも少ないこととなる。いまや費用に計算されるべき他の要因は資本の使用にたいして支払われる利潤と土地の使用にたいして支払われる地代である。いまや、貨幣での価格は、賃金、利潤、地代からなる生産費に等しくなる傾向がある。だが、スミスはつぎのように述べる。「ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである。労働は、価格のなかの労働 (賃金?) に分かれる部分の価値だけでなく、地代に分かれる部分の価値、および利潤に分かれる部分の価値をも測るのである」(WN, p. 50. 大河内訳<Ⅰ>, 85ページ。()内はダース・グプタ)。このような複雑なケースでは、労働尺度は、商品の生産過程に支出される賃金、利潤、地代の総計から導き出されなければならないのである。転換の原理は単純なケースにおけるのと同じである。我々は、我々の公式の分子にさらに二つの変数すなわち地代と利潤を導入しなければならないだけである。かくして、商品によって支配される労働の計測は、 $\frac{(w+r+p)}{\bar{w}}$ という公式から得られることとなる。これは、その商品からの販売売上金額 (生産費に等しくなる) が市場において購買または支配しうる労働量を示すのである。Das Gupta [1960], pp. 108-109.

- (10) ダース・グプタは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「文明国では、その交換価値が労働だけから生じるような商品はほんの少数であって、圧倒的大部分の商品の交換価値には、地代と利潤が大いに寄与している。だから、その国の労働の年々の生産物は、つねに、その生産物を産出し、調整し、市場に運ぶのに用いられた労働よりもはるかに多くの量の労働を、購買または支配するに足りるのである。」(WN, p. 54. 大河内訳<Ⅰ>, 92ページ。傍点の付されている箇所はダース・グプタがイタリック体にしてしている箇所。) Das Gupta [1960], pp. 109-110.
- (11) Das Gupta [1960], pp. 109-110. またダース・グプタによれば、マルクス (K. Marx) のアプローチはスミスのアプローチと根本的に異なりさえするけれども、こ

37. A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年)

のスミスの命題からマルクスの剰余価値概念への移行は容易なものであるように思える、とされる。すなわち、たとえば、 $\frac{(W+R+P)}{\bar{w}}$ が純国民生産 (net national output) を労働タームで測るものであるとすれば、 $\frac{W}{\bar{w}}$ はマルクスの可変資本 (v) に対応するものとして、そして $\frac{(R+P)}{\bar{w}}$ はマルクスの剰余価値 (s) に対応するものとして、示されうるのであり、ただしそのさいマルクスの不変資本 (c) は我々の純産出額外のものとして除外されている、というのである。Das Gupta [1960], p. 110n. 11.

- (12) Das Gupta [1960], pp. 105, 107-108, 110-111. なお、ダース・グプタは、スミスが尺度を労働に見出したということに関連して、つぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ、労働が唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度でもあること、言い換えると労働が、いついかなるところで、様々な商品の価値を比較することのできる唯一の標準であることは明白であると思える。」(WN, p. 36. 大河内訳〈I〉, 63ページ。) Das Gupta [1960], p. 110.

また、スミスのいう「労苦と骨折り」とは「労働支配力」尺度という考えにとっての補助的なものであるというダース・グプタの見解はすでにみたとおりであるが、スミスの生産費アプローチに関しては、ダース・グプタは概ねつぎのような理解を示している。それによれば、スミスの生産費アプローチは、ある限られた意味ではひとつの理論とみなされるけれども、ひとつの社会的現象としての価値を説明するよう意図されてはいなかった。すなわち、多くの人々はこの生産費に関するスミスの議論を、スミスが与えた価値理論と考えようとしてきたし、また、たしかに、F. von ヴィーザー (F. von Wieser) から J. A. シュムペーター (J. A. Schumpeter) にいたるスミスの諸解釈者たちの多くの人々がそうしたように、「生産費」にある独立的な地位を与え、そしてそれを、「自然価格」とスミスが呼ぶところのものと、結びつけてもよいかもしれない。しかしながら、生産費とは、ある限られた脈絡でのみ、つまり、費用の諸構成要素——賃金、地代および利潤——が独立的な既知のものともみなされうるといった脈絡でのみ、価値を説明するものと考えられうるものであるものであり、そして、スミス自身はこのような限定的な範囲をこえてその「理論」の適用を拡大するつもりはなかったのではないかと思えるのである。すなわち、スミスがここで論じようとしているのは明らかに、まさしく一人の個別的な生産者あるいは一つの個別的な商品なのである。スミスが商品市場および要素市場をつうじて作動する費用・価格均衡という現象に気付いていたということが認められうる、とはいえ〔このことに関してダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ、自然価格というのは、いわば中心価格 (central price) であっ

て、そこに向けてすべての商品の価格がたえずひきつけられるものなのである。様々な偶然の事情が、ときにはこれらの商品価格を中心価格以上に高くつり上げておくこともあるし、またときにはいくらかその下に押し下げることもあるだろうが、このような静止と持続の中心におちつくの妨げる障害がなんであろうと、これらの価格はたえずこの中心に向かって動くのである。」(WN, p. 58. 大河内訳〈I〉, 99ページ。)Das Gupta [1960], p. 111n. 15], その理論を、しばしばなされるように、一般均衡ということを組み込んだものとして解釈することは、いくぶん根拠のないことであろう。「生産費」を、価値事象の説明(explanation)への企てそれ自体——およそ価値「理論(theory)」とはそのようなものであるべきである——としてよりもそれ以上に、労働尺度にとって補助的なものつまり上でみたような意味で、労働尺度に到達するための一つの媒介物として、スミスの体系において役立っていると解釈することが可能なのである。『国富論』のなかの全価値分析における動機は、尺度の発見ということなのである。Das Gupta [1960], pp. 105, 110-111.

- (13) ダース・グプタはつぎのようなシュムペーターの文言を引用している。「アダム・スミスは〔(第1篇第5章)〕, 市場において一商品が支配しうる労働の量が、貨幣でのその商品価格のもっとも有用な代用物であると考えている, すなわち彼は労働をニューメレールとして選んでいるのである」(Schumpeter [1954], p. 310. 邦訳, 第2分冊, 650ページ。〔 〕内は、ダース・グプタが引用にさいして抜かしている箇所), 「……彼(アダム・スミス)は、ニューメレール——L. ワルラスによって一般的に用いられるようにされた表現法を用いるとすれば——として、商品たる銀や商品たる金の代わりに、商品たる労働を選び出すのである」(Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。()内はダース・グプタ)。Das Gupta [1960], p. 111.

- (14) このことについてダース・グプタは概ねつぎのような説明をなしている。それによれば、スミスとワルラスの両者がある共通標準に言及しており、そして彼らはともに彼らの標準を価格の分析の脈絡において使用しているということは真実である。それでもスミスの労働尺度とワルラスのニューメレールの類似は表面的なものにすぎない。スミスの労働尺度とワルラスのニューメレールは、同一の含意も同一種類の意義も持っていないのである。ワルラスの体系におけるニューメレールという概念は、交換の一般均衡の状況において価格体系〔相対価格の体系〕は決まるということの説明のために工夫されたものにすぎないのである。この目的のためには、交換の範囲内にあるどんな商品も (x, y, \dots, n) ニュメレールとして選択されえた, すなわちそこでは、選ばれた商品が一貫して適用されさえすれば、選ばれた商品それ自体に付されるべき特別な属性はなにも存在しはしないのであり、実際、もしニューメレールを変更したいならば、古いニューメレールのタームで表現された諸価格を、古いニューメレールのタームで表現された新しいニューメレールの価格で割りさえすれ

37. A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年)

ばそれでよいのである。これに対し、スミスの標準は経時的に不変なものでなければならぬ。それは、異なる諸時点での諸価値を比較するために使用されるべき「測定物差し」なのである。スミスが標準たるものに必要な属性を有する「商品」として、穀物あるいは金あるいはまた銀を退けて労働を選んでいる、ということが、思い起こされるであろう。他の諸商品は経時的に価値において変化する、これに対し、労働はそうでないのである〔ダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者としては等しい価値をもつものと言うことができよう。」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。傍点の付されている箇所はダース・グプタがイタリック体にしてある箇所。) Das Gupta [1960], p. 112n. 21]。ワルラスのニューメレールとスミスの労働尺度という二つの概念は、根本的に、異なった論考プランに属しているのである。このことを理解しないと『国富論』における価値分析の意味を全く見のがしてしまうこととなる。Das Gupta [1960], pp. 111-112, p. 112n. 20.

- (15) Das Gupta [1960], pp. 112-115. なお、すでにみたようにダース・グプタは『国富論』での価値分析におけるスミスの主要な関心事は価値尺度の発見ということであつたとするのであるが、ダース・グプタは、そのようなものとしての『国富論』における価値分析の意義はどこに存するのか、また、どのように「価値」は『国富論』の主要構造に関連づけられるのか、ということについて、概ね以下のような説明を示している。それによれば、いわゆる新古典派体系にあっては価値理論が経済分析の核心を構成するのであり、そしてこの学派に属する経済学者たちにとっては、経済学の問題は、本質的には、稀少資源の配分の問題、すなわち、その割合で稀少資源の投入が競争的な諸産業のあいだに配分される傾向のあるそのような配分割合を規制する諸力の本質を確定するという問題である。そして、いやしくも合理的な社会においてはこの資源配分は市場をつうじてはたらく「相対価格」によって導かれるということから、市場と価格の原理が、これらの経済学者にとっては、経済学の中心部分として現れてくることとなる。それにたいして、スミスの体系において中心的な地位を占めるものは、まさしく、諸国民の繁栄の前進と衰退の諸原因および諸含意についての分析ということである。「配分」がなんの役割も果たさないというわけではない、それはたしかに役割を果たすのである、しかしその地位は従属的なものである。つまり、配分の問題は、主に、相対的な有利性にもとづく適切な「資本の投下」が諸国民の富を増加させるというかぎりにおいてのみ、関連しているのである。『国富論』の中心的な諸陳述は、現在我々が成長の経済学として理解しているものと関連する。それゆえ人は一体なぜスミスがそれほど多くの重要性を価値に置いたのかということを不思議に思うかもしれない。スミスが『国富論』をつうじて言っていること、つまり、富は分業の進展とともに増加すること、分業は市場の拡大によって促進されるということ、資本蓄積は物的繁栄の条件であ

るということ、資本形成は貯蓄の結果であるということ、このようなことを言うためには、人は、価値についての込み入った理論を必要とはしない。『国富論』は本質的には成長の経済学におけるひとつの試みである、そして、たしかに成長モデルは、ポスト・ケインズ成長論者たちのあいだでの慣行が十分に例証しているように、相対価格理論の助けなしに展開させられえたのである〔なお、事実上、ダース・グプタは、ここでの問題とは別のこととしながらも、個人的には、このような慣行は好ましいものとは思えず、成長理論が相対価格理論と統合されることが望ましいと思える、としている。Das Gupta [1960], p. 113n. 25〕。だがそれでも、異時点間の比較のために、富を構成する異質的な諸財貨をある共通の標準のタームで言い直すためにだけでも、理論の展開の一つの段階で、価値という概念が導入されなければならない。この問題は集計 (aggregation) に関する問題、つまり、国民所得を測定するための方法を工夫する問題である。現代の理論家たちなら、「指数」としてこんにち知られているものの助けをかりて、その問題を解こうとするであろう。それにたいし、スミスは労働尺度の助けを援用するのである。その目的は、産出総「価値」の変動というタームで、時間をつうじて一社会内にどのような道すじで進歩が生じているか、ということを示明することである〔なお、ダース・グプタは、スミスが『国富論』における「真実価格 (real price)」という概念の意味に言及しつつ「本書のような著作で、……ある特定の商品の、様々な時と場所における様々な真実価値 (real values)」を比較すること、言い換えると、ある特定の商品が、様々な場合にそれを所有する人たちに与える、他の人々の労働を支配する力の様々な程度を比較することは、ときには有用なことであろう」と述べている (WN, p. 38. 大河内訳 I), 65ページ。傍点の付されている箇所はダース・グプタがイタリック体にしてしている箇所)、ということを指摘し、そして、ふたたびスミスの価値尺度とワルラスのニューメールとのあいだのきわだった相違に注意するよう指示している。Das Gupta [1960], p. 113, p. 113n. 26〕。このような意味で、労働支配力価値尺度は、スミスの体系においては、経済的変化のプロセスについてのひとつの理解への鍵を提供するのである。Das Gupta [1960], pp. 112-114.

- (16) この脈絡でダース・グプタはつぎのようなスミスの文章を引用している。「もしその社会が年々に購買できるはずの労働のすべてを年々用いるとすれば、労働の量は年ごとに大きく増大するだろうから、すべてあとの年の生産物は前の年のそれにくらべて、非常に大きい価値をもつことになるだろう。だが、年々の生産物の全体が勤勉な人々を扶養するために用いられる国などというものはどこにもない。怠け者がどこでもその一大部分を消費するものである。この全生産物がそうした二つの異なる階級の人々のあいだに年々分割される割合が異なるのに応じて、その通常価値または平均価値は、年々増加するか減少するか、それとも年から年へとひきつづき同じであるか、そのいずれかになるにちがいない。」 (WN, p. 54. 大河内訳

37. A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年)

〈I〉, 92ページ。) Das Gupta [1960], p. 114.

(17) なお, ダース・グプタによれば, このことは, スミスが述べている人口増加の原理から出てくる, とされる。Das Gupta [1960], p. 114n. 28.

(18) Das Gupta [1960], pp. 114-115. なお, ダース・グプタは, 消費において1期間のラグが仮定されていることに注意するよう指示している。Das Gupta [1960], p. 115n. 30.

(19) Das Gupta [1960], p. 115. なお, ダース・グプタはここでまた, スミスの体系とマルクスの体系との類似を指摘している。そして, ここで言及されている成長率ゼロという中間的なケースはマルクスの単純再生産のケースに対応し, それに対して正の成長率というケースは拡大再生産のケースに対応するのであり, 一方においては剰余価値のすべてが「消費」され, 他方においては, 剰余価値の一部が可変資本に転化されるのである, とされる。Das Gupta [1960], p. 115n. 31.

(20) Das Gupta [1960], p. 115.

(21) Das Gupta [1961], p. 285. なお, ダース・グプタは, つぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆる種類の動物は, その生活資料に比例して自然に増殖する。そして, どんな種類の動物も, これを超えて増殖することはできない。」(WN, p. 79. 大河内訳〈I〉, 135ページ。) また, 「もしも, (労働にたいする) こうした需要がたえず増加するならば, 労働の報酬は必然的に労働者の結婚と増殖を刺激して, たえず増大する需要を, たえず増大する人口によって満たすことができるようになるにちがいない。」(WN, p. 80. 大河内訳〈I〉, 136ページ。() 内はダース・グプタ。) Das Gupta [1961], p. 285.

(22) Das Gupta [1961], pp. 285-286. なお, ダース・グプタは, つぎのようなスミスの文章を引用している。「賃金を騰貴させる資本 (stock) の増加は, 利潤を引き下げる傾向がある。多数の富裕な商人の資本 (stocks) が同一事業にふりむけられるとき, かれら相互の競争は自然にその利潤を引き下げる傾向がある。また, 同じ社会で営まれる種々さまざまな職業において, 同じような資本 (stock) の増加があるときは, 同じ競争がこれらすべての事業で同じ効果をもたらすにちがいない。」(WN, p. 87. 大河内訳〈I〉, 148ページ。なお, この引用文中の「同じ社会」という箇所は, 本書で使用しているモダン・ライブラリー版『国富論』では 'some society' となっているのであるが, ダース・グプタの引用文では 'same society' とされており, また, ダース・グプタ自身がこの研究で使用しているエヴリマンズ・ライブラリー (Everyman's Library) 版『国富論』およびその他, 中川のみた範囲内での『国富論』の諸版においても 'same society' となっているので, 「同じ社会」として捉えておくこととした。) Das Gupta [1961], pp. 285-286.

ただし, ダース・グプタは, 蓄積は賃金を引き上げるとともに利潤を引き下げるという利潤低下に関するスミスのうえの命題は低落的利潤についてのリカード原理

論と区別されなければならない、とする。そのことについてのダース・グプタの説明はつぎのようなものである。すなわち、リカードウの理論では、低落的利潤という傾向は、収穫逡減のために存続するのである。つまり、蓄積は、ある所与の量の土地での資本と労働の使用の増大へと導き、収穫逡減が作用し、そして、生存手段を生産するための労働費用 (labour cost) が上昇する、それゆえ労働のタームで測られた賃金が増加する〔生存手段 1 単位当たり生産に必要な労働量 (労働費用) の増加は、労働者をして生存に必要な生存手段を購買させるに足りうる賃金の高さを、労働 (ただしここでは、労働費用) のタームで測って、上昇させる〕ので、利潤は低下するのである。そしてそのプロセスは、技術進歩が存在しない場合には、蓄積が止まりそして定常状態が到達されるほどの低水準にまで利潤が低落するまで、続くのである。これに対して、スミスの体系においては、停滞に向かうこのような長期的傾向といったものは作用しはしない。そこでは、収穫逡減が占めるべき場所はないのである。蓄積は終わることなく、それはただ、人口増加と符合することになるだけなのである。賃金の上昇と利潤の低下は、経済成長率に影響を及ぼす過渡的な現象なのである。Das Gupta [1961], p. 286.

- (23) ダース・グプタは、1960年の彼の論文で用いられた労働支配力尺度のための公式によってどのようにしてこの過渡的な賃金変動という現象が取り扱われうるかということを示すことが、この補遺の目的である、としている。(Das Gupta [1961], p. 286.) そしてその説明は概ね以下のようなものであるといえる。

労働支配力尺度のための公式は、 $\frac{W+R+P}{\bar{w}}$ あるいは $\frac{W}{\bar{w}} + \frac{R+P}{\bar{w}}$ で、 \bar{w} は賃金率、 W は総賃金、 R は総地代、 P は総利潤であった。 $\frac{W}{\bar{w}}$ はある所与の期間のあいだに全体としての産出物に「体化」された労働量であるため、「支配される労働」は、 $\frac{R+P}{\bar{w}}$ だけ「体化された労働」を超過する。したがってこの $\frac{R+P}{\bar{w}}$ は、次の期間に〔追加的に〕生産的に使用されうる労働の最大量を表す、すなわちそれは、最大蓄積率を与えるのである。この最大量に注意を集中し、その一部分が「浪費的な消費」に支出されるという可能性を無視しよう。ある部分がそのように支出されるかもしれないという事実は、ここでの分析の妥当性には影響を及ぼさないのである。(Das Gupta [1961], p. 286.)

さて、もしも、最低生存費の賃金率のもとで、人口増加の結果として生じる労働力の増加が蓄積のペースと調子を合わせつつけるならば、賃金率は最低生存費水準で一定でありつつける。だが、うえで過渡的な期間と呼んだものを考慮するために、労働力の増加が、資本家たちがすすんで生産的に雇用しようとする追加的な労働の量よりも少ない、と仮定しよう。そのときにはどのようなことが生じるであろうか。

37. A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年)

明らかに、労働市場に圧力が存在し、そして賃金が上昇する、つまり \bar{w} はより大きい値をとる。ところでこのことは、公式の第二項すなわち $\frac{R+P}{\bar{w}}$ に影響を及ぼすのであり、それゆえ、成長のプロセスはここでは、もし賃金が生存費水準で一定にとどまっていたならそうであったであろうものとは異なったものになる傾向がある。(Das Gupta [1961], pp. 286-287.)

産出が $W+R+P$ で、体化された労働が $\frac{W}{\bar{w}}$ 、そして支配される労働が $\frac{W+R+P}{\bar{w}}$ であるといった期間 t_0 からはじめよう。そのときには、期間 t_1 のための生産的雇用により意図される追加的労働（すなわち、蓄積）は、 $\frac{R+P}{\bar{w}}$ である。しかしながら、もしも、期間 t_1 のあいだに人口増加の結果としてそのシステムに実際に^{●●}くかわる追加的な労働がこれよりも少ないならば、賃金は生存費水準にとどまることはできない。期間 t_1 についての新しい賃金率、それを \bar{w}' で表せば、その \bar{w}' は \bar{w} よりも高いであろう、したがってまた、 $\frac{R'+P'}{\bar{w}'}$ は、もし賃金率が生存費水準で一定にとどまっていたならばそうであったろうものよりも、小さいであろう。言い換えれば、期間 t_1 のあいだの「体化された労働」をこえての「支配される労働」の超過分は、変更された賃金率 \bar{w}' のもとでは、生存費水準の賃金率 \bar{w} のもとではそうであったろうよりも、より少ないことになるであろう。そしてそのことは、労働のタームで測られた利潤〔および地代〕も、また同様に蓄積の余地も、〔生存費水準の賃金率のもとではそうであったろうよりも、〕より少ないこととなるであろうということを、意味しているのである。(Das Gupta [1961], p. 287.)

ところで、このようなプロセスは、人口増加が蓄積の速度に遅れるかぎり、続くであろう。しかしながら、それは、無際限には続くことはできない。というのは、一方で、賃金が上昇してゆくのであったのであるから、「体化された労働」をこえての「支配される労働」の超過は（すなわち蓄積の速度は）、〔賃金上昇がなかった場合に比べて、〕ひきつづく諸期間において低下しつつあることになるであろうし、また他方で、そしてまたこれがスミスの人口理論がとることになる立場でもあるのであるが、賃金率の上昇は結婚と増殖を刺激するであろう、そしてそのため人口増加の速度は〔賃金上昇がなかった場合に比べて、〕上昇しつつあることになるであろう、からである。その結果、ある段階で状況は逆転されそして人口増加が蓄積の速度を超える傾向をもつこととなるであろう。この逆転的な作用は、うえとは逆に、賃金の低下、〔労働のタームで測られた〕利潤〔および地代〕の上昇の傾向をもたらすであろう、そしてそのプロセスは、結局、生存費に等しい賃金率ということと両立するであろうような人口増加と蓄積率との間の調整ということで終わ

るのである。これらの端点が、1960年の論文での準拠枠であったのである。(Das Gupta [1961], p. 287.)

A. K. ダース・グプタ (1960年, 1961年) についての覚書

ダース・グプタは、1960年の論文において、スミスの価値分析における主要な関心事は「価値の尺度」を見いだすということにあったのであって、ある程度の一般性をもった説明的な仮説としての価値についてのある一般的な「理論」を提示することにはなかったのではなく、スミスの議論にみられる生産費アプローチでさえ、それはある限られた意味ではひとつの理論とみなされうるが、ひとつの社会的事実としての価値を説明することを意図されてはいなかった、また、「価値理論」は、スミスの経済分析体系にとっては補足的なものにすぎず、「価値理論」は、リカードウの体系や新古典派の体系の核心を構成しているようには、スミスの体系の核心を構成してはいない、という認識に立ちつつその議論を展開しようとするのであるが、そのダース・グプタによれば、スミスは「効用」を表すものとしての「使用価値」と、「交換価値」という二つの価値概念があるとし、彼はそのうちの「交換価値」を取り扱ったのであるが、スミスの議論におけるこの「交換価値」とはたんなる比率といったものではなくて測定可能な数量であったのであり、スミスは商品の交換価値を、その商品を所有することがもたらす他の財貨にたいする購買力と定義し、そして、商品のこの交換価値をさらにまた一社会において年々に生産される全体としての諸商品のもつ交換価値およびその経時的な変動を測定するためのそれ自体不変な共通の標準を、「労働支配力」に求め、商品の交換価値また全体としての諸商品のもつ交換価値は、それらによって支配される労働量によって測定されるとした、とみられるのであった。

『国富論』の中にはスミスは「真実価格」という言葉を価値〔交換価値〕と同義語として使用しているということを示す証拠が豊富に存在するとするダース・グプタによれば、スミスの議論では事実上、「名目価格」（貨幣での価格、貨幣価格）はつぎのような公式によって「真実価格」（労働での価格としての交換価値、真実価値）に転換されることとなっている、とみられるのである。すなわち、ダース・グプタは、スミスの議論では事実上、生産されるもののすべてが賃金として労働者に帰属することになる土地の占有と資本の蓄積に先立つ「初期未開の社会状態」では w/\bar{w} によって (w は当該商

品の生産に投入された労働にたいして支払われる賃金総額、 \bar{w} は労働 1 単位当たり賃金)、当該商品によって支配される労働の量、すなわち、当該商品の「真実価格」が表され、それに対し、ヨリ一般的なケースとしての、土地の占有と資本の蓄積が行われそして「貨幣での価格」、当該商品からの販売売上金額が当該商品の生産に投入された労働、土地、資本に対する賃金、地代、利潤からなる生産費に等しくなる傾向のある進歩した社会というケースでは、 $(w+r+p)/\bar{w}$ によって (r と p は、それぞれ、当該商品を生産するにさいしての土地および資本の使用に対して支払われる地代と利潤)、当該商品によって支配される労働の量、すなわち、当該商品の「真実価格」が表される、ということとなっており、さらにまたこの後者の公式は事実上一社会において生産される全体としての諸商品にも適用、拡大されることとなっているのであって、そこでは、 $(W+R+P)/\bar{w}$ によって (W, R, P は、それぞれ、一社会において生産された全体としての諸商品の生産に投入された労働、土地、資本に対して支払われる賃金、地代、利潤)、一社会において生産された全体としての諸商品の「名目価格」が、それによって支配される労働の量、すなわち、その「真実価格」に転換される、ということになっている、とみるのであった。そしてまたダース・グプタによれば、そこでの $(W+R+P)$ は事実上、こんにち要素費用表示の国民所得として知られているものに、さらに、この拡大された公式 $(W+R+P)/\bar{w}$ の使用は、労働のタームでの国民所得の測定あるいはケインズ流に言えば「賃金単位」のタームでの国民所得の測定といったことに、対応するものである、とみられるのであった。

また、価値に関する議論におけるスミスの主要な関心は価値尺度を見いだすこと、すなわち、個々の商品の価値の尺度を発見したそれからさらにすすんで、社会において生産される全体としての諸商品のもつ価値の尺度、諸国民の富の尺度を発見することにあつたのであって、価値についての因果的説明を与えるものとしての一般的な価値理論を提示することにあつたのではなく、価値についての他の諸概念は付随的なもの、補助的なものであつたにすぎないのであって、それらの概念の意義は、尺度という主要問題との関連でみられるべきである、とするダース・グプタによれば、たとえばスミスは「労苦と骨折り」といったことに言及するのであり、またそれはしばしばスミスの体系における価値へのある独立したアプローチとみなされることがあ

るのであるが、「労苦と骨折り」ということに関するその議論がスミスの体系における価値分析の目的という観点からみて有益なもの、必要なものであったのか否かということは別として（なお、ダース・グプタ自身は、それは有益なものでも必要なものでもないと思う、とするのであった）、その「労苦と骨折り」といったことについてのスミスの言及自体は、「人時」タームでの労働という単位を示すことだけで満足することなくさらにもう少し深く掘り下げて労働の主観的相対物としての、労働に伴うものとしての、「労苦と骨折り」また「安楽、自由、幸福の犠牲」といったものを持ち出すことによって不変の価値尺度としての労働という考えをより堅固なものとしようという意図から、なされたものであって、スミス自身は「労苦と骨折り」をもって価値についての一つの独立した因果的説明としようとしたというわけではなく、それは価値尺度としての「労働支配力」という基本的概念を根拠づけるために用いられた補助物、その基本的概念にとつての補助的なものであるのであった、とみられるのであった。また、たとえば、スミスの議論では「初期未開の社会状態」においては市場で商品によって支配される労働量とその商品に体化された労働量とは等しくなり、その商品の価値はその商品の生産に投下された労働量によって直接的に測定されることが可能ということになっているのであるが、このケースについてのスミスの議論においては、「労働費用」「投下労働」と「労働支配力」とは二つの独立したアプローチであったわけではなく、「労働費用」は地代も利潤も存在しない社会という特殊的、限定的な状況での「労働支配力」からの派生物、付随的なものであったのであり、したがってまた、交換価値は相対的労働費用によって決定されるという意味での労働価値説に類似したものに対してスミスが直接的に主唱者としての責任を有すると考えるのは誤りである、とみられるのであった。さらにまた、たとえば、価値に関するスミスの所説にみられる「生産費」についての議論も、それは多くの人々によってスミスの与えた価値理論として捉えられてきたし、また事実それはある限られた意味では一つの価値理論とみなされうるものではあったのではあるが、スミス自身はそれを一つの社会的事実としての価値を因果的に説明するものとして構想していたようには思われないのであり、そして、「生産費」についてのスミスのその議論自体は、価値事象の因果的説明それ自体、一つの価値理論、としてよりもむしろそれ以上に、労働尺度にとつて補助的なものつまり上でみたような形で労働尺度

に到達するための一つの媒介物として、スミスの体系において役立っている
と解釈することのできるものなのである、とみられるのであった。そしてこ
のような事情からあらためて、『国富論』のなかの全価値分析における動機
は尺度の発見ということであったのであるということが、強調されるのであ
った。

そしてまたダース・グプタは、スミスのその労働尺度は表面的にはワルサ
スのニューメレールと類似してはいるけれどもそれらは同一の含意も同一種類
の意義も持つものではなかったのであって、スミスの労働尺度はワルサ流
のニューメレールという概念の先駆的なものというわけではない、とするとと
もに、「価値理論」は新古典派の体系の核心を構成しているように『国富
論』におけるスミスの経済分析体系の核心を構成してはいないということ
を具体的に示そうとするのであるが、そのダース・グプタによれば、『国富
論』における価値についてのスミスの議論は、経済成長ということを中心的な問
題として取り扱う『国富論』において、集計にかかわる問題、こんにちで言
う国民所得の測定といったことにかかわる問題という脈絡のなかでその意義
を持つこととなっているのであって、価値についてのそのスミスの議論での
主要関心事となっている価値尺度の発見ということの中で提示される価値尺
度としての労働支配力尺度とは事実上、こんにち「指数」として知られてい
るものの助けをかりて対処されているそのような集計の問題に対するスミスの
方法を示すものであったのであって、スミスはその労働支配力価値尺度の
助けをかりて、産出総「価値」の変動という形で、経時的に一社会において
どのような道すじで進歩が生じているかということを明示しようとしたので
あり、そのような意味で、労働支配力価値尺度はスミスの体系においては、
経済的変化のプロセスについてのひとつの理解への鍵を提供するものであ
ったのである、とみられるのであった。

そしてさらにダース・グプタは、そのような認識に基づきつつ、スミスの
その労働支配力価値尺度がスミスの成長理論とどのように関連づけられるか
ということを具体的に示しその脈絡におけるスミスの労働支配力価値尺度の
もつ意義を示そうとし、そしてまたさらに、1961年の補遺において、スミスの
議論における過渡的な賃金変動の可能性ということを認め、そのような変
動が生じるケースをも取り扱うために、1960年の論文での議論を拡張しよう
とするのであった。

38. M. ブラウグ (1962年)

本書の「33」において我々は、1959年に公表された M. ブラウグ (M. Blaug) の一論説での「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつブラウグの所説を取り扱ったのであるが、ブラウグはまた、その初版が1962年に刊行された彼の一著書 (Mark Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, 3rd edition, Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1978 [1st edition Homewood, Ill.: Richard D. Irwin, 1962; 2nd edition (revised) 1968; 4th edition Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1985]). なお、ここではもっぱら上掲の第3版を使用するのであるが、ここで扱うブラウグの研究の発表年の区分については上掲書の初版が刊行された年、1962年をとり、そして、以下では、上掲書第3版を Blaug [1962]と略記する、また、第4版は Blaug [4th ed.]と略記することとする。久保芳和他訳『新版 経済理論の歴史』(全4巻) [第3版の邦訳]、東洋経済新報社、1982-1986年) のなかでも「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつ所説を展開している。そして、そこでのブラウグの議論は事実上、(Ⅰ)「価値尺度の問題」と「価値決定の問題」とは別個の問題であるというブラウグの認識にもとづいての『国富論』第1篇第5、第6、第7章のテーマの確定、(Ⅱ) 価値尺度についてのスミスの議論そのものの内容の把握、(Ⅲ) そのようなものとしてのスミスの議論についての検討、といったものに大きく整理することもできるもの、と捉えることもできる。ここでは、その各々の点についてのブラウグの所説をみていくことによってブラウグの議論の内容の把握を試みることにする。

(Ⅰ) [(Ⅰ) の点に関するブラウグの所説はつぎのようなものである。]

スミスは、『国富論』第1篇第4章で貨幣を導入し、水とダイヤモンドのパラドックスによって例証しつつ交換価値を使用価値と区別し、そして、つづく三つの章において交換価値の問題を取り扱うとしてそれらの章でとりあげるべき諸問題を言明するのであるが、その言明¹⁾においては、二つの非常に違った種類の問題、つまり、何が価値の最善の尺度であるのかという問題と価値を決定するのは何であるかという問題とが混同されている。事実上、第

5章は第一の問題をとりあげ⁽²⁾、第6章と第7章は第二の問題、何故に相対価格が現実になような大きさのものであるのかという価値理論 (value theory) の伝統的な問題を取り扱っているのであるが、明瞭化のためには、こういう二つの方向の質問は厳密に分けられるべきである。「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」と題される第5章は、この意味で価値理論にかかわるものではなく、うへの第一の問題を取り扱うものであり、そしてそれは事実上、厚生経済学またとくに厚生の指数の問題にかかわるものなのである。

(II) [つぎにブラウグは、価値尺度についてのスミスの議論そのものの内容をつぎのようなものとして示そうとする。すなわち、①スミスは事実上、経済的厚生の本質についての彼の考えから、「真実価値」の尺度、経済的厚生の指標を「支配労働量」に求め、さらにスミスはそのようなものとしての「支配労働量」という考えを展開するにさいして事実上、②労働の質の相違の問題、③尺度の要件としての尺度自体の不変性の問題、④また、事物の支配労働量タームでの価値そのものはその事物の貨幣タームでの価値を貨幣タームでのものとしての賃金単位で割ることによって算定されることになるのであるが事実上その賃金単位ということに関連してさらに、賃金単位を表現するための安定的な物差しを選ぶという問題に、触れている、とみるのである。以下、その各々の点についてのブラウグの所説をみていくこととする。]

(まず、①の点についてのブラウグの所説はつぎのようなものとして捉えることができる。) : スミスは、物価水準よりもむしろ貨幣賃金率との関連で商品の「真実価格」や「実質所得」を確定することを選び、当該事物が支配しうる労働量によってその「真実価値 (real value)」を測ろうとするのであるが、スミスのこの選択は、貨幣賃金は価格一般よりも変動にさらされることが少ないという確信によって指示されていたのではなく、経済的厚生の本質についての彼の考えによって指示されていたのであった。つまり、スミスの考えでは、労働とはやっかいなものであり、「労苦と骨折り」は究極的稀少生産要素である。また、一個人の「富 (wealth)」とは、他人の生産物を支配する力によって自然的に測られるのであるが、[社会的] 分業のもとでの富の追求は、我々から不快な労働を省きそれを他人に課そうという欲望によって動機づけられている。それゆえ人は、彼の富あるいは彼の所有する一商品を、彼がそれでもって市場で買うことのできる他人の労働の量によ

て評価する（したがって、スミスの議論では、一商品の「真実価値」とはその商品の労働価格〈labor price〉なのであり、そしてそのさい、労働は、ある一定数の人時〈man-hours, 延べ労働時間〉そのものではなくて不効用の諸単位を、すなわち、個人にとっての仕事の心理的コストを意味しているのであり、また、ここでの価値とは、交換価値よりもむしろ尊重価値〈esteem value〉を意味しているのである^{(4) (5)}）。ところで、厚生指数（index number）の目的とは、一個人あるいは一社会が時および場所の移りかわりをつうじて暮らし向きが向上しているか否かを査定することを可能にする、ということなのであるが、賃金単位で測られた一商品の「真実価格」が高ければ高いほど、その商品の「真実価値」が大きければ大きいほど、その商品をもつことのゆえに我々はいっそう暮らし向きが良いということになるのであり、また、総生産物がますます多くの労働を支配すればするほど、国民は「ますます富裕」である、ということになる。支配労働標準（labor-commanded standard）が経済的厚生[●]の正の指標（index）を提供するということが、このことがスミスの所説の要旨なのである⁶。

（② 以上のように、ブラウグの所説の示すところによれば、スミスは、労働とはやっかいなものであり、「労苦と骨折り」は究極的稀少生産要素であるのであり、また、個人の「富」は他人の生産物を支配する力によって自然的に測られるのであるが「社会的」分業のもとでの富の追求は、我々から不快な労働を省きそれを他人に課そうという欲望によって動機づけられているのであって、それゆえ人は、彼の富あるいは彼の所有する商品を、彼がそれでもって市場で買うことのできる他人の労働の量によって評価する、といった考えから、事物の「真実価値」の尺度を、その事物によって「支配する労働の量」に求めたのであり、したがってまたそこでの「価値」、「真実価値」とは事実上、「交換価値」よりもむしろ「尊重価値」にあたるものであった、また、そこでの「真実価値」の尺度としての労働とは、「労苦と骨折り」といった不効用としての労働のことであつたのであって、そこでの「真実価値」は不効用としての労働をどれほど支配するかということによって評価されることとなっているのである、さらにまた、個人のもつ商品あるいは所得の「真実価値」が大きければ大きいほど、また社会全体の生産物の「真実価値」が大きければ大きいほど、その個人あるいはその社会は、より多くの労働不効用をまぬがれ・支配できるという意味で暮らし向きがより良いと

いうこととなるのであり、そしてこの意味で、支配労働標準は経済的厚生[・]の正の指標を提供するということ、これがスミスの所説の要旨であった、ということになるのであった。このようにブラウグによれば、スミスは不効用としての労働を事物の「真実価値」の尺度、経済的厚生[・]の指標とした、とされるのであるが、つぎにブラウグは、そのようなものとして不効用としての労働を用いるにあたっては異なったタイプの労働には異なった程度[・]の不効用が伴いうるという問題があるとし、そして、その問題にたいするスミスの対処はつぎのようなものであった、としている。)：一体だれの「労苦と骨折り」が主観的な厚生[・]の恒常的な標準となるべきなのか。異なるタイプの労働が、すべて同程度に不快であるわけではない。スミスは『国富論』第1篇第5章では、熟練を異にする労働の尊重価値の間に「ある種の大まかな相当関係(equality)」をうちたてるであろうところの「市場のかけひきや交渉」に簡単にふれるだけでこの問題をかたずけている。だが、スミスは第1篇第10章において、競争をつうじて等量の不効用という意味での等単位の労働は等額の貨幣賃金によって補償されるということ、競争が労働の不効用の諸単位にたいする貨幣収入を平準化するということを、証明しているのであり、それゆえ、原理的には、代表的な賃金単位を設定することは可能⁽⁷⁾なはずなのである。

(③ 以上のように、ブラウグは、スミスの議論では不効用としての労働が「真実価値」の尺度とされており、また、スミスは1時間の普通労働の不効用を反映する賃金単位を設定することは可能であったはずであって、その賃金単位の使用によって、うえのようなものを尺度にして「真実価値」を測定するさいに生じうる問題としての労働のタイプの相違による労働の不効用の相違といった問題は克服できるのであった、とみているのであるが、つぎにブラウグは、あるものを尺度とするためには尺度となるものそれ自体が不変性という性質をそなえていなければならないとし、そして、その問題についてのスミスの態度はつぎのようなものであった、としている。)：スミスも指摘しているように、測定されるものの変化を正確に表すためには測定標準それ自体が不変なものでなければならない。だが、1時間の労働の不効用は時間の経過がある場合にも諸個人にとって同一のままにとどまるというのは本当であろうか。スミスは本当である[・]と考えるのである。スミスは苦痛費用(pain cost)についての我々の直観的感性に訴えつつ、等量の労働は「労

働者の安楽、自由、幸福の同一部分」を表現するという点で「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、その労働者にとっては等しい〔尊重〕価値をもつものと言うことができる」ということを、自明のこととして仮定するのである（WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。傍点の付されている部分はブラウグがイタリック体にしてある箇所。〔 〕内はブラウグ⁸⁾）。

（④ 以上のように、ブラウグは、価値尺度に関するスミスの議論で事実上取り扱われている「価値」とは「交換価値」というよりもむしろ「尊重価値」にあたるものであったのであるがスミスのその議論では事実上、同一の質・種類の労働1時間に伴う不効用はあらゆる時と場所において同一であり、また、異なった質・種類の労働1時間に伴う不効用の格差は同一時点においてそれらの労働1時間に対して支払われる貨幣賃金額の格差に反映されることになるゆえ、たとえば、各時点において成立している貨幣タームでの商品の名目価格を、各時点において成立している1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率としての賃金単位で測って、各時点においてその商品がどれだけの時間数の普通労働を支配しうるかということを知ることによって、各時点においてその商品が普通労働1時間に伴う不変な労働不効用をどれだけ支配しうるかを知るといった形で、各時点におけるその商品の「真実価値」の大きさを知りうるとともにその大きさの経時的な比較も可能、ということとなっている、とみ、そしてこの意味で、スミスは「真実価値」についての支配労働標準を主張した、とみるのであるが、つぎにブラウグは、スミスはさらに賃金単位を表現するための安定的な物差しを選ぶという問題にも言及している、とみ、そしてそこでのスミスの議論をつぎのようなものとして示している。）：「真実価値」についての労働標準を弁護したのち、スミスは賃金単位を表現するための安定的な物差し（yardstick）を選ぶという問題に注意を向ける。銀の価値は「年から年にかけては」さらに「半世紀またはまる1世紀の間」でさえ相対的に安定しているから、適度な長さの暦上の諸期間（calendar periods）については、銀タームでの名目的な賃金単位で十分であろう。しかし、もっと長い諸期間については、穀物賃金単位（corn-wage unit, 穀物タームでの賃金単位）がより適している。穀物価格は短期（short run）では鋭く変動し、しかも、貨幣賃金と同じ方向に同じ振幅で変動することはまれであるのではあるが、「世紀から世紀にかけては」、穀物価格はいちじるしく安定的であるのである。その理由は、第1篇に付き

れた「銀の価値の変動に関する余論」のなかでスミスが説明しているように、費用を低落させるような農業上の諸改良が「農業の主要な用具」である家畜の価格の上昇によって「多かれ少なかれ相殺される」からである。しかも穀物は「人々の基本的な生活資料」であるから、穀物の貨幣価格は長期 (long run) では貨幣賃金を支配するのである。議論は完全である。つまり、リアル・タームでの賃金単位——穀物で測られた普通労働の賃金——は、時間をつうじて不変的であり、そして労働のある不変的な不効用を反映するのである。⁽⁹⁾

(Ⅲ) [ブラウグは、価値尺度についてのスミスの議論そのものの内容を以上のようなものとして把握し、そして、そこで示されている「支配労働標準」が経済的厚生[・]の正の指標を提供するということがスミスの所説の要旨であるとするのであるが、ブラウグは、そのようなものとしてのスミスの議論に対してつぎのような検討をくわえている。]

① スミスの所説の要旨は、支配労働標準が経済的厚生[・]の正の指標を提供するということである。賃金単位で測られた一商品の「真実価格」が高ければ高いほど〔その商品の「真実価値」が大きければ大きいほど〕、その商品をもつことのゆえに我々は暮らし向きがヨリ良いということになる。また、総生産物がますます多くの労働を支配すればするほど、国民は「ますます富裕」であるということになる。このことは、厚生を、人口のたんなる正の関数にする。すなわち、「どんな国でも、その繁栄の最も決定的なしるしはその住民数の増加である」(WN, p. 70. 大河内訳<Ⅰ>, 119ページ)のである。しかしながら、もしも貨幣賃金が産出の貨幣価値よりも急速に増大するならば、すなわち、もしも産出のうちの労働の相対的な分け前が増大するならば、総生産物は、現行賃金単位のタームで表現されたいっそう大きな価値を、必ずしも、もたらしはしないであろう⁽¹⁰⁾。このことは、スミスの賃金単位はそれの基準年の価値で一定と考えられなければならないということを示している。スミスは、我々は産出の増加と組み合わされた貨幣賃金における増加ということによって惑わされてはならない、と言っているように思われる。すなわち、1時間の労苦と骨折りの尊重価値は決して変わらないのであるから〔1時間の労働に伴う不効用すなわち労苦と骨折り、犠牲にされる安楽、自由、幸福は決して変わらない——またそのことのゆえに1時間の労働にたいして人が付する尊重価値は決して変わらない——のであるから〕、ヨリ大き

な産出は実際に、何時間の労苦と骨折りを表示するのか〔ヨリ大きな産出は実際に、何時間の、不効用としての労働、労苦と骨折り、安楽・自由・幸福の犠牲としての労働を、表示するのか——したがってまた人はそのヨリ大きな産出にたいしてどれほどの尊重価値を付することになるのか——〕、⁽¹¹⁾ ということを知らなければならないのである。

② しかしながら、もしも我々が、実質賃金率が不変で、その不変の実質賃金率は不変の労働不効用を表す、といった考えをすててしまうと、スミスの議論は経済的厚生⁽¹²⁾の負の指標を提出するかもしれない。もしも、労働生産性の上昇のゆえに実質賃金⁽¹³⁾が上昇しつつあるかあるいは物価が低下しつつあるならば、年々の総生産物によって支配される現行賃金単位⁽¹⁴⁾の数は低下する傾向をもつかもしいのである。負の指標にとっての必要条件は、1人当たり産出量 (output per man)〔労働1単位当たり産出量〕を超過しての実質賃金の騰貴である。⁽¹⁵⁾一商品が交換において支配する労働量の減少は、一商品にたいする労働の購買力の増加という関係にあるのであるから、⁽¹⁶⁾ 実際には、負の指標のほうがずっと道理にかなっている。総生産物がヨリ少ない労働しか支配しないにつれて、⁽¹⁷⁾ 実質所得にたいする労働の購買力は増大するのである。⁽¹⁸⁾

③ スミスのアプローチの実際的な困難の原因は、実質賃金不変という支持しがたい仮定なのであり、そしてまたこの仮定は、「あらゆる時において」努力1単位当たりの〔労働1単位当たりの〕主観的犠牲の支出は不変であるという大胆な仮定を反映しているのである。⁽¹⁹⁾ また、「あらゆる場所における」労働の等しい不効用というものも、それは経済的厚生の国際比較を行うさいにしばしば仮定されるものではあるけれども、⁽²⁰⁾ おそらく、弁護のできない仮定である。⁽²¹⁾

(注)

- (1) ブラウグはつぎのようなスミスの文章を引用している。「諸商品の交換価値を規制する原理〔ブラウグの原本の引用文ではここは条件 (conditions) となっているが、スミスの原典では原理 (principles) となっている〕を究明するために、私はつとめてつぎの諸点を明らかにしようと思う。／第一に、この交換価値の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか。／第二に、この真実価格を構成し、あるいはつくりあげている様々な部分とはどんなものであるのか。／そして最後に、価格のこうした様々な部分のいくつが、

38. M. ブラウグ (1962年)

またはすべてを、ときにはその自然率ないし通常率以上に引き上げ、またときにはそれ以下に引き下げる様々な事情とはどんなものであるか。あるいは、諸商品の市場価格すなわち現実の価格がそれらの自然価格と呼べるものと正確に一致するのをときとして妨げる諸原因は、いったいどんなものであるのか。」(WN, pp. 28-29. 大河内訳 <I>, 50ページ。[] 内は、ブラウグの著書の邦訳者が注をもうけて指摘している内容にあたる部分。／は原典において行変えが行われていることを示す。) Blaug [1962], p. 39. (Blaug[4th ed.], p. 38.) 邦訳 <I>, 64ページ, 64ページ注*。

- (2) ブラウグによれば、『国富論』第1篇第5章は、その議論についていくのが特に難しい部分であり、そしてそれは、一方での交換価値の「原因 (cause)」と交換価値の「尺度 (measure)」との間の違い他方での「支配労働」価値説 ('labor-commanded' theory of value) と「投下労働」価値説 ('labor-embodied' theory of value) との間の違いといったことをめぐって人々を当惑させるような様々な解釈を得てきた、とされ、そして、その原因は、前で見られたような第5, 第6, 第7章でとりあげる問題についての第4章の終わりの部分でのスミスの言明における、何が価値の最善の尺度であるのかという問題と価値を決定 (determine) するのは何であるかという非常に異なった二種類の問題の混同、といったことにある、とみられる。なお、ブラウグは、事実上このような内容をもつ指摘を、「価値の尺度と原因 (The Measure and Cause of Value)」という見出しの付された節の中でなしている。また、以上のような事情からして、ブラウグの議論では、価値の「原因」すなわち価値を決定するもの、として捉えられている、ともいえるであろう。Blaug [1962], pp. 39-40. (Blaug [4th ed.], p. 38.) 邦訳 <I>, 64ページ。(なお、Blaug [1962] つまり第3版では 'labor' という用語が使用されているのであるが、第4版ではそれに代えて 'labour' という用語が使用されている。)

- (3) Blaug [1962], pp. 39-40, 51. (Blaug[4th ed.], pp. 38, 49.) 邦訳 <I>, 63-65ページ, 80-81ページ。なお、ブラウグによれば、スミスは「いま意味での価値理論としての」労働価値説を定式化しようとしたが生産物によって「支配される労働」とその生産物の生産に「具現された労働 (labor embodied)」とを混同したと言われるのがつねであったが、スミスは「価値理論としての」労働価値説と正当に呼ばれるようなものを定式化しようとしたわけではなく、『国富論』第1篇第5章は一つの、主観的厚生労働説 (labor theory of subjective welfare) を提示し、第6章は労働が唯一の生産要素であるような特殊なケースでの素朴な価格決定論をもてあそび、第7章は相対価格の生産費説を提供しているのである、とされる。またブラウグによれば、『国富論』は「国民の年々の労働はその国民に……生産物を……本来的に供給する源 (fund) である」といった文言 (WN, p. lviii. 大河内訳 <I>, 1ページ) で始まっているということは本当であるが、これは富 (wealth) は貨幣からではなくて現実の物資からなるという事実を強調することを企図されていると

いうことは明らかなのであり、「労働は富の基礎であり本質である」という句は、その時代の合言葉の一つであったのであり、重商主義的思考に対する一つの便利な武器であったのである、とされる。Blaug [1962], pp. 53-54. (Blaug [4th ed.], pp. 52-53.) 邦訳〈I〉, 85-86ページ。なお、本文および注1, 2, 3でみてきたブラウグの所説と、そこでの問題に関連する本書前出「33」でみたブラウグの所説との間には、共通する点と同時に相違する点もある。それについては、以上のブラウグの所説と、Blaug [1959], p. 150 でのブラウグの所説（本書前出「33」の、冒頭および注1も見よ）を、比較せよ。

- (4) なお、ブラウグはここでは、スミスの議論における事物の「真実価格」とは、その事物の貨幣価格（名目価格）を賃金単位で測ったものを意味するとみ、そして、この「真実価格」がその事物の「真実価値」に相当するとみている、といえる。それについては、Blaug [1962], pp. 51-53 (Blaug [4th ed.], pp. 49-51, 邦訳〈I〉, 80-84ページ) でのブラウグの議論におけるこれらの用語の使われ方を見よ。ブラウグは、スミスの議論では、事物の「真実価値」はこのような意味での「真実価格」に対応するものであり、また、そこでの価値とは交換価値よりもむしろ尊重価値を意味しており、スミスの議論での事物の「真実価値」はその事物の労働価格、努力価格 (effort price) である、というのである。

- (5) Blaug [1962], p. 51. (Blaug [4th ed.], pp. 49-50.) 邦訳〈I〉, 80-82ページ。なお、このような認識にもとづきつつブラウグはさらに、スミスの議論における価値の評価に関してつぎのような説明を加えている。それによれば、「労働の全生産物が働き手に属する」ような「初期未開の社会状態」では、諸商品に体化された (embodied) 個人的労働は、それらの商品の労働購買力と一致する。その場合には、人は彼自身の労働サービスの価値あるいは他人の労働サービスにたいする彼の購買力に応じて「富んでいたり貧しかったり」する、それら二つのものは等しいからである。ところが、財産所得の発生とともに、この一致は破られ、現行賃金単位で測られる商品の価値——その商品が交換において支配しうる労働の量——は、いまや、利潤と地代の全価値だけ、その商品の生産に具現された (embodied) 労働の価値を上回る。だがそれにもかかわらず、商品の「真実価値」すなわち努力価格は、依然として、その商品が現在の賃金率で市場において購買することのできる「労苦と骨折」の単位数によって、測られるべきなのである。Blaug [1962], pp. 51-52. (Blaug [4th ed.], p. 50.) 邦訳〈I〉, 82ページ。

- (6) Blaug [1962], pp. 51, 53. (Blaug [4th ed.] pp. 50, 51.) 邦訳〈I〉, 81, 83-84ページ。なお、本書前出「33」で取り扱われた1959年のブラウグの研究、Blaug [1959] では、支配労働標準についてのスミスの議論は指数問題の克服への努力を含む主観的厚生経済学への一つの企てとみなすことができるのであり、スミスは事実上「実質所得」の不変の尺度を彼の支配労働標準に求めるのであるがスミスの議論では事

38. M. ブラウグ (1962年)

実上、その支配労働標準は資本蓄積率の指標と主観的所得の大きさの指標という役割を果たすこととなっており、しかもそのスミスの議論は、発展しつつある経済においてはそれら二つの指標は同じものになるということを示すことに向けられていた、と捉えられていたのであって、その Blaug [1959] では事実上、「実質所得」の不変の尺度を支配労働標準に求めるそのスミスの議論においては一国の資本の蓄積率＝一国の〔生産的〕労働の雇用の増加率＝一国の〔物的（純）〕生産物の増加率＝一国の〔物的〕生産物購買力としての一国の「実質所得」および一国の労働不効用支配力・一国の「主観的所得」としての一国の「実質所得」の増加率、ということとなっており、そこにおいては一国の「主観的所得」の大きさ、一国の主観的厚生水準が支配労働標準によって示されるとともに、その支配労働量の増加率は一国の資本蓄積率を指し示している、ということになっている、とみられていたのであった。

なお、本章で取り扱われている Blaug [1962] ではブラウグはまた、我々が事物の「実質価格 (real price)」というとき、それは、いっさいの他財貨にたいするその事物の購買力、すなわち、貨幣価値の変化、物価水準 (level of prices) [なお、Blaug [4th ed.] では、平均物価水準 (average level of prices)] の変化に対して補正をくわえられたその事物の名目価格、をさすのにたいし、スミスは「真実価格 (real price)」の計測にさいして以上でみたような方法をとったのであるが、指数問題に対するスミスのそのような解決法はケインズ (J. M. Keynes) を、すなわち、実質所得を物的産出量というよりもむしろ雇用量のタームで述べつつスミスの方法を採用したケインズを、思い出させる、として [なお、Blaug [4th ed.] では事実上、指数問題に対するスミスのそのような解決法はまさしく、実質所得を物的産出量よりもむしろ雇用量のタームで述べたケインズによって採用されているものである、とされている]、つぎのような説明をくわえている。それによれば、ケインズは、賃金単位——1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率——をデフレーターとして用いることによって、総所得における賃金の分け前一定ということが与えられているさいの、所得と雇用との間の一対一の関係を得た。すなわち、 Y を貨幣所得、 N を雇用、 W を貨幣賃金総額、 w を貨幣賃金率とすれば、ケインズにおける実質所得は Y/w 、労働の相対的分け前は W/Y となり、またそれゆえ $(Y/w) \cdot (W/Y) = W/w = N$ ということとなり、そこから所得を固定的に雇用に結びつけるケインズの関係が出てくるのである。ただし、ケインズのな短期 (short run) では補正を行うのが物価変化に対してであっても賃金変化に対してであってもほとんど差異はないけれども、労働の生産性が上昇するにつれて価格は通常、賃金率に比して相対的に低下するであろうから、長期 (long run) では、デフレーターの選択は重大な問題である。なお、スミスは、ケインズとは違って、実質所得を長い諸期間 (long periods of time) にわたって測定することを欲したのであり、そして彼が労働

標準を選択したのは、貨幣賃金が価格一般よりも変動にさらされることが少ないという確信によって指示されていたのではなく、経済的厚生の本質についての彼の考えによって指示されていたのである。Blaug [1962], p. 51, p. 51n. 1. (Blaug[4th ed.], pp. 49-50, p. 50n. 1.) 邦訳〈I〉, 80-81ページ, 81ページ注1。

さらにまたブラウグは他の箇所でも、つぎのように示すこともできるであろうような彼の見方も示している。すなわち、スミスは、社会会計の適切な単位を捜し求め、そしてその単位を、生産物が引き換えに支配することのできる賃金単位の数に見いだしたのであるが、そこではスミスは事実上、一つの「絶対価値の労働説 (labor theory of absolute value)」と呼ばれてきたものを、すなわち、「どんな経済財にも、いかなる他の経済財とも関係なしに、ある絶対的な数が付されうるのである、といった考え」〔本書前出「32」つまり「D. F. ゴードウン (1959年)」の①, また、Gordon [1959] の pp. 466-467 を見よ〕を、提案していたのであって、こういったものは厚生経済学であって価値理論 (value theory) ではないのである。実質純国民生産物 (real net national product) 〔なお、Blaug [4th ed.] では、実質国民生産物 (real national product) 〕を算定するウエイトとして、貨幣賃金、人時 (man-hours, 延べ労働時間)、それとも相対価格を用いるべきか、といったようなことは、経験的事実の問題であるわけでも論理的演繹の問題であるわけでもなく、規範的判断の問題なのであり、そして規範的判断といったものは、論議することのできるものではあるが科学的に立証あるいは反証することのできるものではないのである。なお、ケインズが産出を測定するために賃金単位を用いるという自分の選択を正当化するに至ったとき彼は、人間労働の支出というものが、そのタームですべての他の生産的貢献を表しうるところの一義的な社会費用を構成するのだ、という古典派の学説に好意的であったのである。Blaug [1962], pp. 118-119. (Blaug [4th ed.], pp. 114-115.) 邦訳〈I〉, 185-186ページ。

なお、この Blaug [1962] でもブラウグは、スミスの議論における経済的厚生の正の指標としての支配労働標準ということを考えるときには、スミスの議論では事実上、現実には享受しうる産出物の物量に増加がある場合にはその増加は、支配しうる労働量の増加に反映され、そしてその支配しうる労働量の増加は、まぬがれ・支配しうる労働不効用量の増加を意味するということになっている、といったことを考えているようである。

- (7) Blaug [1962], pp. 49, 52. (Blaug[4th ed.], pp. 48, 50-51.) 邦訳〈I〉, 78-79ページ, 82ページ。ブラウグは、スミスが第5章のこの問題についての議論において読者に第1篇第10章を見るよう指示していないことは奇妙なことである、としている。Blaug [1962], p. 52. (Blaug[4th ed.], pp. 50-51.) 邦訳〈I〉, 82ページ。

なお、ここでのブラウグの説明はつぎのようなことを言おうとしているものとして理解することができよう。すなわち、スミスは不効用としての労働を商品、所得

38. M. ブラウグ (1962年)

の「真実価値」の尺度、経済的厚生指標とするのであるが、労働の不効用そのものは、労働の質・種類が異なるのに応じて、異なりうる。この問題に対してスミスは『国富論』第1篇第5章では「市場のかけひきや交渉」にふれるだけであるが、第10章では競争が労働の不効用の諸単位にたいする貨幣収入を平準化するということを証明している。したがって、たとえばある大きさの不効用を伴う労働の2時間が獲得する貨幣賃金の額は、その労働の1時間が獲得する貨幣賃金の額の2倍となり、また、その労働の1時間と、それと同じ大きさの不効用を伴う別の労働の1時間とは、等しい額の貨幣賃金を獲得し、さらに、それらの労働に伴う不効用の2倍の大きさの不効用を伴う第三の労働の1時間は、それらの労働の1時間が獲得する額の2倍の額の貨幣賃金を獲得することになる。質・種類の異なった労働1時間の不効用の格差は、それらの労働1時間に対して支払われる貨幣賃金額の格差に反映されるのである。したがってそこでは、原理的には、それぞれの時点において様々な労働の1時間に対して支払われる貨幣賃金額の格差に照らすことによって、それらの労働1時間に伴う不効用の大きさの格差を知ることができるとともにそれらの大きさを相互換算することができ、また、それらの貨幣賃金額のうち、1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金額（1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率、つまり、本章の注6中でふれられたブラウグによる「賃金単位」の定義）が、1時間の普通労働の不効用を反映する代表的な賃金単位、ということになるはずである。それゆえまたそこでは、たとえば貨幣タームで表された商品の名目価格をこの賃金単位で測ることによって、その商品がどれだけの時間数の普通労働を支配しうるか、したがってどれだけの普通労働の不効用を支配しうるか、つまり、その商品の「真実価値」を知ることができるのである。

- (8) Blaug [1962], p. 52. (Blaug [4th ed.], p. 51.) 邦訳〈I〉, 82-83ページ。つまりブラウグは、スミスの議論では「真実価値」の大きさは不効用としての労働（なお、異なった質・種類の労働の1時間に伴う不効用の格差は、競争をつうじて、それらの労働1時間に対して支払われる貨幣賃金額の格差に反映されることとなる）をどれだけ支配しうるかということによって測られるものであったのであるが、不効用としての労働の量がたとえば総生産物や所得の「真実価値」の大きさの経時的な変化を正確に表すためには労働1単位当たりの労働不効用の大きさ自体が経時的に不変なものでなければならず、この問題にたいしてスミスは事実上、等量の労働に伴う不効用——労苦と骨折り、犠牲にされる安楽、自由、幸福——はあらゆる時と場所において、つまり、異時点間および異場所間において、同一不変であるということ、またそのことのゆえに人は等量の労働に対して等しい（尊重）価値を付するということを、自明のこととして仮定した、とするのである。

なお、ブラウグによれば、ひとたびこのようなことが認められれば、一労働者が努力1単位当たり〔労働1単位当たり〕より多くの賃金財を受け取る場合には、「変

動するのはそれらの財貨の「尊重」価値なのであって、それらを購買する労働の「尊重」価値ではないのである」(WN, p. 33. 大河内訳 < I >, 57-58ページ。[] 内はブラウグ)と論ずることは可能なのであり、非常に多くの評釈者を困惑させてきたこのスミスのことばは文脈上完全に論理的なのである、とされる。Blaug [1962], p. 52. (Blaug [4th ed.], p. 51.) 邦訳 < I >, 83ページ。

- (9) Blaug [1962], p. 52. (Blaug [4th ed.], p. 51.) 邦訳 < I >, 83ページ。なお、本書前出「33」でみたブラウグの研究(Blaug [1959])では、本文でみてきたような銀や穀物についてのスミスの議論は「実質賃金 (real wages) を表現するために安定的な価値係数 (value-coefficient) を選ぶ」という問題についての議論として、示されていたのであった (Blaug [1959], p. 152. なお、そこでのブラウグの所論は中川には理解の困難なものであったのであるが、そのブラウグの所論について中川が試みた把握については、本書前出「33」の、③、④、注12、注14および「覚書」第7-第9パラグラフを見よ)。なお、ここで扱っているブラウグの研究では、本文でも見たように、この議論の脈絡のなかでは「実質賃金」という用語は用いられていない。

なお、本文で見たブラウグの所論も中川には理解の困難なものであるが、それはつぎのような内容のことを言っているものとして捉えることもできるかもしれないであろう。すなわち、スミスの議論では事実上、労働に伴う不効用は不変であり、また、競争の作用のゆえに各時点について、1時間の普通労働に伴う不効用の不効用を反映する貨幣賃金率を設定することは可能であったのであり、またそれゆえ、ある所与の時点におけるある事物の「真実価値」の大きさは、その時点でのその事物の貨幣タームでの名目価値を、その時点で成立している1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率(賃金単位)で測ることによって知られる、つまり、その事物がどれだけの普通労働の労働不効用を支配しうるかを知ることができるのであり、他の時点についても、それぞれの時点で成立している賃金単位で測ることによって「真実価値」の大きさは知られることができ、その大きさの経時的な比較も可能、ということになっていたものであって、そこでは、各々の時点におけるある事物の「真実価値」の大きさそのものは、各々の時点におけるその事物の名目価値をその各々の時点で成立している1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率(賃金単位)で割ることによって算出されるところの、その事物が支配しうる普通労働の量によって示される、ということになっていたのであるが、スミスは事実上さらに、1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率(賃金単位)そのものについて、リアル・タームでその大きさを表現する方法という問題、賃金単位の大きさをリアル・タームで表現するための安定的な物差しを選ぶという問題(賃金単位を表現するための安定的な物差しを選ぶという問題)に注意を向けたのであり、そしてその問題にたいするスミスの対処は事実上つぎのようなものであるのであ

た。すなわち、短期では、銀の生産物購買力および銀の労働購買力は相対的に安定的である（短期では銀の価値は相対的に安定的である）ゆえ、銀タームでの名目的な賃金単位で十分であろう。すなわち、短期では銀1単位当たりの生産物購買力は相対的に安定的であるのであるから、短期では、銀の単位数で示された賃金単位の大きさ（銀タームでの名目的な賃金単位の大きさ）そのものが、相対的に安定的に、リアル・タームでの賃金単位の大きさを指し示しているのである。そしてまた短期では銀1単位当たりの労働購買力も相対的に安定的であるのであるから、短期では、銀（貨幣）タームでの賃金単位の大きさそのものが相対的に安定的であるのであり、そしてその賃金単位の大きさが、1時間の普通労働の不変な労働不効用を反映するとともに、1時間の普通労働に対して支払われるリアル・タームでの賃金率の大きさを相対的に安定的に指し示している、ということになるのである。他方、長期については、穀物賃金単位がより適している。すなわち、穀物価格は短期では鋭く変動し、しかも貨幣賃金率と同じ方向に同じ振幅で変動することはまれであるのではあるが、長期では、費用を低落させるような農業上の諸改良が「農業の主要な用具」である家畜の価格の上昇によって「多かれ少なかれ相殺される」ゆえ、穀物価格はいちじるしく安定的である。したがって長期では、同一の大きさの貨幣賃金率は、いちじるしく安定的な量の穀物という生産物に対する購買力をもつのであり、1時間の普通労働に対して支払われるリアル・タームでの賃金率の大きさは、1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率の、穀物という生産物にたいする購買力によって、（穀物賃金単位の大きさ、穀物で測られた賃金単位の大きさ、穀物タームでの賃金単位の大きさ、によって、）いちじるしく安定的に表現されうるのである。そしてまた、穀物は「人々の基本的な生活資料」であるゆえ、長期では穀物価格が貨幣賃金率を支配する。したがってそこでは、貨幣賃金率は穀物価格によって支配され、そしてその穀物価格がいちじるしく安定的であるのであるから、1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率（賃金単位）の大きさそのものもいちじるしく安定的なものとなる。すなわち、長期では、貨幣タームでの賃金単位の大きさそのものがいちじるしく安定的で、その賃金単位の大きさは、リアル・タームでは、いちじるしく安定的な量の穀物という生産物によって表現されうるとともに、それはまた1時間の普通労働の不変な労働不効用を反映しているのである。スミスは事実上、1時間の普通労働の不変な労働不効用を反映する賃金単位の大きさ（1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率の大きさ）は、短期では銀（貨幣）の労働購買力の相対的安定性のゆえに相対的に安定的であり、他方長期では、長期における穀物価格による貨幣賃金率の支配および長期における穀物価格のいちじるしい安定性のゆえに、いちじるしく安定的であり、そしてそのリアル・タームでの大きさは、短期における銀の生産物購買力の相対的安定性のゆえに、短期では相対的に安定的な量の銀（貨幣）そのものという形で表現されうるとともに、長期で

は、長期における貨幣タームでの賃金単位のいちじるしい安定性と長期における穀物価格のいちじるしい安定性のゆえに、いちじるしく安定的な量の穀物という形で、表現されうる、と考えようとした、というわけである。したがってまたそこでは、リアル・タームでの賃金単位の大きさが短期においても長期においても安定的であるのであるから、たとえば賃金単位で測られた支配労働量タームでの一社会の産出の増加は、普通労働の不変の労働不効用にたいする一社会の支配力の増加を指し示すだけでなく、一社会の産出のリアル・タームでの（ただし、長期では支配穀物量という意味でのリアル・タームでの）増加をも安定的に指し示す、ということになるのである。（なお、その場合、長期において安定的な、1時間の普通労働に対して支払われる穀物タームでの賃金率という意味でのそのリアル・タームでの賃金率の大きさが、生産物一般に対する購買力の大きさという意味での実質賃金率の大きさを正確に指し示しうるものでありえたならば、そこでは、長期においても、1時間の普通労働に対して支払われる実質賃金率が安定的であるのであるから社会の現実の物量としての産出が増加するときには、その増加は、社会の産出の名目価値を賃金単位（1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率——ここではその貨幣賃金率に対応する生産物量が経時的に安定的——）で割ることによって算出されるものとしての、社会の産出の支配しうる（普通）労働の量の増加に、支配労働量のタームで表された社会の産出の増加に、安定的に反映される、ということになるであろう。）

なお、以上（Ⅱ）でみてきたブラウグの所説を要約してみれば、彼は事実上、価値尺度についてのスミスの議論そのものの内容を概ね以下のようなものとして把握しているということもできるであろう。すなわち、スミスのその議論では、労働とはやっかいなものであり、「労苦と骨折り」は究極の稀少生産要素であるのであり、また、一個人の「富」は他人の生産物を支配する力によって自然的に測られるのであるが〔社会的〕分業のもとでの富の追求は、我々から不快な労働を省きそれを他人に課そうという欲望によって動機づけられているのであって、それゆえ人は、彼の富あるいは彼の所有する一商品を、彼がそれでもって市場で買うことのできる他人の労働の量によって評価する、といったことから、事物の「真実価値」の尺度が、その事物によって「支配しうる労働の量」に求められたのであった。したがってそこでの「価値」、「真実価値」とは事実上、「交換価値」というよりもむしろ「尊重価値」にあたるものであったのであり、また、そこでの「真実価値」の尺度としての労働とは、不効用としての労働のことであったのであって、そこでの「真実価値」とは不効用としての労働をどれほど支配しうるかということによって評価される、ということになっているのであった。そしてスミスのその議論では、等量の労働に伴う不効用——労苦と骨折り、犠牲にされる安楽、自由、幸福——は「あらゆる時と場所」において同一不変である——またそのことのゆえに人は等量の労働に対し

38. M. ブラウグ (1962年)

て等しい尊重価値を付する——とともに、1時間の普通労働に伴う労働不効用の大きさは、競争をつうじて、1時間の普通労働に対して支払われるその時々¹の貨幣賃金率（賃金単位）に反映されるのであった。したがってそこでは、その時々¹にその商品によってどれだけの量の他人の普通労働を支配できるか、その商品によってどれだけの単位数の賃金単位を購入できるかを知ることによって、その商品によってどれほどの（普通労働の）労働不効用をまぬがれ・支配できるかを、その時々¹のその商品の「真実価値」の大きさを——したがって、その時々¹に人がその商品に付する「尊重価値」の大きさを——知ることができるとともに、その大きさの経時的な比較も可能、ということになっているのであった。貨幣タームでの商品価格を賃金単位で測ることによってその商品の「労働価格」、「努力価格」、「真実価格」→「真実価値」を知ることができるとともにその経時的な比較をなすこともできるのである。さらにスミスのその議論では、商品の「真実価値」の測定およびその経時的な比較と同様個人および社会の「実質所得」の測定およびそれらの経時的な比較も、支配しうる賃金単位数とその比較ということによってなされるのであった。そしてまたそこでは、商品が支配しうる賃金単位数が多ければ多いほどその所有者は、また、個人あるいは社会の所得が支配しうる賃金単位数が多ければ多いほどその個人あるいはその社会は、ヨリ多くの労働不効用をまぬがれ・支配できるという意味で、暮らし向きがヨリ良い、ということになり、この意味で支配労働標準は、経済的厚生²の正の指標を提供する、ということになっているのであった。なお、スミスは事実上さらに、賃金単位を表現するための安定的な物差しを選ぶという問題、賃金単位³の大きさをリアル・タームで表現するための安定的な物差しを選ぶという問題、リアル・タームで賃金単位³の大きさを表現する方法という問題、との関連で銀、穀物に論及するのであるが、そこでのスミスの議論では事実上、1時間の普通労働の不変な労働不効用を反映する賃金単位³の大きさ（1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率の大きさ）は、短期では銀（貨幣）の労働購買力の相対的安定性のゆえに相対的に安定的であり、他方長期では、長期における穀物価格による貨幣賃金率の支配および長期における穀物価格のいちじるしい安定性のゆえに、いちじるしく安定的であり、そしてそのリアル・タームでの大きさは、短期における銀の生産物購買力の相対的安定性のゆえに、短期では相対的に安定的な量の銀（貨幣）そのものという形で表現されうるとともに、長期では、長期における貨幣タームでの賃金単位³のいちじるしい安定性と長期における穀物価格のいちじるしい安定性のゆえに、いちじるしく安定的な量の穀物という形で、表現されうる、ということとなっているのであったのであり、したがってまたそこでは、短期においても長期においても、たとえば賃金単位で測られた支配労働量タームでの一社会の産出の増加は、普通労働の不変の労働不効用にたいする一社会の支配力の増加を指し示すだけでなく、一社会の産出のリアル・タームでの（ただし、長期では支配穀物量という

意味でのリアル・タームでの) 増加をも安定的に指し示す, ということになるのである。

- (10) ブラウグはここで, 本章の注 6 のなかで我々がみたブラウグのつぎの説明を参照するよう指示している (Blaug [1962], p. 53 <Blaug [4th ed.], p. 51>)。その説明とは, Y を貨幣所得, N を雇用, W を貨幣賃金総額, w を貨幣賃金率とすれば, ケインズにおける実質所得は Y/w , 労働の相対的分け前は W/Y となり, またそれゆえ $(Y/w)(W/Y) = W/w = N$ ということとなり, そこから所得を固定的に雇用に結びつけるケインズの関係が出てくる, というものである。

このことからしてここではブラウグはつぎのようなことを言っているのであろう。いま, 社会の産出の貨幣価値を Y で表すとすれば, うえの式から, 本文でみたブラウグの言説はつぎのことを言っているものとして理解できよう。すなわち, もしも貨幣賃金〔総額〕(W) が産出の貨幣価値 (Y) よりも急速に増大するならば, すなわち, もしも産出のうちの労働の相対的な分け前 (W/Y) が増大するならば, 総生産物 (貨幣タームでは増大した Y で表される) は, 現行賃金単位のタームで表現されたいっそう大きな価値 (いっそう大きな Y/w) を, 必ずしも, もたらしはしないであろう。なぜなら, $(Y/w)(W/Y) = N$ であるから, $Y/w = \frac{N}{W/Y}$ となり, そして, W/Y が上昇するのであるから, N の増加率が W/Y の上昇率よりも大きくないかぎり, Y/w はより大きなものとはならないからである。

なお, 社会の産出そのものを X , その社会の物価水準を p で表すとすれば,

$$\frac{Y}{w} = \frac{N}{\frac{W}{Y}} = \frac{N}{\frac{w \cdot N}{p \cdot X}} = \frac{N}{\frac{w \cdot X}{p \cdot N}} = \frac{(X/N) \cdot N}{\frac{w}{p}}$$

となり, 労働の相対的分け前 (W/Y) の動きは実質賃金率 (w/p) の動きと労働 1 単位当たり産出量 (X/N) の動きとの関係におきかえられることができる, つまり, w/p が, X/N よりも急速に上昇すれば W/Y は上昇するということになるのであるが, さらにまた, 産出 (X) の増加率を δ , 労働の相対的分け前 (W/Y) の上昇率を ψ , 労働 1 単位当たり産出量 (X/N) の増加率を β , 雇用 (N) の増加率を γ , 実質賃金率 (w/p) の上昇率を α で表すとすれば, 一般に, $(1+\delta) = (1+\beta)(1+\gamma)$ が 1 より大のときは産出 (X) の増加, 1 のときは X は不変, 1 より小のときには X の減少ということになり, $\frac{(1+\beta)(1+\gamma)}{(1+\alpha)}$ が 1 より大のときには, 賃金単位で測られた産出の貨幣価値 (Y/w) の増加, 1 のときは Y/w は不変, 1 より小のときには Y/w の減少となる。そしてまた, $\alpha > \beta$ のときには労働の相対的分け前 (W/Y) は上昇 ($\psi > 0$), $\alpha = \beta$ のときは W/Y は不変 ($\psi = 0$), $\alpha < \beta$ のときは W/Y は下落 ($\psi < 0$) ということになるのである。

(注10は次ページにつづく)

38. M. ブラウグ (1962年)

また、実質賃金率が一定の場合には、つぎのようなことになる。すなわち、実質賃金率 (w/p) が一定であるのであるから、 $\alpha=0$ であるゆえに $\frac{(1+\beta)(1+\gamma)}{(1+\alpha)}$ において $(1+\beta)(1+\gamma)=(1+\delta)>1$ であるかぎり、つまり、産出が増加するかぎり ($\beta+\gamma+\gamma\beta=\delta>0$ のかぎり)、 Y/w は増加する。つまり、

$$\frac{\frac{X}{N}N(1+\beta)(1+\gamma)}{\frac{w}{p}(1+\alpha)} = \frac{\frac{X}{N}N(1+\delta)}{\frac{w}{p}(1+\alpha)}$$

において、 $\alpha=0$ 、 $\beta+\gamma+\gamma\beta=\delta>0$ 。また、物価水準の上昇率を μ 、貨幣賃金率の上昇率を λ 、産出の貨幣価値の増加率を π で表せば、

$$Y(1+\pi)=pX(1+\mu)(1+\delta),$$

$$\frac{Y(1+\pi)}{w(1+\lambda)} = \frac{pX(1+\mu)(1+\delta)}{w(1+\lambda)}$$

において、実質賃金率一定つまり $\mu=\lambda$ であるため、変化後の Y/w は $\frac{p}{w}X(1+\delta)$ となり、 $\delta>0$ であるかぎり、 Y/w は増加する。つまり、実質賃金率 (w/p) が一定の場合には、賃金単位で測られた産出の貨幣価値 (Y/w) は、産出 (X) の増減に比例して変化することになる。社会の産出が増加すればするほど、賃金単位で測ったその社会の産出の価値が大きくなり、社会は、それだけより多くの労働不効用をまぬがれ・支配することができ、暮らし向きがいっそう良いということになる。支配労働標準は経済的厚生 of 正の指標を提供するのである。(なお、ここでは実質賃金率一定のもとでの社会の産出およびその「真実価値」の増加であるから、労働1単位当たり産出量が一定あるいは下落の場合、また、その上昇率が産出の「真実価値」の増加率よりも小さい場合には、現実の雇用の増加が実現されていることとなる。)

ただし、たとえ産出 (X) が増加しても、もし実質賃金率が上昇するならば、その産出の増加は必ずしも Y/w の増加をもたらすはしない。すなわち、産出 (X) が増加しても、実質賃金率が上昇しその上昇率 (α) が労働生産性 (労働1単位当たり産出量: X/N) の上昇率 (β) よりも大であるならば、つまり、労働の相対的分け前 (W/Y) が上昇するならば、雇用 (N) の増加率 (γ) が労働の相対的分け前の上昇率 (ψ) よりも小さいかぎり、産出の増加にもかかわらず、 Y/w は減少することとなる。したがって、産出の増加が雇用の増加とあいともなって進行するときに賃金単位で測られた産出の貨幣価値 (Y/w) が減少するためには雇用の増加率よりも労働の相対的分け前の上昇率のほうが大きくなければならず、そして労働の相対的分け前が上昇するためには、労働1単位当たり産出量の増加率を超過しての実質賃金率の上昇がなければならない、ということとなり、この脈絡においては、負の指標にとつ

ての必要条件は、労働1単位当たり産出量の増加を超過しての実質賃金の騰貴である、ということができよう。

なお、この点についてもう少し詳しくいえば、つぎのようなことがいえるであろう。すなわち、産出増のもとで Y/w 減が生じるためには、 $\delta, \beta, \gamma, \alpha$ は、 $1 < 1 + \delta = (1 + \beta)(1 + \gamma) < 1 + \alpha$ をみたすものでなければならないのであるが、その産出増が、雇用増と労働1単位当たり産出量の増加との両方によるとき（つまり、 $\gamma > 0, \beta > 0$ ）、雇用増だけによるとき（つまり、 $\gamma > 0, \beta = 0$ ）、労働1単位当たり産出量の増加だけによるとき（つまり、 $\gamma = 0, \beta > 0$ ）、および、労働1単位当たり産出量の減少にかかわらずそれをつぐなっておりある雇用の増加によるとき（つまり、 $\beta < 0, \gamma > 0, \gamma > -\beta - \beta\gamma > 0$ ）には、 $0 < \delta = \beta + \beta\gamma + \gamma < \alpha$ から、 $\beta < \alpha$ ということになるであろう。しかし雇用が減少するがそれをつぐなっておりある労働1単位当たり産出量の増加によって産出増がもたらされるとき（つまり、 $\gamma < 0, \beta > 0, \beta > -\beta\gamma - \gamma > 0$ ）には、必ずしも $\beta < \alpha$ とはならない。したがってまたこのことは、つぎのように言うこともできよう。すなわち、社会の産出の支配しうる労働量が減少するにもかかわらず（ Y/w が減少するにもかかわらず）、社会の産出そのものが増加するつまりその社会が享受しうる財貨の量が増大する、といったことのためには、産出の増加率（ δ ）が実質賃金率の上昇率（ α ）よりも小さくなければならない（つまり、 $1 < (1 + \beta)(1 + \gamma) = 1 + \delta < 1 + \alpha, 0 < \beta + \gamma + \beta\gamma = \delta < \alpha$ ）のであるが、雇用の増加率（ γ ）が負でないかぎり、少なくとも、労働1単位当たり産出量の増加率（ β ）はつねに実質賃金率の上昇率（ α ）よりも小さいものでなければならない。

- (11) Blaug [1962], p. 53. (Blaug [4th ed.], p. 51.) 邦訳〈I〉, 83-84ページ。本章注6の末尾でも触れたように、ブラウグはこの Blaug [1962] でも事実上、スミスの議論における経済的厚生（の正の指標としての支配労働標準ということを考えるときには、スミスの議論では事実上、現実には享受しうる産出物の物量に増加がある場合にはその増加は、支配しうる労働量の増加に反映され、そしてその支配しうる労働量の増加は、まぬがれ・支配しうる労働不効用量の増加を意味するということになっている、といったことを考えているのである。前出の注10も見よ。

- (12) ブラウグは、ここでの「負の指標にとつての必要条件は、1人当たり産出量を超過しての実質賃金の騰貴である」ということに関して、本章の前出注6のなかで我々がみた彼の説明、すなわち、 Y を貨幣所得、 N を雇用、 W を貨幣賃金総額、 w を貨幣賃金率とすれば、ケインズにおける実質所得は Y/w 、労働の相対的分け前は W/Y となり、またそれゆえ $(Y/w)(W/Y) = W/w = N$ ということとなり、そこから所得を固定的に雇用に結びつけるケインズの関係が出てくるという説明をちよつとみただけでもそのことはわかる、としている。Blaug [1962], p. 53. 邦訳〈I〉, 84ページ。ここでの問題については前出の注10も参照せよ。（ただし、第4版では、このような議論の脈絡のなかでの、本章の前出注6のなかで我々がみたブラウグの

38. M. ブラウグ (1962年)

うえのような説明への言及は、ない。Blaug [4th ed.], p. 52.)

- (13) ここではブラウグはつぎのような事情のことを言っているのであろう。たとえば、ある商品 1 単位が交換において、期間 1 に 3 時間の労働を支配し、期間 2 に 2 時間の労働を支配するとすれば、1 時間の労働は、期間 1 においてはその商品 1 / 3 単位を購買する力を持ち、期間 2 においてはその商品 1 / 2 単位を購買する力をもつこととなるという意味で、一商品が交換において支配する労働量の減少は一商品にたいする労働の購買力の増加ということとなる。要するに、商品にたいする購買力の大きさという意味での実質賃金率 (w/p) は、商品 1 単位の労働購買力・支配力と逆の関係にあるのであり、商品の労働支配力の低下は、労働の商品購買力の上昇 (実質賃金率の上昇)、という関係にあるのである。
- (14) ブラウグはつぎのようなことを言っているのであろう。つまり、社会の生産物物量 (X) が減少していないかぎり、社会のその生産物が支配する労働量 (Y/w) の減少は、商品、生産物にたいする購買力の大きさという意味での実質賃金率 (w/p) の上昇を意味することとなる ($\frac{Y}{w} = \frac{X}{w/p}$)。そしてそのかぎりでは、社会の生産物が支配する労働量の減少は、生産物にたいする労働の購買力の増大 (実質賃金率の上昇)、労働 1 単位を提供することの見返りとして支払われる生産物物量の増大 (その意味での、実質所得にたいする労働の購買力の増大) を、したがってまた、ある一定の大きさの実質所得を稼ぐためにその見返りとして提供しなければならない労働の量 (労苦と骨折りの量) の減少を、指し示している、ということになるのである。
- (15) Blaug [1962], p. 53. (Blaug [4th ed.], pp. 51-52.) 邦訳 < I >, 84 ページ。なお、ブラウグはさらにつけて、このように解するとスミスの厚生標準はリカードウ (D. Ricardo) のそれと同じような解答を与えることになるとして、つぎのような説明をくわえている。すなわち、リカードウの標準 [なお、Blaug [4th ed.] では、リカードウの「富」の標準 (Ricardo's standard of 'riches')] は厚生 of 改善を産出 1 単位当たりの人間努力の負の関数たらしめる、つまり、リカードウの標準によれば、もし我々が産出 1 単位を生産するのにヨリわずかししか働かないならば我々はそれだけヨリいっそう暮らし向きが良いということになる、というのである。Blaug [1962], p. 53. (Blaug [4th ed.], p. 52.) 邦訳 < I >, 84 ページ。
- (16) なお、ブラウグによれば、我々のうちのたいてい人は、成長しつつある経済における厚生 of 改善の一つの主要な要素は所得の努力価格の低下であると主張するであろうし、1 週当たり労働時間 (workweek) の減少と同時に実質賃金の上昇といったことが進行していくにつれて、労働の不効用は「あらゆる時において」きっと増大していく、とされる。Blaug [1962], p. 53. (Blaug [4th ed.], p. 52.) 邦訳 < I >, 84-85 ページ。
- (17) ブラウグによれば、たとえばソビエトの生活水準とアメリカの生活水準は、その

二国のおのおのにおいて特定の諸物品をその時価で買うためには現行の率で報いられる労働何時間が必要とされるであろうかということをつねにすることによって、比較されるかもしれないのであるが、このような方法は、なかんずくソビエト連邦における労働の不効用はアメリカ合衆国におけるのと同じであるということを仮定している、とされる。Blaug [1962], p. 53. (Blaug[4th ed.], p. 52.) 邦訳〈I〉, 85ページ。

- (18) Blaug [1962], p. 53. (Blaug [4th ed.], p. 52.) 邦訳〈I〉, 84-85ページ。本書前出「33」の⑥で触れられた Blaug [1959] にみられるどちらかといえば積極的な評価と比較せよ。

なお、ブラウグは、以上でみられてきたような議論を、もっぱら、「経済計算の社会的単位 (A Social Unit of Accounting)」という見出しの付された節のなかで展開するのであるが、ブラウグはさらに、それにつづく節のなかで、スミスが『国富論』第1篇第11章での銀の価値に関する「余論」において諸財貨の価格の歴史を分析するにさいして以上でみてきた労働標準を利用している、ということを指摘している。Blaug [1962], p. 54. (Blaug [4th ed.], p. 53.) 邦訳〈I〉, 86ページ。

M. ブラウグ (1962年) についての覚書

その初版が1962年に刊行された一著書におけるブラウグの議論によれば、スミスは、『国富論』第1篇第4章において、貨幣の導入、交換価値と使用価値との区別、をなし、さらに、それにつづく三つの章で交換価値の問題を取り扱うとしてそれらの章でとりあげるべき諸問題についての言明をなすのであるが、その言明においては、二つの非常に違った種類の問題、したがって厳密に区別されるべき二つの問題、つまり、何が価値の最善の尺度であるのかという問題と価値を決定するのは何であるのかという問題とが混同されているのであり、またそのことのゆえに、その言明のあとをうけて提示される第5章でのスミスの議論にたいしては、一方での交換価値の「原因」と交換価値の「尺度」との間の違い他方での「支配労働」価値説と「投下労働」価値説との間の違いといったことをめぐって人を当惑させるような様々な解釈が与えられてきた、ということになるのであった。しかしまた同時に、事実上価値の「原因」すなわち価値を決定するもの、と捉えるブラウグによれば、事実上、その第5章「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」はうえの第一の問題つまり何が価値の最善の尺度であるのかという問題を取り扱い第6章と第7章

は第二の問題すなわち、価値を決定するのは何であるか、何故に相対価格が現実になような大きさのものであるのかという価値理論の伝統的な問題を取り扱っている、とみられるのであった。

ただし、ブラウグはこのような意味で『国富論』第1篇第5章は価値理論にかかわるものではなく価値の尺度ということにかかわるものであったとみるのであるが同時にまたブラウグによれば、そこでのスミスの議論では、労働とはやっかいなものであり、「労苦と骨折り」は究極的稀少生産要素であり、また、一個人の「富」とは他人の生産物を支配する力によって自然的に測られるのであるが〔社会的〕分業のもとでの富の追求は、我々から不快な労働を省きそれを他人に課そうという欲望によって動機づけられているのであって、それゆえ人は、彼の富あるいは彼の所有する一商品を、彼がそれでもって市場で買うことのできる他人の労働の量によって評価する、といったことから、事物の「真実価値」の尺度が、その事物によって「支配しうる労働の量」に求められているのであった、したがってそこでの「価値」、「真実価値」とは事実上、「交換価値」というよりもむしろ「尊重価値」にあたるものであったのであり、また、そこでの「真実価値」の尺度としての労働とは、不効用としての労働のことであったのであって、そこでの「真実価値」とは不効用としての労働をどれほど支配しうるかということによって評価される、ということになっている、とみられるのであった。

そしてブラウグは、一方で、そこでのスミスの議論における「異質労働の問題」を、事実上、労働のタイプの相違による労働不効用の相違——またそのことのゆえに人は異なったタイプの労働にたいして異なった尊重価値を付する——といった問題として捉えつつ、たしかに『国富論』第1篇第5章ではスミスはこの問題については「市場のかけひきや交渉」ということに簡単に触れるだけでかたづけようとしてはいるが第10章でのスミスの議論からしてスミスは原理的には、普通労働1時間に伴う不効用を反映する1時間の普通労働の貨幣賃金率、賃金単位を（それぞれの時と所について）設定できたはずである、とみるとともに、さらに他方で、スミスの議論では労働に伴う不効用——労苦と骨折り、犠牲にされる安楽、自由、幸福——は異場所間においても異時点間においても不変であるということが、またそのことのゆえに人は等量の労働にたいして等しい尊重価値を付するということが、自明のこととして仮定されていた、とみるのであった。かくして、ブラウグの所説

の示すところによれば、スミスの議論では当該事物によってどれだけの単位数の賃金単位を支配できるかを知ることによって、その事物によってどれほどの（普通労働の）労働不効用をまぬがれ・支配できるかを、その事物の「真実価値」の大きさを——したがって、人がその事物に付する「尊重価値」の大きさを——、知ることができるとともに、異時点間および異場所間におけるその大きさの変化の確定、異時点間および異場所間におけるその大きさの比較も可能、ということになるのである。

なお、本書の「33」でみた1959年のブラウグの研究では、価値尺度についての議論の脈絡の中での銀や穀物へのスミスの言及は実質賃金を表現するための安定的な価値係数の選定に関するものとして示されていたのにたいし、このブラウグの研究では、銀、穀物へのそういったスミスの言及は、うえのような賃金単位を表現するための安定的な物差しを選ぶという問題（賃金単位の大きさをリアル・タームで表現するための安定的な物差しを選ぶという問題、リアル・タームで賃金単位の大きさを表現する方法という問題）との関連での言及として、示されるのであった。そしてそこでのブラウグの所説の示すところからすれば、スミスの議論では事実上、1時間の普通労働の不変な労働不効用を反映する賃金単位の大きさ（1時間の普通労働に対して支払われる貨幣賃金率の大きさ）は、短期では銀（貨幣）の労働購買力の相対的安定性のゆえに相対的に安定的であり、他方長期では、長期における穀物価格による貨幣賃金率の支配および長期における穀物価格のいちじるしい安定性のゆえに、いちじるしく安定的であり、そしてそのリアル・タームでの大きさは、短期における銀の生産物購買力の相対的安定性のゆえに、短期では相対的に安定的な量の銀（貨幣）そのものという形で表現されうるとともに、長期では、長期における貨幣タームでの賃金単位の大きさのいちじるしい安定性と長期における穀物価格のいちじるしい安定性のゆえに、いちじるしく安定的な量の穀物という形で、表現されうるといふこととなっているのであった。（したがってまたそこでは、短期においても長期においても、たとえば賃金単位で測られた支配労働量タームでの一社会の産出の増加は、普通労働の不変の不効用にたいする一社会の支配力の増加を指し示すだけでなく、一社会の産出のリアル・タームでの——ただし、長期では支配穀物量という意味でのリアル・タームでの——増加をも安定的に指し示す、ということになるのであった。）

38. M. ブラウグ (1962年)

また、1959年のブラウグの研究では、支配労働標準についてのスミスの議論は指数問題の克服への努力を含む主観的厚生経済学への一つの企てとみなすことができるのであり、スミスは事実上「実質所得」の不変の尺度を支配労働標準に求めるのであるがスミスの議論では事実上、その支配労働標準は資本蓄積率の指標と主観的所得の大ききの指標という役割を果たすこととなっており、しかもそのスミスの議論は、発展しつつある経済においてはそれら二つの指標は同じものになるということを示すことに向けられていた、と捉えられていたのであって、その1959年のブラウグの研究では事実上、「実質所得」の不変の尺度を支配労働標準に求めるそのスミスの議論においては一国の資本蓄積率＝一国の〔生産的〕労働の雇用の増加率＝一国の〔物的（純）〕生産物の増加率＝一国の〔物的〕生産物購買力としての一国の「実質所得」および一国の労働不効用支配力・一国の「主観的所得」としての一国の「実質所得」の増加率、ということとなっており、そこにおいては一国の「主観的所得」の大きき、一国の主観的厚生水準が支配労働標準によって示されるとともに、その支配労働量の増加率は一国の資本蓄積率を指し示している、ということになっている、とみられていたのであるが、それにたいし、ここで取り扱ったブラウグの研究においては、スミスは実質所得を長い諸期間にわたって測定することを欲した、とされつつも、スミスの議論における資本蓄積率の指標としての支配労働標準といったことにたいする言及はなされはしないのであった。しかしながらまた同時に、この研究においてもブラウグは、支配労働標準という考えが提出される価値尺度についてのスミスの議論を厚生経済学またとくに厚生指数の問題にかかわるもの、とみるのであった。

すなわち、この研究でのブラウグによれば、『国富論』第1篇第5章では一つの「主観的厚生労働説」が提示されているのであり、そこではスミスは物価水準よりもむしろ貨幣賃金率との関連で商品の「真実価格」や「実質所得」を確定することを選び、当該事物が支配しうる労働量をつうじてその「真実価値」を（事実上、その「尊重価値」にあたるものを）測ろうとするのであって、そこではスミスは事実上、「どんな経済財にも、いかなる他の経済財とも関係なしに、ある絶対的な数が付されうるのである、といった考え」をその内容とする一つの「絶対価値の労働説」にあたるものを示しているのであるが、スミスがそのような形で測定することを選んだというそ

の選択は、貨幣賃金率は価格一般よりも変動にさらされることが少ないという確信によって指示されていたのではなくて、経済的厚生の本質についての彼の考えによって、その正当性を科学的には立証することも反証することもできない彼の一つの規範的判断によって、指示されていたのだ、とみられるのであった。そしてそのブラウグの所説の示すところによれば、うえでもみたようにスミスの議論では、労働とはやっかいなものであり、「労苦と骨折り」は究極の稀少生産要素であるとともに、一個人の「富」とは他人の生産物を支配する力によって自然的に測られるのであるが〔社会的〕分業のもとの富の追求は、我々から不快な労働を省きそれを他人に課するという欲望によって動機づけられているのであり、それゆえ人は、彼の富あるいは彼の所有する一商品を、彼がそれでもって市場で買うことのできる他人の労働の量によって評価する、ということとなるのであって、そこでは、個人が有する財貨や所得がより多くの賃金単位数をすなわちより多くの労働を支配すればするほど、また、一社会の全体としての生産物がより多くの労働を支配すればするほど、それだけその個人、その社会はより多くの労働不効用をまぬがれ・支配することができ、そしてその意味でその個人、その社会の経済的厚生がそれだけ大きい、ということとなるのであり、そして、このように支配労働標準が経済的厚生の正の指標を提供するということを述べること、まさにこのことが価値尺度に関するスミスの議論の要旨なのである、ということになるのであった。

なお、本章で取り扱われた研究においてブラウグはこのように、価値尺度に関するスミスの議論の要旨、意図は経済的厚生の正の指標としての支配労働標準という考えを示すことにあった、と捉えるのであるが、ブラウグはまた、そこでのスミスの議論では、異時点間および異場所間において労働の不効用は不変であるという仮定にくわえて、さらに事実上、実質賃金率は経時的に不変ということが暗黙のうちに仮定されている、とみるのであった。それゆえまた、ブラウグの示している所説からすれば、そこではスミスは事実上、社会の現実の物量としての産出の増加→社会の産出の名目価値を賃金単位で測ることによって得られる産出の「労働価格」、「努力価格」、「真実価格」、「真実価値」の増加、支配労働量のタームで表された社会の産出の増加、増加した産出に対応するより多くのまぬがれ・支配しうる労働不効用(また、現実の雇用、人口の増加)→社会の経済的厚生の向上、といったことを考

38. M. ブラウグ (1962年)

えていた，ということとなるわけである。

しかしながらまた同時に，そのブラウグによれば，実質賃金率不変というその仮定は支持しがたい仮定であるとともにその仮定は労働の不効用は経時的に不変であるというスミスの大胆な仮定を反映しているものである，とされ，さらに，労働の不効用は「あらゆる場所において」等しいというものも，たしかにそれは経済的厚生 of 国際比較を行うさいに現代でもしばしば仮定されるものではあるが，おそらくそれもまた弁護のできない仮定である，とされるのであった。

著者略歴

なか がわ えい じ
中川 栄 治（経済学史）

1946年 大阪府に生まれる。

1969年 関西大学経済学部卒業

1974年 神戸商科大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
関西女子短期大学専任講師

1975年より広島経済大学専任講師，助教授を経て

1987年より広島経済大学教授，現在に至る。

この間1984年9月より1年間，英国グラスゴウ大学に留学

現住所 〒739-17 広島市安佐北区口田二丁目8-20

平成7年12月20日発行

「アダム・スミスの価値尺度論」

に関する海外における諸研究

——19世紀末から1970年代末——（上）

広島経済大学研究双書 14

（非売品）

著 者 中 川 栄 治

発行／広島経済大学地域経済研究所

〒731-01 広島市安佐南区祇園5-37-1

Tel (082) 871-1664

印刷／中本総合印刷株式会社